

日本海地域における肥前陶磁の流通

大 橋 康 二

はじめに

江戸時代に肥前陶磁は国内随一の陶磁器生産地として発展し、製品は全国流通を果たした。肥前陶磁の全国流通については、筆者が担当して実施した、昭和59年（1984）の『北海道から沖縄まで一国内出土の肥前陶磁』展で、今から見れば不十分とはいえ国内の流通状況の様子を初めて垣間見ることができた。それまで近世の考古学的調査は緒に付いたばかりで、ほとんどわからなかった時代に画期的な展覧会となった。この展覧会ができたのも、その前の3年間に肥前諸窯の考古学的資料の分析などを通じて、肥前陶磁の編年の骨組みを作り上げていたからである。それ以前には編年といえるほどのものはなく、本格的に考古学的な発掘調査が始められたが、年代はわからず、勢い理化学的方法によって年代推定を試みたが、その結果、百年近い誤りが生じてもほとんど正すこともできなかった。考古学の年代推定の基本である層位学や型式学による地道な編年作業が行われていなかったからである。また古美術の観点からの研究では一部の名品の紹介に偏り、考古学的な調査で出土する陶磁器に該当するものを知る手がかりとなる本は皆無に近い状態であった。そうした学問の水準に達していなかった肥前陶磁の研究が、基本に立ち戻り、考古学的編年研究により、体系的に肥前の陶器と磁器、それぞれが、歴史すなわち時間軸の中に組み込まれ、また、空間軸も窯ごとの関係を明らかにする道筋ができ上がったのである。製品についてのいわばタイムスケールを手に入れることができたことで、消費地遺跡の出土陶磁の年代判定ができることになる。

このタイムスケールを持って、前述の展覧会の出品物候補を探して約4ヶ月で37都道府県を駆け足で調査して廻った。見た何十万という陶磁器片の中から、全国流通の実態に少しでも近づく展示構成を考えて、970点を選定した。もちろん、この程度の数量で全国の流通状況の特徴、地域による流通した製品内容の違いなどを語れるものではなかった。主には編年ができ上がりつつあった肥前陶磁がいつ頃から量的に多く出土するようになるか、あるいはその地域的広がりを概観するにとどまった^{注1}。つまり肥前陶器の胎土目積み製品が1580～1600年代に広く流通したが、東日本太平洋側には極めて少ないこと、1640～50年代に肥前磁器の流通量が増大していくこと、17世紀後半に内野山窯の銅緑釉の皿、京焼風陶器が広く流通したこと、それを経て18世紀に肥前磁器のより粗製品が広

く流通したことを明らかにし、それが清朝磁器の輸出復活により海外需要が減少し、国内市場中心になったことと関わりがあることなどを初めて明らかにした。

1780～1860年代の江戸後期には九州以外にも磁器窯が開窯する例が増え始め、陶工の移動があつて肥前磁器とかなり類似したものを焼成することも指摘し、地方窯の勃興を江戸後期の特徴とした。

日々、産地と消費地の夥しい陶片を分類整理しながら培った蓄積をもとに、一気に全国の出土状況を見た分析結果は、今も大きな錯誤を生じてはいない。

その後の資料の増加などにより、17世紀を2つに区分できるようになり、当時Ⅰ～Ⅳ期の区分であつたのを、現在Ⅰ～Ⅴの5つの区分に修正した。Ⅰ期の下限は遺跡での出土状況を見て、胎土目から砂目への移行に時間を要した可能性を考慮すると、1600年代でなく1610年代とすべきかもしれない。しかし多くは1600年代と考えられるので、本稿では1600年代とした。

1640～50年代の生産量の急増の背景として1644年の中国の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の輸入が途絶したことに注目し、1650年前後の著しい技術革新の原因とみなすことになった。この1650年前後の著しい技術革新を境に前後を区分できるようになった。

この展覧会が消費地遺跡の考古学的調査を促進した。この図録が参考書、手引書となり、近世の遺跡ならばもっとも普遍的に出土する肥前陶磁の識別、年代推定が可能になったために、近世遺跡の調査がさかんになったといえる。近世遺跡の調査がさかんになると、全国の肥前陶磁の出土例が増大するという具合で、その後の23年間で、実に多くの出土資料の蓄積をみたのである。

当館が平成16年（2004）から日本海側の肥前陶磁流通調査に取り掛かったのも、資料の増加で地域差を研究することができる段階に入ったと考えられたからである。

今回、調査対象とした地域は、島根県から日本海側を北上して青森県までである。なお北限をみるため北海道を、太平洋側との違いをみるため、岩手県を加えて分布図を作成した。

現在、肥前陶磁は製品の特徴などから、5つに時期区分しており、それを次のように名づけている。

Ⅰ期（1580～1600年代）

Ⅱ期（1600～50年代）

Ⅲ期（1650～90年代）

Ⅳ期（1690～1780年代）

V期 (1780～1860年代)

I期

肥前陶磁は朝鮮からの技術者によって始まったことは間違いない。

この朝鮮からの技術伝播は二つの大きな波があったと考えられる。一つは秀吉の朝鮮出兵前の1580年代頃に佐賀県唐津市北波多周辺で誕生する唐津焼の創始であり、もう一つは「やきもの戦争」とも呼ばれる秀吉の朝鮮出兵後に多くの朝鮮人陶工が九州の諸大名によって連行された結果、九州各地で陶磁器生産が興こるが、この時肥前にも多くの陶工が連れて来られたのである。

その中で生産がもっともさかんで、全国規模の流通を果たしていくのが肥前陶磁器であった。他の九州の陶器窯はそれぞれの藩領域中心の流通がふつうである。比較的広域流通がみられるのは福岡の上野・高取焼であり、江戸初期には西日本の瀬戸内地域や大坂辺りまでの出土例がみられる。

肥前陶磁器のうち、先行した肥前陶器が早くも慶長（1596～1615）頃には全国流通を果たし、それまでの施釉陶器窯の瀬戸・美濃窯を凌駕する形で西日本地域から日本海側は青森・北海道まで流通する。量的に多くはないが江戸周辺や太平洋側の東北地方でも出土する。量的に多い地域をみると、秀吉時代、朝鮮出兵のための肥前・名護屋城建設や出兵に伴う物資輸送で全国的な舟運が活発になったことと関わりがあると考えられる。とりわけ日本海と大坂を結ぶ輸送ルートの整備にのって肥前陶器がまたたくうちに新しい施釉陶器として広く流通することになった理由は、古代の窯業技術が発展した小規模な中世瀬戸・美濃窯よりも大規模で優れた朝鮮式の登窯（図1）で大量生産し、成形、窯詰め法なども量産向きであり、より安価であったためと推測される。

肥前陶器は松浦党の有力豪族波多氏の保護のもとで、岸岳城（唐津市北波多）周辺で始まったが、波多氏が秀吉の逆鱗に触れ1593年に改易される。保護者を失った陶工たちは離散したと考えられ、その後の陶器窯は南の伊万里や武雄地方に中心が移る（図2）。慶長頃のことである。そのころには周辺の現在の有田町、嬉野市塩田町、多久市から長崎県佐世保市、波佐見町など肥前一带に広がる。

窯場は地域的にも拡大するとともに、各窯でみても窯幅、焼成室数が多くなり生産力が増大していることは明らかである。あえて、岸岳窯とその後の胎土目段階の窯の生産力を推測してみる。岸岳諸窯7箇所の焼成室数が1基平均を多めにみて10室程度と仮定すれば、単純計算しておよそ70室に対し、岸岳離散後のI期の窯は窯場の総数は44箇所

以上であり、1箇所に2基以上の場合もあるから50基以上にはなると仮定すれば、焼成室数も10数室の窯がふつうとなるから焼成室数を15として佐賀県内だけでも単純計算して750室と、10倍以上となり、長崎側でも波佐見、佐世保市にも窯は広がるから、20年間に推定される窯はさらに増大したと考えられる。しかし操業年数は、岸岳諸窯は1580～93年頃までで10年程度に対し、その後の胎土目段階の窯は1590年代から1610年頃までの20年くらいで倍の年数が推定されるから、当時の窯の耐用年数を10年程度と考えると、10年に直してみると半分の375室以上であり、生産量の増大は5倍以上ということになる。これは面積的（1室の面積は1回り拡大）にみただけであり、垂直方向を考えると胎土目積により失敗率を考慮しても3～4倍以上に増えたであろうから、おそらく胎土目積製品を生産した年間生産量は岸岳諸窯のそれより15～20倍以上にのぼったと思われる。焼成技術が試行錯誤段階に近かったと思われる岸岳諸窯に対し安定した量産に入り、何枚も重ね積みする胎土目積段階では、それ以上の流通量の差になった可能性がある。よって、現在、消費地遺跡出土の岸岳窯と考えられる藁灰釉の碗・皿などの製品の出土例の少なさは、上記のような生産地での生産量の差と矛盾していないといえる。つまり、このことは従来、岸岳窯の生産が16世紀前半や中葉から始まるなどの見解があったが、

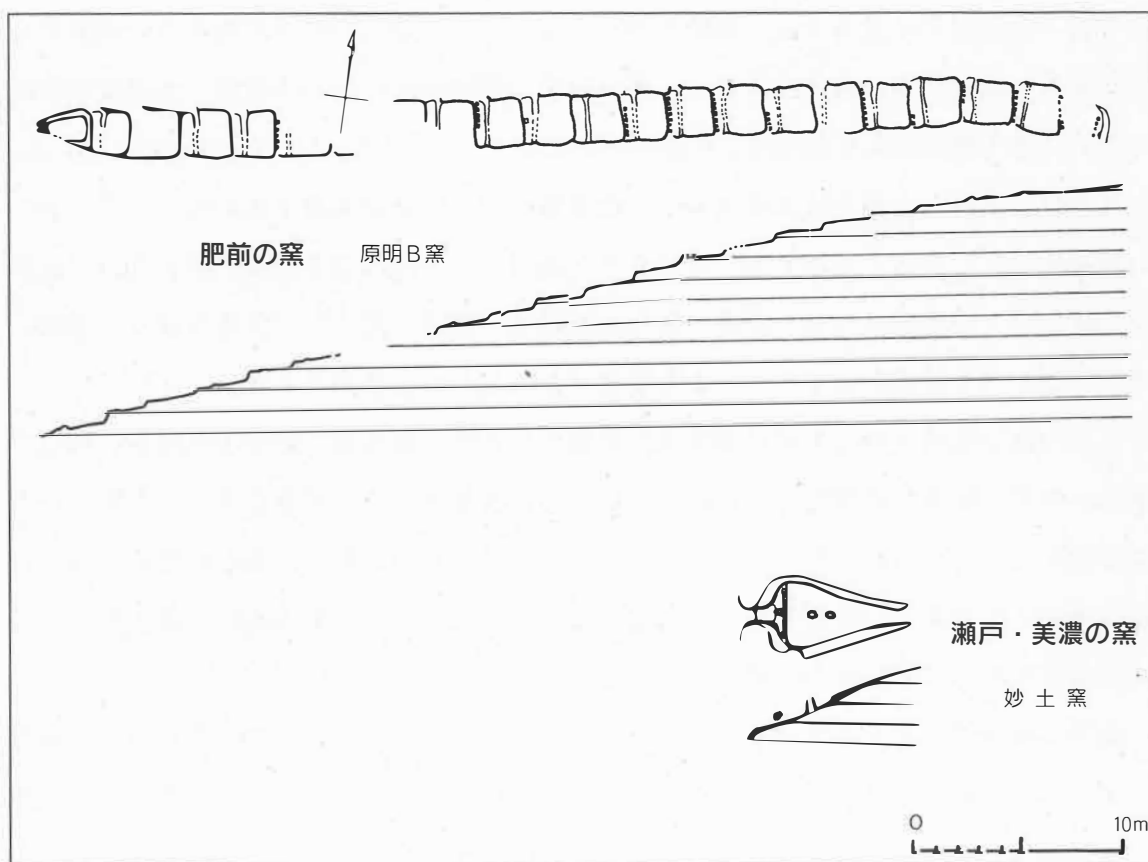


図1 中世末期の瀬戸・美濃窯と近世初期の肥前窯との窯規模比較図

No	窯跡名
1	飯洞 甕下窯跡
2	飯洞 甕上窯跡
3	帆柱窯跡
4	皿屋窯跡
5	皿屋上窯跡
6	山瀬窯跡上窯
7	山瀬窯跡下窯
8	唐人古場(尾越)窯跡
9	高麗谷古(皿山)窯跡
10	大川原(椎ノ木谷)窯跡
11	東田代筒江(カメヤ・段川内)窯跡
12	左次郎窯跡
13	神谷(甕屋ノ谷)窯跡
14	一若窯跡
15	焼山上窯跡
16	焼山中窯跡
17	焼山下A窯跡
18	焼山下B窯跡
19	焼山下C窯跡
20	道園窯跡
21	勝久窯跡
22	阿房谷上窯跡
23	阿房谷下窯跡
24	茅ノ谷1号窯跡
25	茅ノ谷2号窯跡
26	茅ノ谷3号窯跡
27	狼が鞍窯跡
28	市の瀬高麗神上窯跡
29	市の瀬高麗神下窯跡
30	岩谷・大山口(丸岩)窯跡
31	権現谷高麗神窯跡
32	牧山樺谷窯跡
33	小森窯跡
34	原明A号窯跡
35	原明B号窯跡
36	原明C号窯跡
37	山辺田4号窯跡
38	小溝上1号窯跡
39	小物成1号窯跡
40	小物成2号窯跡
41	天神森2号窯跡
42	川古窯ノ谷下(左)窯跡
43	七曲窯跡
44	錆谷窯跡
45	山崎御立目(山崎御音)窯跡
46	祥古谷窯跡
47	李祥古場窯跡
48	古屋敷窯跡
49	小峠窯跡
50	宇土谷1号窯跡
51	小山路(内田 皿山)窯跡
52	内野山南窯跡
53	大草野窯跡
54	本源寺窯跡
55	小十冠者窯跡
56	平松窯跡
57	道納屋窯跡

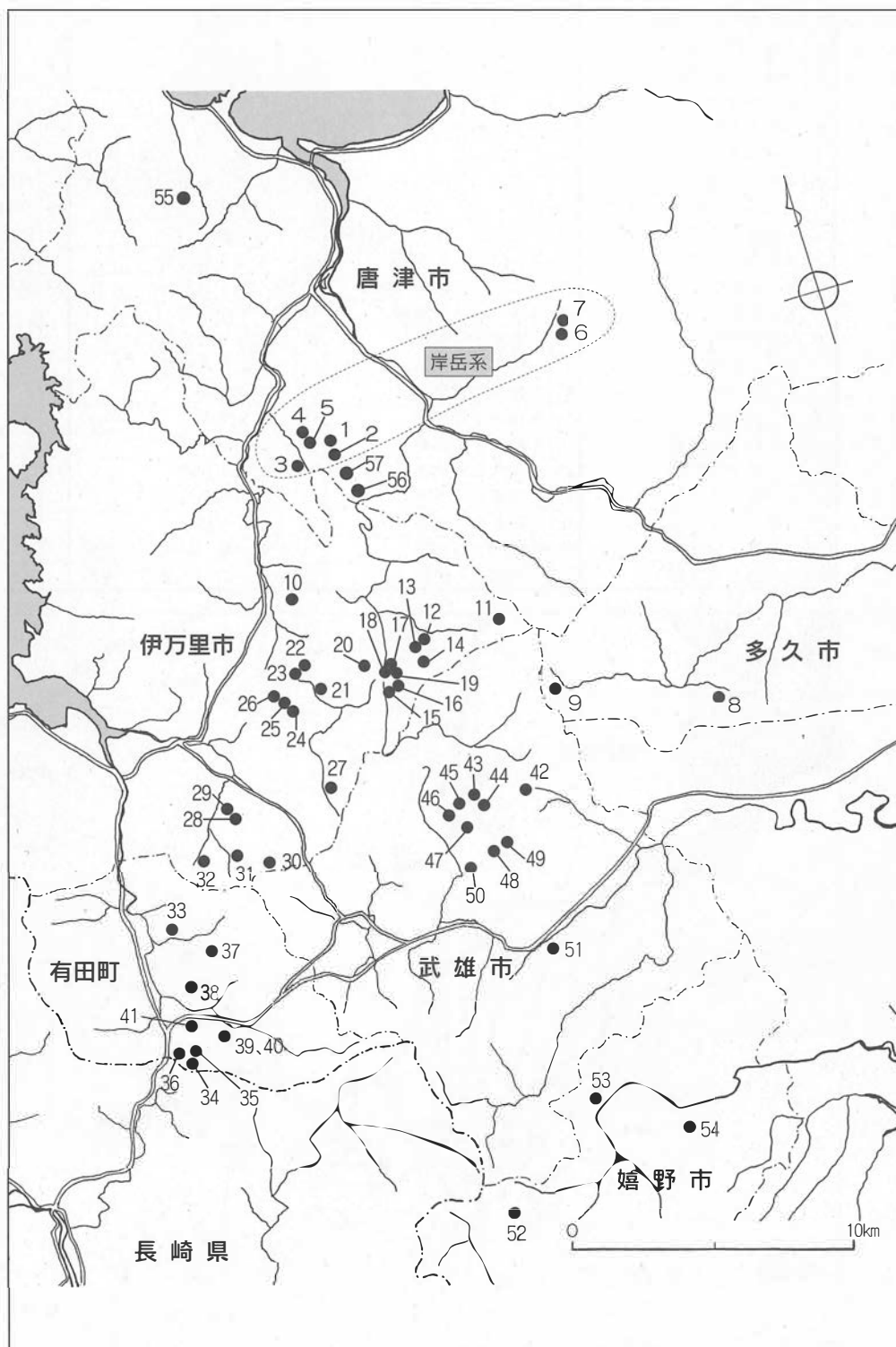


図2 岸岳系諸窯と佐賀県西部におけるI期の陶器窯分布

No	窯跡名	No	窯跡名	No	窯跡名	No	窯跡名
1	楠木谷 1 号窯跡	26	山辺田 3 号窯跡	51	樋口 1 号窯跡	76	下多々良 (椎峯下) 窯跡
2	楠木谷 2 号窯跡	27	山辺田 4 号窯跡	52	樋口 4 号窯跡	77	卒丁古場 (明尊寺裏) 窯跡
3	枳莪窯跡	28	山辺田 6 号窯跡	53	高麗窯跡	78	鞍ヶ壺 (寺の谷鞍壺) 窯跡
4	年木谷 3 号旧窯跡	29	山辺田 7 号窯跡	54	アキ山窯跡	79	栗木谷窯跡
5	小樽 1 号窯跡	30	山辺田 8 号窯跡	55	窯ノ辻窯跡	80	岳野山 (多々良) 窯跡
6	小樽 2 号旧窯跡	31	山辺田 9 号窯跡	56	(百間北) 窯跡	81	香茸窯跡
7	山小屋窯跡	32	多々良ノ元 B 窯跡	57	百間窯跡	82	広瀬向 1 号窯跡
8	谷飯 1 号窯跡	33	小溝下窯跡	58	商人山窯跡	83	弁財天窯跡
9	下白川窯跡	34	小溝中窯跡	59	川古窯ノ谷上 (右) 窯跡	84	迎の原 (上) 窯跡
10	中白川窯跡	35	小溝上 1 号窯跡	60	川古窯ノ谷下 (左) 窯跡	85	迎原高麗神 (下) 窯跡
11	天狗谷 E 窯跡	36	小溝上 2 号窯跡	61	古屋敷窯跡	86	原明 A 号窯跡
12	天狗谷 A 窯跡	37	小溝上 3・4・5 号窯跡	62	小峠窯跡	87	原明 B 号窯跡
13	天狗谷 D 窯跡	38	清六ノ辻 1 号窯跡	63	宇土谷 1 号窯跡	88	原明 C 号窯跡
14	天神山窯跡	39	清六ノ辻大師堂横窯跡	64	焼ヶ峰 1 号窯跡	89	原明 G 号窯跡
15	稗古場窯跡	40	清六ノ辻 2 号窯跡	65	檜ノ木山窯跡		
16	天神町窯跡	41	小物成 1 号窯跡	66	白木原 1 号窯跡		
17	猿川 B 窯跡	42	小物成 2 号窯跡	67	白木原 2 号窯跡		
18	禅門谷窯跡	43	天神森 1 号窯跡	68	甕屋 A 窯跡		
19	一本松窯跡	44	天神森 3 号窯跡	69	甕屋 B 窯跡		
20	向ノ原 1 号窯跡	45	天神森 4 号窯跡	70	内野山北窯跡		
21	向ノ原 2 号窯跡	46	天神森 5 号窯跡	71	内野山南窯跡		
22	向ノ原 3 号窯跡	47	天神森 6 号窯跡	72	内野山西窯跡		
23	外尾山 1 号窯跡	48	天神森 7 号窯跡	73	大草野窯跡		
24	外尾山 2 号窯跡	49	天神森 8 号窯跡	74	上多々良 (椎峯上) 窯跡		
25	掛の谷 1 号窯跡	50	天神森 9 号窯跡	75	中多々良 (椎峯中) 窯跡		

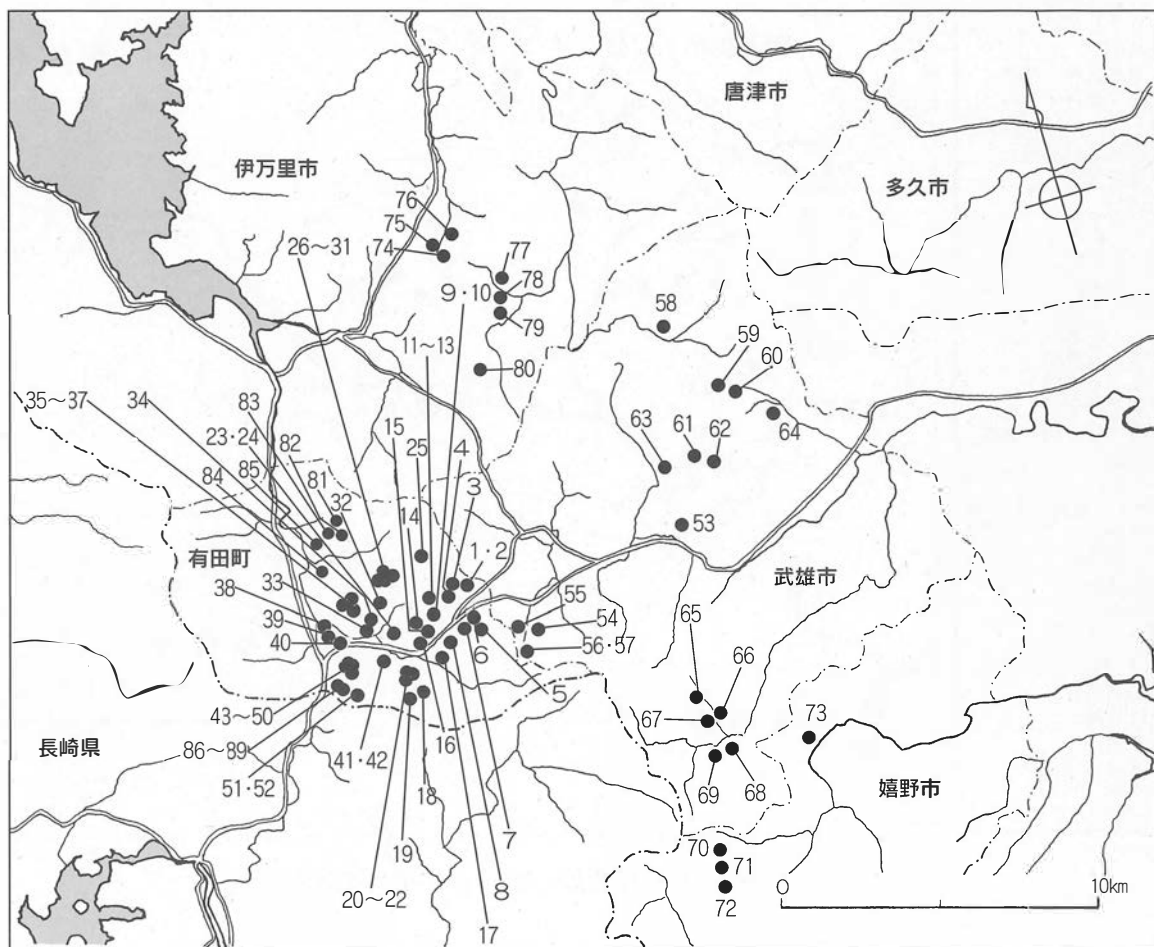


図3 佐賀県西部におけるⅡ期の陶磁器窯分布

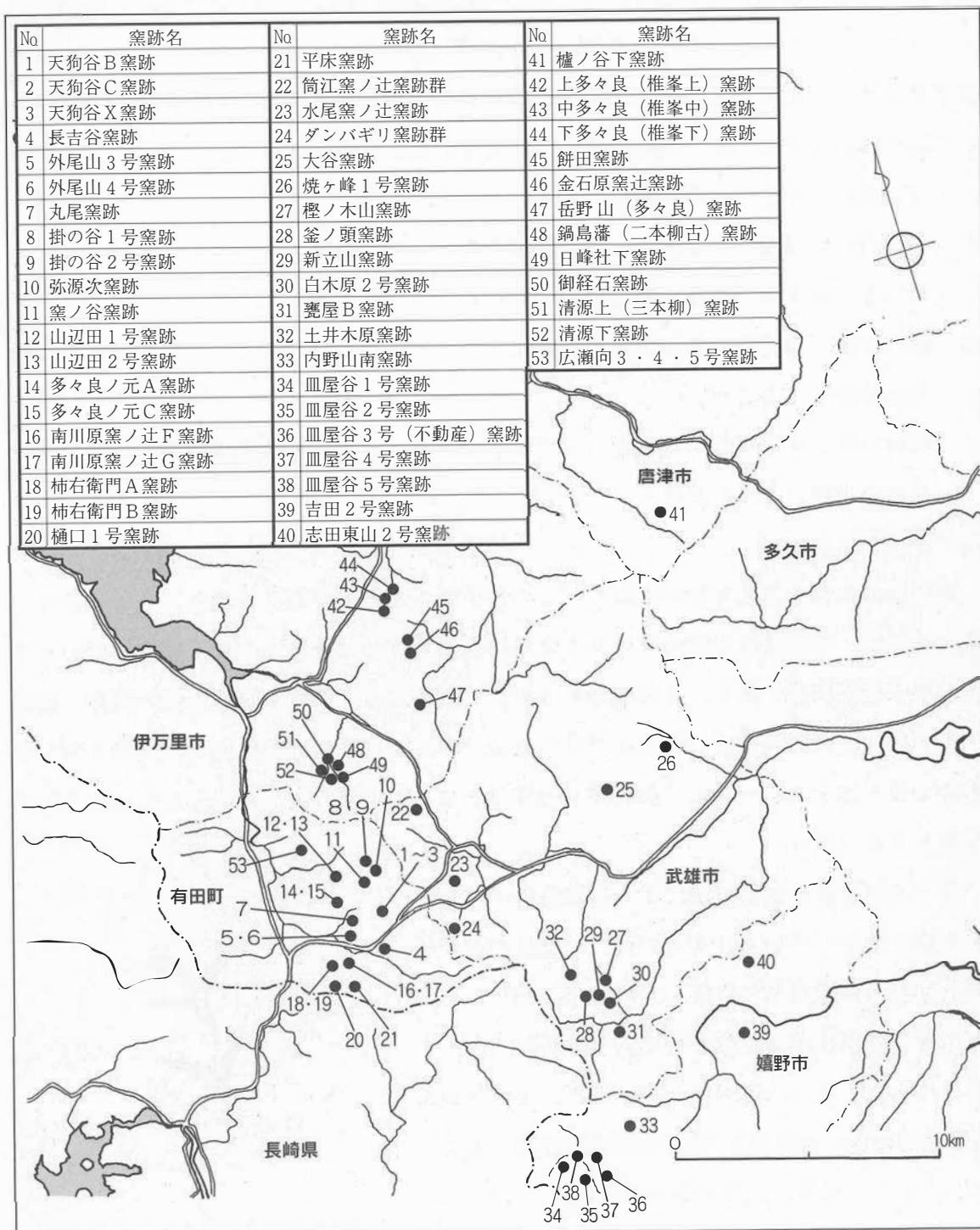


図4 佐賀県西部におけるⅢ期の陶磁器窯分布

そうであれば、消費地での出土状況からすれば矛盾するのであり、また生産地としても当時の窯が粘土だけで作られていたために窯の耐久性は低く、長くて10年程度しかもたなかったことが推測されることからして、岸岳系諸窯（図2）の7箇所程度の窯数からしても40～50年間も焼いたことを裏付ける証拠はないのである。もちろん年代がわかる消費地遺跡で、確実にそうした16世紀中葉にさかのぼりうるような出土例はないこともこの論拠を裏付けている。現在、確実に岸岳窯の製品と判断できる出土例は表3、図31のように極めて少ない。その理由としては

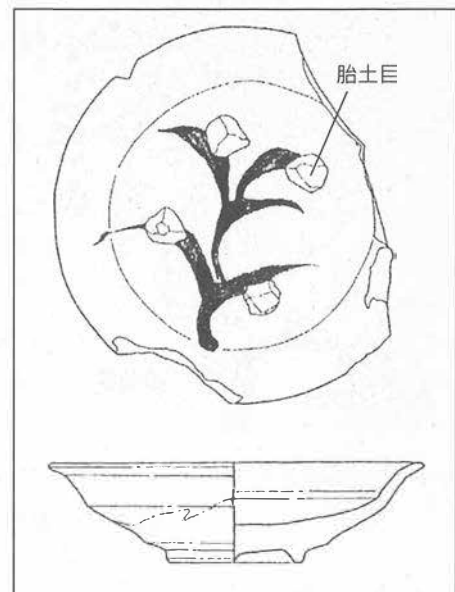
- 1 室町時代には陶器生産がほとんど行われなかった九州地方で、新たに朝鮮陶工を連れてきて始まった新興の陶器が急に販路を拡大できなかったこと。
- 2 国内の流通は秀吉の朝鮮出兵を契機に北国と九州間の舟運がようやく活発になり始めた時期であること。
- 3 朝鮮の陶工も藁灰釉の技術をもった陶工であり、日本に来て築窯や製陶技術の試行錯誤の段階にあったこと。

などがあげられる。

藁灰釉の製品をみると釉が剥離したものが少なくないのであり、釉としての安定性が低いからか、岸岳離散以降の伊万里や武雄に広がる窯では使用されなくなる。代わって主となるのが灰釉であり、この灰釉も3種に大別される。つまり緑色が強い灰釉、透明に近い灰釉、長石釉に近い白色を帯びた灰釉である。透明に近い灰釉では鉄絵を施したものが多く作られ、一般に「絵唐津」と呼ばれる。碗・皿の窯詰め法としては胎土目の特徴とする（図5）。

今、この肥前の胎土目積による陶器段階は慶長・元和期と推定している。秀吉が死に、慶長の役が終わり朝鮮から撤退して以後、元和元年（1615）の大坂の陣で豊臣氏が滅ぶ頃までである。朝鮮出兵のときに作られた多くの船が払い下げられ、また朝鮮出兵の物資輸送で整備された航路が活発な海運に変わっていく。この九州と北国を結ぶ海運ルートにのって、新興の肥前陶器が一気に広域流通していったものと考えられる。

実際、胎土目積による肥前陶器の碗・皿の出土例は地域による多寡はあるにしても、北海道までの広



有田町原明窯出土

図5 胎土目積による肥前陶器鉄絵皿

域に分布する（図32）し、鉄絵を施したより高級品と考えられる皿は東京から太平洋側の岩手県まで出土例が分布する。もちろん量的に多いのは日本海側や瀬戸内、四国から関西、といっても京・大坂から和歌山、奈良の地域までの西日本地域である。日本海側も島根以北でみると、島根の次は石川、富山地域、次いで山形、秋田、青森地域に多い。特に領国米の船として越前、加賀の商人が活躍し、この地域が西からの船と北国の舟運の結節点のような地域であることと関係があるのではなかろうか。加賀藩という大藩で米の輸送や消費地としての物資購買力も大きかったことが上げられる。肥前陶器が次の砂目積段階にも同じような出土分布を示すのではなく、分布域に変化がみられ減少することは、朝鮮出兵後の名残で胎土目積段階までは物資輸送が活発であったためであろう。

もちろん、価格と生産力も重要な要件であり、肥前陶器の窯はそれまでの中世陶器の焼成室1部屋の窯体に比べ、登窯というはるかに大規模な窯体であり、また成形も瀬戸・美濃の陶器は高台を貼り付けて作るのに対し、轆轤成形であり、成形時間はより短いと思われる。こうした朝鮮の新たな量産向きの技術でより安価な陶器を多量に供給できたものと推測される。こうしてそれまで瀬戸・美濃の碗・皿が流通していた地域にも、それをしのぐ形でまたたくうちに流通したことを、出土分布が物語っている。そのため焼物の代名詞で近現代でも「瀬戸物」というのに対し、富山あたりまでの地域では「唐津物」と呼ぶということも、この北陸地域に肥前陶器が筑前などの商人により、直接的に運ばれ、山形、秋田、青森も量的に多いが、これはこの陸奥・出羽などから材木などの物資が運ばれ、その帰り荷として肥前陶器が運ばれた。つまり、間接的に運ばれたことが、呼称などの違いとなった可能性がある。仮にⅡ期以降にこうした代名詞ができたとしたら、唐津ではなく磁器の伊万里であったと思われるから、伊万里が誕生以前のⅠ期の時代に同じ陶器の瀬戸と天下を二分した時代にできた焼物の代名詞と推測されるのである（図6）。

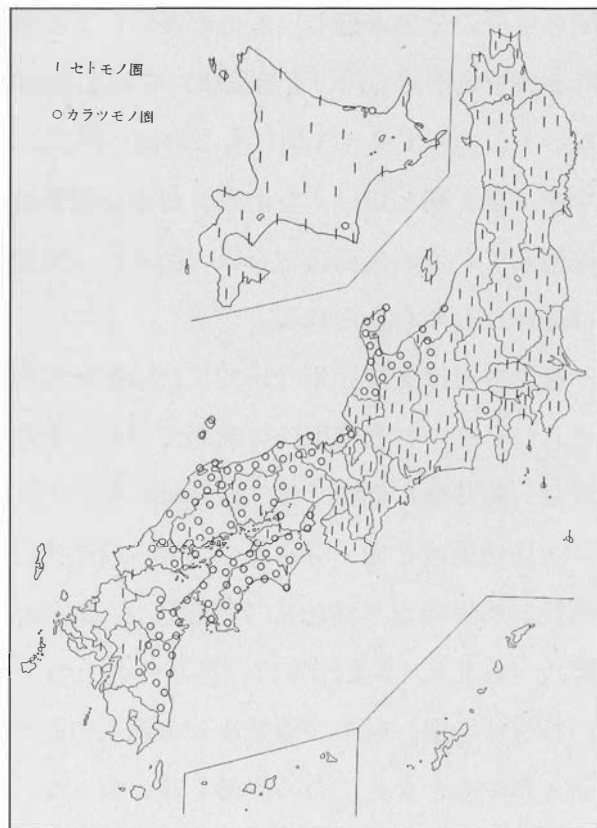


図6 「せともの」方言の分布
（『瀬戸市史陶磁史篇五』1993より転載）

『日本海海運史の研究』（福井県立図書館）の321頁に、天和の頃の敦賀の職業構成が記されているが、その中にも「唐津焼物屋」が2軒と記され、この地域では17世紀後半には「唐津焼物」という焼物の代名詞が使われていたことがわかる。

これに対し、佐渡の天明3年（1783）『高津勘四郎商人重宝記』には、秋田への下り物として「瀬戸物」とある。

ただしこの呼称については、単純に富山以西では「唐津物」といつていたとはいえない。「毛利文庫」の文化元年（1804）『定札持諸町人附立』に「瀬戸物類商売 萬屋三右衛門^{注2}」や、肥前でも「瀬戸向焼」（史料7）の呼称が当時の記録にみえる。富山以北では「瀬戸物」と呼んでいたと考えられているが、その例としては、天明8年（1787）の「蝦夷産物平均訳書」（松前交易値段付帳、松前町史編纂室、1983所収）に、「鉄物類刃物鍋釜瀬戸物家器類塗物古器物」（傍点筆者注）とある。

I期の肥前陶器は城館跡や寺院などで出土することが多い。磁器は中国磁器が出土し、陶器には瀬戸・美濃窯の陶器も出土することが、北陸以北では普通である。しかし、江戸初期に始まるような遺跡では肥前陶器の方が多くなる。

I期の肥前陶器は、碗皿のほか、ロクロ成形では擂鉢、片口鉢もあるが、これらはI期とII期の分別が難しいものが多い。また叩き成形の壺・甕・瓶・擂鉢もあり、内壁の叩き成形痕が同心円（青海波状）であるのが特徴である。寛永頃を境に格子目状に変わっていく。よってII-1期にもこの同心円状の叩き痕を残す壺・甕が残ると思われるので、すべてがI期とはいえないが、日本海側地域でこのような叩き成形の壺・甕や瓶などが流通しているのは間違いない（図46）。「朝鮮唐津」と呼ぶ瓶の上下を藁灰釉と鉄釉で掛け分けたものもみられる。

豊臣秀吉は文禄元年（1592）には朝鮮渡海のための乗艦建造を加賀・前田家に命じ、それに必要な材も秋田氏に求めている。その後も毎年のように多くの杉材が秋田領から敦賀（福井県）経由で畿内に運ばれた^{注3}。

伏見城築城と城下町建設のため、秋田氏に杉材伐採と杉板の輸送を命じた。さらに津輕氏、小野寺氏（仙北）、戸沢氏、仁賀保氏、赤宇曾氏、滝沢氏、内越氏、岩尾氏、六郷氏（仙北）、本堂氏等11の奥羽の大小名に命じて調達した。慶長2年、秋田家受持分の杉板は敦賀、越中、能登などの商人の船で運ばれた^{注4}。慶長3、4年では越前、若狭の商人が中心となってこの回漕を請け負った^{注5}。それは秀吉死去の翌年まで続いた。

別に南部氏や最上氏も材木調達を命ぜられたと考えられ、これら奥羽北辺の大小名はまさに山形・秋田・青森地域であり、肥前陶器の胎土目が多く、また砂目積の溝縁皿も

多い地域に重なるといえる。

豊臣氏のための作事板調達は秀吉の死去の翌年までで終わり、次の年からは秋田氏の持ち船が秋田氏自身のための木材を敦賀に運んでいる。

こうして秀吉時代に活発になった北国と上方を結ぶ海運は秀吉後も発展を遂げていったものと思われる。

弘前・加賀・丸岡などの北国諸藩による領主米（蔵米）の廻米があり、流通拠点として敦賀に蔵屋敷を設けた。加賀藩は天正19年（1591）に始め、秋田藩も慶長末、新潟の



図7 近世の主な湊と航路〔日本海側を中心に〕（『初期伊万里展』2004 NHKプロモーションより転載）

新発田藩は慶長・元和、村上藩は元和7年頃、山形の新庄藩戸沢氏は元和9年（1623）に敦賀廻米を始めている。^{注7}

これらの地域は胎土目積の肥前陶器が多く出土している地域でもある。

敦賀などは逆に発掘例が少なく肥前陶器がどのくらい流通したか不明な地域であるが、福井城など調査が行われた遺跡では多く出土していることから、敦賀にも多く運ばれたと推測される。こうした福井、石川、富山地域まで西からの船で運ばれ、ここから北国舟でさらに北の青森までの地域に運ばれたと考えられる。

このⅠ期には東北太平洋側の岩手・宮城でも鉄絵を施したいわゆる絵唐津は少量ではあるが、出土している。これは日本海ルートで運ばれたと考えるべきか否かである。

筆者はこうした絵唐津の出土分布は東京などにもあり、次のⅡ期を代表する砂目積溝縁皿がこうした東日本太平洋側では出土しないことを考え合わせると、岩手・宮城などでみられる絵唐津は日本海側というより、江戸を経由して太平洋側を北上して運ばれたのではないかと推測している。絵唐津は相対的に高級品のために遠隔地まで運ばれたと考えられる。

Ⅱ期

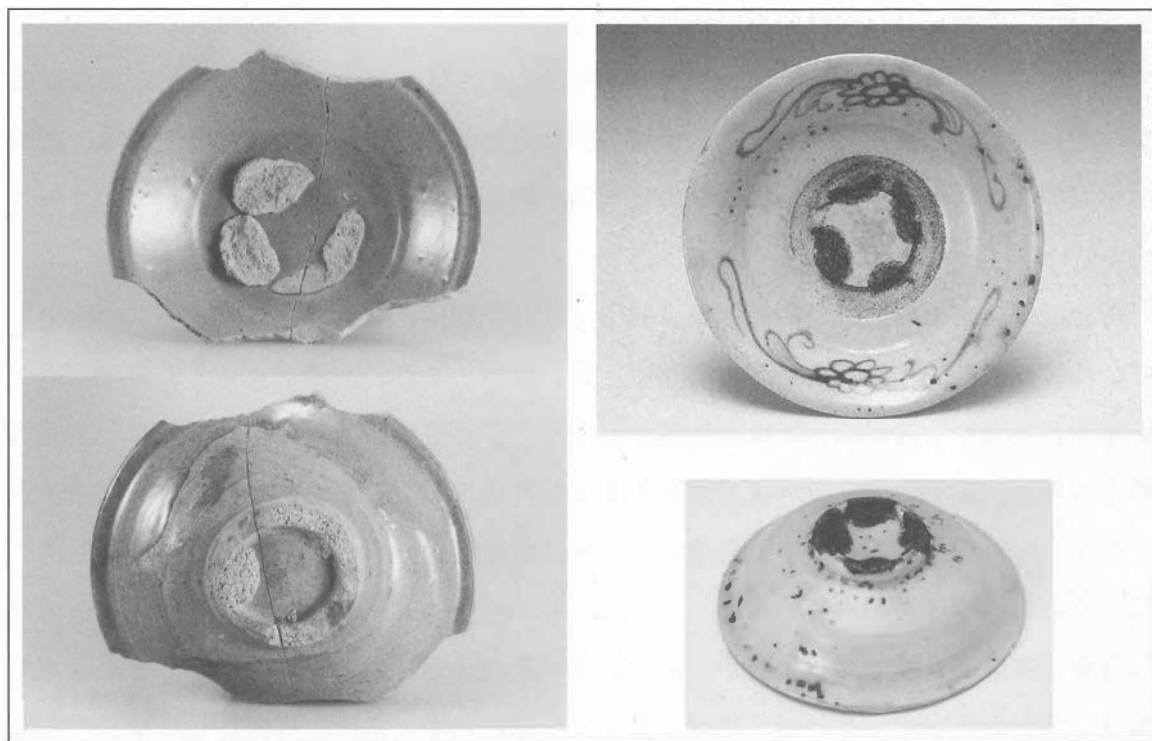
Ⅱ期の肥前陶器生産は、新たに秀吉の朝鮮出兵の後に連れ帰られた朝鮮人陶工が加わり一層の拡大をみたものと考えられる。この新たな朝鮮人陶工によって新しい技術がもたらされた。もっとも重要な技術変化は製品を窯に詰めて焼く際の製品の重ね積みの仕方が胎土目積と呼ばれる方法から、砂目積に変わることである。この砂目積に変わると、次第に器に描く鉄絵装飾は消えていき、文様のない灰釉皿が主となる。そして新しい装飾として白化粧土で刷毛目や象嵌をする装飾法が現れる。そうした新しい装飾の陶器は武雄・塩田などの地域の窯で主に作られた。

朝鮮出兵後の朝鮮人陶工による技術伝播のもっとも重要なものは磁器の技術である。磁器は技術的にもっとも進歩した焼物であり、その技術と特別な原料がなければできない。わが国では中世まで磁器ができず、主に中国、いくらかは朝鮮などから輸入していた。そうした中、鍋島軍に連れて来られた朝鮮人陶工が原料を求めて佐賀領内を探し歩き、有田周辺で磁器原料を発見し、先行して操業していた陶器窯の中で磁器焼成の試行錯誤が始まる。江戸時代初頭、1610年代頃のことである。

磁器草創期には朝鮮の技術がみられる。その第一は窯詰めの際に、砂目を挟んで製品同士を重ね、焼き上げた後重ねた製品をはずしやすくする方法である。

肥前で陶器・磁器両方の生産が朝鮮の技術によってさかんになるが、こうした朝鮮の技術は、陶器に関しては福岡県の上野、高取焼にも伝わったし、熊本県小代山麓の古畑窯（荒尾市）、大分県佐伯市の波越窯にみられる。また鹿児島県の薩摩焼から山口県の萩焼にまで広がるのが、朝鮮出兵を原因とする朝鮮の技術伝播であった。

Ⅱ期は現在1600～50年代と考えているが、それも寛永14年（1637）の伊万里・有田の窯場の整理統合事件^{注8}を境として、その前後である程度区別できるものが多い。そのため、1637年以前をⅡ－1期、以後をⅡ－2期とする。特に陶器では1637年以前に特徴的で主であった製品として灰釉溝縁皿がある。胎土目積の陶器窯で砂目積に移行し、その主力製品がこの溝縁皿（図8）であった。



有田町天神森3号窯出土

染付小皿（砂目積） 1610～1630年代
口径14.6cm 柴田夫妻コレクション

図8 陶器溝縁皿（砂目積）

図9 砂目積磁器

〈陶器溝縁皿〉

1637年の窯場の整理統合事件とは、磁器と陶器両方の陶磁器生産がさかんになると燃料の新材採取のために陶業者が山を伐り荒らすことを理由に、鍋島藩は伊万里の窯場4箇所すべてと、有田の窯場のうち7箇所の合計11箇所の窯場を取り潰し、有田の13箇所の窯場に統合した。この事件で取り潰された窯場を筆者が推定したが、その共通項が灰釉溝縁皿を焼いていた窯であり、この事件を境に、もっとも安価な食器として作られていた、こうした灰釉陶器の碗皿が姿を消すのである。つまり、有田は磁器一本の窯場に

変身を遂げた。

この1637年の事件以前には広く作られた灰釉溝縁皿であるが、その出土分布には地域差が絵唐津以上にある。つまり、島根から青森まで多寡はあるにしても、おおむね日本海側を広く運ばれたことがわかる（図33）。福井は近世遺跡の発掘調査例が少ないせいかもしれない。北海道でも上ノ国市街や瀬田内チャシ跡で出土している。青森でも十三湊で多く出土し下北の東通村では出土しているが、その先の太平洋側の岩手県では未発見である。東日本太平洋側では出土例がほとんどない。京都、大阪、和歌山あたりは多く、奈良でも出土しているが、滋賀ではみられない。四国は多く出土している。瀬戸内の岡山、広島でも多い。

ふつうの溝縁皿は透明性の高い灰釉をかけたものであり、底部は高台を削りだす。その中にいくらか鉄釉をかけた溝縁皿や糸切り放しの平底の例がある。鉄釉平底の溝縁皿が一番多いのは秋田県であり、他には石川県と大分県で出土している程度である。灰釉で平底の溝縁皿となると、日本海側では秋田、新潟、石川、福井、島根などで出土している。

溝縁皿が日本海側と瀬戸内の広島、岡山、さらに四国、関西の京都、大阪、和歌山に多いのは、それより東の太平洋側などは、なお瀬戸・美濃の陶器が流通していたためであろう。九州でも沖縄以外では溝縁皿が出土するが、それほど多いわけではない。九州はこの1610～30年代頃には各地で陶器生産も行われていた。しかし、必ずしもその理由で片付けられないのは、熊本も薩摩もこの時期に碗皿といった陶器の食器生産を活発に行っていた形跡はないからである。これらの地域の窯はより特別な茶道具や、鹿児島では壺甕、播鉢のような陶器生産が目立つ。18世紀のように陶器の食器生産はまださかんではなかった。とすると、碗・皿の食器は何を用いたかである。理由としてはまだ中国磁器が輸入され、長崎などに近い地理的事情から中国磁器を使う割合が多いこと、肥前でも磁器生産が始まり、やはり地理的に近いと輸送コストを抑えた価格での入手ができたことなども考えるべきかもしれない。地理的に近いから流通量も多いということは当たらないのである。それは『天保六年伊万里津積出陶器荷高国分』^{注10}（図10）をみてもわかる。

長野県北部信濃川付近でも溝縁皿が多くみられるのは越後側から舟運を使って入ったからと考えられる。図6のように、焼物の代名詞が「唐津物」という地域であることも、こうした時代に肥前陶器の流通圏であったためであろう。

後の記録であるが、越後・今町の記録（天明6年（1786）『新潟県の地名 日本歴史

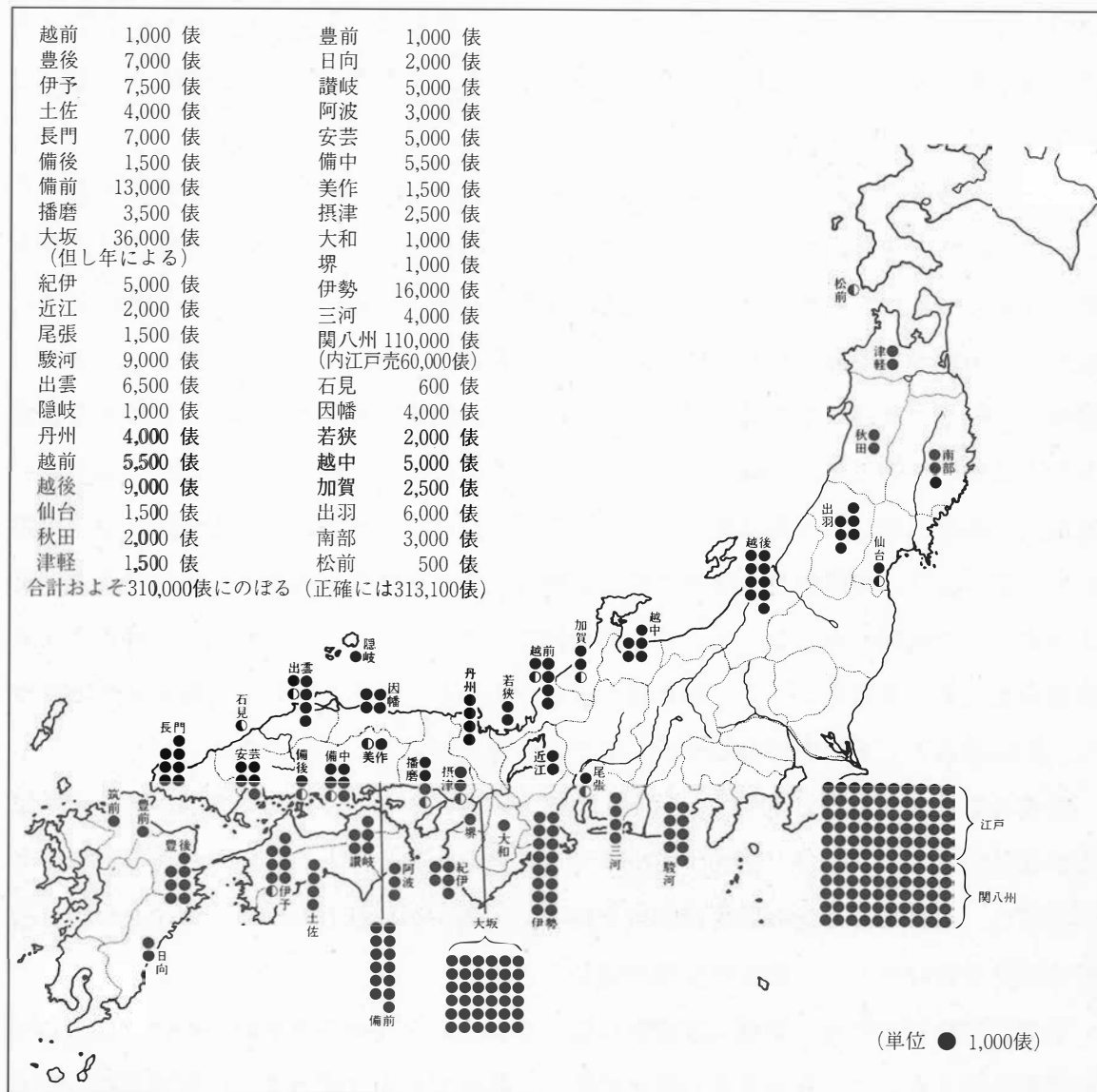


図10 天保6年伊万里津積出陶器荷高国分 (『国内出土の肥前陶磁』1984より転載)

地名大系十五』)によると「入津荷の売捌きは(中略)瀬戸物類は信州へ八割、郡内二割」という。^{注11}

寛永期には、加賀藩はそれまでの敦賀からの陸路と琵琶湖の舟運を使って上方に運ぶ方法に対して、西廻り航路をとって、船で下関を経由し、瀬戸内海を通過して大坂に運ぶ大坂廻米を始める。これが北前船の先駆けともいわれる。この西廻り航路を取るならば、下関あたりで肥前陶器を買い付け、帰り荷として北国に運ぶことが考えられる。加賀藩ということで、それ以北の国々が行ったわけではないので、大きく肥前陶磁の流通路を変えたとは思えないが、大きな船が多量に運ぶことによって流通量が増大したことは推測される。

滋賀県は関西でも砂目積溝縁皿が出土していない地域であり、敦賀から大津へと米が

運ばれるが、陶磁器の流通ルートではなかったし、溝縁皿のような文様のない雑器は陸路、遠く運ばれるほどの価値はなかったのであろう。この理由は、東日本太平洋側の江戸などで出土しない理由と共通である。

こうした地域差がある中で、新潟の中でも、佐渡に胎土目積、砂目積の肥前陶器が多いのは、佐渡の金銀山のさかんであった時期という背景があった。佐渡金銀山は文禄4年（1595）に相川で始まったという。新潟は慶長2年（1598）秀吉が上杉景勝を会津に転封し上杉領国を解体していく。秀吉は直臣堀秀治を越後45万石としたが、その秀吉が慶長3年死去。慶長5年の関ヶ原の戦いを経て、家康は慶長6年（1601）に佐渡を幕領とし、敦賀の豪商代官田中清六を代官として佐渡に送った。慶長7年に佐渡金銀山から家康への銀運上額は1万貫に及び、慶長17年の記録には「その頃、佐渡の国に金山繁昌して、京、江戸にも御座なきほどの遊山見物遊女など充満す。国々より来る金ほり、町人等かよの遊興にふけり、もとでを失ひ候て、ことごとく、うかれ国元へ帰る事なき者数を知らず。身持ちよくして帰るは十人に一人なり^{注12}」とあって佐渡の繁栄振りが分かり、中国磁器とともに肥前陶器が多く出土する理由を知ることができる。

慶長8年、家康の代官頭大久保長安が佐渡の国奉行となる。越後45万石の福島城主堀氏が改易され、慶長15年（1610）家康は六男忠輝を福島城主として大久保長安を付家老に任じた。19年には交通の要衝高田城を築いて福島から移転したのも、佐渡金銀山と駿府を陸路で結ぼうとした長安の意図が感じられるという^{注13}。

慶長18年長安が死ぬと金銀山は家康に収公された。元和から寛永期にかけて金銀山は最盛期を迎えた。ところが寛永11年と13年の大洪水で鉱山は没落する。相川金銀山が衰えると相川の人口は急減した^{注14}。

秀吉時代に文禄慶長の役に関わる名護屋城への物資輸送などで全国的海上輸送網が発達し、その海上輸送網によって1590～1610年代の胎土目積肥前陶器が広く流通したが、1610年代から30年代、元和・寛永期には、日本の茶人が中国景德鎮窯に磁器を注文することが行われ、「古染付」と呼ばれる日本独特の茶陶が生まれた。この古染付が佐渡奉行所跡でも出土している。肥前窯での生産状況や、消費地遺跡での出土状況から、筆で描いた絵をもつ高級食器は中世日本の陶器生産にはなかったが、桃山時代に筆で絵文様を描いた陶器への需要が、絵唐津、志野、織部などの陶器から始まり、さらに、中国景德鎮窯や漳州窯、肥前染付磁器へと移ったと考えられる。

この背景としては、古田織部が元和元年（1615）大坂夏の陣の後、豊臣方と通じた嫌疑で切腹。元和2年、家康も死去するが、大御所となった秀忠と新将軍家光が幕府安定

に向けて茶事を活発に行った。織部に代わって小堀遠州が茶の湯の指導的役割を果たすようになるにつれ、「綺麗寂」といわれるように茶陶にも洗練された陶器が取り上げられ、かつ磁器の茶道具もさかんに用いられるようになった。

中国磁器に対しては「綺麗寂」の中で祥瑞と呼ばれる幾何学文様や丸文などをさかんに描いた意匠の磁器を景德鎮に求め、崇禎期頃の特徴的な中国磁器となる。

祥瑞は古染付以上に出土例は少なく、「五良大甫呉祥瑞」銘の典型的なものは東京大学構内遺跡などきわめて少ない。広義の祥瑞にしても少なく、祥瑞を最後に中国磁器の輸入はほとんど途絶する。その原因は中国の明王朝が正保元年（1644）倒れ、北からの清王朝に代わると、明の遺臣が南方に逃れながら抵抗を続け、中国南部は内乱状態に陥る。そのため、中国南部の大窯業地は戦乱で疲弊する。この結果、中国磁器の輸出は激減し、日本にもほとんど輸入されなくなる。わが国の磁器需要は肥前に向けられ、有田を中心とする肥前窯は生産力を増大させ、一気に国内磁器市場を独占した。

〈高台無釉碗〉

このことを裏付ける生産地側の現象としては、1640年代頃の窯で高台無釉の碗（図11）や小坏が作られる。いくらか壺や大皿などにも高台無釉のものがみられる。高台無釉は通常の施釉よりも畳付の部分の釉剥ぎをする時間、手間を省くことができる。また山辺田窯の大皿などでも焼成時間を短くしたことを示す焼成の甘い特徴をもつ製品が多くなる。

鍋島藩はこれに先立つ寛永14年（1637）3月15日に日本人陶工826人を陶業から追放し、窯場の整理・統合を進めた。その頃、光野久左衛門、鑰山九大夫山代官のときは漸く1年に銀2貫100目ずつの運上銀であった。そのような時、大坂の塩屋与一左衛門、えらや次郎左衛門の2人が伊万里の陶商東嶋徳左衛門と運上銀増しを提示し、寛永19・20年、上記3人に1年20貫目の運上銀を条件に山請けを許した。^{注15}しかし、この目論見は失敗。皿屋中が1年35貫目ずつの運上銀で3ヵ年山請けとなる。このような後、正保4年（1647）9月、江戸より藩主の命があり、山が伐り荒らされるため皿屋を潰すという。それについて皿屋頭らと副田喜左衛門が集められ、相談した。35貫目の上に増し銀をし、詫び言を申上げれば赦されるのではという意見もあったが、35貫目さえ納めることができないのだから、潰されても仕方がないということになった。しかしその後、藩の石井右衛門佐、土肥喜右衛門・山本神右衛門が有田に出向き、皿屋の総人数を集めて談合したが、増銀は無理であると皿屋惣中は言い切り、暗礁に乗り上げた。

神右衛門は窯が潰され、朝鮮の陶工たちが散りじりになるのは問題であるし、皿屋運

上銀を1年68貫990目に神右衛門が目論見し、皿屋中の人たちを集め読み聞かせ、談合したところ、当時、焼物製作をしていた車（ロクロ）数155車、竈数155竈あったが、そのうちの半分の75人は神右衛門の目論見に従うと。ただし倒れ車があるのでその運上は免除されるとし、残る半分の75人は窯業から追放されても仕方がないということになった。

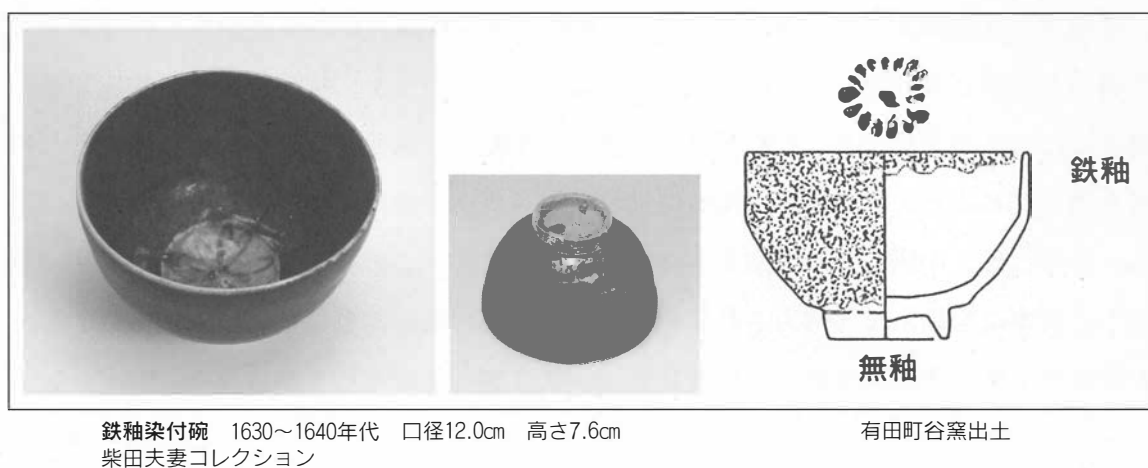


図11 高台無釉の磁器碗

佐賀に戻り、石井兵庫に報告したが、多額の運上銀なので、実現するのかと兵庫も心もとなく思ったが、皿屋が潰されても迷惑する。正保4年10月25日付けで1年運上銀68貫990目の目安を提出し、江戸の藩主に伝えられた。

これに対し、12月、有田皿屋代官に山本神右衛門が任じられた。正月8日より神右衛門は皿屋に赴任。正保5年（1648）、1ヶ年に銀77貫688匁を取り立て納めた。「皿屋の儀になる様さへ能く御座候はば、以後迄、御運上 召し上げらるべく候。神右衛門一存にて毎年過分の御所務なされ、向後、御為に罷りなり候儀、一人の案じ工夫迄にて御座候。談合相手と候て、誰ぞ一人も御座なく候ひつ」とある。^{注16}このようにわずか8年で有田皿山が鍋島藩に納める税が35倍にまで急増した。この大增税を納めきった理由は、前述の1644年、中国磁器の輸入が途絶し、国内の磁器需要が有田に集まったためと、それに応じて、生産力を増大させたためである。窯が増えたわけではなく、生産量を増大させる工夫として、高台無釉の碗・小坏などや、焼成時間を短縮して、生産量を増やした。作れば作るだけ売れるという状況になったものと想像される。

実際、遺跡出土の肥前磁器はこの頃から多くなる。表ではⅡ期として区別していないが、Ⅱ－2期の1640年代以降のものから一般に出土量が多くなる。その象徴的な高台無釉の碗、小坏は石川、福井あたりに多い遺跡があり、新潟から北海道でも少しずつ出土している（図35）。

以上のように高台無釉碗は、岩手県の遺跡では出土した例をみない。やはり、これも溝縁皿と同様の、肥前磁器碗の中でもっとも安価な碗として作られ、輸送コストを考えると、遠隔地にまで運ばれなかったものと思われる。しかし、溝縁皿と異なり江戸周辺の埼玉、神奈川に多いし、山梨、千葉でも出土している。それは需要量の規模の違いで説明でき、しかも陶器の溝縁皿と、中国磁器の供給ストップに代わる肥前磁器の安価な碗との違いのためである。陶器の場合、江戸などの地域には瀬戸・美濃の陶器が流通していたのに対し、磁器は肥前磁器しかないからである。

高台無釉碗に関連するものとして高台にだけガラス分のない鉄泥を塗って焼いたものがある。これは瀬戸・美濃陶器碗の天目が高台に鉄泥を塗っていたのに倣ったものと考えられる。なぜならば、高台無釉碗の古いタイプには天目形に作られた鉄釉と青磁が多いからである。高台の釉をかけないという発想も天目が釉をかけていないことにヒントを得た工夫と考えられる。1630年代以前から天目の流行下にあって磁器を作り始めた有田では染付の天目形碗を多く作っていた。その段階では高台まで施釉し、畳付のみ釉剥ぎするというふつうの碗の底部の作り方であった。この初期の磁器天目では口部をくびれさせ、いわゆるすっぽん口に作った。

それが、1640年代に入って、中国磁器の輸出途絶による量産の中では口部のくびれを作らず立ち上がる口作りの天目形に作り、外に青磁もしくは鉄釉、内面に透明釉をかけ分ける碗を多量に作り出した。この種の青磁もしくは鉄釉の高台無釉碗を作った窯は、百間、窯ノ辻を始め、天狗谷、谷、猿川、山辺田などこの時期の窯の多くである。

後出の染付碗は天目形のものではなく、1650年代にかけて多くの窯で作られた。有田以外でも嬉野市吉田窯、伊万里市大川内・日峯社下窯などに拡大した。

高台無釉の製品で碗の次に目立つのは小坏である。この小坏という器種自体、1630年代以前の有田磁器生産ではわずかにみられる程度であった。それがこの1640年代の中で急に目立つ器種となる。その理由は、中国の明末の景德鎮磁器の輸入器種の中で碗・皿に次いで小坏も多くなっていた。16世紀後半では白磁の見込蛇目釉剥ぎの小坏と染付の見込み蓬莱山文の小坏などわずかであったが、1600年前後から外に花卉や蘭文を描いた染付など増えるのである。

まさに文様もそうした明末の景德鎮窯の小坏の意匠に倣って、1640年代の窯ノ辻窯を主力窯として大量生産したのである。窯ノ辻窯ではその前の有田の鎬文の碗の意匠を取った鎬文の小坏や、寿字と鎬を交互に表した意匠なども作り出して量産し、中国磁器に代わって広く流通させた。おそらく、中国景德鎮の碗と小坏の数量的比率と大差ないくら

いの割合で広く流通したとみられ、日本海側から瀬戸内で出土し、大阪、京都ではとくに量多く、四国でも愛媛ではみないが香川、徳島では多い。陶器溝縁皿と違うのは、東京、神奈川、埼玉に多く、山梨や千葉などでも出土している。江戸圏でも中国景德鎮磁器の代わりにすぐに有田磁器を求め、代替品として一気に流通量が増えた様子がうかがえる。

江戸では都下に多い傾向があるのは、高台に施釉した碗より安価であったことが理由として考えられよう。

この種の高台無釉碗も、1650年代で急速に消えていく。その理由は、肥前の窯場が増え、生産力が増大したことが第1に上げられる。

つまり、1660年代にかけては、有田でも多少その傾向はあるが、それ以上に波佐見諸窯で窯場が増え、嬉野の吉田や伊万里の大川内、さらに武雄の小田志、佐世保市三川内、嬉野不動山、遠くは熊本の天草にまで磁器窯が広がる。

これらの窯に共通する代表的製品は、東南アジア向けの染付荒磯文碗であるが、国内向けにも染付網目文碗などを作り出した。

生産力さえ整っていけば、やはり高台無釉は好ましくないと映ったのであろうし、またもう一つの理由は天目形碗の流行が終わることである。瀬戸美濃の陶器の天目碗の流行が下火になると、肥前でも磁器の天目形碗は1650年代にはほとんど作られなくなるのと符合する。

こうして碗で高台の釉薬をかけないものは、以後、基本的に作られない。逆に高台を無釉とした皿は、17世紀後半から18世紀にかけて波佐見中心に作られ、より安価な皿として流通した。こうした波佐見の碗と皿の役割、用途などが関わる、高台無釉で見込蛇目釉剥ぎの皿は、中国明末の福建省南部の漳州窯の皿の代替品のように思われる。漳州窯の皿の中でもっとも粗放なものに高台無釉で見込蛇目釉剥ぎした皿が16世紀後半～17世紀初にかけて多く輸入されていた。有田磁器の草創期に朝鮮陶工が砂目積で磁器を作る際にわざわざ見込を蛇目釉剥ぎし、砂目を置いた皿を作ったのは漳州の皿に一部倣ったためと考えられる。そうした中国の粗放な磁器を求めた需要層が相手に、波佐見の皿が生まれたのであろう。

この波佐見の17世紀後半の高台無釉の粗製皿の流通状況を見る必要があるが、報告書の図だけでは、17世紀後半のものか18世紀のものかは判断つきかねる。よって本稿ではこの追究は行わない。

前述のように高台無釉碗は、岩手県の遺跡では出土した例をみない。やはり、これも

溝縁皿と同様の、肥前磁器碗の中でもっとも安価な碗として作られ、輸送コストを考えると、遠隔地にまで運ばれなかったものと思われる。しかし、溝縁皿と異なり江戸周辺の埼玉、神奈川に多いし、山梨、千葉でも出土している。それは需要量の規模の違いで説明でき、しかも陶器の溝縁皿と、中国磁器の供給ストップに代わる肥前磁器の安価な碗とは大きく違うためである。

中国磁器が果たして、本当に1644年以降、ほとんど輸入されなくなったのかを確かめる必要がある。全国的に17世紀後半の遺跡になると、中国磁器の出土量が激減するのは明らかであるが、1640年代なのか、1650年代なのか、1660年代なのかということになると、判断は難しい。つまりそこまで年代が明確な事例が多くないからである。また、中国磁器のような相対的に高級品は伝世もし易いからである。中国の陶磁器研究において、日本に17世紀に沢山輸入されたような磁器の編年研究が進んでいないことも理由の一つである。つまり、1640年代から60年代頃の日本に輸入されたような水準の中国磁器の編年が十分できていないからである。筆者は、1644年以降50年代にかけて中国の景德鎮窯も福建の窯も海外輸出は激減したと推測している。日本にもほとんど輸入されなくなるから、この時期に作られた中国磁器が遺跡で出土することはほとんど例がない。この時期の遺跡で出土する中国磁器は少し古い明末の中国磁器である。年代のわかる1例として、三代将軍家光殉死墓の蔵骨器がある。慶安4年（1651）4月20日に家光死去。家臣5人が殉死し、日光山輪王寺に家光の霊廟を設け、殉じた家臣の5人の分骨墓も建立された。^{注17}

下総国佐倉藩11万石の老中堀田正盛の分骨壺は中国景德鎮窯の染付壺であったが、武蔵国岩槻藩10万8千石の老中阿部重次の分骨壺は肥前・有田窯の染付壺であった。中国の壺は1644年以前のもので伝来した壺と考えられ、有田の壺はまさに1640年代後半から1651年までのものであり、中国磁器から有田磁器への移行期であることを『隔莫記』とともに示す。

『隔莫記』には中国染付の記録と伊万里の記録があり、正保5年（1648）ころまでは、中国染付が多く、慶安2年（1649）の54件をピークに慶安3年（1650）に伊万里のほうが多くなってからは慶安4年（1651）に半々に近くなり、以後は伊万里のほうが多くなり、1655年には中国磁器が2件、伊万里が71件と完全に伊万里中心となる（表1）。これは金閣寺の住持という最上流層の移り変わりであるが、ふつうのそれまでの中国磁器需要層はもっと早くに中国磁器の入手が困難になったと推測される。このように、1644年以降の中国磁器から伊万里磁器への移行は漸移的に進んだといえる。この場合でも中国

磁器は1644年以降のものというよりも、1644年以前の磁器がしばらくは流通していたことを物語っているであろう。

Ⅲ期

1637年の窯場の整理統合事件で伊万里・有田地方からいったんは陶器の雑器生産は姿を消す。もちろん陶器の陶工たちは武雄などを中心に、二彩手、三島手などの中・大皿や、瓶・壺・甕などの生産に軸足を移していた。ところが、中国磁器の輸入途絶は、1650年代頃から再び磁器を買えない需要層の求めで、陶器の碗・皿を生産し始める。最初は、鉄釉陶器碗であり、これは有田の南川原地区で多量に生産された。

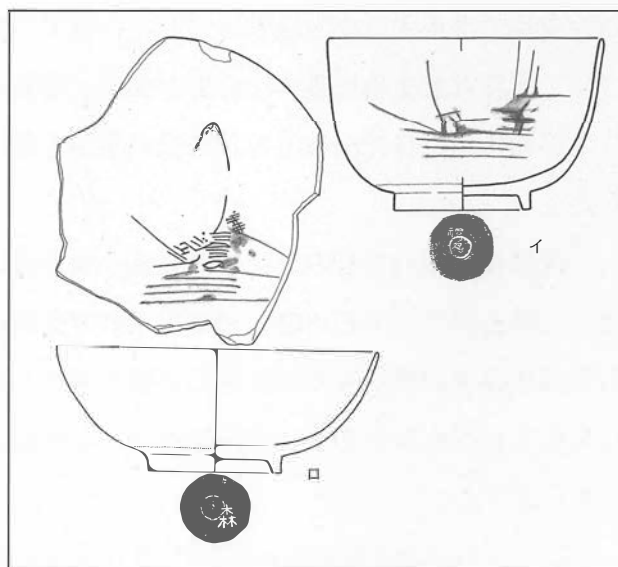
表1 隔莫記に見る磁器

		中国染付	伊 万 里
寛永13	1636	1	
寛永14	1637	2	
寛永15	1638		
寛永16	1639	13	1
寛永17	1640	13	
寛永18	1641	37	
寛永19	1642	10	
寛永20	1643	15	
寛永21	1644	25	1
正保 2	1645	43	4
正保 3	1646	11	
正保 4	1647	22	2
正保 5	1648	15	8
慶安 2	1649	54	24
慶安 3	1650		23
慶安 4	1651	21	24
慶安 5	1652	33	221
承応 2	1653	12	21
承応 3	1654	11	66
承応 4	1655	2	71
合 計		340	466

(数字の単位は個数)

〈京焼風陶器〉

1660年代頃になると、新たに京焼風陶器と呼ぶ特徴的な碗皿が登場する(図12)。生産の中心窯は伊万里市大川内山である。京焼風陶器と呼ぶ一群は、精製された明るい褐色の土を用い、高台を鋭く削り出し、高台内中央に円刻を施し、周囲に印銘を押捺したものである。碗は外面に、小皿は内面に呉須で簡略な山水文を描いたものが基本の



伊万里市鍋島藩窯出土

図12 京焼風陶器碗と皿

製品である。釉は透明に近い玉子色の釉を外面胴部から内面にかけてかけ、底部は無釉とする。高台内の印銘など、それまでの肥前にはない特徴ある製品であり、こうした印銘の特徴は京都の仁清を代表とする京焼の中でみられた。印銘の古いものに「清水」印があることなど京焼の影響で作られたと考えられた。^{注18}

この時期の京焼の窯はまだ、小規模生産であり、仁清（御室窯）などの名工は高い評

価を受け、幕府の記録『徳川実紀』にも

明暦元年（1655）6月23日牧野佐渡守親成御座所にて拝謁し・・・御室窯香炉、茗碗
を献ず

明暦2年（1656）5月27日牧野佐渡守親成拝謁し・・・御室窯茶碗・・・を献ず

万治2年（1659）10月5日京所司代牧野佐渡守親成より・・・御室茶碗五・・・を献ず

寛文2年（1662）9月1日仁和寺門跡・・・御室茶具五品ささげられ

9月8日御側松平民部少輔氏信京より帰謁し、御室香炉・・・を献ず

寛文3年（1663）7月16日御側森川下総守重名京より帰謁す。御室茶碗・・・を献ず

寛文4年（1664）12月21日京職牧野佐渡守親成御室茶入、茶碗を献ず

天和元年（1681）7月28日仁和寺より・・・御室茶碗、花瓶、硯屏をささげ

のように、御室窯製品の記事がしばしば載ったとはいえ、京焼の流通はごく限られたものであったことが遺跡出土例からわかる。

京焼に比べて大規模な生産地であった肥前で、仁清により評価の高まった京焼の特徴を取り込んだ製品を大量生産し、それが、京焼が流通しない地域にまで広く流通した。もちろん京都の好みで作られた京焼より安価な製品として京都にも多く流通したが、それ以外にも北海道から沖縄まで広域に流通していることが遺跡出土品からわかる（表3、図36）。福岡・大分・宮崎・香川・徳島をはじめとする四国、中国地方、大阪、京都、奈良、三重、愛知にもあり、関東も江戸中心に埼玉、群馬でも多く、山梨、長野にもみられる。

岩手の平泉で多いから、京焼風陶器に関しては日本海側の流通が強調できるものではない。

印銘を施した京焼風陶器は1660～90年代にかけてさかんに作られ、流通したが、18世紀にはいると印銘は消え、作りも粗雑になる。

代わって京焼、もしくはその普及版としての信楽の碗類が18世紀になると流通量を増していき、とくに18世紀後半には全国的に出土するようになる。肥前で京焼風陶器の粗製品が作られるのは18世紀前半で終わるのも、こうした京焼、もしくは信楽の碗類の普及と量的に反比例するように思われる。

今回の分布図表では18世紀の印銘のない衰退期の京焼風陶器は取り上げていない。

<呉器手碗>

京焼風陶器と生産窯では深い関わりのある製品として呉器手碗がある。これは京焼風

陶器ほど精製された緻密な土ではなく、また底部は畳付以外に施釉される。しかし、印銘をもつ京焼風陶器は17世紀前半の肥前ではまったくなく、京焼の影響の下で始まったことは明らかであるが、呉器手碗は17世紀前半に古式のものが見られる。「呉器手」の名は朝鮮の碗に由来するように、朝鮮の高麗茶碗を意識した碗として寛永頃には確実に作られている。高台内をアー

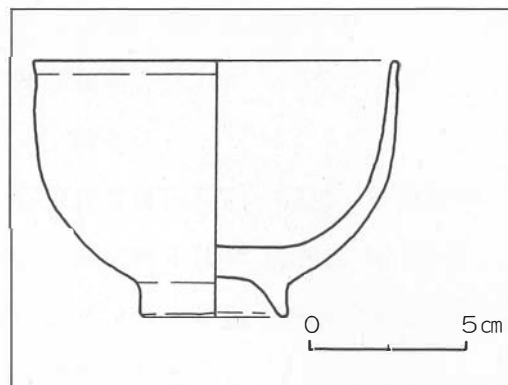


図13 陶器呉器手碗

チ状に削り込むなどの特徴がある。嬉野の内野山窯などで砂目積の例があるし、伊万里の椎の峰窯などでより近い呉器手碗が作られている。それが、17世紀後半に、伊万里市大川内山で印銘のある京焼風陶器とともに多量に作られ、さらに18世紀前半には武雄市武内の大谷窯などでも印銘を失った京焼風陶器皿などとともに作られる。生産量的にもっとも多いのは17世紀後半と思われるが、前後との区別は高台などの器形による。

今回表3、図37で取り上げたのも、この17世紀後半と思われるものである。

京焼風陶器は石川県金沢城下などに多かったが、他の日本海側地域ではそれほど多くみられないのに対し、呉器手碗のほうが福井、富山、新潟で多く出土しているし、岩手でも多い。他では大阪、徳島、高知、広島に多い遺跡があり、こうした多寡の偏りがどのような理由によるものかは明らかではない。単に地域の好みによるものであろうか。岩手でも多いのは寛文11年（1671）河村瑞賢が東廻り海運を整備したことによるのであろう。牧野隆信『北前船の研究』にあるように、文部省史料館祭魚洞文庫、万延元年（1860）2月に「江戸より東前船運賃之定」とあり、岩城・宮古・石巻・八戸・青森・秋田・能代などから太平洋を回って江戸までの、江戸から見て東廻りの海路につく船は東前船と呼んだ。

海運史料『奥南盛風記』に元禄11年（1698）8月19日、大風のため、下北半島田名部のうち、佐井浜にて諸国の商船が破損した。その中には佐久島船7艘、三河船4艘、仙台船、江戸船、尾張船、伊勢船、越前船各2艘、津軽、能登、真柄、神部、兵庫、宮古各1艘とあり、下北半島にはヒバ材の局地外市場として日本海側だけでなく、宮古、仙台、江戸、尾張、伊勢など東廻り筋の船も来ていたことがわかる。こうした東廻り海運の整備が肥前陶磁の東北太平洋側への流通を促進したものと考えられる。

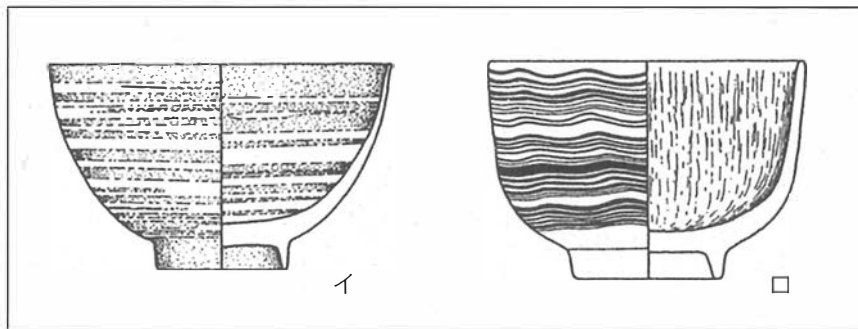


図14 刷毛目陶器碗

佐世保市江永古窯出土

Ⅳ期

<刷毛目陶器碗>

白化粧土で素地に刷毛塗りした装飾を刷毛目と呼ぶが、これにも波状に表す波刷毛目や、布様のもの

ので打ちつけて表す打ち刷毛目などがある。また初期には型紙刷毛目と呼ぶ、文様を切り抜いた型紙を器面に当て、それに白土を刷毛で刷り込み、型紙をはずすと文様が刷毛目のある白地で表現できるものである。1610年代頃の砂目段階に現れ、17世紀前半の中で消えていく。刷毛目技法自体、胎土目積段階にはみられず、砂目積段階に現れる。つまり、寛永頃から、二彩手、三島手などとともにさかんになる。二彩手もふつう濃い色調の素地に白化粧土で地を塗り、それに銅の緑と鉄の褐色の2色で文様を描いたり、2色の釉を流しかけて、透明釉をかける。

三島手も素地に黒っぽい土を使い、文様をハンコで押捺したり陰刻し、それに白土、稀に黒土を充填し、透明釉をかけて白黒で文様を浮かび上がらせる。

この両者の技法は1637年の整理・統合事件で灰釉溝縁皿などの陶器の雑器が消えた後も、大皿、瓶、甕などを作り続けた。主に武雄地方の窯で作られた。

その後、陶器碗として、鉄釉碗が復活したあと、1660年代頃から、より明るい土の京焼風陶器、呉器手碗などが作られる。その中で、17世紀第4四半期頃から刷毛目の碗が作られる。初めは明るい土を使う。器形も磁器並みに薄手でシャープな作りのものが多い。この頃の磁器碗にもいくつかの器形があったが、口が開く一番多い器形の磁器碗（図15のイ）の形をとったのが刷毛目碗（図14のイ）であった。京焼風陶器碗は、次に多い直立気味で高台径の広い碗形（図15のロ）をとる。京焼風陶器が底部無釉としたのに対し、刷毛目碗は高台内まで施釉する。もちろん磁器の碗とは無関係の呉器手碗とは異なる。

この刷毛目碗が一層、量産され、流通量が増えるのは、1690～18世紀前半である。器形は立ち上がりが強くなり（図14のロ）、素地はより黒っぽい土を用い、内面は打ち刷毛目とする点で17世紀後半の刷毛目碗と異なる。この時期、高級陶器として作られた長崎市現川焼との影響関係がある。

現川焼は有田・南川原の柿右衛門窯系の技術や京焼風陶器などの技術を取り込み、優

れた陶器を作り出した。現川と明らかにわかる製品は長崎をはじめ、江戸などで少しずつ出土するが、多く出土するのは前述のより粗放な碗である。出土分布をみると、日本海側は広く北海道まで出土しているが、しかし多く出土するのは石川、富山、福井の北国地域である（表3、図38）。日本海域の流通の要として、西と東の結節点でもあった。後は、鳥取、山口、四国の香川、徳島などに多い。北前船の活躍した北国と大坂を結ぶ地域に、多い地域を重ね合わせることができる。

もう一つは、江戸周辺の神奈川から群馬の地域である。東北は比較的少なく、秋田、青森でいくらか出土しているものには、蛸手と呼ぶ、外面の刷毛目の代わりに白く丸い

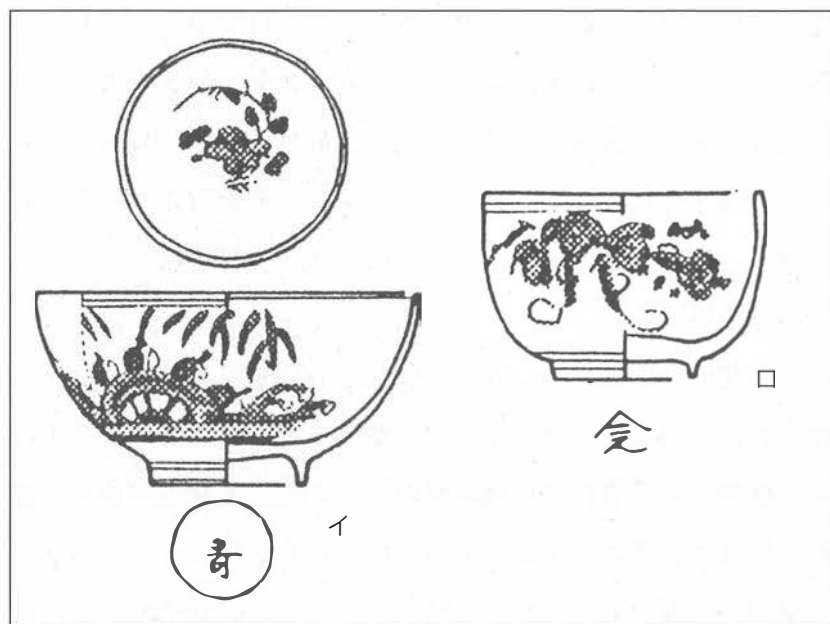


図15 染付碗

有田町長吉谷窯出土

文様を三、四方に施したものである。こうした蛸手の刷毛目碗は内野山窯でも焼かれている。^{注19}

岩手や宮城でも出土しているが少なく、北国3県に出土例が集中していることは、17世紀後半の京焼風陶器や呉器手碗とは異なる出土傾向である。

<青緑釉陶器>

佐賀県嬉野市の内野山窯は江戸初期の草創期から他と違った陶器生産を展開した。朝鮮の陶工や、名工として名を残す高原五郎七などが関わったという伝承もある。砂目積の玉子手陶器を草創期の特徴的製品として作り、また溝縁皿と碗も他窯に比べて薄手でシャープで素地もより白いものが多いなどの特徴があった。この溝縁皿と碗も有田が1637年で陶器溝縁皿などが消えたのと同じ頃に、内野山窯の溝縁皿と碗も作られなくなったものと思われる。

その後、17世紀後半に出てくるのが、内面に銅緑釉を施し、外面に透明釉を掛け分けた皿である。いつ頃からこの青緑釉皿・碗を内野山で作り始めたかの詳細な年代は明らかではない。遅くとも17世紀第3四半期には始まったと考えられる。しかし、多くなる

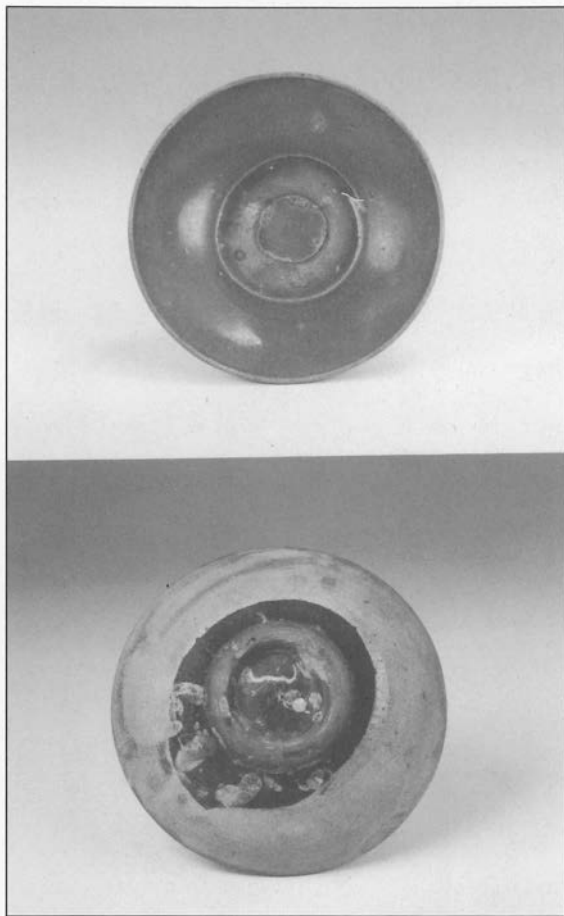


図16 青緑釉陶器皿 17世紀後半～18世紀前半
口径12.6cm 川内賢一氏寄贈

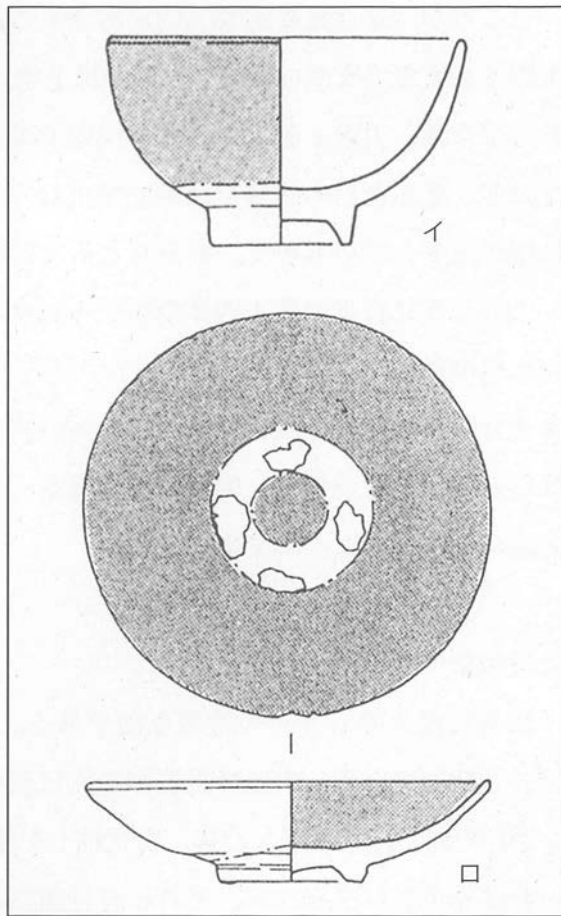


図17 青緑釉陶器碗と皿

嬉野市内野山北窯出土

のは第4四半期であり、18世紀前半にかけて全国流通した。よって、時期区分表ではⅣ期に入れた。

碗と小皿のほかに中皿も少なくない。皿の場合、見込を蛇目釉剥ぎし、そこに砂目を3～4個置き重ね積みした。碗は外面に銅緑釉、内面に透明釉をかけ分け、皿とは逆となる。碗皿とも底部を無釉とする。その意味ではもっとも粗放な陶器といえ、肥前陶磁器でもっとも安価な碗皿として広く流通したものと考えられる。この青緑釉皿は、昭和50年に東京国立博物館で開催された「日本出土の中国陶磁」展で紹介された^{注19}ことがあるが、その時には肥前の窯の研究が進んでおらず、誤って中国の古い陶器として紹介された。それほど国産としては異色であった。

出土分布は北海道から沖縄まで広いのであるが、その中でも日本海側では富山にとりわけ多く、ついで秋田、石川も多い（表3、図39）。江戸周辺でも神奈川、埼玉、群馬などに多いし、大阪、四国の香川、徳島、高知に多い。九州でも熊本、宮崎などで多くみられる。

ところが、皿は比較的普遍的に出土するのに対し、碗は日本海側ではみられず、太平洋側でも東北ではみられない。碗が出土するのは江戸周辺の神奈川に多く、埼玉、千葉、さらに京都、大阪、滋賀の関西、四国では徳島、高知、九州の宮崎などである。不思議なほど、歴然と日本海側では碗が出土していない。関東から沖縄にかけての太平洋側では碗が出土しているので、好みなども反映したものであろうか。

このように17世紀第4 四半期頃から18世紀前半にかけて広く流通した青緑釉碗・皿も18世紀中葉を境に姿を消していった。その原因は、内野山の青緑釉碗・皿のような粗放、つまり安価な陶器を買っていた人々が、波佐見などで作り出した「くらわんか」と呼ばれる安価な染付碗皿や、陶器では京焼系、とくに信楽などで作り出された安価で薄手の陶器碗類に移ったためであろう。

<陶胎染付碗>

18世紀前半のもう一つ特殊な碗がある。「陶胎染付」と呼んでいる、素地は陶器のように灰色や褐色を帯びた粗い土で成形した後、白化粧土を薄くかけ、いわばキャンバスを作り、それに青色顔料のゴスで染付文様を描き、透明釉をかけて焼いたものである。



波佐見町百貫西窯出土

図18 陶胎染付碗

素地原料は有色の陶器原料を使うので磁器とはいえないが、目指したのは磁器の染付碗である。よって、磁器のほうで分類をしているが、原料を科学的にみると陶器である。

この陶胎染付の技術は元は1650年代頃、茶陶の茶碗や水指を作る技法として開発されたと考えられる。窯も有田の山辺田窯、長吉谷窯などであり、磁器のように硬い肌合いとは違って、釉に貫入が沢山入り、茶の湯で求められる「わび」「さび」の趣を求めるところで作られ始めた。

少し後に下白川窯で碗が作られる段階では茶陶とは思えない水準のものになっているが、それをさらに、磁器原料は高価なので、より安い陶器原料で安価な染付磁器に似通った碗を作ろうとしたのが18世紀前半の陶胎染付碗である。波佐見の百貫窯や佐世保市木原などの窯で多く作られた。

陶胎染付碗は広く流通したが、沖縄ではみないし、地域的偏りがみられる。その出土分布は刷毛目碗の分布に近いが、北国の富山と石川、福井に多く、北前船の海路である鳥取、島根から瀬戸内に入り、岡山に多く、四国4県とも多いという傾向がある（表3、

図40)。

太平洋側の東ではやはり、刷毛目碗も多かった群馬に多く、神奈川、埼玉、千葉で出土がみられ、長野でも多くみられる。東北では福島、宮城、岩手でも出土しているが^{注21}多くはない。坂井隆氏によると、栃木、茨城にはないということで、関東では群馬で多く出土している。多少の差はあるにしても、刷毛目碗と出土分布が似通っていることを指摘できる。

両者は18世紀前半という時代も共通しており、主産地が佐世保市木原・江永で比較的粗製の陶磁器という点で、同じような流通をしたものと思われる。ここで北前船のことを考えてみよう。

牧野隆信氏によれば、北前とは戦国時代には瀬戸内側の人は日本海沿岸方面を北前と呼んだ。それが、貞享2年(1685)備前下津井村の漁民が越中に水主として稼ぎに出る他国行願書に「北前行願書」とあり、さらに弘化4年(1847)安芸・広村の記録に廻船で「北前乗り廻し」能登福浦の湊で乗り込むことが記されていることなどにより、北前とは瀬戸内側からみて北のほうを日本海側をさす語として用いられる^{注22}。また牧野氏は「北前船とは瀬戸内や大坂の地域で日本海と瀬戸内を結んで活躍した北国船主の船をさすのが原則」とする^{注23}。北前船の定義や始まりについては、まだ諸説あつて確定していないようであるが、さかんになるのは江戸中期からのようである。日本海海運のうち、加賀藩が寛永16年より海上航路で藩米を大坂に運んだことが一つの契機とみられている。しかし、当時はなお諸藩の米は越前敦賀、若狭の小浜経由で大津を経て京坂に輸送するルートが主であった。

ところが河村瑞賢が寛文12年(1672)に西廻り航路を確立し、敦賀、小浜から陸路を京坂に運ぶより低運賃で運べる下関、瀬戸内を経て大坂に運ぶ海運がさかんになり始める。そのため、敦賀、小浜の入津米量は延宝・元禄期に急減していったという^{注24}。

そして、さらに元禄以降、北国船で下関、瀬戸内海を経由して関西と北海道を結んだ買積船、すなわち、北前船が始まる。牧野氏によれば、北前船の「はじまりは元禄の頃にあり、盛時は享保以後になるものとせざるをえない」という^{注25}。

北前船による小浜の衰退と関係するものとして、若狭国小浜の木崎惕窓による『拾椎雑話』(宝暦7年(1757)自序)の「小浜」の項に、「元禄の頃まで、西国唐津船毎年四月に來たり、土橋より北の大溝まで十間ほどに小屋を懸け、いまり焼物店を出し、町・在ともに此の來るをまって多くの商物いたし候事二ヵ月ばかり。元禄末より京清水焼もの多く來たりて、唐津舟も小屋懸け致し候ほどの商いもなく、今は止み候よし。」とあ

り、小浜の港で焼物販売が定期的に行われていたことが知られる。

元禄の頃まで、西国の唐津船が毎年4月に小浜に来ていたこと。小浜で小屋懸けの伊万里焼物店を出し、町の人も在郷の人も、この来るのを待つて2ヶ月間くらい商売した。

ところが元禄末よりは、京焼の清水焼が多く来るようになり、唐津船は小屋懸けするほどの商売が成り立たなくなり、今はそのような販売はないとある。

文言のまま読めば、京焼の清水焼が多く流通するようになり、それに押されて伊万里焼が売れなくなり、定期的な販売がなくなったように解される。しかし、京焼は陶器であり、伊万里焼の磁器とは役割も少し違うので、京焼の流通が元禄末以降増えるというのは出土状況からも理解できるが、それによって肥前磁器の流通が減退したというのは出土状況などからも理解しがたい。実態としては肥前磁器に加えて、京焼の陶器も普及品を量産しだして、広く流通するようになっていったことを表しているように思われる。

それよりも、伊万里焼が小浜で売れなくなり、唐津船が定期的に来航しなくなったことは別の理由を考えたほうがよいのではなかろうか。

それこそ小浜が敦賀とともに、西廻り航路がさかんになり、北前船が元禄から始まり、敦賀、小浜が諸藩の藩米輸送の拠点でなくなったことによる経済的没落がより高級な磁器の定期販売の唐津船が小浜に来なくなった理由ではないかと思われる。経済力・購買力を失ったところには定期販売船も来なくなるということであろう。

そのように考えると、17世紀前半までは、日本海側で、1610～30年代の灰釉陶器溝縁皿や1640～50年代の磁器高台無釉碗が青森まで出土するのに、太平洋側の岩手、宮城ではまったくといってよいほど出土しないのに対し、1660年代から90年代の京焼風陶器碗・皿や17世紀後半の呉器手碗になると、岩手でもふつうに出土することは、寛文12年(1672)の河村瑞賢による東廻り航路の整備で山形の酒田から下北を回って太平洋側伝いに江戸に米を運び始めたことが、江戸からかもしれないが、京焼風陶器や呉器手碗が太平洋側の東北各地に運ばれることになったのであろう。

さらに、18世紀前半に中心のある、安価な肥前陶磁器の普及品である刷毛目碗、青緑釉皿、陶胎染付碗の流通傾向をみると、多く出土する遺跡が石川、富山に強い偏りをみせる。これはまさに北前船の経営者の中心地であった。元禄8年(1695)、加賀・大聖寺藩が橋立に船番所を置いたのも北前船の出入りを監視するためと考えられている。北前船主たちの拠点港としては、加賀の宮腰、大聖寺領内の塩屋、瀬越、橋立などがあつた。

北前船の帰り荷としてこうした雑器がバラスト代わりに沢山運ばれた可能性が高い。牧野氏がいうように、北前船により、「大量の日常雑器類は、船の安定保持を兼ねて、

庶民の生活充足のため運ばれたもの」という。^{注26}

実際、18世紀でもっとも安い陶磁器を量産した内野山窯の天明7年（1787）の記録に「諸方廻り船下積ニ商人杯待懸、相調申儀ニ御座候事」（史料3）とある。

こうした肥前の安い陶磁器が量多く流通したが、出土の状況からみると、庶民層にまで、こうした粗放な陶磁器が多く渡ったと考えられる。これらは量的に多く流通したにもかかわらず、伝世品として古美術市場でみる量は同時期の有田磁器の碗皿に比べて極めて少ないことも、これらが日常的に使われ、廃棄され易い器であり、客をもてなす器として箱に収められ大切に扱われた有田磁器、いわゆる古伊万里とは異なる。有田の磁器にもいえることであるが、現在残り、博物館や資料館、あるいは古美術店などでみる内容は、当時流通した実態を表しているわけではない。例えば、伝世品には碗より皿が圧倒的に多いため、古伊万里の生産は皿が中心であったと誤解されている方が多い。本稿でみても気づくように、遺跡で出土するのは碗のほうが多いことがふつうである。碗のほうが使用頻度が多く、破損などで廃棄される割合も高いといえる。

肥前磁器は、1684年の中国の展海令で東南アジア市場などを中国磁器に奪回され、海外輸出が頭打ちになったことが、18世紀前半の雑器生産の活発化につながる。つまり、17世紀後半に中国磁器の輸出が止まったことを受けて、その代替品を肥前が作り、世界に向けて輸出した。それは景德鎮磁器の代わりの高級磁器は有田を中心として作り、ヨーロッパを中心に、アジアでも上流階層向けに作り出していったものと推測される。

ところが、東南アジアでは17世紀前半に景德鎮磁器とともに、福建漳州窯の粗放な磁器が量的には景德鎮窯と同じくらい流通し景德鎮磁器を買えない人々がそれを用いた。そうした需要層向けに、肥前でも有田以外の窯ではより粗放な碗皿を作って輸出した。さらに、ベトナムの碗が17世紀後半に輸出されたということがオランダの記録にあるが、これらは肥前の有田以外の粗放な磁器の下級ランクか、それ以下の需要に応えたものと思われる。

そのように17世紀前半の中国の磁器水準に対応するように、肥前も上・中・下のクラスの磁器を作り、供給したのである。それが、1684年の展海令で中国磁器の輸出が本格的に再開され、東南アジア市場向けは中国に奪回された。残るのはオランダ東インド会社が注文してくるヨーロッパ市場向けの高級磁器に限られた。

わかりやすい例は、東南アジア向けの代表的製品である染付荒磯文碗・鉢が1680年代を境に姿を消すし、波佐見や有田などで作られた東南アジア向けの高級磁器であった青磁大皿も17世紀末で生産をほとんど終える。青磁大皿は国内市場にもかなり流通してい

たから、荒磯文碗ほど急激な生産の終わり方はみせない。

いずれにせよ、こうした大きな市場を失い、方向転換をして新たな市場を開拓しなければ、窯場としては存続は困難となったであろう。

波佐見諸窯をみると、東南アジア向けに多くみられた青磁大皿の生産は東部の三股、木場山窯などに生産の中心があったが、1680年代以降、青磁生産は減退傾向にあり、長田山窯などで18世紀初まで作られた。しかし、これらは東南アジアなどでみられる青磁大皿とは異なり、国内向けと考えられるものである。波佐見では荒磯文碗は東部の永尾や西部の皿山地区などで作られたが、それが1684年で頭打ちになって以後は国内向けの碗の生産に移っていく。その中で西部の百貫西窯で陶胎染付が18世紀前半に作られるが、波佐見の中では百貫西窯を中心に作られたのも、陶胎染付の主要な生産地の佐世保市木原・江永窯などと地理的に近いこと、少しでも輸送コストを下げるために東部より西部の川棚に近い地域での生産を行おうとしたことが、百貫西窯で作った理由と考えられる。しかし、波佐見は磁器碗・皿の底部を厚くして窯割れしにくくし、より失敗率を減らすこと、碗でも見込蛇目釉剥ぎし、直接製品同士を重ねて同一面積に数多く窯詰めできるようにする方法、装飾法もコンニャク印判という方法を取って製作時間を短縮することで生産コストを下げる方向に進んでいく。18世紀後半にその中心があり、いわゆる「くらわんか」の碗皿が作られる。

18世紀後半に波佐見諸窯では焼成室20室以上で、登窯の全長100mを越し、窯幅も7～8mのような巨大な窯で文字通り大量生産されるようになる。窯幅が7～8mということになればドーム状に築かれる天井の高さも3mを越すようなものになったであろう。その空間を無駄にしないためにも、天秤積という新たな窯詰め法が始まり、より同一面積の中で沢山窯詰めできるようになる。

こうした厚手で粗製の染付碗・皿は、広く全国で出土する。まさにこの時期に人が住んでいるところでは津々浦々といえるほど農村集落、山間部の遺跡でも出土するようになる。このように安価な肥前磁器が広く流通するようになると、肥前では陶器の碗皿の生産が消えていく。

嬉野の内野山窯や志田山窯などの記録にも、18世紀後半の中で陶器では立ち行かなくなり、南京焼すなわち磁器を焼きたい旨、陳情し、磁器生産に転向する窯が出てくる。

内野山は『皿山代官旧記』天明7年(1787)(史料3)に内野山は下焼物なので他の皿山同様には存続できない。もはやつぶれるほかない。内野山は「焼物建初」の山にて亡所となつてはしようもない。内野山窯製品は下焼物であり、佐賀領内に限らず隣

国諸方に上手焼物は多く、内野山の焼物は自然と不景気となり、さらに近年の物価高騰で年々窯焼きが潰れ、残った我々も危ない。よって上下両登窯のうち、下登は向う5ヵ年は窯入れせず、上登だけで焼く。これまでは年2、3度くらい窯を焼いてきたのを、今後は5、6度ずつ積みいれ、試みとして上手の焼物を作り、だんだんと焼成法を身につけ、下登を再興して上手の焼物を焼き立てるとある。内野山の陶器などは「下焼物」なので売れないことが記される。

天明8年(1788)には内野山窯焼・細工人のうち2人が大村領焼物山、つまり波佐見町三股、永尾山と長与町長与窯に行つて細工をしているものがあるので、捕り方(警固2人、案内者1人)を大村領に差し向けた(史料5)。

この事件は内野山頭、すなわち窯場のトップからの情報で発覚したが、この細工人は内野山の「徳利細工人」城右衛門と他1人であった(史料6)。ふつうの碗皿のロクロ細工人と違い徳利細工人であるというのも、ちょうど18世紀後半になると内野山では碗皿が消え、瓶すなわち陶器の徳利などが主力製品となっていたことと符合する。徳利を得意とする細工人は、碗皿細工人ほど多くはなかったから、波佐見の三股、永尾などでも江戸後期に大瓶がさかんに作られるようになること、長与窯にしても瓶が作られていることと関係があるであろう。^{注27}^{注28}

伊万里の陶器商人武富家文書の幕末の記録にも、波佐見の中尾山への徳利注文があり、一升徳利千俵、五合徳利2百俵を下関継ぎにて送ってほしいとある。^{注29}そうした酒瓶需要増大に合わせ、それまで碗皿中心に作っていた波佐見でも、瓶の轆轤成形の細工人を雇えば作れるわけであるから、陶器需要の減退で衰微していた内野山の陶工を招いたに違いない。しかし、それは鍋島藩側にとっては陶工が他領で仕事をし、技術の漏洩は違法であったから、捕り方を派遣することになったのである。

この事件は、まさに、当時の陶器から磁器への質的需要変化や、江戸で貧乏徳利などの陶器の酒瓶の大量消費に象徴されるように、酒徳利需要の増大が起こり始めた時期の中で起こった。

有田『皿山代官旧記』文化11年(1814)に正月11日御蔵啓の節、御酒は昔より徳利に入れ、酌をしてきたが、いずれの頃よりか、銚子鍋に入れ、酌をしてきた。それが、当年よりまた昔のように志田徳利にて酌をするようになり、以来徳利を用いるとある(史料11)。徳利で酒を酌して飲む風が一般的になった結果であり、江戸での貧乏徳利の普及からみても、内野山で18世紀後半になると碗皿に代わって徳利が主力製品になったのもそうした需要に応じたことと思われるが、消費者の経済力を背景としたニーズはよ

り白い磁器の徳利に1780年代頃から移行したのであろう。もちろん地方の陶器窯では陶器の徳利を作る窯も多く、輸送コストがかかることからそうした地方では作れない磁器の徳利で肥前窯は競争したのであろう。ちなみに有田『皿山代官旧記』天明4年(1784)に内野山で作っていた下焼物として、仕入値段ではあるが、徳利1個10文、茶出1個10文(小は7文)、鉢は1個大中小3文、その他とある(史料2)。天明頃には、徳利といわゆる土瓶、鉢(今、中皿と呼ぶ)が主力製品であることは実際、窯跡から出土する製品と矛盾しない。

内野山は天明8年(1788)に窯焼儀右衛門は南京向つまり磁器を焼きたいが、今までの窯ではできないので元の窯床に5、6間の焼成室をもつ窯を塗り立てたい旨、陳情してきたが、儀右衛門にはできそうにない。そこで儀右衛門の一類で鹿島市の磁器の窯場である浜皿山の窯焼次郎右衛門が協力するとはいえ、儀右衛門では経済力もなく無理であろうとみられた(史料7)。しかし、寛政元年(1789)に内野山の下登は再興の末、7月14日に火入れをし、まず焼成室数7間を築き、磁器を作る(史料9)。

また、志田東山も有田『皿山代官旧記』寛政9年(1789)に庄屋次右衛門と窯焼8人が、甕、茶出その他の陶器を焼いてきたが、時節柄、商売にならないので、磁器を焼いている蓮池領の志田西山に一類と一緒に頼っているが、衰退し、窯普請など自力ではできないので借金を願い出た(史料10)。しかし、磁器は勝手に製作することは禁じられているので事前に届け出て、指示通りに試焼をしなければならないとあるように、次々に陶器窯から磁器窯に転向しようという動きがみられた。

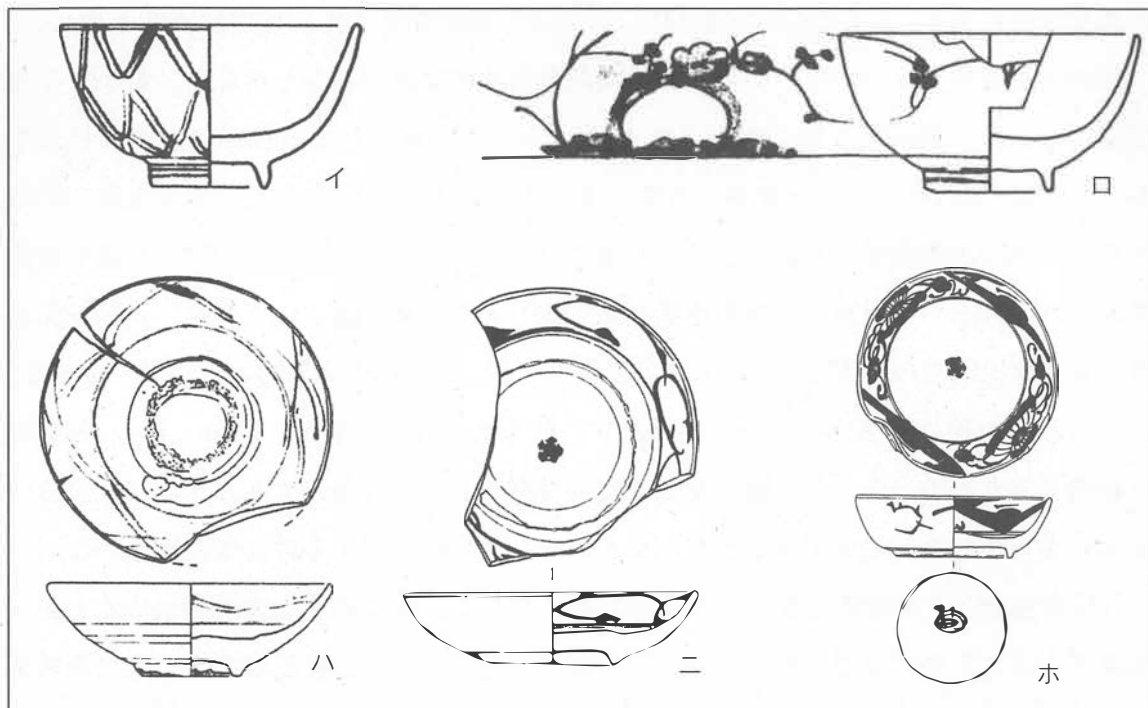
<くらわんか碗・皿>

いわゆる「くらわんか」の碗皿は波佐見諸窯中心に大量に作られた。厚手でやや小振りとなり、外面に雪輪梅樹文や二重網目文を描いた碗が多量に流通している。波佐見諸窯では皿山本登窯、三股上登窯など多くの窯でこうした碗を生産した。

天草の明和4年(1767)『近国焼物大概帳』に、波佐見の窯場として

中尾皿山	窯数凡107間	但し3登	地土ヲ以て南京焼物出来仕申候
三股皿山	窯数凡105間	但し2登	〃
長尾皿山	窯数凡50間	但し2登	〃
ひえ木(場)皿山	窯数凡47間	但し2登	赤土物に而こす茶碗類南京焼も少々出来仕申候

寛政8年(1796)『近国焼物大概帳』(『あまくさ雑記』創刊号、同人マジミ)にも、



イ、口は波佐見町皿山本登窯出土 ハは同町長田山窯出土 二、ホは同町永尾本登窯出土

図19 「くらわんか」 碗と皿

中尾皿山	窯数凡80間	窯 3 登	地土ヲ以南京焼之下品焼物 出来、焼物師千百人程
三股皿山	窯数凡75間	窯 2 登	〃 焼物師六百人程
長尾皿山	窯数凡20間	窯 1 登	〃 焼物師百十人程、赤絵焼物出来
稗木場皿山	窯数凡30間	窯 1 登	地土に天草土少調合南京焼之下品焼 物出来

『大村郷村記』（文久2年完成、刊本は藤野保編『大村郷村記』第3巻、1982の310頁～312頁）

中尾皿山	窯数150軒（間）	窯 3 登	焼物出来高21966俵
三ツ股皿山	窯数108軒（間）	窯 3 登	焼物出来高13230俵
永尾皿山	窯数44軒	窯 1 登	焼物出来高6620俵

以上のように大規模な波佐見の窯場も、1767年から幕末の間にも窯の規模などに多少の変化はあったと推測できる。稗木場皿山は1767年では赤土による呉須茶碗とあるのは陶胎染付のことであろうし、幕末には窯場としてはなくなったのかもしれない。幕末の『大村郷村記』には内訳も記されるが、その中で最大の窯は、中尾皿山の大新登であり、

窯数が39間とある。永尾皿山は窯数44間とあるが、内訳のところには窯数29間とあり、この差が何を意味するのかは不明である。44間というのは誤りかもしれない。最小でも20間であるから、焼成室1間の奥行平均を4.5メートルと仮定して全長90メートルにはなる。多くは全長100メートルを越す登窯であった。こうした巨大な窯で大量生産したのである。携わる焼物師の人数も、最小の窯で110人ほどとあり、多くは300人を超す人数であった。最小の永尾窯で年間生産量が6620俵とある。6620俵というのは、天保6年の伊万里津積出陶器の荷高国分をみると、出雲の1国に6500俵とあるのに近い数字である。

くらわんか碗の出土分布は全国的であり、皿も大差ない（表3、図41・42）。碗は蛇目釉剥ぎしたものがあるが、碗で見込を蛇目釉剥ぎして重ね積みすることは17世紀にはなく、また江戸後期にも肥前では行わなくなる。蛇目釉剥ぎするのは傷には違いないから、江戸後期、天明頃から足付ハマを製品間に挟んで、窯詰めする方法が始まると蛇目釉剥ぎすることはだんだん消えていく。ただし、波佐見では19世紀前半まで蛇目釉剥ぎした碗が残る。より安価な碗として作られたのであろう。

一方の皿は、見込蛇目釉剥ぎすることはもちろんさかんに行われ、波佐見では高台も無釉として重ね積みする量産品がもっとも安価な染付磁器皿として作られた。

江戸前期までは庶民の食器は木器が中心であったと考えられる。それが元禄以降、18世紀前半に庶民の経済力が高まる。武家社会から町人社会に変わっていく中で、庶民までが、陶器の食器を求めるようになる。18世紀前半に磁器より安価な陶器が量産され、刷毛目陶器碗や、青緑釉陶器碗・皿、陶胎染付碗などが広く流通し、陶器の碗皿すなわち食器が人々の間に普及したと考えられる。この食器における陶器普及の時代を経て、18世紀後半になると波佐見窯で量産されたより安価な磁器の碗皿が広く全国に流通する。庶民までが日常的に磁器の食器を使う時代の到来である。

そうなると各地の藩では、肥前磁器を大量に買い入れることは、藩からの金が出流する結果を生み、後述するように各藩の中で何とか自藩で磁器焼成を行わせようとする動きが出てくる。

磁器はふつうの陶器を焼いていた陶工が作ろうとしても出来ないものであり、その結果、たいていは肥前もしくは肥前系の磁器の技術を身につけた陶工を招いて開窯することになる。

こうした肥前磁器の技術伝播の早い例としては、明暦2（1656）年頃石川県九谷窯、寛文（1661～73）年間頃には広島県姫谷窯、鹿児島県山元窯、天和2（1682）年頃に福岡県小石原上の原窯などがある。

それぞれの窯跡の調査結果をみると、窯構造が肥前式の連房式登窯であること、窯詰めの道具も肥前と同様であること、磁器製品の特徴も同時代の肥前と共通点があることなどから、肥前の陶工、しかも複数の陶工が関わって開窯したと推測される。

1650年代後半から1682年頃にかけてそうした技術伝播がみられることは、当時、肥前がもっとも海外輸出がさかんであった時期に合致するのである。加賀・大聖寺藩前田家、備後・福山藩水野家、薩摩藩島津家、筑前・福岡藩黒田家は長崎を通じての肥前磁器輸出がさかんな様子を知りうる大大名や幕府要職に連なる大名であった。しかし、大大名や幕府要職のなかでも、加賀の大聖寺藩前田家、備後・福山城主水野家、薩摩・島津家、筑前・福岡藩黒田家であった理由は何か。このことについては姻戚関係や藩のつながりであることはすでに論じた。^{注30} 石川県山中町九谷窯が1656年頃と一番早く、続いて広島県福山市姫谷窯と鹿児島県加治木町山元窯が寛文頃に開窯し、最後が福岡県小石原村上の原窯で1682年頃には開窯と、時間的ずれがあるにしても肥前磁器窯が輸出で活況を呈した時期に当たる。

肥前磁器窯は徹底した分業生産を行っていたため、肥前磁器窯と窯構造、窯道具まで類似しているということは複数の技術者が行かない限り困難と考えられるのである。上記4窯では一時期だけ肥前式の窯ができるが、短期間で廃窯になったり、窯場が続いた場合でも肥前式の技術は次第に変質してしまうのは、一時的に肥前の複数の陶工が出向したための現象と考えられる。

18世紀後半になると食器が庶民にまで普及する中で、肥前磁器の技術伝播が始まる。磁器は肥前の特産品であったから、鍋島藩としては技術流出を禁じていた。明和元年（1764）6月3日の有田皿山代官の申し渡しに「今度、内外十式カ山陶器大坂為替方御仕与について、右山々ならびに地方町内に罷り在り候絵書細工人、私領山罷り越し候儀、御法度に仰せ付けられ候」とあり、大坂の鍋島藩蔵屋敷で陶磁器の一手販売を行うにあたって絵書や細工人は外に出ていってはならないと命じ、職人の確保を図った。^{注31} さらに安永7年（1778）にも「有田皿山の絵書細工人どもは他所へ行ってはいけない。私領（鍋島本藩の直轄地以外の蓮池領、武雄領、鹿島領などを指す）の細工人も天草そのほか他藩の製陶地へ行ったり、有田皿山の細工人が私領経由で天草そのほかに出稼ぎに行く場合もある。私領の皿山の陶工たちも他藩へ出てはいけないとある。

この時代、鍋島藩は伊万里焼の流通に統制を加えることをたびたび実施している。藩が一手販売を行ったのであり、前山博氏の研究によると、^{注32}

1 享保11年末～12年初

- 2 享保19年（1734）秋以降20年
- 3 享保20年（1735）「御上仕込み」法と元文4年（1739）大坂市場支配策によって藩の大坂蔵屋敷で展開される一手販売の体制ができあがった。私領皿山産出の焼物についても統制していたが、寛延2年（1749）窯焼と商人との自由売買に戻る。この窯焼、商人の自由取引の時代を経て、再び、
- 4 明和元年（1764）から大坂為替仕法という藩の統制時代を迎える。この流通統制の時代、前述のように絵書、細工人が他所に行くことを禁じたのである。この統制は大坂での大きな売れ残りが生じ、わずか3年で破綻した。

その後は窯焼と商人の自由取引が再開した。次の統制は35年後の、

- 5 享和3年（1801）「見為替仕法」である。それまで焼物を大坂に運び商売してきたが、益がなく、窯場が衰微するので願いにより新聞屋が設けられ専売とする。この結果、伊万里や紀州、筑前の商人の交易は限定され打撃を受けることになった。しかし、中央市場以外の方面の商売は自由であったし、伊万里商人や旅商にとって中央市場以外の「地売り」は大きな意味を持っていた。

このように18世紀前半から中央市場では藩による一手販売と自由売買が交互にあった。ところが、中央市場以外は統制を受けなかったようであるから日本海流通は旅商が活発に行っていたものと思われる。

文化11年（1814）に4隻の雲州船が伊万里川口大風のために破船した記録があるように、文久3年（1863）に伊万里から焼物を積み出した雲州船頭は下関以東ではもっとも多い5人であった。この1863年の記録では、下関以東では長門1人、伯耆1人、因幡1人、隠岐1人、播磨2人であった。

伊万里に派船して焼物を販売するのは播磨あたりまでが多く、それより北の商人が伊万里に来航して直接焼物を買付けたのは後述のように越後の旅商がいるが、それより東に対しては、前掲の『拾椎雑話』（宝暦7年（1757）自序）の「小浜」の項に、「元禄の頃まで、西国唐津船毎年四月に來たり、土橋より北の大溝まで十間ほどに小屋を懸け、いまり焼物店を出し、町・在ともに此の來るをまって多くの商物いたし候事二ヵ月ばかり。元禄末より京清水焼もの多く來たりて、唐津舟も小屋懸け致し候ほどの商いもなく、今は止み候よし。」とあり、小浜の港で焼物販売が定期的に行われていたことが知られる。また『稚狹考』（板屋一助、明和4年（1767）自序）に諸国より米のほかに小浜に來るものとして「松前の諸物、筑前の磁物、出雲・但馬の鉄、播磨の塩、南部・津輕の材木」をあげている。筑前の磁物とは、筑前の陶器商人が運んだ肥前の磁器「伊万里焼」

を指している。寛政元年（1789）に巡礼の旅で伊万里商人が若狭の小浜で筑前焼物船と出会っている。筑前商人が18世紀後半に北国の福井、石川、富山から新潟西部の上越市辺まで行商していたという。^{注33}

このように日本海沿岸では山口、島根、鳥取、兵庫の船頭が伊万里に來航して焼物を運ぶ場合と、筑前商人が買い積みした肥前陶磁器を北国に運んで行商することがあった。

肥前磁器の技術の伝播はこうした肥前磁器販売の関わり方の深さに比例して進む傾向がみられる。

肥前磁器の伝播が早いのは筑前の須恵焼や能古焼があった。須恵焼は天明4年（1784）以前に有田南川原山に人を派遣して技術を学ばせたという。そして『皿山代官旧記』に「筑前、鋸嶋、須恵両山へ有田より佐十郎という焼物細工が行き居る。佐十郎は有田中樽新九郎・良之進・為次郎と名を替えた。小倉あか山（清水山）へ所を替えた。絵書作十郎の元の名は長之進・為次郎といい、武雄筒江山の者であり、親の新九は皿山に出生し筒江山に在りながら皿山上幸平山・中樽山辺に居る」とある。^{注34}能古焼については寛政10年（1798）の『筑前国統風土記附録』に「明和頃より此嶋にて陶器を製す」とあり、出土した製品内容からも明和（1764～72）・天明頃の短期間に陶磁器生産が行われたと推測される。出土した窯道具も肥前の技術であることは明らかなものであった。『皿山代官旧記』の記録にあるように、佐十郎は名前を変えて鋸嶋、須恵窯から小倉の清水山に移動したことがわかる。これを示すように、寛政8年（1796）の天草の『近国焼物大概帳』^{注35}には、天明頃には操業を終えた能古焼のことは記されず、清水皿山の名が記載されている。豊前領の窯の一つとして「清水皿山 窯一登 此数凡八間」とあり、下品の陶器を焼き、20人程度の陶業者がいるとある。ちなみに清水皿山は、佐藤浩司氏が三官飴の容器としての陶器壺を焼いた窯として紹介している。

能古窯の操業年代は出土品から1770年代から90年代の間と推測される。

この1796年の記録でも須恵焼は規模が大きく、窯2登りで、焼成室計31室である。陶業者約180人、そのうち焼物師が150人ほどという。そして地元の土と天草土で中品の磁器を焼いていることが記される。

こうして筑前地域に少なくとも18世紀第4四半期には肥前磁器の技術が伝播して、磁器生産が筑前でも行われる。この筑前で作られた下手の磁器が肥前磁器や新たに始まった瀬戸などの磁器とともに萩にたくさん移入されていることは、文政7年（1824）の萩の『浦小畑陶器竈御取建之事』^{注36}に記される。18世紀第4四半期は商品流通重視の経済政策を進めた田沼意次時代（1772～86）のことであり、全国的に磁器の食器需要が増大し

た。各藩では肥前磁器が大量流入することが問題となる状況が生まれた。例えば、加賀の金沢藩で、文化5年（1808）であるが、「前々、金沢は大樋等において楽焼類はいたしきたり候えども、唐津・今里等の如き堅焼は致さざるにつき、当用の雑器の品は一切他国より入り来り、あまつさえへ遠路の運送につき、駄賃等加わり、此の代料の他国へ洩れ候銀高は年々積もり候えば、過分の事なり」（『政隣記』）とある。江戸後期、日本海側における肥前磁器の生産技術伝播は、肥前磁器の日本海側の行商に主要な役割を果たした筑前商人の根拠地に始まった。このように筑前に早くに肥前磁器の技術が伝播したことの裏には、筑前商人が肥前磁器の流通に主要な役割を演じていたことと関わりがあらう。磁器需要の高まりをいち早く知った商人たちが、鍋島藩の統制などの影響を受けない磁器の安定した供給地を作ろうとしたことが推測されるのである。

次の肥前磁器技術の伝播は山陰地方であった。『皿山代官旧記』文政3年（1820）に「長州（山口県）萩領へ近頃良い焼物土を掘り出し、追々窯を立てる趣のところ、窯塗り立て方その外の心得者がいないので、見習いのため、萩領の者が大村、平戸あるいは諫早筋の者に偽装し、内外山へ5、6人入り込み、日雇い稼ぎなどをしたという」。このように萩領の人が有田に潜入したが、それではすまず、文政4年に皿山は国産の重要な所で秘事の産物であるから、絵書・細工人が他所に行くことは許されない。分けても、この筋、長州の萩焼窯場へ行くものもあるので、窯焼どもは絵書・細工人どもへ諭してこのようなことがないようにとある。つまり、有田から陶工が萩に仕事に行ったものがあることを物語っている。

この萩の窯は、豊北町滝部さかいづの境下窯と推測される。

こうして肥前の陶工によって滝部や萩の小畑で磁器窯が築かれ磁器生産が始まった。この頃、肥前と同様の磁器生産窯はさらに東の田万川町の江崎皿山焼でもみられる。製品に19世紀前半に流行した広東形と呼ぶ碗がみられた。

肥前系の磁器生産は同じ頃、石見（島根県）にはみられず、それより遠く出雲（島根県）の久村窯（多伎町）、意東窯（東出雲町）に飛ぶ^{注37}。出雲は伊万里の文久3年（1863）の遠国船頭による焼物積出し高の記録によると、日本海側では筑前に次いで多い5人の名がある。これも肥前に加え磁器流通を支えた筑前商人の根拠地であり、かつ磁器生産が始まっていた筑前から陶工が移動したことがわかる。このように出雲も商人が磁器流通を活発に行っていた地域であるから、比較的早くに肥前系の磁器窯が始まった。

出雲より東で文政以前に始まった肥前系の磁器窯としては但馬（兵庫県）の出石焼いずしがある。出雲の意東焼に共通の皿などもあり、肥前系の技術伝播が日本海沿岸を飛び飛び

に東進していったことを表すのかもしれない。

一方で、出石焼には出雲などではみられない製品もあり、肥前磁器の意匠・器形とはずいぶん違った製品が現れるのも特徴である。ここで作られた磁器が加賀・金沢や新潟など東方へ販売されたことが記されるし、特徴的な文字文様の小碗は北海道余市町の大川遺跡で多く出土している。西日本ではみないから北海道方面に販売が多かったのかもしれない。

この但馬に近い若狭湾に面した丹後（京都府）地方でも文化・文政頃に肥前系の磁器生産窯が始まった。京都府久美浜町の久美浜焼と舞鶴市の半田焼であり、広東形碗などから寛政・文化・文政年間（1789～1830）頃に操業との推測を裏付けている。俗称「唐津山」というのも肥前系であることの傍証となる。

北陸では加賀の春日山窯や若杉窯で文化4年、肥前島原の陶工本田貞吉が磁器焼成を始めたが、京焼の青木木米の指導があったことなど、前述の長門から若狭にかけてみられた肥前系の磁器が碗・小皿といった食器中心であったのとは異なる。碗皿の供給は肥前に加えて、より安価な雑器は出石焼などが占め、それらと競合しない器種などを作ったのかもしれない。

北国以北の商人が肥前に来航して直接、焼物を買付けたのは越後の旅商がある。伊万里津に来航して滞在する指定宿にも越後宿が2軒含まれることでわかる（天保6年（1835）『伊万里歳時記』）。

1835年の『伊万里歳時記』にみる伊万里から積み出された陶器量は日本海側で越後が9,000俵と最も多い。越後商人の活躍の現れといえる。

これより北では、秋田県寺内焼が窯道具等から肥前系の技術であることがわかる。^{注38}山形県新庄東山焼創始者、湧井弥兵衛の「履歴書」によれば、弥兵衛は文政11年（1828）に山形平清水の窯場から「寺内村瀬戸場エ召抱えられ（略）」とあり、また「天保十年中寺内村瀬戸場に於いて肥前国松津郡在田村産瀬戸師直太郎に就き唐津流丸窯の法を皆伝せり」とある。新庄東山焼資料によると「奥州森岡に於いて石焼の国産を開かれ、九州肥前から津より数多の職人（中略）多分は秋田エ参り、同寺内の国産にて石焼を開かんと欲し」とある。^{注39}岩手県盛岡で肥前陶工を抱えて磁器焼成を試みたが失敗し、陶工たちは隣国である秋田の寺内窯に流れてきたと推測されている。

このように日本海側各地で幕末には磁器の生産が活発になる。よって、この時期には肥前磁器とともにそうした各地で焼かれた染付の碗・皿が多寡はあるにしても多い。肥前磁器と文様などで区別しやすいものもあるが、判別が困難なものもある。

それは陶器にもいえることであり、日本海側各地で作られた陶器がそれぞれの地域に流通する。江戸前半では、富山周辺では越中瀬戸窯製品の出土が多い。越中瀬戸の皿はかなり広く流通し、石川、新潟などでも出土する。山形では福島のアサギの陶器が出土するし、時代が下れば大堀相馬焼が出土するようになる。石川では九谷焼の17世紀後半のものが少し出土するし、19世紀になると再興九谷の製品が出土する。福井では越前焼壺・播鉢が多いし、石川でも越前播鉢が出土する。島根では江戸後期の石見焼陶器が出土する。というように、肥前陶磁は江戸時代の共通項であり、それに各地域で他の窯の入り方に地域差があるというのがふつうである。

＜火入・灰吹＞

喫煙の流行とともに、煙草用の火入・灰吹も肥前陶磁器で多く作られた。

日本への煙草の伝来は慶長10年説（1605）と天正年間説がある。元和頃になると、喫煙の風習がさかんになり、幕府はたびたび禁止令を出している。寛永19年にも幕府は来年よりは田畑に煙草を植えるのを禁じているように、急速な喫煙の流行を抑えようとしている。後に火事などが原因で禁じられ途絶えたが、人の嗜好

で止めがたく、再び流行し、広く貴人も喫煙するようになったと記録にある。こうした中で17世紀代には後のような煙草盆のセットは出来上がってはなく、寛永以降から香盆を転用したものが現れる。17世紀代には寛永頃以降、肥前磁器の火入が現れ、後半になると灰吹（灰落しともいう）と考えられるものがみられ始めるが、まだ後のように同意匠の火入、灰吹のセットはみられない。記録で肥前磁器の火入・灰吹の初見は、『隔蓑記』承応3年（1654）に「今利皿・火入」を買い求めたことが記され、寛文3年（1663）に「錦木手今里灰吹」を贈られている。

同意匠の火入・灰吹は元禄前後に出現するようであるが、これは華やかな有田磁器の火入・灰吹のセットを煙草盆で使えるほど、喫煙が上流階層にまで普及、浸透したことを表しているであろう。火入は灰を入れ炭火をいけて、煙草の火をつける用をなす。灰吹は吸い終わった煙草の灰を捨てるための容器である。灰吹は一般には青竹を切った竹筒が用いられたらしく、磁器で灰吹として作られたものも竹筒をモデルとした筒形製



図20 染付灰吹
1690～1720年代 口径6.5cm
柴田夫妻コレクション

品がふつうである。

前摂政太政大臣近衛家熙の『槐記』享保11年（1726）11月4日の茶会で烟草盆に「火入今里、青竹灰吹」、11月7日中御門天皇の御成の待合でも烟草盆に「金馬高麗ノ火入、青竹ノ灰吹」、同12年正月の茶会で待合の記述に「烟草盆、火入青磁、灰吹青竹」とある。

京都の頂点での茶会では火入は、有田の磁器や青磁が使われたようであるが、灰吹は青竹であった。しかし他の上流階層の煙草盆には陶磁器の灰吹が使われ始めたことが、肥前の製品から想像される（図20）。しかし、火入と文様を合わせたセットとしての火入、灰吹が定着するのは18世紀後半と考えられる。火を使うものということも理由かもしれないが、18世紀前半の陶胎染付碗が安い碗としてさかんに使われていた時代には陶



図21 色絵火入と灰吹 1770～90年代 火入の口径10.7cm
柴田夫妻コレクション

胎染付の火入も多い。陶胎染付碗が多く出土する福井、富山の北国地域と出雲周辺、すなわち島根、鳥取地域に陶胎染付の火入も出土分布がみられる（図43）。しかし陶胎染付の盛行は18世紀前半で終わるためか、灰吹のセットはみられない。

灰吹は煙草の灰を嫌ったのと、灰の火が早く消えるように蓋をつけたものも多い。蓋は18世紀では水指のように蓋受けを設けた口作りにはめるものが（図21）、幕末になると、蓋の底面にかえりを作り出し、身の口縁部には蓋受けがない。江戸後期の灰吹には口部に敲打痕がみられるものが多いが、これは吸殻を落とすのにキセルを叩いてするからである。本来、毎日キセルの掃除をすれば叩かなくても吸殻は吹いただけで落ちるのが、何日も掃除せずに使うからという。そうしたキセルの手入れの差が時代によってあったというが、陶磁器の灰吹をみていると合点がいくのである。

V期

<そば猪口>

現在、「そば猪口」と呼んでいる器形の猪口は18世紀前半頃に定型化したものである。江戸時代には「猪口」と呼ばれ、元来はそばのつけ汁入れではなかった。

記録上、「猪口」の初見（表2）は現在のところ、京都の金閣寺の住持鳳林承章の『隔蓑記』に明暦4年（1658）「今里染付皿・チョク拾ケ」とあり、次に寛文5年（1665）にも「今利焼之チョク・皿拾ケ」とある。『隔蓑記』には中国陶磁器や他産地の国焼の記載も多くみられるが、「猪口」は伊万里焼の2例だけである。

また有田の柿右衛門文書にも、赤絵始まりの「覚え」に二代藩主光茂が明暦3年（1657）2月に襲封し、初めて入部した万治元年（1658）に「錦手富士山之鉢、猪口相副え献上」とある。新藩主にお目見えの際に献上したことを記している。肥前磁器、すなわち伊万里焼の猪口の名が生産地側の史料で確認できる最初である。後述するように18世紀の鍋島藩から将軍家への献上陶器に皿・鉢とともに猪口が入っていることから、将軍、大名クラスの食膳具の重要な器の一つであったことが推測できる。

続く記録として土佐の『森田久右衛門日記』に延宝6年（1678）「ちょく一つ」などがあり、肥前磁器では『柿右衛門家文書』元禄4年（1691）御内様御用の「染付猪口二〇」がある。

このように記録では17世紀後半よりみられる「猪口」であるが、猪口と推測できる形状の器で従来、向付と呼ばれた筒形や角形の窯跡出土品や伝世品は寛永（1624～44）頃からすでに現れる。いずれも口径に比べて高さかなり高い、深めの猪口である。また『森田久右衛門日記』の延宝6年の朝顔形や釜山窯の記録正徳3年（1713）に端反り猪口とあるが釜山窯の端反り猪口はふっくらと丸い胴部から強く外に反る口作りであり、朝顔形との差はないようである。こうしたふっくらと丸い胴部から大きく外に開く器形の朝顔形、端反形の器も1650年代頃から多く、18世紀前半の図案史料からみるとこれも猪口と呼ばれたのだろう。深めの筒形の向付などは松ヶ谷と呼ばれた器や初期の鍋島にも多いが、元禄以降は少なくなる。

このように記録では17世紀後半より「猪口」の名はみられるが、こうした「猪口」について、正徳2年（1712）の『和漢三才図会』では「盞」を「猪口」とも読み、俗に「猪口」といい、形が猪の口に似るゆえの名ともいうが詳かでないとする。また盞は盃のもっとも小さいものであり、俗に猪口という。その端反るものを朝顔形と名付く。大小数品があり、当時の人は冷飲にこれを用い、和え物および塩辛を盛るとあり、『槐記

続編』享保17年（1732）に「大猪口ウドアヲアエ、小猪口ウコギヒタシモノ」とある。酒の飲用に使う「猪口」は名酒徳利との組み合わせで猪口がでてくる記録もある。昔は徳利に入れて酒を注いできたが、18世紀に染付など磁器の銚子が流行り、19世紀に入りまた徳利形が流行る。しかしこれは地域差がかなりあったらしい。また徳利と銚子は現在ではほとんど同じものを指して使われるが、江戸時代には形状も使い方までも異なっていた。

こうした酒瓶が変遷するように酒坏の方も変わったようであり、江戸後期の盃と猪口の混用も、式正においては（土器）かわらけから塗盃（杯）を用いるようになり、日常は木杯、塗盃から陶磁器の猪口へと次第に変わっていった結果ではないか。式正の「銚子」と日常の「徳利」が混用され、意味が同じようになっていく江戸後期に「盃」と「猪口」の混用も進んだように思われる。

18世紀になると、佐賀藩四代藩主『吉茂公譜』享保11年（1726）に「例年御献上の皿・猪口・鉢の類」とあるようにこれ以前から将軍家への献上陶器に皿・鉢とともに猪口が入っていたことが分かる。以後も続いたことは『重茂公御年譜』宝暦10年（1760）の年中御献上物についての11月に「陶器五箱、鉢二・大皿二〇・皿二〇・小皿二〇・茶碗・猪口・皿、この内より二〇」とある。そして、安永3年（1774）将軍家御好みの陶器についての注文があり、肴鉢・皿の他「松千鳥絵猪口」が含まれ、12通りの陶器が試みられた。以後の献上品5品のうちに2、3品を入れるようにと命じられた。この鍋島焼の猪口の器形を知る手がかりとして、鍋島家に残された図案帳がある。享保3年（1718）かと記された図のように朝顔形の絵に「ちよく、五方に錦手」とある。これからしても猪口の器形は様々であったことがわかる。現在、逆台形の猪口（図22・23）は「そば猪口」といってそばの付け汁を入れる器として考えられている。幕末の『守貞漫稿』に盛そばの図を掲げているが、この図に描かれる猪口3個はどうみても逆台形猪口の形である。小さい図なので文様までは表現されていない。その脇に箸やだし汁入れとして瓶が描かれている。江戸時代の記録に「そば猪口」の名はみられず、調べてもせいぜい伝世したそば猪口の箱に明治3年（1870）の年代と共に「そば猪口二〇人前入」などと墨書した例がある程度である。新しい言葉のようであるがいつの間にか誰でもが知る名称となった。

前述のような様々な器形の猪口の中から選ばれたものがそばの付け汁を入れる器として用いられるようになったとすると、その原因としてはそば切り、盛りそばの流行が想定される。そこでそば切り、盛りそばの普及の歴史を先ずみしてみる。わが国のそば作り

は中国から弥生時代の頃には伝来したとみられているが、そば切の始まりについて、現在、最も古い記録は『慈性日記』慶長19年（1614）に近江の多賀神社の社僧慈性が江戸滞在中、常明寺でそば切のご馳走になったとい



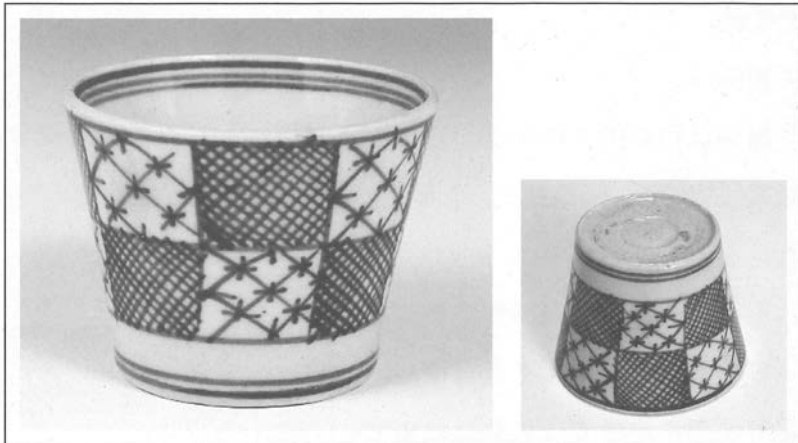
図22 染付猪口 1690～1740年代 口径9.2cm 柴田夫妻コレクション

う。確証はないが室町時代に禅寺などで先行する切麦（うどん）を真似てそば粉につなぎを入れ、薄くのばして細く切ったのが「蕎麦切」という。ゆでて汁につけて食べる。寛文（1661～73）頃になると、もらった蕎麦粉で蕎麦切を手作りし相伴者と食べたり、飲酒や茶などの前後に蕎麦切を度々食べるようになる。寺では精進料理に伴って麺類を食することが早くからさかんだったようである。江戸時代に入って『隔莫記』では「切麦」「素麺」、夏場には「冷麺」が多くみえ、寛文元年から「蕎麦切」がさかんに食されている。しかし、水戸黄門すなわち徳川光圀の記録によると17世紀には温飩でさえ晴れの日の食べ物であったらしい。そうした中で、幕末の『守貞漫稿』によれば、或書に寛文4年（1664）慳貪蕎麦切始めてこれを製す。下賤の食とす。価八文とある。これをもってそば屋の出現と説明する書が多いが、確証はないようである。

確かに江戸時代の初めには外食の店はなく、食事に金を払う所といえば街道の宿場や町の宿屋と茶屋など旅での食事であった。街道の宿場は江戸時代に発達し、その外食の早い例としてそば屋がある。こうして「江戸初期、精進料理の珍味として供せられていた『蕎麦切り』が庶民食の代表となったのは、江戸も半ば、安永（1772～81）年間のこと^{注40}とする。そうして「主食ではなく趣味食として」さかんになった蕎麦屋は、万延元年（1860）、ソバの値段が高くなったことについて、江戸中の蕎麦屋が会合した時、その数は3763店にも上ったという。

このように蕎麦屋が17世紀後半以降段階的に増加して18世紀後半以降、庶民にも普及したことが推測されるという。そのことは肥前磁器の逆台形猪口の生産と矛盾しない。17世紀後半には有田で作られていたのが、18世紀前半に有田の日常品生産窯から周辺の志田西山窯や波佐見窯に拡がり、さらに18世紀後半には有田窯ではみられず、周辺の広瀬山、大川内山や長崎県長与窯などで量産の状況がみられるし、瀬戸でも呉須絵陶器の

ものを作り始める。1780年～幕末の逆台形猪口は有田外山の多々良ノ元窯で出土しているが、有田では少なく、代わって周辺の広瀬山、伊万里市瓶屋窯、嬉野市吉田窯、長崎市瀬古窯に拡がる。と



すると、この逆台形猪口
図23 染付猪口 1780～1810年代 口径8cm 柴田夫妻コレクション
の多くが、他の器形の猪口に対して、ソバ食の流行とともに生産が増大していったものと推測して大きな間違いはないように思われる。

用途の常として、実際にはソバ食の付け汁を入れるだけの用ではないかもしれないが、少なくとも、この逆台形猪口の生産増大の背景にはやはりソバ食の流行があったといえよう。「江戸で『蕎麦前』^{註41}」といえは清酒のこと。ソバが茹であがる前に、一杯やって待つ」と説明されるように、こうした逆台形猪口で酒を飲んだことも想像できる。「猪口」という言葉のもつ用途の一つに酒の坏が加わっていったのがやはり18世紀からとすればなおさらのことである。

このそば猪口の出土分布をみると、記録にそば食が記される、江戸つまり東京やその周辺ではもちろん多いし、長野も多い。大阪では、大阪市住友銅吹所遺跡で18世紀初の上質の猪口が多いが、これはそば食のためではなく、本来の猪口のいわゆる「向付」的な使い方であろう。大阪市内の遺跡では出土しているが、堺市ではみないなど地域差があるかもしれない。徳島や広島、山口も多く、九州では福岡、大分に出土が多いが、南九州でも出土している。

およそ太平洋側では、関東以西では出土しているようである。出土が少ないのは、沖縄であり、そば猪口を使うようなそば食がない地域のためである。その意味ではそばを食べる地域でも食べ方が違い、山形も庄内地方では、今はそば猪口を使いそば食がさかんであるが、昔は食べ方が違ったという。肥前磁器の猪口が出土していない地域である。

そば猪口は18世紀以降の器種ということで日本海側は北前船による輸送が主であることの出土分布傾向がみられる。つまり、石川、富山などの次は出雲周辺に多い（表3、図44）。

その他

< 播鉢 >

播鉢はわが国では中世から重要な調理具として、陶器窯で生産が行われた。瀬戸（愛知県）、備前（岡山県）、珠洲（石川県）、越前（福井県）、信楽（滋賀県）、丹波（兵庫県）などである。

その流通は、日本海側地域に限ってみると、おおよそ鎌倉後期～室町中期にかけては福井県以東では珠洲焼播鉢が多く、越前焼播鉢が珠洲焼播鉢に対して優位に立つのは室町後期のことである。

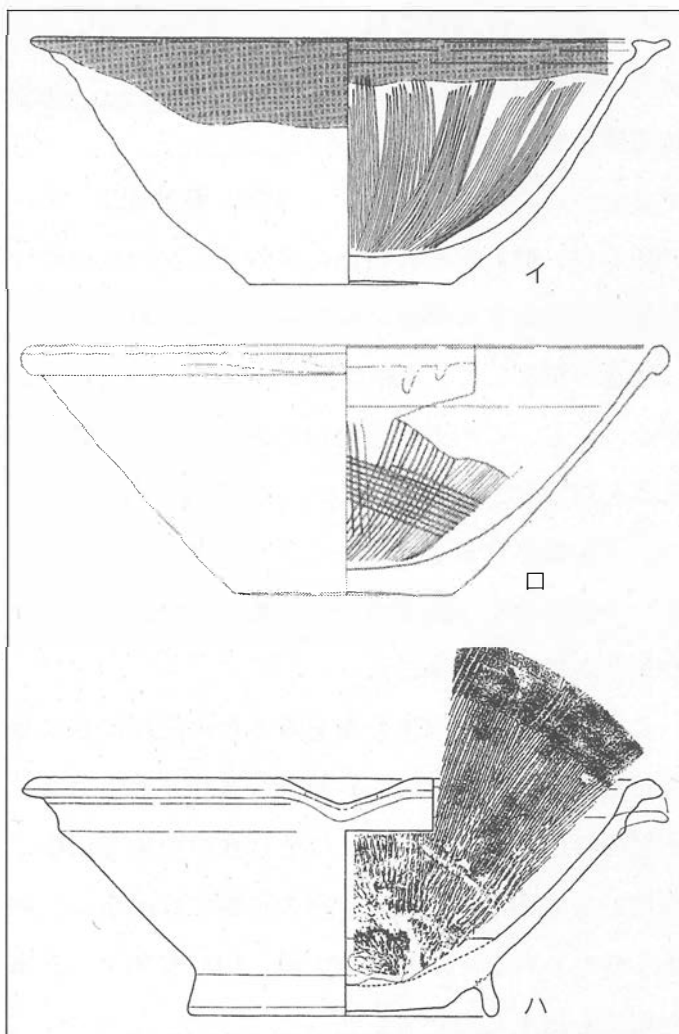
中国地方の日本海側では鎌倉時代以降、備前焼播鉢が主として流通している。^{注42} こうした中世から近世になると、肥前陶器生産では草創期から播鉢を作る。日本海側には初期から流通し始める。肥前の陶器では、草創期の岸岳諸窯では叩き成形の播鉢が作られているが、次の胎土目積の絵唐津時代、すなわち1593～1610年代になると、轆轤成形による播鉢が作られ始め（図24のイ）、17世紀は基本的に轆轤成形の播鉢がさかんに作られた。

轆轤成形も叩き成形も朝鮮の技術

者がもたらしたが、両者は韓国でも異なる技術系譜があり、叩き成形とは陶工集団が異なると考えられる。よって叩き成形の播鉢は17世紀は例外を除き消える。

ところが遅くとも18世紀初頭には叩き成形の播鉢が作られ始め（図24のハ）、逆に轆轤成形の播鉢は姿を消す。以後、幕末にかけては叩き成形の播鉢が壺・甕類とともに作られた。

この肥前播鉢の外観の特徴としては、17世紀の轆轤成形の播鉢は、口縁部にのみ鉄釉



イ(17世紀前半)は嬉野市内野山北窯出土、口(17世紀後半)は神埼市の遺跡出土
ハ(18世紀前半)は嬉野市志田西山1号窯出土

図24 肥前陶器の播鉢

もしくは灰釉を施釉しているのが特徴である（図24のイ・ロ）。

18世紀の叩き成形の播鉢になると、壺甕と同様の土灰釉を全体に施釉するため褐色を呈す（図24のハ）。

肥前播鉢の流通をみると、中世以来の生活必需品であり、かつ備前や越前、瀬戸、丹波などの播鉢が流通していたから、前述の陶器碗・皿などの出土分布とはかなり異なる。つまり、太平洋側ではほとんど出土しないし、関西、四国では少ない。岡山、広島あたりから日本海側に出土分布がみられ（表3、図45）、他は九州である。

また長野県北部で17世紀の播鉢が多いのは、陶器溝縁皿の項で述べたように、新潟側からの搬入があったと考えられる。日本海側では越前、備前や山口の須佐唐津などの播鉢との競合もあったが、北海道までの広域に流通した。こうした出土分布傾向は壺・甕類に近い。

<叩き壺・甕類>

肥前陶器では朝鮮の叩き成形の技術によって草創期から壺・甕類が作られた。初期の壺・甕は朝鮮の壺・甕と極めて酷似の製品が作られた。薄手で、内面に同心円（青海波）状の当て具痕が残るのが特徴である（図25のイ）。ところが、寛永頃から厚手となり、内面に格子目状の当て具痕が残るようになっていく（図25のロ）。

器形も備前の大甕の影響を受け、大型の甕も作られるようになる。

こうした壺・甕も日本海側には船で運ばれた（表3、図46）。

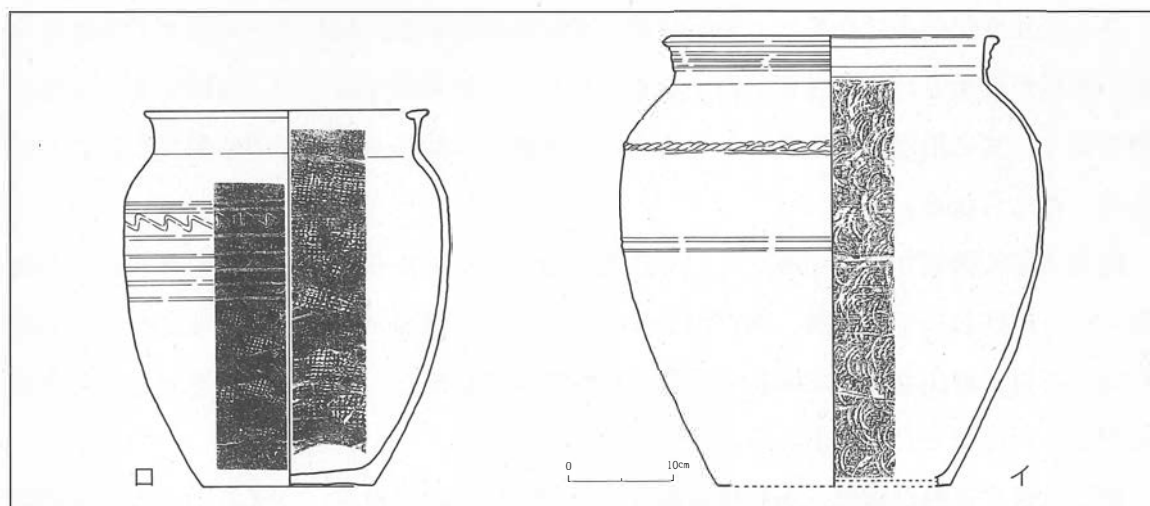


図25 肥前陶器甕 陶器の叩き成形は寛永（1624～44）頃を境に変化

まとめ

以上のように、江戸時代の肥前陶磁は日本海側地域に広く船で運ばれた。当然、海運の歴史変遷とも関わり、また人々の生活の変遷とも密接な関係がある。とくに、各時期に大量に作られ、地域差などをとらえやすい製品に絞って検討した。

秀吉の朝鮮出兵のため、名護屋城への物資などの輸送で全国的な舟運が活発になり、また秀吉の伏見城建設で材木が秋田から敦賀経由で畿内に運ばれたことなども加わる。

そうした海運の発達によって、初期の肥前陶器が日本海側に流通したものと考えられる。

胎土目積の碗皿に加えて東日本太平洋側ではみられない播鉢、壺・甕に至るまでが日本海側は広く北海道まで流通した。

その後、17世紀前半には陶器溝縁皿、播鉢など東日本太平洋側には出土しないものが、日本海側では引き続き流通した。

1644年の中国の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の輸入がほとんど止まると、国産磁器として生産が始まっていた肥前磁器は1644年以降、またたくうちに国内磁器市場の需要を一手に受けて国内磁器市場を独占する。この磁器生産量を増やす象徴的なものとして高台無釉碗が作られた。これは広く出土分布をみせる。17世紀後半の京焼風陶器や呉器手碗になると日本海側だけでなく、岩手へと太平洋側に回る地域でも出土する。

この出土分布の変化は、寛文11年（1671）河村瑞賢が東廻り海運を整備し、東北太平洋を回って江戸まで行く海路で物資が動くようになったためと推測される。

さらに18世紀前半になると、刷毛目碗や青緑釉陶器碗皿、陶胎染付碗などの安価な陶器の食器が量産され流通する。出土分布をみると日本海側では石川、富山にもっとも濃密であり、次に出雲周辺地域であることは、元禄頃に始まる北前船の活発化と関わりがあると考えられる。

寛文12年に西廻り航路が確立し、それまで敦賀、小浜から陸路を京坂に運んでいた輸送ルートに代わって、下関、瀬戸内を経て大坂に運ぶ海運がさかんになる。さらに元禄以降、石川、富山などの北国船で下関、瀬戸内海を経由して関西と北海道を結んだ北前船がさかんになるためであろう。

刷毛目碗、青緑釉碗皿、陶胎染付碗などの雑器は船の下積み、つまり船の安定保持を兼ねて、庶民向けに運ばれたものとみられる。

こうした陶器の雑器碗皿の時代を経て、18世紀後半には波佐見諸窯で量産される安いくらかわんか手の染付碗皿が代わって全国流通するようになる。そうすると各地の藩は困

り、何とか自藩でも磁器焼成を行わせようとする動きが出てくる。

磁器はふつうの陶器を焼いていた陶工が作ろうとしてもできないのであり、その結果、たいていは肥前もしくは肥前系の磁器の技術を身につけた陶工を招いて開窯することになる。こうして肥前磁器の技術が伝播し、各地で磁器生産が行われるようになった。

よって、出土分布をみても江戸後期になると磁器、陶器両方とも、肥前の割合は地域差はあるが、平均すれば減少傾向がみられ、また、産地の特定も容易ではなくなる。北前船による交易がこの時期の日本海側でさかんになったことが、こうした各地の陶磁器生産を支えたという点も考えねばならない。

いずれにせよ、以上のように肥前の陶磁器流通の上で江戸と京坂は別格として、日本海側の流通は重要な位置を占めていた。

それが、秀吉による海上輸送の隆盛、1644年中国陶磁器の輸入激減、河村瑞賢による寛文11年の東廻り航路、同12年の西廻り航路の整備、元禄頃からの北前船交易の成長など流通の大きな変遷と肥前陶磁の出土分布の地域差や変遷は符合している。さらに記録にはない陶磁器の質的变化、デザイン変化などは人々の生活変化や好み、流行にもとづくものであり、今後、日本海側以外の地域においても、こうした読み解きやすい製品を抽出して、地域差を浮かび上がらせることができるものと予測される。

陶磁器はきわめて普遍的、かつ消滅しない材質のものであるからこそ、こうした歴史研究に有効なのである。

本稿は、当館が平成16～17年度に行った「伊万里焼の日本海側流通状況調査」の成果を反映したものである。また資料の整理や図表の作成には、山本文子、中村康子両氏に御協力いただいた。

史料1 皿山代官旧記 宝暦五亥年日記 (1755)

一、去ル廿一日之御状相達致拝見候、然ハ嬉野山下登計ニ釜入候ニ付而、釜付帳面被差越、例之通鬩釜致書載、今般宿継を以差越申候条、御受取可被成候、且又、土場下目附瀬戸口新内致病死候ニ付、代人柄中嶋内蔵之允与谷口源兵衛へ被仰付度旨、別紙書付被差越吟味ニ差出候処、右源兵衛義此内堺目附役被仰付置候処無調法有之、役方被差迦候ニ付而ハ下目附役可被仰付様無之候条、別ニ人柄御見立御書付可被差越と存候、御答旁如此ニ御座候、已上、

嬉野久郎左エ門

富石清兵衛

高木与惣兵衛様

石井ニエ門

史料2 皿山代官旧記 天明四年 (1784)

此之願重訴出候ニ付而、白五枚之付紙有リ

- 一、嬉野内野山釜焼共、別紙之通願書差出候ニ付而、承調候処、訴面之通極々之鉢ニ相成居候、只今之焼物ニ而ハ、直段左之通ニ而相続不相成候故、内野山近辺不働山^(動)と申所へ白土有之、右土ニ而致心見候由、左候而、商人共へ見セ候処、可致仕入旨申候由、右山之儀ハ、

日峯様朝鮮、御帰陣之砌、御運越已後、御国産ニ相成、一鉢根元之焼物師子孫ニ候得ハ、相潰候通有之候而ハ、乍憚、御主意ニも難相叶奉存候、先年ハ数拾人罷在候由ニ候得共、段々相潰、只今ニ而ハ七人程ニ相成、別而下焼物と申、猶又、近年一統之不景氣、就中、米高直諸色も同然炉木・す焼木彼是以前とハ相違、左ニ書載直段之通ニ而ハ自今相続相叶間敷、何連共不相潰通有御座度奉存候条、願書幾重ニも被遂御吟味拝借被仰付度、此段御達仕候、已上、

但、仕入直段

- 一、徳利壺ツ、代錢十文
一、茶出壺ツ、右同十文、小七文
一、鉢壺ツ、大中小三文、其下略之
右之通御座候、已上、

史料3 皿山代官旧記 天明七年 (1787)

内野山願ニ代官ノ之付帑、此拝借配当方等雜之部ニ書置

- 一、嬉野内野山釜焼共別紙重訴差出候ニ付而、御達仕候、内々之儀ハ猶又訴面調合候処、訴面之趣ニ御座候、先達而ノ御達仕候通、山柄之儀候得ハ、亡所共相成候而ハ相叶間敷永続仕候通、宜被遂御吟味度御達仕候、已上、

御小物成所ノ之付状写

本文訴面之趣遂吟味候処、右釜焼共地行極々困窮之上、猶又、当時節柄ニ付而、至而差迫り候趣ニ付而、拝借其外廉々願出候、先達而郡目附役者差越一鉢見分申付候処、訴面之通相違無之由、別紙見分書之通御座候、去ル已年拝借被差出、今又弥ヶ上被差上候通ニ而も中々振立候道も有之間敷候、何レー山御再興御仕与無之而ハ不

相叶儀ニ御座候、御山方内之儀ニ候得ハ、急度割山其外廉々御吟味有御座度致御達候、已上、

御山方

六府方付紙

- 一、御小物成所付紙ニ御山方内之儀ニ候得ハ、割山其外廉々急度吟味有之旨候得共、專焼物職方ニ相懸候得ハ、一鉢之仕与者於役筋可相整様無之候、尤割山ニ相懸候儀ハ左ニ書載仕候条、於御小物成所ニ永続之御仕法可有之候事、
- 一、割山之儀、以前も無銀懸ニ被渡下、其後為冥加銀纔宛相納、其已後壹反ニ付而、銀十五六匁位相納、近年ハ廿八匁程ニ而も被仰付候を、向五ヶ年之處、半銀程ニ而為御介抱被仰付候様相願候得共、往昔朝鮮人之時分ハ何レ之通ニも可有之候得共、割山代半銀納と有之儀難被相叶候、尤、木立善悪、依多少、銀懸リ有之儀増減ハ可有之候、何レ永続之御仕法於被仰付ハ、是迄之通、割山代銀ハ相納候様被仰付方ニ而可有之候事、
- 一、右割山、前之通三畝町余宛被相渡候様相願候得共、釜登数相減候ハ、右積合を以、可被相渡候条、一鉢之御仕法被相立候ニ付而ハ、壹ヶ年、釜入度数、薪之入方積、被相達ハ、右を以、割山繰合可被相渡候事、
- 一、割山相願候共、時々御渡方無之處、漸々と相衰候由、見分書ニ相見候得共、右ハ願之度ニ及延引たるニ而有之間敷、一鉢割山渡方之儀手明鍵役々々相整候ニ付而、御無人之節ハ致延引候儀も可有之、強^{あなが}チ、右故為相衰ニ而も有之間敷候得共、下焼物之儀ニ候得ハ、自余皿山同様ニハ相続相成間敷歟と存候事、

御小物成所ノ申来

- 一、先達而、嬉野内野山釜焼共ノ願之趣吟味之上、御側先以懸合ニ相成、付紙之通御座候、乍然、於役筋其仕組不相整ニ付、於其御方、何レ取続候通之仕組有之被相達候様ニと御座候、右ニ付而ハ書付ニ而ハ難碎、幸、小出清左エ門・小嶋三郎兵衛当所罷越居候ニ付而申含越候、尚又、御承知可被成と存候、此段及御懸合候、已上、

内野山仕法書差出候ニ付代官ノ付紙、

- 一、内野山釜焼共反の相続不相叶、既ニ及潰候故、先達而ノ毎度願差出候末、於役筋致吟味、何レ取続候通之仕法書を以、御達仕候様被相達致承知候、早速釜焼共ニ御達之趣相達候處、此節別紙之通、仕法書を以相願候、最早相潰申ノ外無之鉢御座候、右山焼物建初之山ニ而、亡所共相成候而ハ相叶間敷、別紙之通被仰付候ハ、相続可仕候条、幾重も被遂御吟味度御達仕候、已上、

- 一、去ル十四日之御状落手致拝見候、内野山釜焼ともゞ別紙仕法書を以相達候故、私ゝ致書副致御達候条、宜御吟味ニ相成候様被成可被下候、此段為可申越、如此ニ御座候、已上、

内野山仕法書

- 一、内野山釜焼打迫困窮之末、拝借其外廉々願差出候処、訴面ニ御付紙之通御山代銀貳拾八匁位ニ相渡被来候を、半銀拾四匁ニゞ被相渡被下候様相願候得共、不被相叶候旨、右ニ付而ハ釜焼相続之筋前ニ仕法書付を以相達候様被仰達奉承知候、左ニ申上候、

- 一、我々下焼物之儀、御国内ニ不限、隣国諸方上手焼物多、焼立候時節ニ振替リ、我々焼物自然と不景氣ニ相成、更曾近年米其外諸色高直彼是ニ付、職分相続不相叶、年々釜焼及潰、相残候我々拙も同然之行懸ニ付、段々相続之手筋吟味仕候処、先訴ニ御願申上候通、上下兩登釜之内下登之儀向五ヶ年之間釜入被相除置、釜焼壺人前ニ正銀三百匁ツ、御拝借被仰付、上登計ニ火入仕、何レも細工人・荒使子等雇入不仕、手人数ニ而爰限差部リ相働候半ハ、是迄壺ヶ年ニ兩三度位押々釜積入来候を、向後五六度ツ、積入仕、相続仕度奉存候、只今何分下焼物不景氣と申候而も、夫丈之儀ハ諸方廻り船下積ニ商人抔待懸、相調申儀ニ御座候事、

- 一、御山代銀貳拾八匁程ニ而是迄被相渡候を、為御介抱拾四匁位被仰付被下度奉願候得共、難被相叶由御尤奉存候、尤、我々薪之儀ハ惡木雜木ニ而不苦候条、其時々御見計を以、相応之直段ニ而被仰付可被下候、尤、割山床之儀ハ壺ヶ年ニ六登ツ、釜積入仕候、凡積ゞ三町余宛被相渡被下度奉存候、併、木立之新古多少次第之儀ニ御座候、且又、御山代銀納方之儀ハ、御憐愍を以兩三度割合を以、相納候通被仰付被下度奉願候事、

- 一、去ル巳年被仰付候御拝借銀之儀ハ、此度奉願候通被仰付、於巳下ハ、跡方被相達置候通、此末積入釜ゞ登返上尖ニ相納可申候事、

- 一、此節奉願御拝借正銀壺人前三百匁ツ、都而貳貫百匁、御返上之儀ハ、明年ゞ五ヶ年割合ニゞ御返上被仰付被下度奉願候事、

右之通御慈悲之御吟味を以被仰付被下候ハ、無別条相続仕、御返上銀等も尖ニ相納難有仕合奉存候、扱又、我々下焼物之儀、世上一統振替不景氣之時節ニ相成候得ハ、永続之職分候者幾末無覺束奉存候ニ付、只今積入申候壺登之内ニ釜壺軒ツ、為心見、漸々上手之焼物作立、釜焼舫ゞニ仕入仕、段々焼仕法等得と相心得、下登再興致シ、上手之焼物焼立候、永続之目論見仕儀ニ御座候条、手形焼物等出来立候

ハヽ、追而御達をも可申上奉存候条、此段御筋々宜敷被仰上可被下儀深重奉頼上候、
已上、

未九月十六日

内野山
釜 焼 中
庄 屋
伊右エ門

右之通、内野皿山釜焼中某立会、段々吟味仕、前断之廉々御達申上候、其通被抑付候ハヽ、於被下ハ、無別条職分相続仕儀ニ御座候、外ニ色々詮議仕候得共、何分ニも宜手段無御座、右之通奉願儀ニ御座候条、片時も早く願之通被仰付被下候様、御筋々宜御達可被下儀深重奉願候事、

未九月十七日

小 嶋 三郎兵衛

右之通内野皿山釜焼中ノ仕法書を以相願申儀ニ御座候条、筋々宜被遂御吟味被下度奉存候、已上、

史料4 皿山代官旧記 天明八申日記 (1788)

一、嬉野内野山拝借渡四月二日ノ郡目附田口幸右エ門・役者中溝常右エ門・下目附中溝慶十・下役小出清左エ門・大庄屋小島三郎兵衛病氣ニ付、悴吉左エ門・警固中村利兵衛右人数罷越、於彼地庄屋初釜焼中招呼、筋々ノ御達相成候趣申聞、跡方返上、扱又、此節返上都而此向年ニ三度ツヽ、無遅滞返上仕、釜焼中ハ永続之道有御座哉承候処、返上之儀不及申、此向昼夜出精仕、若其内心得違仕不出精之者も有之候ハヽ、仲ヶ間中ノ申聞、末々相続仕候通吟味仕、自然申聞不相用者ハ、御役筋御達可仕由候、小嶋三郎兵衛迄手形釜焼中ノ差出候、

史料5 皿山代官旧記 天明八年 (1788)

一、口 達

嬉野内野山釜焼細工人之内ノ、大村領焼物山へ参、細工仕居候由相聞候ニ付而、為捕方皿山町警固兩人道引之者壺人相付、差越申候ニ付、別紙之通、入切前相達候、跡方右躰之節ハ役内銀ノ差出被来候得共、唯今集銀少分も無御座候条、御役筋ノ被差出度、此段御達仕候、

已上、

御小物成所へ

代 官 ノ

史料6 皿山代官旧記 天明八年 (1788)

一、嬉野内野山頭細工人ヲ、式人大村領長柄村ニ罷越、細工仕候由、相聞候ニ付、警固
兩人案内者壺人、五月ノ大村罷越候、

覚

一、申五月七日、皿山出立大村領長尾山相廻リ、同領三ツ野俣罷越止宿、

一、同八日、同所出立、同領彼杵罷越止宿、

一、同九、同所ノ借舟、財津渡海、同領長江罷越止宿、船借賃銀九匁、

一、同十日、同所出立、財津罷越借船、彼杵渡海可仕処、逆風ニ而、大村城下着船、同
所止宿、舟借賃銀九匁、

一、十一日同所出立嬉野罷越止宿、

一、同十二日同所出立、皿山罷帰候、

一、皿山ノ手引壺人連越候路銀・賃銀六日分、銀拾八匁、

一、旅行六日、

ノ 式人路銀、

船借賃銀十八匁、

手引壺人路銀・賃銀十八匁、

右銀被相渡被下候様、御点合被差出可被下候、但、今般大村領三ツ野俣・長尾山・
長江山三ヶ所釜焼在所ニ候処、嬉野山釜焼細工人之内ノ兩人罷越居候由、相聞候ニ
付、右捕方扱又焼物其外為見繕、我々被差越候ニ付而、路銀其外入切前申上候儀ニ
御座候、已上、

皿山町警固

兩人名前

申五月廿四日

中溝常エ門殿

右銀相渡候様御点合可被差出候断、前書ニ御座候、已上、

中溝 常エ門

久米覚右エ門

申五月廿四日

百武次郎兵衛殿

右銀入切之儀承届致存候、已上、

一、宿繼を以啓上仕候、然ハ大村領之内三ツ野俣山・長尾山・長江山三ヶ所共ニ釜焼在

所ニ付、嬉野内野山德利細工人城右エ門今壺人右三ヶ所へ相忍罷越、細工仕居候趣、風説有之候ニ付而、町警固兩人、道引之者壺人、捕方其外為聞繕、去ル七日ノ大村筋被差越候処、右城エ門儀ハ去年共迄ハ罷越細工仕居候由候得共、当時病氣差出、内野山罷越^{ひた}混と平臥罷在候由、今壺人ハ新蔵助市と申者ニ而可有之候得共、是又、只今ハ一向他方出等不仕、内ノ山ニ而、細工等仕居候由、昨十二日暮比、警固罷歸申達候、右ニ付而不差分儀有之候付而、近日之内ノ詰中申談、内野山罷越人別調等相整、委ク差分候通可仕と申談仕儀ニ御座候、扱又、此節被差越候町警固其外路銀并船賃銀入切前乞筈差越申候条、御点合可被差出候、右之外聞合之趣、彼者共ノ申達候儀も有之、彼是ニ付一刻も人別調等無之而相叶間敷ニ付、右之通御座候、猶又、御帰之上、委クハ可申上候得共、旁之趣御懸合為申上、如此ニ御座候、

役中ノ

百 武 へ

史料7 皿山代官旧記 天明八年 (1788)

一、一筆致啓達候、嬉野内野山釜焼儀エ門儀南京向焼立度由候得共、只今迄之釜ニ而ハ宜無之ニ付而、元釜床ニ五六間塗立度旨別紙之通書付差出候ニ付而、訴面之分ニ而ハ無心元、万一も塗懸候而、又候、拝借等相願候通之儀をも出来、且外ニ差障候儀等ハ無之哉、彼是を以、爰許役人中彼地参、得と承調被申候処、何ハ差支候儀無之、儀エ門一類浜山罷在候釜焼次郎エ門内分セ話仕、いつれ南京向焼立候半而ハ永続之道有間敷、釜焼元祖之儀ニ而及潰候而ハ一類ニ相成候而も残念ニ相心得、別紙願書差出候由候得共、儀エ門儀ハ貧窮者ニ而不任所存、最前釜焼中ノ相願置候末ニも有之、南京向と候而も上手焼物ハ出来兼、瀬戸向焼ニ而可有御座候、別紙願書差越候而、尚又、宜被遂御吟味候、此段為可申越、

御小物成所へ

史料8 皿山代官旧記 天明八年 (1788)

一、嬉野内野山釜焼共ノ別紙之通割山願差出候ニ付而、致御達候条、宜被遂御吟味、何卒如願相済候様有之度、左候而否急度相分、早々可被仰越候、此段為可申越、

石井五郎太夫

御山方へ

史料9 皿山代官旧記 寛政元年 (1789)

一、嬉野内野山下登再興之末、当十四日火入注進仕候ニ付而、此節ハ釜焼物出来立見分之上ニ而ハ、相応之御運上銀被相懸候半而不相叶ニ付、代官石井五郎太夫へ申達、下目附下役共罷越候儀、何分可仕哉相達候処、前々何レ之通之手数ニ而有之候哉、部郡目附申談、目附役者兩人罷越相済候通相決候事、

口 達

嬉野内野皿山下登再興之末、先以釜数七軒塗立、南京焼仕立候ニ付而、見分仕候処、御運上銀成定、別紙書載之通被相極方ニ而可有御座哉、此段御達仕候条、尚又、可被遂御吟味候、已上、

西七月十九日

中溝常右エ門

右見分立会存致候、

荒本文右エ門

史料10 皿山代官旧記 寛政九巳申渡帳 (1797)

科代銀七匁

志田東山 庄屋

次右エ門

同 五匁ツゝ

右同所 釜焼

八 人

其方共儀、甕茶出其外焼来候処、時節柄不商売ニ而渡世成兼候ニ付、南京焼存立西山蓮池私領へ一類共罷在候由ニ而、拵土等申請、少々焼立候処、相応ニ有之、幾々渡世相続ニも可相成候得共、兼而極及零落釜普請等自力ニ而不任所存儀、彼是を以丁銀貳拾五貫目拝借願出候、惣而南京焼自分ニ仕立候儀堅停止ニ候得ハ、前以相願指図之上、試焼立可申処、無其儀、早竟、不案内之处、前断之次第、甚以無調法至極候、次右エ門義ハ庄屋役も相勤居、猶又、不念無調法之至候、依之、焼物取揚之上、銘々如書載為科代銀子相納候様申付者也、

史料11 皿山代官旧記 文化十一戌日記 (1814)

一、正月十一日御蔵啓之節、御酒は昔々德利ニ入しやく相取来候処、いつれ之比ふ歟、銚子鍋ニ入、しやく取来候由、然処、当年々又々昔之通、志田焼德利ニ而、しやく取候様ニ成、已来德利を用候様、
御城正月荒神祭之節、花柴を利理^(マ、)ニ立候由、是ハ天正ノ比^{マ、}于今不相替由候也、

- 注1 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984
- 注2 柏本朝子氏よりご教示いただいた。
- 注3 古田良一「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」『日本海運史の研究』昭和47の718頁
- 注4 注3の723頁
- 注5 注3の724頁
- 注6 注3の728頁
- 注7 印牧信明「近世前期の日本海海運と商品流通—北国海運と西廻り海運の発展を中心に—」『日本海域歴史大系第4巻 近世篇1』清文堂出版、2005の218—221頁
- 注8 『山本神右衛門重澄年譜』
- 注9 大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について—窯詰技法よりみた—」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』燎原、1983
- 注10 「伊万里歳時記」巻2『日本都市生活史料集成 十 在郷町篇』学習研究社所収
- 注11 前山博「国内流通編」『伊万里市史（陶磁器編）』伊万里市、2002の540頁
- 注12 『新潟県の歴史』山川出版社、1998
- 注13 注12に同じ。
- 注14 注12に同じ。
- 注15 注8に同じ。

大坂にて、塩屋惣五郎と申す者の手代に塩屋与一左衛門・えらや次郎左衛門と申す者、此の兩人有田皿屋にて売買の心当にて伊万里町へ罷り下り候由、有田大木村にて神右衛門承りつく。同町東嶋徳左衛門と申す者、右の兩人へ知人に罷りなり、御徳に相なるべき儀はこれあるまじきやと談合仕り候様にと申し含め候処、御運上増し申し積り、大坂兩人者申し候を徳左衛門神右衛門へ申し聞かせ候。尤も左右に心得申し候て、其の段、石井右衛門佐方を以って 御前へ申し上げ候処、寛永十九・二十年大坂与一左衛門・・・

下関にて伝右衛門宿主土蔵え焼き物預け置き、大坂兩人者は差し登せ、伝右衛門急ぎ佐賀・・・預け置き候焼き物、関にて伝右衛門働きを以って、売り払い申し候て、御上納未進残らず相済まし申し候。

- 注16 注8に同じ。
- 注17 『日光山輪王寺釈迦堂境内家光公殉死者墓調査報告書』日光山輪王寺、1999
- 注18 大橋康二「鍋島藩窯跡出土の京焼風陶器（上）印銘を中心として」『セラミック九州7号』九州陶磁文化館、1984、「同上（中）」『セラミック九州8号』1984、「同上（下）」『セラミック九州9号』1984、「いわゆる京焼風陶器の年代と出土分布について—肥前産の可能性のあるものを中心として—」『青山考古第8号』青山考古学会、1991

- 注19 佐賀県教育委員会『内野山北窯跡』1996、嬉野町教育委員会『内野山南窯跡・内野山北窯跡』1997
- 注20 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』昭和53年刊、図367-③（愛知県採集）、図381-①（山形県出土）
- 注21 九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる—』2001
- 注22 牧野隆信『北前船の研究』法政大学出版局、1989の13頁
- 注23 注21の15頁。
- 注24 小野正雄「寛文期における中継商業都市の構造—越前敦賀港に関する一考察—」『日本海海運史の研究』福井県立図書館、1972の157・158頁
- 注25 牧野隆信「近世以後の若越の港と加賀の関係—敦賀と北前船を中心に—」『日本海海運史の研究』福井県立図書館、1972の453頁
- 注26 注22の374頁。
- 注27 中野雄二『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会、2000の278頁
- 注28 『長与焼の研究』長与町教育委員会、1974、長与町教育委員会『長与三彩発掘調査報告書』2006、第7図39
- 注29 前山博「伊万里陶商の基礎的研究—武富家文書・記録—」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第2号』1990の18・19頁
- 注30 大橋康二「朝鮮から肥前に伝わった磁器焼成技術とその伝播」『日本海域歴史大系第5巻近世篇Ⅱ』清文堂、2006
- 注31 前山博「国内流通編」『伊万里市史（陶磁器編）』伊万里市、2002
- 注32 注31の64～101頁。
- 注33 注31の538頁。
- 注34 池田史郎編『皿山代官旧記覚書』金華堂、1966
- 注35 江浦久志「天草上田家文書『近国焼物大概書上帳』について」あまくさ雑記創刊号、同人マジミ
- 注36 柏本朝子「萩における磁器生産について」萩市郷土博物館研究報告12、萩市郷土博物館、2002
- 注37 内田律雄・本間恵美子「出雲意東長歳山焼について」八雲立つ風土記の丘49号、島根県立八雲立つ風土記の丘、1981
- 注38 『寺内焼窯跡』秋田市教育委員会、1991
- 注39 『日本やきもの集成』平凡社
- 注40 杉浦日向子『大江戸美味草紙』新潮社、1998
- 注41 注40に同じ
- 注42 大橋康二「中世播鉢考」考古学ジャーナル179号、1980

表2 近世文献史料にみる陶磁器

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
1 寛永十六年閏十一月十三日	1639	香合	今利焼藤実染漬				宗貞(形見)	鳳林承章		『隔笈記 第一』 p.195
2 正保元年二月十四日	1644	肴壺	今焼青磁 壺ヶ				真如堂之祥源院	鳳林承章		『隔笈記 第一』 p.561
3 正保二年二月二十五日	1645	茶碗	今入焼白 壺丁				唐物屋藤田次郎左衛門	鳳林承章		『隔笈記 第一』 p.679
4 正保二年三月二日	1645	平鉢	今利焼 壺丁				仏師右京	鳳林承章		『隔笈記 第一』 p.680
5 正保二年三月二日	1645	有蓋壺	今利焼染付 壺丁				仏師右京	鳳林承章		『隔笈記 第一』 p.680
6 正保二年十一月二十二日	1645	茶碗	今入焼 壺ヶ				鳳林承章	北野観音寺		『隔笈記 第一』 p.754
7 正保四年一月十五日	1647	鉢	今利焼 両丁				高雄地蔵院	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.145
8 正保五年一月十二日	1648	鉢	今里青磁菊目 両ヶ				高雄地蔵院	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.293
9 正保五年一月二十二日	1648	鉢	今里釜染付 壺ヶ				相国寺客頭寿恩	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.298
10 正保五年一月二十五日	1648	鉢	今里焼青磁菊目 一ヶ				鳳林承章	承需		『隔笈記 第二』 p.299
11 正保五年一月二十八日	1648	鉢	今里青磁菊目 一ヶ				鳳林承章	金光寺学持		『隔笈記 第二』 p.300
12 正保五年閏一月八日	1648	鉢	今里 壺ヶ				鳳林承章	竹田庄左衛門		『隔笈記 第二』 p.304
13 慶安元年三月十日	1648	香炉	今里青磁四方 1				鳳林承章	中院通村		『隔笈記 第二』 p.326
14 慶安元年三月十日	1648	香炉	今里青磁円				鳳林承章	中院通村		『隔笈記 第二』 p.326
15 慶安元年六月三十日	1648	小壺	今里焼染付 一壺				勝定院	鳳林承章	醤油入	『隔笈記 第二』 p.361
16 慶安元年七月十三日	1648	鉢	今里焼染付 壺ヶ				鳳林承章	林光院瑞宥		『隔笈記 第二』 p.368
17 慶安二年一月六日	1649	香合	今里焼有蓋藤実 壺ヶ				藤田次郎左衛門	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.438
18 慶安二年二月二十二日	1649	鉢	今里焼青磁 二ヶ				広嶋清春	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.466
19 慶安二年四月二十八日	1649	鉢	今里焼染付 壺ヶ				鳳林承章	観音寺		『隔笈記 第二』 p.489
20 慶安二年十二月二十二日	1649	皿	今里染付 廿ヶ				周順	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.589
21 慶安三年一月廿五日	1650	鉢	今里 式ヶ				五味豊直内白井喜兵衛	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.619
22 慶安三年四月十九日	1650	茶碗	唐津焼神辺				鳳林承章	大平五兵衛	売却のため	『隔笈記 第二』 p.649
23 慶安三年十二月二十四日	1650	茶碗・皿	今里焼染付 拾ヶ				全受正音	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.746
24 慶安三年十二月二十八日	1650	皿	今里焼 拾ヶ				周順	鳳林承章		『隔笈記 第二』 p.750
25 慶安三年極月	1650	香炉	今利染付獅子				加賀前田家	鍋島勝茂		『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.339
26 慶安四年一月二日	1651	薫物香合	今里染付 壺丁				藤田次郎左衛門	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.5
27 慶安四年一月十四日	1651	大鉢	今里焼 二ヶ				八条宮智忠親王	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.18
28 慶安四年三月一日	1651	香合	肥前焼 壺ヶ				清泉寺宗左	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.31
29 慶安四年十一月	1651	硯屏	今利鶏 二つ				加賀前田家	鍋島勝茂		『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.339
30 慶安四年十一月	1651	友蓋水指	今利染付 笛耳 友蓋 撮み蟹				加賀前田家	鍋島勝茂		『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.339
31 慶安四年十一月	1651	友蓋水指	耳笛の染付 友蓋				加賀前田家	鍋島勝茂		『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.339
32 慶安四年十二月二十五日	1651	茶碗	今里焼 拾丁				全受正音	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.99
33 慶安四年十二月二十五日	1651	卓皿	今里焼染付 拾丁				鳳林承章	渡辺十右衛門		『隔笈記 第三』 p.99
34 慶安五年一月二日	1652	茶碗	今里染付 拾丁				鳳林承章	藤谷為賢室		『隔笈記 第三』 p.116
35 慶安五年一月二日	1652	鉢	今里之錦手 壺丁				唐物屋大平五兵衛	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.116
36 慶安五年九月五日	1652	壺	今里焼 二百十ヶ				御水尾天皇	鳳林承章 他		『隔笈記 第三』 p.214
37 慶安五年九月五日	1652	壺	染付 十五ヶ				御水尾天皇	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.214
38 承応二年八月十三日	1653	茶碗	今里染付 十ヶ				松嶋軒慶彦	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.362
39 承応二年十二月二十五日	1653	茶碗	今里染付 小 十ヶ				全受正音	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.415
40 承応二年十二月二十六日	1653	新德利	今里焼				鳳林承章	御水尾院	黒龍酒入	『隔笈記 第三』 p.416
41 承応三年一月二日	1654	茶碗	今里染付 十				明哲	藤谷為賢		『隔笈記 第三』 p.425
42 承応三年一月七日	1654	茶碗	今里 三ヶ				北野日代渡瀬友世	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.431
43 承応三年一月十八日	1654	皿	今里染付 拾ヶ				智忠親王	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.437
44 承応三年二月一日	1654	茶碗	今里 壺ヶ				勝満寺巧円	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.443
45 承応三年八月一日	1654	茶碗	今里染付 十ヶ				藤谷為賢室	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.514
46 承応三年十二月二十五日	1654	皿	今里 十ヶ				鳳林承章	藤井玄三		『隔笈記 第三』 p.583
47 承応三年十二月二十五日	1654	皿	今里焼 廿ヶ				鳳林承章	慈照顕倬		『隔笈記 第三』 p.583
48 承応三年十一月二十八日	1654	皿	今里				(市中)	鳳林承章	購入	『隔笈記 第三』 p.571
49 承応三年十一月二十八日	1654	火入	今里				(市中)	鳳林承章	購入	『隔笈記 第三』 p.571
50 承応四年一月二十三日	1655	茶碗	今里 十ヶ				智忠親王	鳳林承章		『隔笈記 第三』 p.608
51 承応四年二月十四日	1655	茶碗	今里焼 十ヶ				鳳林承章	大徳寺天裕		『隔笈記 第三』 p.617

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
52 承応四年四月十二日	1655	小皿	今里染付	拾ヶ			鳳林承章	賀茂梅藏院		『隔蓑記 第三』 p.635
53 明暦元年七月二十九日	1655	香炉	今焼環入				後光明	鳳林承章	八月二十八日 今里青磁 香炉、見事 之青磁、凡 眼者、無類 之香炉	『隔蓑記 第三』 p.678
54 明暦元年八月一日	1655	茶碗	今里染付	十ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第三』 p.678
55 明暦元年十二月八日	1655	小皿	今里	拾ヶ			鳳林承章	林光院瑞有		『隔蓑記 第三』 p.723
56 明暦元年十二月二十七日	1655	皿	今利	拾丁			藤井市郎兵衛	鳳林承章		『隔蓑記 第三』 p.728
57 明暦元年十二月二十八日	1655	小皿	今里	十拾			鳳林承章	武田信勝		『隔蓑記 第三』 p.729
58 明暦二年一月十六日	1656	茶碗	今里	拾ヶ			智忠親王	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.14
59 明暦二年五月十八日	1656	皿	今里錦手	拾ヶ			大徳寺天祐翁	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.66
60 明暦二年七月二十九日	1656	茶碗	今里染付	拾ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.101
61 明暦二年八月二十三日	1656	茶碗	今里染付	拾ヶ			鳳林承章	北野能碩		『隔蓑記 第四』 p.109
62 明暦二年十二月二十八日	1656	茶碗	今里	十			鳳林承章	藤井玄三		『隔蓑記 第四』 p.163
63 明暦三年一月十六日	1657	茶碗	今里	十ヶ			智忠親王	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.184
64 明暦三年八月一日	1657	茶碗	今里染付 小	拾ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.255
65 明暦三年十一月一日	1657	有蓋鉢	今里染付				筑前前田九左衛門	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.289
66 明暦三年十二月十八日	1657	蓋茶碗	今里染付 大				安養寺龍空	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.310
67 明暦四年一月一日	1658	皿・チョコ	今里染付	拾ヶ			明哲	慶彦		『隔蓑記 第四』 p.322
68 明暦四年一月二日	1658	茶碗	今里染付	拾ヶ			明哲	藤谷為賢室		『隔蓑記 第四』 p.324
69 明暦四年一月十日	1658	茶碗	今里染付	拾ヶ			智忠親王	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 pp.333-334
70 明暦四年一月十二日	1658	茶碗	今里	十ヶ			高辻豊長	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.334
71 明暦四年四月五日	1658	茶碗	今里	十ヶ			鳳林承章	西川瀬兵衛		『隔蓑記 第四』 p.363
72 万治元年七月三十日	1658	薄小皿	今里	拾ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.400
73 万治元年八月十六日	1658	茶碗	今里染付	十ヶ			鳳林承章	坊城俊完		『隔蓑記 第四』 p.409
74 万治元年閏十二月一日	1658	皿	今里染付	拾ヶ			鳳林承章	岩倉具起		『隔蓑記 第四』 p.448
75 万治元年閏十二月二十九日	1658	茶碗	染付	五拾ヶ			鳳林承章	御水尾上皇		『隔蓑記 第四』 p.459
76 万治二年二月八日	1659	皿	今里	四拾ヶ			鳳林承章	北野能碩		『隔蓑記 第四』 p.481
77 万治二年十月二十五日	1659	茶碗	唐津焼	壹ヶ			袖岡宇右衛門	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.570
78 万治二年十一月三十日	1659	茶碗	今里染付				鳳林承章	伊藤由庵	購入	『隔蓑記 第四』 p.580
79 万治二年十二月七日	1659	茶碗	今里染付	拾ヶ			鳳林承章	承需		『隔蓑記 第四』 p.583
80 万治二年十二月二十六日	1659	茶碗	今里染付	五十			鳳林承章	御水尾上皇		『隔蓑記 第四』 p.590
81 万治二年十二月二十八日	1659	小皿	今里焼染付	十			鳳林承章	林光院瑞有		『隔蓑記 第四』 p.592
82 万治三年一月四日	1660	皿	今里	拾枚			藤谷為賢室	吉権、西瀬		『隔蓑記 第四』 p.602
83 万治三年一月十四日	1660	茶碗	今里染付	十			智忠親王	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.612
84 万治三年四月十七日	1660	皿	今里染付	拾ヶ			鳳林承章	南禅寺天授庵玄承		『隔蓑記 第四』 p.649
85 万治三年七月三十日	1660	小皿	今里白	拾枚			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.691
86 万治三年十二月二十七日	1660	茶碗	今里焼染付	五十ヶ			鳳林承章	御水尾上皇	例年の如く とある	『隔蓑記 第四』 p.758
87 万治三年十二月二十八日	1660	茶碗	今里焼	拾ヶ			承集	鳳林承章		『隔蓑記 第四』 p.760
88 万治四年一月三日	1661	茶碗	今里染付	式拾ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.6
89 万治四年一月九日	1661	鉢	今里環入	壹ヶ			勝満寺巧円	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.11
90 万治四年二月十八日	1661	茶碗	今里	拾ヶ			鳳林承章	北野能碩		『隔蓑記 第五』 p.31
91 万治四年三月三日	1661	小壺	肥前今里焼 之錦手山糺 粉入	兩ヶ			北大路能貨	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.37
92 万治四年三月十日	1661	水指	瀬戸物・ 今里焼乎不 分明				承復(遺物)	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.39
93 寛文元年六月一日	1661	茶碗	今里	拾ヶ			鳳林承章	富春春徳宗全		『隔蓑記 第五』 p.77
94 寛文元年六月三日	1661	茶碗	今里染	拾ヶ			鳳林承章	林光院瑞有		『隔蓑記 第五』 p.77
95 寛文元年六月二十三日	1661	小瓶	今里焼之錦手	兩ヶ			鳳林承章	識仁親王		『隔蓑記 第五』 p.85
96 寛文元年十二月十四日	1661	鉢	今里	壹ヶ			鳳林承章	正親町実豊		『隔蓑記 第五』 p.173
97 寛文元年十二月二十七日	1661	茶碗	今里焼之染付	五十			鳳林承章	御水尾院		『隔蓑記 第五』 p.179
98 寛文二年一月一日	1662	香合	今里錦手	壹			明哲	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.186
99 寛文二年一月二十四日	1662	鉢	今里青磁	1			勝満寺巧円	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.205
100 寛文二年一月二十四日	1662	茶碗	今里青磁	1			勝満寺巧円	鳳林承章		『隔蓑記 第五』 p.205
101 寛文二年二月三十日	1662	皿	今里染付	十ヶ			鳳林承章	岡崎宣持		『隔蓑記 第五』 p.218

	年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
102	寛文二年六月七日	1662	鉢	今里焼	二ヶ			後藤藤乗	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.258
103	寛文二年六月二十七日	1662	鉢	今里焼	壹			鳳林承章	高辻少納言		『隔笈記 第五』 p.265
104	寛文二年七月十日	1662	鉢	今里	壹ヶ			鳳林承章	北野渡瀬		『隔笈記 第五』 p.274
105	寛文二年七月十日	1662	蜜壺	今里	壹ヶ			鳳林承章	北野渡瀬		『隔笈記 第五』 p.274
106	寛文二年七月三十日	1662	鉢	今里青	壹ヶ			藤谷為賢室	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.286
107	寛文二年八月一日	1662	茶碗	今里	壹			袖岡宇右衛門	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.287
108	寛文二年十月十日	1662	鉢	今里青磁	壹ヶ			鳳林承章	峰本院民部		『隔笈記 第五』 p.312
109	寛文三年一月一日	1663	灰吹	今里錦木手				明智	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.338
110	寛文三年一月六日	1663	茶碗	今里三嶋手	壹ヶ			尾崎喜右衛門	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.342
111	寛文三年一月二十五日	1663	蓋茶碗	今里染付	壹ヶ			橋本公建	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.351
112	寛文三年二月二日	1663		今里焼染付有蓋	壹			鳳林承章	竹岩求首座		『隔笈記 第五』 p.354
113	寛文三年四月二十一日	1663	鉢	今里染付	壹			鳳林承章	芝山宣豊娘新内典侍		『隔笈記 第五』 p.386
114	寛文三年八月十六日	1663	壺	今里染付				北野能貸	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.442
115	寛文三年九月七日	1663	茶碗	今里錦手	拾ヶ			鳳林承章	蓮台寺中嶋坊		『隔笈記 第五』 p.448
116	寛文三年十月八日	1663	茶碗	今里染付	三十			鳳林承章	一乗院真敬		『隔笈記 第五』 p.462
117	寛文三年十一月十四日	1663	皿	今利染付	拾ヶ			鳳林承章	劫外軒承音		『隔笈記 第五』 p.476
118	寛文三年十二月四日	1663	皿	今利白	拾ヶ			後藤宗也	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.485
119	寛文三年十二月四日	1663	卓皿	今利白	拾ヶ			後藤宗也	鳳林承章		『隔笈記 第五』 p.485
120	寛文三年十二月十六日	1663	茶碗	染付	五十			鳳林承章	御水尾上皇		『隔笈記 第五』 p.493
121	寛文三年十二月二十七日	1663	茶碗	今里染付	五十			鳳林承章	御水尾上皇		『隔笈記 第五』 p.500
122	寛文三年十二月二十八日	1663	小皿	今利焼白	拾			鳳林承章	風早實種		『隔笈記 第五』 p.501
123	寛文四年二月十五日	1664	鉢	今利染付	二ヶ			鳳林承章	伊勢殿御局		『隔笈記 第五』 p.539
124	寛文四年閏五月二十八日	1664	茶碗	今利染付	三十			(市中)	鳳林承章	購入	『隔笈記 第五』 p.590
125	寛文四年閏五月二十九日	1664	茶碗	今利焼染付上々	三十			鳳林承章	常子内親王		『隔笈記 第五』 p.590
126	寛文四年六月二十八日	1664	茶碗	今利染付上	三十			鳳林承章	光子内親王		『隔笈記 第五』 p.599
127	寛文四年十月十五日	1664	土器	肥前	五枚			後西天皇御所競物	鳳林承章	鉢皿	『隔笈記 第五』 p.655
128	寛文四年十一月二十九日	1664	鉢	今利焼染付	二ヶ			鳳林承章	承需		『隔笈記 第五』 p.680
129	寛文四年十二月二十三日	1664	皿	今利焼	拾枚		一両三分	鳳林承章	武田信徳		『隔笈記 第五』 p.690
130	寛文四年十二月二十七日	1664	茶碗	今利焼	五十			鳳林承章	後水尾上皇		『隔笈記 第五』 p.694
131	寛文五年一月二十六日	1665	茶碗	今利	十			鳳林承章	藤江雅良		『隔笈記 第六』 p.26
132	寛文五年二月五日	1665	茶碗	今利染付	二十			鳳林承章	西枝宗二		『隔笈記 第六』 p.31
133	寛文五年二月十二日	1665	茶碗	今利染付	二十			鳳林承章	智積院		『隔笈記 第六』 p.34
134	寛文五年四月九日	1665	鉢	今利	二ヶ			鳳林承章	北野能順		『隔笈記 第六』 p.57
135	寛文五年十二月四日	1665	茶碗		五十		銀拾匁	鳳林承章	伊藤由庵	購入	『隔笈記 第六』 p.115
136	寛文五年十二月四日	1665	茶碗		五十			鳳林承章	後水尾上皇		『隔笈記 第六』 p.115
137	寛文五年十二月七日	1665	チョコ・皿	今利焼	拾ヶ			鳳林承章	富春軒宗全		『隔笈記 第六』 p.116
138	寛文五年十二月二十三日	1665	肴鉢	今利	壹			鳳林承章	武田信徳		『隔笈記 第六』 p.122
139	寛文五年十二月二十六日	1665	茶碗	染付				鳳林承章	後水尾上皇	毎年染付御茶碗	『隔笈記 第六』 p.125
140	寛文六年三月二十三日	1666	茶碗	今利染付	二十			鳳林承章	高辻豊長		『隔笈記 第六』 p.212
141	寛文六年九月二十日	1666	小皿	今利白	二十枚			竹田権右衛門	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.299
142	寛文六年十一月十四日	1666	深鉢	今利焼	壹			鳳林承章	養源軒承需		『隔笈記 第六』 p.323
143	寛文六年十一月十四日	1666	香煎入	錦手				鳳林承章	養源軒承需		『隔笈記 第六』 p.323
144	寛文六年十一月三十日	1666	肴鉢	今里黒薬	壹			鳳林承章	林光院瑞有		『隔笈記 第六』 p.330
145	寛文六年十二月八日	1666	皿	今利白	拾枚			鳳林承章	光源院妙恕		『隔笈記 第六』 p.334
146	寛文六年十二月二十七日	1666	茶碗	今利染付	五十			鳳林承章	後水尾上皇		『隔笈記 第六』 p.344
147	寛文七年一月二十一日	1667	蓋茶碗	今利染付				松波光教	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.370
148	寛文七年六月三十日	1667	鉢	今利	式ヶ			鳳林承章	慶瑞	壹ヶ者二ヶ者之鉢成	『隔笈記 第六』 p.460
149	寛文七年九月二十三日	1667	香合	今利	壹ヶ			相国寺寿恩	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.493
150	寛文七年十一月二十二日	1667	皿	今利染付	拾ヶ			鳳林承章	蓮台寺中嶋坊		『隔笈記 第六』 p.536
151	寛文七年十二月二十六日	1667	茶碗	今利染付・無紋・惣白	五十			鳳林承章	後水尾上皇	例年	『隔笈記 第六』 p.553
152	寛文八年一月二十二日	1668	花入	今利焼青磁	三ヶ			半井瑞雪	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.585
153	寛文八年二月二十三日	1668		今利焼青磁	一			風早実種	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.603
154	寛文八年二月二十七日	1668	鉢	今利焼	二ヶ		銀壹匁半	鳳林承章	浄光寺		『隔笈記 第六』 p.605

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
155 寛文八年三月四日	1668	深鉢	今利	三ヶ			鳳林承章	慈照寺		『隔笈記 第六』 p.608
156 寛文八年三月二十三日	1668	小皿	今利白	拾枚			鳳林承章	北野能碩		『隔笈記 第六』 p.617
157 寛文八年三月二十四日	1668	茶碗	今利染付上	三十顆			鳳林承章	仁和寺御局		『隔笈記 第六』 p.618
158 寛文八年四月二十一日	1668	茶碗	今利白	十ヶ			等陳	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.633
159 寛文八年五月六日	1668	茶碗	今利染付	三十			鳳林承章	近衛基熙		『隔笈記 第六』 p.641
160 寛文八年五月二十三日	1668	鉢	今利染付	二ヶ			鳳林承章	蓮台寺真言坊		『隔笈記 第六』 p.645
161 寛文八年六月二十三日	1668	茶碗	今利染付	十			竹田文甫	鳳林承章		『隔笈記 第六』 p.657
162 延宝六年十一月十日	1678	ちゃわん	大坂高屋やき					森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.98 『東洋陶磁Vol. 5』
163 延宝六年十一月十日	1678	ちゃわん	いと(井戸)手		金十五枚		山内式部之豊	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.99 『東洋陶磁Vol. 5』
164 延宝六年十一月十日	1678	ちゃわん	ミしま手 (三島)				山内式部之豊	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.99 『東洋陶磁Vol. 5』
165 延宝六年十一月廿八日	1678	大鉢		壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.135 『東洋陶磁Vol. 5』 1978
166 延宝六年十一月廿八日	1678	みきすゝ		壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.135 『東洋陶磁Vol. 5』
167 延宝六年十一月廿八日	1678	茶入		壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.135 『東洋陶磁Vol. 5』 1979
168 延宝六年十一月廿八日	1678	茶わん		式つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.135 『東洋陶磁Vol. 6』
169 延宝六年十一月廿八日	1678	なます 皿		五つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.135 『東洋陶磁Vol. 5』 1980
170 延宝六年十一月廿九日	1678	花入	かふら	式つ			養竜(柳)院様	森田久右衛門	但かふら	『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
171 延宝六年十一月廿九日	1678	徳利		壺つ戻ル			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
172 延宝六年十一月廿九日	1678	ちゃわん鉢		壺つ戻ル			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
173 延宝六年十一月廿九日	1678	水さし		壺つ			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
174 延宝六年十一月廿九日	1678	茶入		壺つ			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
175 延宝六年十一月廿九日	1678	ちゃわん		式つ内壺つ 戻ル			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.136 『東洋陶磁Vol. 5』
176 延宝六年十一月廿九日	1678	かうろ		壺つ			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.137 『東洋陶磁Vol. 5』
177 延宝六年十一月廿九日	1678	皿		三つ内壺つ 戻ル			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.137 『東洋陶磁Vol. 5』
178 延宝六年十一月廿九日	1678	ちゃわん	高台取	三つ(以上 9種うち) ×拾五内四 つ戻ル			養竜(柳)院様	森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.137 『東洋陶磁Vol. 5』
179 延宝六年十二月十二日	1678	皿	肥前やき					森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.150 『東洋陶磁Vol. 5』
180 延宝六年十二月十二日	1678	茶わん	肥前やき					森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.150 『東洋陶磁Vol. 5』
181 延宝六年十二月十二日	1678	茶わん	高麗					森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.150 『東洋陶磁Vol. 5』
182 延宝六年十二月十二日	1678	茶わん	からつ焼似せ	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
183 延宝六年十二月十二日	1678	茶わん	井戸似せ	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
184 延宝六年十二月十二日	1678	茶わん	吹墨似せ	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
185 延宝六年十二月十二日	1678	花入	りうこ(立 鼓)	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
186 延宝六年十二月十二日	1678	花入	中かふら成	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
187 延宝六年十二月十二日	1678	花入	とうつか	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
188 延宝六年十二月十二日	1678	水指	きやう(経) 筒成	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
189 延宝六年十二月十二日	1678	水指	丸成肩	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
190 延宝六年十二月十二日	1678	小皿	めんとうふ かく	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
191 延宝六年十二月十二日	1678	小皿	ひらく(開) あん	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
192 延宝六年十二月十二日	1678	手塩皿	丸	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』
193 延宝六年十二月十二日	1678	大皿	ひらく(開) あん	壺つ				森田久右衛門		『森田久右衛門江戸日記』 p.152 『東洋陶磁Vol. 5』

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
194	延宝六年十二月十二日	1678	ちよく	あさか ほ	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.152『東洋陶磁Vol.5』
195	延宝六年十二月十二日	1678	茶わん皿	屋 う成	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.152『東洋陶磁Vol.5』
196	延宝六年十二月十二日	1678	下皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.153『東洋陶磁Vol.5』
197	延宝六年十二月廿日	1678	水指		四つ成色々			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.161『東洋陶磁Vol.5』
198	延宝六年十二月廿日	1678	茶碗		八つ右同断			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.161『東洋陶磁Vol.5』
199	延宝六年十二月廿日	1678	たんけい下皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.161『東洋陶磁Vol.5』
200	延宝六年十二月廿日	1678	なます皿		貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
201	延宝六年十二月廿日	1678	ちゃわん皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
202	延宝六年十二月廿日	1678	ちよく		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
203	延宝六年十二月廿日	1678	手塩皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
204	延宝六年十二月廿日	1678	たんけい油皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
205	延宝六年十二月廿日	1678	花入		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.162『東洋陶磁Vol.5』
206	延宝六年十二月廿一日	1678	水指		四つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
207	延宝六年十二月廿一日	1678	茶碗		八つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
208	延宝六年十二月廿一日	1678	なます皿		貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
209	延宝六年十二月廿一日	1678	ちよく		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
210	延宝六年十二月廿一日	1678	ちゃわん皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
211	延宝六年十二月廿一日	1678	たんけい下皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
212	延宝六年十二月廿一日	1678	たんけいあふら皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
213	延宝六年十二月廿一日	1678	手塩皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.166『東洋陶磁Vol.5』
214	延宝六年十二月廿三日	1678	水指	高台耳付	四つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
215	延宝六年十二月廿三日	1678	ちゃわん	か うたい取	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
216	延宝六年十二月廿三日	1678	なます皿	か うたい取	貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
217	延宝六年十二月廿三日	1678	たんけい下皿	か うたい取	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
218	延宝六年十二月廿三日	1678	ちゃわん	か うたい取	四つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
219	延宝六年十二月廿三日	1678	大さら	か うたい取	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.167『東洋陶磁Vol.5』
220	延宝七年一月十四日	1679	花入		大小貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.176『東洋陶磁Vol.5』
221	延宝七年一月十四日	1679	鯨皿	ゑん有三所いふう	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.176『東洋陶磁Vol.5』
222	延宝七年一月十四日	1679	なます皿	ゑん有三所いふう四角	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.176『東洋陶磁Vol.5』
223	延宝七年一月十四日	1679	皿	三角	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.176『東洋陶磁Vol.5』
224	延宝七年一月十四日	1679	花入	ひしき竹	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
225	延宝七年一月十四日	1679	水さし		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
226	延宝七年一月十四日	1679	ちゃ入		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
227	延宝七年一月十四日	1679	ちゃわん		貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
228	延宝七年一月十四日	1679	鉢		大小貳つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
229	延宝七年一月十四日	1679	すゝ		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
230	延宝七年一月十四日	1679	つぼ	なしもの	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』
231	延宝七年一月十四日	1679	ちゃわん	か うたい取	五つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.177『東洋陶磁Vol.5』

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
232	延宝七年一月廿二日	1679	香炉	肥前焼 はい(貝?)	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.187『東洋陶磁Vol.5』
233	延宝七年一月廿二日	1679	香炉	肥前焼 井筒蓋唐鹿有かし	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.187『東洋陶磁Vol.5』
234	延宝七年一月廿二日	1679	濃茶々碗	肥前焼	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.187『東洋陶磁Vol.5』
235	延宝七年一月廿三日	1679	花入		三つ内壺つ留ル		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.190『東洋陶磁Vol.5』
236	延宝七年一月廿三日	1679	香炉		四つ内式つ留ル		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
237	延宝七年一月廿三日	1679	薄ちゃわん		壺つ		森田久右衛門	但本多備前守様へ参ル		「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
238	延宝七年一月廿三日	1679	濃茶々碗	角	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
239	延宝七年一月廿三日	1679	濃茶々碗	こき(呉器)手	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
240	延宝七年一月廿三日	1679	水指	たんひゃう	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
241	延宝七年一月廿三日	1679	水指	ひしき(ぎ)竹	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
242	延宝七年一月廿三日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
243	延宝七年一月廿三日	1679	茶入	肩付	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
244	延宝七年一月廿三日	1679	香炉蓋	なすひつまみはつけい(八卦)すかし	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
245	延宝七年一月廿三日	1679	香炉蓋	唐鹿水玉すかし	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.191『東洋陶磁Vol.5』
246	延宝七年二月四日	1679	茶入	肩付	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.201『東洋陶磁Vol.5』
247	延宝七年二月四日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.201『東洋陶磁Vol.5』
248	延宝七年二月四日	1679	皿	色々	六つ		森田久右衛門	内壺つ 御本ニ被下候		「森田久右衛門江戸日記」p.201『東洋陶磁Vol.5』
249	延宝七年二月四日	1679	茶碗		貳つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
250	延宝七年二月四日	1679	すゝ		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
251	延宝七年二月四日	1679	水指		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
252	延宝七年二月四日	1679	鉢		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
253	延宝七年二月四日	1679	香炉		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
254	延宝七年二月四日	1679	茶碗	かうたい取	三つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
255	延宝七年二月四日	1679	薄ちゃわん		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.202『東洋陶磁Vol.5』
256	延宝七年二月九日	1679	茶入	肩付	壺つ	諏訪部彦兵衛	森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
257	延宝七年二月九日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
258	延宝七年二月九日	1679	こいちゃわん		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
259	延宝七年二月九日	1679	なます皿	えん有	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
260	延宝七年二月九日	1679	四角なます皿		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
261	延宝七年二月九日	1679	茶碗	高台取	三つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.213『東洋陶磁Vol.5』
262	延宝七年二月廿六日	1679	茶入	撫肩	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.233『東洋陶磁Vol.5』
263	延宝七年二月廿六日	1679	こいちゃわん		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.233『東洋陶磁Vol.5』
264	延宝七年二月廿六日	1679	なます皿	色々	四つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.234『東洋陶磁Vol.5』
265	延宝七年二月廿六日	1679	徳利		壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.234『東洋陶磁Vol.5』
266	延宝七年二月廿六日	1679	茶碗	高台取	三つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.234『東洋陶磁Vol.5』
267	延宝七年三月十五日	1679	皿	ふね成 内かしの絵様有すかし有	壺つ		森田久右衛門			「森田久右衛門江戸日記」p.247『東洋陶磁Vol.5』

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
268	延宝七年三 月十五日	1679	角皿	四方ニすかし有	壺つ			森田久右衛門	角おらんた(だ)もへき(萌黄)葉方すかの下二さし白葉にて	「森田久右衛門江戸日記」p.247『東洋陶磁Vol.5』
269	延宝七年三 月十五日	1679	皿	すはまなり内菊のおりへた(枝)有	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.247『東洋陶磁Vol.5』
270	延宝七年三 月十八日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.250『東洋陶磁Vol.5』
271	延宝七年三 月十八日	1679	茶入	肩付	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.250『東洋陶磁Vol.5』
272	延宝七年三 月十八日	1679	濃茶々碗		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.250『東洋陶磁Vol.5』
273	延宝七年三 月十八日	1679	水こぼし		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.250『東洋陶磁Vol.5』
274	延宝七年三 月十八日	1679	なます皿		式つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.250『東洋陶磁Vol.5』
275	延宝七年三 月十八日	1679	茶碗	高台取	三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
276	延宝七年三 月廿三日	1679	茶入	肩付	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
277	延宝七年三 月廿三日	1679	こいちゃわん		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
278	延宝七年三 月廿三日	1679	なます皿		三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
279	延宝七年三 月廿三日	1679	水さし	丸ク	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
280	延宝七年三 月廿三日	1679	茶碗	高台取	式つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.254『東洋陶磁Vol.5』
281	延宝七年四 月二日	1679	茶入	肩付	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.258『東洋陶磁Vol.5』
282	延宝七年四 月二日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.258『東洋陶磁Vol.5』
283	延宝七年四 月二日	1679	皿	色々	式つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.258『東洋陶磁Vol.5』
284	延宝七年四 月二日	1679	ちゃわん	高台取	三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.258『東洋陶磁Vol.5』
285	延宝七年四月四 日	1679	水こぼし	足付	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260『東洋陶磁Vol.5』
286	延宝七年四 月四日	1679	なます皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260『東洋陶磁Vol.5』
287	延宝七年四 月四日	1679	茶入	色々	三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260『東洋陶磁Vol.5』
288	延宝七年四 月四日	1679	皿	まん在				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260『東洋陶磁Vol.5』
289	延宝七年四 月四日	1679	角皿	めんとり				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260『東洋陶磁Vol.5』
290	延宝七年四 月四日	1679	水こぼし	焼立備前やき丸				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.260-261『東洋陶磁Vol.5』
291	延宝七年四 月四日	1679	水さし	ひやうたん				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
292	延宝七年四 月四日	1679	皿	ふちそり				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
293	延宝七年四 月四日	1679	皿	あさかをなかりかうたい高ク				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
294	延宝七年四 月四日	1679	なます皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
295	延宝七年四 月四日	1679	ちよく	ひやうたんなり	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
296	延宝七年四 月四日	1679	なます皿		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
297	延宝七年四 月四日	1679	ちよく	かうたいさわ置上筋	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.261『東洋陶磁Vol.5』
298	延宝七年四 月四日	1679	茶入	肩付	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』
299	延宝七年四 月四日	1679	茶入	ひやうたん	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』
300	延宝七年四 月九日	1679	茶入	なすひ	壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』
301	延宝七年四 月九日	1679	なます皿	色々	三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』
302	延宝七年四 月九日	1679	こいちゃわん		壺つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』
303	延宝七年四 月九日	1679	茶碗	高台取	三つ			森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.268『東洋陶磁Vol.5』

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
304 延宝七年四月十八日	1679	茶入	茄子	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
305 延宝七年四月十八日	1679	茶入	文林	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
306 延宝七年四月十八日	1679	茶入	なて肩	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
307 延宝七年四月十八日	1679	肩付	金花山作	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
308 延宝七年四月十八日	1679	肩付	□きのほそき	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
309 延宝七年四月十八日	1679	小肩付		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
310 延宝七年四月十八日	1679	茶入	ひやうたん	式つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.272『東洋陶磁Vol. 5』
311 延宝七年四月十八日	1679	茶わん		大小四つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
312 延宝七年四月十八日	1679	水指	皆口	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
313 延宝七年四月十八日	1679	花入	口広	壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
314 延宝七年四月十八日	1679	掛花入		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
315 延宝七年四月十八日	1679	火燈		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
316 延宝七年四月十八日	1679	火燈台		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
317 延宝七年四月十八日	1679	二重かさね火燈台		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
318 延宝七年四月十八日	1679	水こぼし		壺つ				森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」p.273『東洋陶磁Vol. 5』
319 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶碗					松平陸奥守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
320 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶入		二			松平陸奥守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
321 貞享二・三年	1685 ~ 1686	水指		二			松平陸奥守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
322 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶入					大久保加賀守(老中)	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
323 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶碗		五			土屋相模守(所司代)	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
324 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶入		二			土屋相模守(所司代)	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
325 貞享二・三年	1685 ~ 1686	皿		五十二			土屋相模守(所司代)	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
326 貞享二・三年	1685 ~ 1686	茶入					牧野備後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
327 貞享四年カ	1687	花入	青地 大	八本			大石軍平	酒井田柿右衛門	老中様御用	『有田町史 陶業 編 I』p.500
328 貞享四年カ	1687	さしみ皿	染付				大石軍平	酒井田柿右衛門	老中様御用	『有田町史 陶業 編 II』p.500
329 貞享四年カ	1687	肴鉢		壺ツ			江口要左衛門	酒井田柿右衛門	御用カ	『有田町史 陶業 編 I』p.500
330 貞享五年	1688	指味皿	染付	廿六ツ 二 十二相納			執行三左衛門・高木次郎兵衛	酒井田柿右衛門	御用カ	『有田町史 陶業 編 I』p.499
331 貞享五年	1688	鱈皿	染付	三十三納			執行三左衛門・高木次郎兵衛	酒井田柿右衛門	御用カ	『有田町史 陶業 編 I』p.499
332 貞享五年二月十七日	1688	香炉	錦手うす口 反り	一つ 四ツ 相渡			執行三左衛門・高木次郎兵衛	酒井田柿右衛門	御用カ	『有田町史 陶業 編 I』p.499
333 貞享五年	1688	指味数(皿カ)	青地 桜、 成之 (ママ)	三拾二 三 十三相渡				酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業 編 I』p.499
334 元禄二年カ三月廿一日	1689	濃茶之碗		百ツ			伊田文右衛門	酒井田柿右衛門	御用注文	『有田町史 陶業 編 I』p.500
335 元禄二年カ三月廿一日	1689	薄茶之碗		百五拾			伊田文右衛門	酒井田柿右衛門	御用注文	『有田町史 陶業 編 I』p.500
336 元禄二～三年	1689 ~ 1690	茶碗		十			松平隠岐守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15
337 元禄二～三年	1689 ~ 1690	鱈皿		七十			戸田山城守(寺社奉行)	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol. 5』p.15

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
338 元禄四年三月	1691	蘭鉢	青磁もつかなり	式ツ			甲府様	酒井田柿右衛門	口二尺余、千丹置上ケ御用	『有田町史 陶業編 I』p.497
339 元禄四年三月	1691	蘭鉢	青磁瓜なり	式ツ			甲府様	酒井田柿右衛門	口二尺余、無地 御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
340 元禄四年五月廿二日	1691	卓香炉	青磁楽太鼓小	三口			松平伊予守	酒井田柿右衛門	高サ四寸より五寸余迄、ふたつまみ共御用	『有田町史 陶業編 I』p.497
341 元禄四年六月廿日	1691	香炉 蓋	青磁				於保弥五右衛門・大木八郎右衛門	酒井田柿右衛門	雲形すかし、蓋玉の下をくりぬき、玉花輪連、地の所透し、玉より獅子の口までくりぬき、煙出 御用力	『有田町史 陶業編 I』p.497
342 元禄四年	1691	鱈皿	染付 下皿 廿		壹束ニ付式拾匁		御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
343 元禄四年	1691	小皿	染付 下皿 廿		壹束ニ付拾式匁		御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
344 元禄四年	1691	水和茶碗	染付 下皿 廿		銀拾四匁		御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
345 元禄四年	1691	猪口	染付 下皿 廿		一束ニ付七匁		御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
346 元禄四年	1691	菓子鉢	錦手	五ツ	拾五匁宛	銀七拾五匁	御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
347 元禄四年	1691	嗽		式ツ	拾匁宛	銀式拾匁	御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
348 元禄四年	1691	中茶碗		拾ツ	八匁宛	銀八拾匁	御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
349 元禄四年	1691	けさうとき		四ツ	八匁宛	銀三拾式匁	御内様	酒井田柿右衛門	御用化粧とき	『有田町史 陶業編 I』p.495
350 元禄四年	1691	油すまし		四ツ	七匁宛	銀廿八匁	御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
351 元禄四年	1691	油桶			拾匁宛	銀三拾匁	御内様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.495
352 元禄四年	1691	けさう水入		式ツ	八匁宛	銀十六匁	御内様 御姫様	酒井田柿右衛門	御 用	『有田町史 陶業編 I』p.496
353 元禄四年	1691	香炉	青磁蓋無シ手本					酒井田柿右衛門	手本香炉の蓋を青磁で頭蓋に焼結を作る。この香炉と同じものを新たに2つ焼立、余慶共に2つ御用	『有田町史 陶業編 I』p.496
354 元禄四年	1691	茶碗	染付 舞龍の絵 四ッ入	拾人前				酒井田柿右衛門	おや碗、汁碗中互二面四ッわん御用	『有田町史 陶業編 I』p.496
355 元禄四年	1691	平皿	染付 舞龍の絵	拾人前式通り				酒井田柿右衛門	蓋共ニ御用	『有田町史 陶業編 I』p.496
356 元禄四年	1691	坪皿	染付 舞龍の絵	拾人前式通り				酒井田柿右衛門	蓋共ニ御用	『有田町史 陶業編 I』p.496
357 元禄四年	1691	蓋	青磁色身つれ候様ニ焼次	壹ツ			松平土佐守	酒井田柿右衛門	外ニ余慶身蓋御用注文	『有田町史 陶業編 I』p.496
358 元禄四年	1691	香炉	鷺	余慶共ニ三ツ			松平民部大輔	酒井田柿右衛門	蓋の葉の所、青磁、鷺ハ白焼ニシテ成程念を入焼立御用	『有田町史 陶業編 I』p.496
359 元禄四年	1691	卓香炉	青磁 大	壹ツ			執行新助	酒井田柿右衛門	高七、八寸斗、ふたつまみ共、長密尺計、獅子ならば恰合次第 御用力	『有田町史 陶業編 I』p.497
360 元禄四年	1691	卓香炉	青磁 中	壹ツ			執行新助	酒井田柿右衛門	高五寸より六寸余迄、ふたつまみ共、長サ獅子ならば六、七寸計 御用力	『有田町史 陶業編 I』p.497
361 元禄四年以降	1691	香炉		一			養柳院（豊昌姉）	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
362 元禄四年以降	1691	香合		一			養柳院（豊昌姉）	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
363 元禄四年以降	1691	香合		二			山内 豊房（豊昌養嗣子）	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
364 元禄四年以降	1691	水指		一			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
365 元禄四年以降	1691	風炉		二			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
366 元禄四年以降	1691	風炉前土器		二十			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
367 元禄四年以降	1691	茶碗		二			山崎勘解由	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
368 元禄四年以降	1691	香合					山崎勘解由	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
369 元禄四年以降	1691	膳皿		五十			松平安芸守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
370 元禄四年以降	1691	香炉		二			神尾市左衛門	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
371 元禄四年以降	1691	皿	せきれい	二十			大久保加賀守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
372 元禄四年以降	1691	皿	せきれい	二十			戸田山城守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
373 元禄四年以降	1691	皿	せきれい	二十			土屋相模守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
374 元禄四年以降	1691	茶碗		二			神尾市左衛門	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
375 元禄四年以降	1691	茶入		一			神尾市左衛門	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
376 元禄四年以降	1691	花入	手桶	一			神尾市左衛門	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
377 元禄四年以降	1691	花入	手桶	一			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
378 元禄四年以降	1691	茶入		一			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
379 元禄四年以降	1691	風炉		一			安部豊後守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.15
380 元禄四年以降	1691	皿	せきれい	二十			細川越中守	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.16
381 元禄四年以降	1691	香炉	獅子	一			桑山可斎	森田久右衛門		「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』p.16
382 元禄四年カ	1691	釘かくし	にしき手、縁金入	九ツ			大石軍平	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
383 元禄四年カ	1691	天井釘かくし	金入	七ツ			大石軍平	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
384 元禄四年カ	1691	釘かくし	にしき手縁金入	八ツ			大石軍平	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
385 元禄四年カ	1691	釘かくし	にしき手、ほり上ケ金入	九ツ			大石軍平	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
386 元禄十一年カ	1698	花生	青地 大	壱本			大久保加賀守	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
387 元禄十一年カ	1698	香炉	染付一重口松むし・すず虫を、襷之内に書入	式ツ			鳥屋源六	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.498
388 元禄十五年カ	1702	花皿	なら葉	四ツ				酒井田柿右衛門	すやき、御上覧	『有田町史 陶業編 I』p.498
389 元禄十五年カ	1702	花皿	竹	三ツ				酒井田柿右衛門	すやき、御上覧	『有田町史 陶業編 I』p.498
390 元禄十五年カ	1702	花皿	式つ鶴	壱ツ				酒井田柿右衛門	すやき、御上覧	『有田町史 陶業編 I』p.498
391 元禄十五年カ	1702	花皿	蓮の葉	三ツ				酒井田柿右衛門	すやき、御上覧	『有田町史 陶業編 I』p.498
392 元禄十五年カ	1702	花皿	ぐり手	式ツ				酒井田柿右衛門	すやき、御上覧	『有田町史 陶業編 I』p.498
393 元禄十五年カ	1702	花皿	ならは	四ツ				酒井田柿右衛門	そんし物	『有田町史 陶業編 I』p.493
394 元禄十五年カ	1702	花皿	竹	壱ツ				酒井田柿右衛門	そんし物	『有田町史 陶業編 I』p.498
395 元禄十五年カ	1702	卓香炉	式ツ獅子	式ツ				酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.499
396 元禄十五年カ	1702	卓香炉	壱ツ獅子	四ツ				酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.499
397 元禄十五年カ	1702	花入	三段重	二ツ				酒井田柿右衛門	地形カ	『有田町史 陶業編 I』p.499
398 元禄十五年カ	1702	水さし		壱ツ				酒井田柿右衛門	地形	『有田町史 陶業編 I』p.499
399 元禄十五年カ	1702	手水鉢	樽	壱ツ				酒井田柿右衛門	地形	『有田町史 陶業編 I』p.499
400 宝永六年二月五日	1709	ぎぼうし	るり金入	式十ツ			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
401 宝永六年二月五日	1709	釘かくし	染付金入まき龍	十ツ			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
402 宝永六年二月五日	1709	天井釘かくし	染付金入	七ツ			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
403 宝永六年二月五日	1709	志ととめ	染付	八ツ			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
404 宝永六年二月五日	1709	花いけ	染付	壺本			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
405 宝永六年二月五日	1709	花生	こす手	壺本			若殿様	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
406 宝永六年五月晦日カ	1709	鱈皿	染付	廿二				酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
407 宝永六年五月晦日カ	1709	茶碗	染付水物	廿二				酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
408 宝永六年カ	1709	ぎほうし	るり金入	式十五ツ				酒井田柿右衛門	宮様御紋付ニシテ菊御紋備付御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
409 宝永六年カ	1709	釘かくし	染付金入	十				酒井田柿右衛門	宮様御紋付ニシテ菊御紋備付御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
410 宝永六年カ	1709	釘かくし	染付ほ里上ケ金入	十一ツ				酒井田柿右衛門	宮様御紋付ニシテ菊御紋備付御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
411 宝永六年カ	1709	しととめ	染付	十式ツ				酒井田柿右衛門	宮様御紋付ニシテ菊御紋備付御用	『有田町史 陶業編 I』p.493
412 正徳二年四月十一日	1712	石台鉢	角白焼	壺ツ			北島十郎右衛門	酒井田柿右衛門	御公儀様御用(詳細あり)	『有田町史 陶業編 I』p.494
413 正徳二年四月十一日	1712	石台鉢	青磁 瓜成り	壺ツ			北島十郎右衛門	酒井田柿右衛門	胴之廻り菊唐草之ほり上ケ 御公儀様御用	『有田町史 陶業編 I』p.494
414 正徳二年四月十一日	1712	石台鉢	丹しき手太鼓	壺ツ			北島十郎右衛門	酒井田柿右衛門	御公儀様御用	『有田町史 陶業編 I』p.494
415 正徳二年	1712	大花生	染付唐子ノくわん	三ツ			高木次郎兵衛	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.494
416 正徳二年	1712	大花生	大白 くわん有り				高木次郎兵衛	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.494
417 正徳二年	1712	香合	柿	壺ツ				酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.494
418 正徳五年	1715	大皿	今利染附縁橋	九十						『「古九谷」研究批判』p.104
419 正徳五年	1715	大皿	今利太白地紋椿	三十六						『「古九谷」研究批判』p.104
420 正徳五年	1715	大皿	今利太白縁地紋	十九						『「古九谷」研究批判』p.104
421 正徳五年	1715	大皿	今利錦手染附雲形・ざくろ	十						『「古九谷」研究批判』p.104
422 正徳五年	1715	大皿	今利錦手山水雲形	十 内一つひびき						『「古九谷」研究批判』p.104
423 正徳五年	1715	大皿	今利太白	十						『「古九谷」研究批判』p.104
424 正徳五年	1715	大皿	今利染附千鳥	十						『「古九谷」研究批判』p.105
425 正徳五年	1715	大皿	今利染附岩組山水	十						『「古九谷」研究批判』p.105
426 正徳五年	1715	皿	今利錦手菊形絵桜に蝶	十九						『「古九谷」研究批判』p.105
427 正徳五年	1715	皿	今利錦手口紅鳳凰・菊	十						『「古九谷」研究批判』p.105
428 正徳五年	1715	皿	今利錦手雲形唐人	十						『「古九谷」研究批判』p.105
429 正徳五年	1715	皿	今利染附口紅いてう	十						『「古九谷」研究批判』p.105
430 正徳五年	1715	皿	今利口紅絵桜・蝶	十						『「古九谷」研究批判』p.105
431 正徳五年	1715	皿	今利口紅染附鳥	十						『「古九谷」研究批判』p.105
432 正徳五年	1715	皿	今利口紅染附牡丹唐草	十						『「古九谷」研究批判』p.105
433 正徳五年	1715	皿	今利口紅染附釣人	十						『「古九谷」研究批判』p.105
434 正徳五年	1715	皿	今利錦手いが栗	九つ						『「古九谷」研究批判』p.105
435 正徳五年	1715	皿	今利錦手牡丹に鶯・緑菊唐草	八つ						『「古九谷」研究批判』p.105
436 正徳五年	1715	小皿	今利口紅染附霜降	五つ						『「古九谷」研究批判』p.105
437 正徳五年	1715	ちよく	今利太白くわんにう手桔梗形	四十五						『「古九谷」研究批判』p.105
438 正徳五年	1715	ちよく	今利染附蒲萄	十九						『「古九谷」研究批判』p.105

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
439 正徳五年	1715	ちよく	今利槿形腰 染附	十						『「古九谷」研究批判』p.105
440 正徳五年	1715	小ちよく	今利槿形腰 染附	九つ						『「古九谷」研究批判』p.105
441 正徳五年	1715	ちよく	今利錦手杜 若に蝶	六つ						『「古九谷」研究批判』p.105
442 正徳五年	1715	ちよく	今利錦手長春	四つ						『「古九谷」研究批判』p.105
443 正徳五年	1715	ちよく	南京八角錦手	一つ						『「古九谷」研究批判』p.105
444 正徳五年	1715	ちよく	今利染附文字	一つ						『「古九谷」研究批判』p.105
445 正徳五年	1715	大鉢	今利錦手山 水帆懸船	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
446 正徳五年	1715	大鉢	今利錦手松・ 梅・船・人	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
447 正徳五年	1715	中鉢	今利錦手松・ 竹・梅・縁響	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
448 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手襷 に鳥	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
449 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手襷 に鳥形替	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
450 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手松 屋形、少響	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
451 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手雲 に蝶	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
452 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手獅 子に牡丹	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
453 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手須 崎雲形	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
454 正徳五年	1715	小鉢	今利錦手菊 に蝶	一つ						『「古九谷」研究批判』p.106
455 正徳五年	1715	雑皿	太白染附色々	三百八十二						『「古九谷」研究批判』p.106
456 宝暦十二年八月廿五日	1762	茶碗	志戸呂焼	三					御上座用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.48
457 明和二年九月八日	1765	茶碗蓋	万古焼	一箱			徳川家治	鍋島重茂	公より御土産	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.114
458 明和二年九月八日	1765	御盃		三ツ組一箱			徳川家治	鍋島重茂	公より御土産	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.114
459 明和二年九月八日	1765	茶出	京焼	一箱			徳川家治	鍋島宗教	公より御土産	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.114
460 明和二年九月八日	1765	茶出	京焼	一箱			徳川家治	鍋島宗教	公より御土産	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.114
461 明和六年	1769	茶碗		三千五百程					茶碗薬=斤目 三合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
462 明和六年	1769	目茶碗		千四百程					茶碗薬=斤目 四合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
463 明和六年	1769	皿	上	五百七拾程					茶碗薬=斤目 老斤程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
464 明和六年	1769	皿	下	四百三拾程					茶碗薬=斤目 式合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
465 明和六年	1769	奈良茶		弐百程					茶碗薬=斤目 老斤程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
466 明和六年	1769	竿寒		百程					茶碗薬=斤目 六合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
467 明和六年	1769	蓋物		八拾程					茶碗薬=斤目 式合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
468 明和六年	1769	猪口		百五拾程					茶碗薬=斤目 四合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
469 明和六年	1769	肴鉢		三拾枚程					茶碗薬=斤目 三合程	『生産遺跡基本調査報告書 II』p.19
470 明和七年一月四日	1770	蓋置	伊万里焼				鍋島重茂	高傳寺三御九	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.155
471 明和七年十一月	1770	鉢		二			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
472 明和七年十一月	1770	大皿		二十			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
473 明和七年十一月	1770	皿		二十			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
474 明和七年十一月	1770	小皿		二十			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
475 明和七年十一月	1770	茶碗皿・猪口		此内二十			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
476 明和七年十二月	1770	御上器		二箱			鍋島治茂	徳川家治	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.182
477 明和七年十一月	1770	鉢		二			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
478 明和七年十一月	1770	大皿		二十			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
479 明和七年十一月	1770	皿		二十			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
480 明和七年十一月	1770	小皿		二十			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
481 明和七年十一月	1770	茶碗皿・猪口		此内二十			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
482 明和七年十二月	1770	御上器		二箱			鍋島治茂	徳川家基	月次献上物	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.183
483 明和八年四月七日	1771	花生		一			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
484 明和八年四月七日	1771	卓下花生		二			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
485	明和八年四月七日	1771	守香炉	二			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
486	明和八年四月七日	1771	茶出	二			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
487	明和八年四月七日	1771	柱から入	二			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
488	明和八年四月七日	1771	香合	一			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
489	明和八年四月七日	1771	水入	一			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
490	明和八年四月七日	1771	文鎮	一			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
491	明和八年四月七日	1771	根付	一			鍋島治茂	夏目和泉守	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
492	明和八年四月七日	1771	花水指	二			鍋島治茂	高木作右衛門	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
493	明和八年四月七日	1771	水罎	一			鍋島治茂	高木作右衛門	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
494	明和八年四月七日	1771	名酒猪口	一			鍋島治茂	高木作右衛門	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
495	明和八年四月七日	1771	文鎮	二			鍋島治茂	後藤惣左衛門	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
496	明和八年四月七日	1771	水入	一			鍋島治茂	後藤惣左衛門	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
497	明和八年四月七日	1771	掛花入	一			鍋島治茂	高嶋八郎兵衛	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
498	明和八年四月七日	1771	名酒瓶	一			鍋島治茂	高嶋八郎兵衛	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
499	明和八年四月七日	1771	煎茶碗	三			鍋島治茂	高嶋八郎兵衛	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
500	明和八年四月七日	1771	香合	一			鍋島治茂	高嶋八郎兵衛	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.250
501	明和八年七月二日	1771	茶瓶	二			鍋島治茂	阿蘭陀船頭	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
502	明和八年七月二日	1771	煎茶々碗	十			鍋島治茂	阿蘭陀船頭	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
503	明和八年七月二日	1771	茶瓶	二			鍋島治茂	阿蘭陀人	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
504	明和八年七月二日	1771	煎茶々碗	十			鍋島治茂	阿蘭陀人	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
505	明和八年七月二日	1771	名酒瓶	三			鍋島治茂	唐人三人	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
506	明和八年七月二日	1771	名酒猪口	十			鍋島治茂	唐人三人	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
507	明和八年七月二日	1771	奈良茶碗	十			鍋島治茂	唐人三人	御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.252
508	明和九年三月六日	1772	花生	端反	壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.327
509	明和九年三月六日	1772	卓下花生	青磁	壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.327
510	明和九年三月六日	1772	香炉	菊形空柱	壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.327
511	明和九年三月六日	1772	香炉	青磁 牛	壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.327
512	明和九年三月六日	1772	茶出		壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
513	明和九年三月六日	1772	花生	端反赤絵入浮口	壺ッ		鍋島治茂	円諦院	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
514	明和九年三月六日	1772	香炉	菊形空柱	壺ッ		鍋島治茂	円諦院	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
515	明和九年三月六日	1772	香炉	青磁 牛	壺ッ		鍋島治茂	円諦院	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
516	明和九年三月六日	1772	香合	赤絵入	壺ッ		鍋島治茂	円諦院	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
517	明和九年三月六日	1772	茶出		壺ッ		鍋島治茂	円諦院	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
518	明和九年三月六日	1772	香合		壺ッ		鍋島治茂	溜池御前	江戸屋敷頼続、御用	『佐賀県近世史料 第一編五巻』p.328
519	安永三年七月	1774	鉢紙形	二			献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
520	安永三年七月	1774	丸皿紙形	二			献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
521	安永三年七月	1774	角皿紙形	二			献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
522	安永三年七月	1774	長手皿紙形	三			献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
523	安永三年七月	1774	皿紙形	木瓜形	一		献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
524	安永三年七月	1774	皿紙形	船形	一		献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
525	安永三年七月	1774	猪口紙形	一			献上・水野出羽守	江副九太夫		『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.78
526	安永三年九月八日	1774	なら茶			拾匁	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
527	安永三年九月八日	1774	なら茶	中		八匁五分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
528	安永三年九月八日	1774	なら茶	小		七匁八分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
529	安永三年九月八日	1774	茶碗	中		五匁五分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
530	安永三年九月八日	1774		小中		四匁九分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
531	安永三年九月八日	1774	小服			六匁八分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
532	安永三年九月八日	1774	手引皿			十二匁	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
533 安永三年九月八日	1774	輪皿				十老匁	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
534 安永三年九月八日	1774	中皿				五匁八分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
535 安永三年九月八日	1774	小皿				四匁	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
536 安永三年九月八日	1774	甲鉢				五匁五分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
537 安永三年九月八日	1774	甲鉢	中			四匁	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
538 安永三年九月八日	1774		八寸			三匁八分	近江屋源七	前川善三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.501
539 安永三年十二月二十二日	1774	肴鉢	梅絵 大	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
540 安永三年十二月二十二日	1774	肴鉢	牡丹絵 中	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
541 安永三年十二月二十二日	1774	角皿	菊形 大	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
542 安永三年十二月二十二日	1774	角皿	山水絵 中	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
543 安永三年十二月二十二日	1774	長皿	山水絵	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
544 安永三年十二月二十二日	1774	長皿	遠山霞絵	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
545 安永三年十二月二十二日	1774	長皿	折桜絵 小	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
546 安永三年十二月二十二日	1774	皿	金魚絵船形	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
547 安永三年十二月二十二日	1774	丸皿	萩絵 中	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
548 安永三年十二月二十二日	1774	皿	葡萄絵菊	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
549 安永三年十二月二十二日	1774	皿	葛絵木瓜形	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
550 安永三年十二月二十二日	1774	猪口	松千鳥絵	一			献上・水野出羽守	江副九太夫	將軍好みの12通り注文	『佐賀県近世史料 第一編六巻』p.80
551 天明二年	1782	硯屏					鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
552 天明二年	1782	卓下花生					鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
553 天明二年	1782	朱肉入		一			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
554 天明二年	1782	水指		一			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
555 天明二年	1782	ふた置		一			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
556 天明二年	1782	名酒瓶		一			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
557 天明二年	1782	猪口		十			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
558 天明二年	1782	結メ		十四			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.65
559 天明二年	1782	煎茶わん		十			鍋島治茂	久世丹後守殿	御用	『諸御手数録 九』p.66
560 天明四年	1784		京焼						「唐物座商売記」	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.297
561 天明五年九月六日	1785	卓香炉		一			鍋島治茂	鍋島甲斐守(連池)・鍋島和泉守(鹿島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.423
562 天明五年九月六日	1785	花生		一			鍋島治茂	鍋島甲斐守(連池)・鍋島和泉守(鹿島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.423
563 天明五年九月六日	1785	文鎮		三ずつ			鍋島治茂	鍋島甲斐守(連池)・鍋島和泉守(鹿島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.423
564 天明六年二月二十四日	1786	花生		壺ツ			鍋島治茂	細川能登守(肥後熊本新田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
565 天明六年二月二十四日	1786	卓香炉		一			鍋島治茂	細川能登守(肥後熊本新田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
566 天明六年二月二十四日	1786	香炉	空柱	一			鍋島治茂	細川能登守(肥後熊本新田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
567 天明六年二月二十四日	1786	文鎮		二			鍋島治茂	細川能登守(肥後熊本新田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
568 天明六年二月二十四日	1786	花生		一			鍋島治茂	京極備後守(丹後峯山)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
569 天明六年二月二十四日	1786	懸花生		一			鍋島治茂	京極備後守(丹後峯山)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
570 天明六年二月二十四日	1786	濃茶碗		五			鍋島治茂	京極備後守(丹後峯山)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462
571 天明六年二月二十四日	1786	名酒猪口		六			鍋島治茂	京極備後守(丹後峯山)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.462

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
572	天明六年二月二十四日	1786	花生	一			鍋島治茂	松浦老岐守 (膳平戸)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
573	天明六年二月二十四日	1786	懸花生	一			鍋島治茂	松浦老岐守 (膳平戸)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
574	天明六年二月二十四日	1786	文鎮	三			鍋島治茂	松浦老岐守 (膳平戸)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
575	天明六年二月二十四日	1786	根付	一			鍋島治茂	松浦老岐守 (膳平戸)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
576	天明六年二月二十四日	1786	懸花生	一			鍋島治茂	片桐石見守 (和小泉)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
577	天明六年二月二十四日	1786	煎茶碗	五			鍋島治茂	片桐石見守 (和小泉)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
578	天明六年二月二十四日	1786	文鎮	一			鍋島治茂	片桐石見守 (和小泉)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
579	天明六年二月二十四日	1786	香合	一			鍋島治茂	五嶋近江守 (膳福江)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
580	天明六年二月二十四日	1786	文鎮	二			鍋島治茂	五嶋近江守 (膳福江)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
581	天明六年二月二十四日	1786	朱肉入	一			鍋島治茂	五嶋近江守 (膳福江)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
582	天明六年二月二十四日	1786	濃茶碗	五			鍋島治茂	五嶋近江守 (膳福江)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
583	天明六年二月二十四日	1786	根付	一			鍋島治茂	五嶋近江守 (肥前福江)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
584	天明六年二月二十四日	1786	花生	一			鍋島治茂	岡部美濃守 (和泉岸和田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
585	天明六年二月二十四日	1786	硯屏	一			鍋島治茂	岡部美濃守 (和泉岸和田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
586	天明六年二月二十四日	1786	文鎮	一			鍋島治茂	岡部美濃守 (和泉岸和田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
587	天明六年二月二十四日	1786	香合	一			鍋島治茂	岡部美濃守 (和泉岸和田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
588	天明六年二月二十四日	1786	根付	一			鍋島治茂	岡部美濃守 (和泉岸和田)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
589	天明六年二月二十四日	1786	花生	一			鍋島治茂	細川和泉守 (殿宇土)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
590	天明六年二月二十四日	1786	硯屏	一			鍋島治茂	細川和泉守 (肥後宇土)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
591	天明六年二月二十四日	1786	文鎮	三			鍋島治茂	細川和泉守 (殿宇土)	御用	『佐賀県近世史料 第一編七巻』p.463
592	天明七年十一月十三日	1787	煎茶碗	十			鍋島治茂	細川越中守・ 細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.142
593	天明七年十一月十三日	1787	井鉢	二			鍋島治茂	立花丹後守 (勸徳山)	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.142
594	天明八年二月十七日	1788	茶出	二			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.164
595	天明八年二月十七日	1788	井鉢	三			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.164
596	天明八年二月十七日	1788	文鎮	一			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.164
597	天明八年二月十七日	1788	筆立	一			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.164
598	天明八年二月十七日	1788	香炉	空炷	一		鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
599	天明八年二月十七日	1788	間香炉	一			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
600	天明八年二月十七日	1788	水差	一			鍋島治茂	毛利石見守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
601	天明八年二月十七日	1788	卓下花生	一			鍋島治茂	伊東播磨守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
602	天明八年二月十七日	1788	間香炉	一			鍋島治茂	伊東播磨守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
603	天明八年二月十七日	1788	多葉粉道具	一組			鍋島治茂	伊東播磨守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
604	天明八年二月十七日	1788	茶出し	一			鍋島治茂	伊東播磨守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
605	天明八年二月十七日	1788	水差	中	一		鍋島治茂	片桐主膳正	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
606	天明八年二月十七日	1788	文鎮	一			鍋島治茂	片桐主膳正	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
607	天明八年二月十七日	1788	多葉粉道具	一組			鍋島治茂	片桐主膳正	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
608	天明八年二月十七日	1788	名酒瓶	一			鍋島治茂	片桐主膳正	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
609	天明八年二月十七日	1788	香炉	一			鍋島治茂	片桐主膳正	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
610	天明八年二月十七日	1788	水罐	一			鍋島治茂	岡部美濃守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
611	天明八年二月十七日	1788	花水差	一			鍋島治茂	岡部美濃守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
612	天明八年二月十七日	1788	硯屏	一			鍋島治茂	岡部美濃守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
613	天明八年二月十七日	1788	濃茶碗	二			鍋島治茂	岡部美濃守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
614	天明八年二月十七日	1788	煎茶碗	三			鍋島治茂	五嶋近江守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
615	天明八年二月十七日	1788	間香炉	一			鍋島治茂	五嶋近江守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
616	天明八年二月十七日	1788	名酒瓶	一			鍋島治茂	五嶋近江守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
617	天明八年二月十七日	1788	筆立	一			鍋島治茂	小笠原佐渡守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
618	天明八年二月十七日	1788	水罐	一			鍋島治茂	小笠原佐渡守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
619	天明八年二月十七日	1788	井鉢	一			鍋島治茂	小笠原佐渡守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
620	天明八年二月十七日	1788	花水差	一			鍋島治茂	小笠原佐渡守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
621	天明八年二月十七日	1788	茶出	一			鍋島治茂	小笠原佐渡守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.165
622	天明八年二月十七日	1788	水差	一			鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
623	天明八年二月十七日	1788	筆立	二			鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
624	天明八年二月十七日	1788	文鎮	三			鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
625	天明八年二月十七日	1788	硯屏	一			鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
626	天明八年二月十七日	1788	卓下花生	一			鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
627	天明八年二月十七日	1788	水差	中	一		鍋島治茂	細川能登守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
628	天明八年二月十七日	1788	掛花生	一			鍋島治茂	佐竹老岐守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
629	天明八年二月十七日	1788	香炉	一			鍋島治茂	佐竹老岐守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
630	天明八年二月十七日	1788	薄茶碗	三			鍋島治茂	佐竹老岐守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
631	天明八年二月十七日	1788	名酒瓶	二			鍋島治茂	丹羽長門守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
632	天明八年二月十七日	1788	空柱	一			鍋島治茂	丹羽長門守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
633	天明八年二月十七日	1788	掛花生	一			鍋島治茂	丹羽長門守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
634	天明八年二月十七日	1788	井鉢	一			鍋島治茂	丹羽長門守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
635	天明八年二月十七日	1788	茶出	一			鍋島治茂	丹羽長門守	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
636	天明八年二月十七日	1788	香炉	一			鍋島治茂	加賀守 (小城鍋島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
637	天明八年二月十七日	1788	井鉢	二			鍋島治茂	加賀守 (小城鍋島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
638	天明八年二月十七日	1788	茶出	一			鍋島治茂	加賀守 (小城鍋島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
639	天明八年二月十七日	1788	文鎮	一			鍋島治茂	加賀守 (小城鍋島)	御用	『佐賀県近世史料 第一編八巻』p.166
640	寛政元年十月	1789	お茶ひん	グステ菊絵 模様染付	五ツ		御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.505
641	寛政元年十月	1789	お茶ひん	グステ手唐阿 をい染付	五ツ		御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.505
642	寛政元年十月	1789	お茶ひん	南京手菊絵 模様染付	五ツ		御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.505
643	寛政元年十月	1789	お茶ひん	南京手唐阿 をい染付	五ツ		御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.505
644	寛政元年十月	1789	濃茶之碗	式拾ツ内 巻ツ不足	ハ匁替巻ツ ニ付	正銀百五拾 式匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
645	寛政元年十月	1789	薄茶之碗	式拾ツ	四匁替巻ツ ニ付	正銀八拾目	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
646	寛政元年十月	1789	徳利	スマシ形り物 様若松青磁 (絵カ)ニシテ 舞鶴貴也密ツ 付振 五升入	巻ツ	六匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
647	寛政元年十月	1789	徳利	杉形り秋之 草絵染付 三升入	巻ツ	四匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
648	寛政元年十月	1789	徳利	杉形り秋之 草絵染付 式升入	巻ツ	三匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
649	寛政元年十月	1789	徳利	杉形り秋之 草絵染付 巻升入	巻ツ	二匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.506
650	寛政元年十月	1789	徳利	スマシ形り 絵様秋之草 絵染付 巻 升入	巻ツ	式匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
651	寛政元年十月	1789		染付模様見 合 巻升入 スマシ	巻ツ	式匁五分替 正銀式匁五分	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
652	寛政元年十月	1789	御酒ひん	模様若松、前 ニ御酒と印シ 五合入	式ツ	正銀巻匁 替 正銀匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
653	寛政元年十月	1789		模様見合 式合半入ス マシ	巻ツ	正銀巻匁 替 正銀巻匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
654	寛政元年十月	1789		模様見合 三合入スマシ	巻ツ	正銀巻匁 替 正銀巻匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
655	寛政元年十月	1789	懸物軸	ごすて染付 模様見合	三幅分 此内巻幅分 小形	巻幅 正銀七 匁五分替 正銀式拾 匁五分	御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507
656	寛政元年十月	1789	懸物軸	南京手染付 模様見合	三幅分此内 巻幅分小形	巻幅正銀式 匁五分替 正銀六匁六分	御前御用	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.507

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
657 寛政元年十月	1789	德利	三升入 裏表日蓮二菊・牡丹沢山を染付濃ク	壺ツ	正銀拾三匁替		佐嘉藩	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
658 寛政元年十月	1789	德利	式升入 裏表隆二菊・牡丹沢山を染付濃ク	壺ツ	正銀式(八)匁五分替		佐嘉藩	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
659 寛政元年十月	1789	德利	壺升入 紋染付濃ク、裏に雲山水染見合	壺ツ	四匁		佐嘉藩	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
660 寛政元年十月	1789	德利	壺升入 紋所染付濃ク、裏に龍菊沢山染付	壺ツ	正銀四匁五分		佐嘉藩	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
661 寛政元年十月	1789	くわんす	青磁 壺升入 切はき、つたの葉少し染	壺ツ			代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
662 寛政元年十月	1789	火鉢	青磁切はきニシテ少し見合染付	壺ツ			代官カ	酒井田柿右衛門	くわんす之すわりかけんにて見合 御用	『有田町史 陶業編 I』p.508
663 寛政元年十月	1789	井	白焼、内外青絵模様 大中	三ツ	大六匁五分 中四匁替	正銀拾四匁五分	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
664 寛政元年十一月廿八日	1789	角皿	外濃	式拾ツ	拾式匁	正銀式拾四匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
665 寛政元年十一月廿八日	1789	小皿	外濃絵	三拾ツ	五匁三分	正銀拾六匁	代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
666 寛政元年十一月廿八日	1789	中皿	外濃絵	式拾ツ	(八匁カ)		代官カ	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
667 寛政元年	1789	済し	五升入	壺本	式匁	献上カ	御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
668 寛政元年	1789	済し	式升入	壺本	三匁	献上カ	御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
669 寛政元年	1789	鉢	尺口	式枚	五匁	献上	御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
670 寛政元年	1789	井	青磁 大	壺ツ	五匁		御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
671 寛政元年	1789	井	青磁 小	式ツ	三匁		御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
672 寛政元年	1789	井	外濃 小	壺ツ	四匁		御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
673 寛政元年	1789		三升入	壺本	四匁		御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
674 寛政元年	1789	花生	青地 宝袋 大	壺本	拾匁		御用 人	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.509
675 寛政二年七月十七日	1790	花生	青磁こす	式本壺本納	正銀式拾匁かへ	正銀式拾匁	長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
676 寛政二年七月十七日	1790	水差	青磁こす	壺ツ	八匁九分	八匁九分	長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
677 寛政二年七月十七日	1790	老幅分長小口共二	白焼詩文字を染付左右之軸ちらし之絵見合染付	七部	四匁		長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
678 寛政二年七月十七日	1790	二幅分ばち軸長小口共二	白焼染付模様見合、小口ニ亀老ツツ染付	七部	五匁五分		長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
679 寛政二年七月十七日	1790	三幅対長小口共二	白焼染付模様見合	八部	二匁六分		長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
680 寛政二年七月十七日	1790	二幅対長小口共二	白焼赤絵模様見合	七部	五匁五分		長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.510
681 寛政二年七月十七日	1790	二幅分長小口共二	こすにて染付模様見合	七部	七匁八分		長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.511
682 寛政三年カ正月廿九日	1791	花生	こす、白ニシテ少し染付	壺本	廿五匁	廿五匁	郡目付	酒井田柿右衛門	高尺式寸、御用	『有田町史 陶業編 I』p.511
683 寛政三年カ	1791	火鉢	こす	壺ツ		三拾八匁	佐嘉ヨリ代官	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.511
684 寛政三年カ	1791	花生	草花染付志よく下	壺本		六匁		酒井田柿右衛門	随分綺麗ニ	『有田町史 陶業編 I』p.511
685 寛政三年カ	1791	済シ	五合入花形	壺ツ		式匁		酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.511
686 寛政三年カ	1791	済シ	三合入花形	壺ツ		壺匁		酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.511
687 寛政三年カ	1791	德利	草花染付式升入	壺ツ		三匁五分		酒井田柿右衛門	杉形り	『有田町史 陶業編 I』p.511
688 寛政四年カ	1792	くわんす	ちり紅葉少し、壺合八匁小				代官	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.511

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
689 寛政四年カ	1792	火鉢	ちり紅葉少し いさ出し あな五所				代官	酒井田柿右衛門	下ニ水少し 見合、御用	『有田町史 陶業編 I』p.511
690 寛政四年カ	1792	掛物軸	青磁染付	式幅分	五匁	拾匁	長崎奉行御用	酒井田柿右衛門	八月三日ニ 泉登二積入、 御用	『有田町史 陶業編 I』p.512
691 寛政四年カ	1792	掛物軸	ひ、焼染付 模様見合	式幅分	七匁八分	拾五匁六分	長崎奉行御用	酒井田柿右衛門	八月三日ニ 泉登二積入、 御用	『有田町史 陶業編 I』p.512
692 寛政四年カ	1792	掛物軸	前書ニ断詩 文字染付	巻幅分	四分		長崎奉行御用	酒井田柿右衛門	八月三日ニ 泉登二積入、 御用	『有田町史 陶業編 I』p.512
693 寛政六年一月三日	1794	なら茶		巻束			前川家	吉岡良左衛門		『伊万里焼流通史の研究』p.507
694 寛政六年一月三日	1794	くわし鉢		二ツ			前川家	吉岡良左衛門		『伊万里焼流通史の研究』p.507
695 寛政六年二月廿六日	1794	なら茶	稲へ	四十		八十匁ツツ	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
696 寛政六年二月廿六日	1794	なら茶	草へ	廿		八	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
697 寛政六年二月廿六日	1794	上小服	菊へ			七	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
698 寛政六年二月廿六日	1794	小ふく	るり			二五	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
699 寛政六年二月廿六日	1794	茶わん	朝貞	十		二三	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
700 寛政六年二月廿六日	1794	大鉢				七	前川家			『伊万里焼流通史の研究』p.510
701 寛政六年十二月三日	1794	望料	杜若へ(紋)				前川家	魚蔵寺御隠居		『伊万里焼流通史の研究』p.513
702 寛政六年十二月三日	1794	里ん	笹牡丹	十			前川家	大黒や政右衛門		『伊万里焼流通史の研究』p.513
703 寛政六年(十二月)三日	1794	なら茶	笹菊へ	十			前川家	堺屋種兵衛		『伊万里焼流通史の研究』p.513
704 寛政六年(十二月)三日	1794	なら茶		式ツ			前川家	堺屋伝左衛門		『伊万里焼流通史の研究』p.513
705 寛政六年(十二月)三日	1794	なら茶		式ツ			前川家	成井喜三郎		『伊万里焼流通史の研究』p.513
706 寛政七年カ	1795	德利		式本		四匁五分	元助	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.512
707 寛政七年カ	1795	井		式ツ		六匁	元助	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.512
708 寛政八年カ	1796	須ひ志やく立		式本		式拾匁	吉左衛門	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.512
709 寛政八年カ七月	1796	長皿	青地 浪二 十鳥置揚 長サ全六寸 I正寸	廿八前	九匁かへ	百八拾匁	長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.512
710 寛政八年カ八月一日	1796	花生	絵形有り	巻本		正銀	石井五郎太夫	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.513
711 寛政八年カ八月一日	1796	花生	絵形有り	三本		正銀	石井五郎太夫	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.513
712 寛政八年カ八月一日	1796	水筒	角 絵図有之	巻ツ		正銀	大庭忠蔵	酒井田柿右衛門		『有田町史 陶業編 I』p.514
713 寛政八年カ八月二日	1796		印地 御絵図	式ツ	百六拾匁替	三百式拾匁	江戸より	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.513
714 寛政八年カ八月二日	1796		印地 御絵図	巻ツ	百六拾匁	百六拾匁	江戸より	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.513
715 寛政八年カ八月二日	1796	筆立	御 有之、 南 屏	巻ツ		式拾四匁	江戸より	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.513
716 寛政八年カ八月二日	1796	硯屏	御絵図有之	式ツ	百三拾匁替	式百六拾匁	江戸より	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.513
717 寛政九年十一月廿七日	1797	植木鉢紙 形		一			徳川家斉	治茂名内 志波四郎次	御用	『佐賀県近世史料 第一編九巻』pp.257-258
718 寛政十年カ二月	1798	香炉	青磁 手頭 身・蓋・龍目 蓋ハ切貫	式拾ツ	正銀百匁替	正銀式貫匁	長崎奉行	酒井田柿右衛門	御用	『有田町史 陶業編 I』p.514
719 寛政十一年	1799	鉢	大飛切八仙 人内外濃 四角 九寸	十三入巻俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.521
720 寛政十一年	1799	浅掬(繰)鉢	飛切内外地文 縁書寿福團扇 外濃八角	十入式俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.521
721 寛政十一年	1799	蓋物	飛切牡丹蝶 外濃	廿四入 巻 俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
722 寛政十一年	1799	なら茶	無類柳胸唐絵	三十二入 巻俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
723 寛政十一年	1799	蓋物	無類縁書三 所唐花	十五入 巻 俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
724 寛政十一年	1799	手塩	無類 唐絵 外濃	四十 内間 十 巻俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
725 寛政十一年	1799		外濃	六十 内間 十 巻俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
726 寛政十一年	1799	足付鉢	無類乱絵	六ツ入 巻 俵			大坂問屋備 前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
727 寛政十一年	1799	なら茶	無類錦割金欄手丸小	四十入 壹俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
728 寛政十一年	1799	五両入	無類結紫板絵	八十入 一俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
729 寛政十一年	1799	くり鉢	無類内外割書廻	七ッ入 壹俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.522
730 寛政十一年	1799	広東なら茶	無類柳牡丹	三十入 貳俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.523
731 寛政十一年	1799	かん東なら茶	無類唐舟	三十入 二俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.523
732 寛政十一年	1799	小なら茶	無類錦割金欄手	六十八入 貳俵			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.523
733 寛政十一年十二月六日	1799	大皿		二十			鍋島茂茂	林大 学頭	御用	『佐賀県近世史料 第一編九卷』p.409
734 寛政十一年十二月六日	1799	奈良茶碗		二十			鍋島茂茂	古賀弥助	御用	『佐賀県近世史料 第一編九卷』p.409
735 寛政十一 ~ 十二年	1799 ~ 1800	奈良茶	龍山水	四十 内間			筑前商人	前田家		『伊万里焼流通史の研究』p.543
736 寛政十一 ~ 十二年	1799 ~ 1800	奈良茶	柳唐人形字絵	四十			筑前商人	前田家		『伊万里焼流通史の研究』p.543
737 寛政十一 ~ 十二年	1799 ~ 1800	奈良茶	極山水	四十 内間			筑前商人	前田家		『伊万里焼流通史の研究』p.543
738 寛政十一 ~ 十二年	1799 ~ 1800	奈良茶	立割濃	廿			筑前商人	前田家		『伊万里焼流通史の研究』p.543
739 寛政十一 ~ 十二年	1799 ~ 1800	奈良茶	寿福	四十 内間			筑前商人	前田家		『伊万里焼流通史の研究』p.543
740 寛政十二年三月十日	1800	本皿	薄葉形入	貳百		廿匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	焼手梶原儀右衛門手本、口差渡五寸壹分	『伊万里焼流通史の研究』p.528
741 寛政十二年三月十日	1800	中皿	薄葉形入	貳百		拾九匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	焼手梶原儀右衛門手本、口差渡四寸三分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
742 寛政十二年三月十日	1800		薄葉形入八寸	貳百		四拾貳匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	焼手梶原儀右衛門手本、口差渡七寸六七分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
743 寛政十二年三月十日	1800	和物	薄葉形入	貳百		廿匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	貴様御仕入焼手、口差渡三寸八九分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
744 寛政十二年三月十日	1800	和物	薄葉丸形入九	百		拾壹匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	御見計二而、口差渡三寸五分、高サ貳寸壹分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
745 寛政十二年三月十日	1800	小皿	薄葉形入	貳百		九匁 五分	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	梶原与次兵衛位ノ焼手、口差渡三寸五分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
746 寛政十二年三月十日	1800	猪口	薄葉形入	貳百		拾貳匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	御見計二而、口差渡三寸九分、高サ九分	『伊万里焼流通史の研究』p.529
747 寛政十二年三月十日	1800	本皿	本唐轉形入	四百		拾七匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	梶原位、口差渡五寸壹分	『伊万里焼流通史の研究』p.530
748 寛政十二年三月十日	1800	指身	本唐轉丸	貳百		廿壹匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎	此山(ママ)谷河内松尾与二右衛門、山口伊左衛門右両人之焼物二而御座候	『伊万里焼流通史の研究』p.530
749 寛政十二年三月十日	1800	指身	七寸本轉草	貳百		拾六匁	大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.530
750 寛政十二年三月十日	1800	猪口	太白丸	五拾			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.530
751 寛政十二年三月十日	1800	名酒	細薄葉反り	百 五拾			大坂問屋備前屋徳兵衛	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.530
752 享和二年	1802	皿								『生産遺跡基 本調査報告書Ⅰ』p.25
753 享和二年	1802	茶碗								『生産遺跡基 本調査報告書Ⅱ』46
754 享和二年	1802	猪口								『生産遺跡基 本調査報告書Ⅱ』46
755 享和二年	1802	春寒								『生産遺跡基 本調査報告書Ⅰ』p.25
756 享和二年	1802	肴鉢類								『生産遺跡基 本調査報告書Ⅱ』46
757 文化元年十二月	1804	指ミ	山絵	上五十四 中七廿			前川家	釜焼立林清右衛門	上を十とし、中七懸・仁五懸	『伊万里焼流通史の研究』p.494
758 文化元年十二月	1804	箆羹	山絵	上九十 中廿 仁十			前川家	釜焼立林清右衛門	上を十とし、中七懸・仁五懸	『伊万里焼流通史の研究』p.494

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
759 文化元年十二月	1804	本皿	山 絵	上百三十 中五十			前川家	釜焼立林清 右衛門	上を十とし、 中七懸・仁 五懸	『伊万里焼流通史の研究』p.494
760 文化元年十二月	1804	小皿	山 絵	上百四十 中六十			前川家	釜焼立林清 右衛門	上を十とし、 中七懸・仁 五懸	『伊万里焼流通史の研究』p.494
761 文化元年十二月	1804	欠皿	瑠璃	上六十 中六十			前川家	釜焼立林清 右衛門	上を十とし、 中七懸・仁 五懸	『伊万里焼流通史の研究』p.494
762 文化三年	1806	小皿	外濃緑なす ひ之絵	六拾ッ	正銀六匁替	正銀三百六 拾匁	中山多兵衛	酒井田柿右 衛門	八角ニシテ縁四 ツ手網、外濃、 底山水、外縁 も四ツ手網、高 台も八角ニシテ 内ニ文字あり、 御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』pp.487-488
763 文化三年	1806	小皿	柳二入形傘 など指たる 景、裏其 詩、二遠 神田所	式拾ッ	正銀八匁替	正銀百六拾匁		酒井田柿右 衛門	縁そり、丸 小皿、高台 之内ニ文字 あり、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.490
764 文化三年	1806	小皿	底ニけんさ き之絵、其 中ニ素書之 文様	式拾ッ		正銀百六拾匁		酒井田柿右 衛門	丸作りニシテ、 縁地紋濃、裏 ハ割絵、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.490
765 文化三年	1806	砂物鉢	絵形之通縁 より縁迄外濃	式ッ		正銀拾七枚	紀州様	酒井田柿右 衛門	差渡老尺五寸 深サ内法四寸 七部、外、立 浪之浮紋、縁 富文、内、梅・ 菊之絵、底裏 ニ文化年製之 印、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』図アリ pp.490-493
766 文化三年	1806	茶瓶	壺ツツ、絵 様違イ	拾ッ	正銀貳拾枚		成富作兵衛	酒井田柿右 衛門	唐詩選ノ内之 七言絶句之詩 有り、外ニ御 絵形拾枚あり。 蓋合カたニ目 □なし。裏懸 り、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』図アリ pp.488-489
767 文化三年	1806	茶碗	牡丹・萩・か きつばた・な でしこ・菊・ 桔梗之絵	六拾ッ	正銀八匁替	正銀四百八 拾匁		酒井田柿右 衛門	御絵形六通、 拾ッツツ、絵 様違イ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』図アリ p.489
768 文化七年七月四日	1810	輪	菊割	六十入 上、式拾俵下物 三拾俵			大黒屋幸右 衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.31
769 文化七年七月四日	1810	輪	廿四孝	上式拾俵下 式拾俵			大黒屋幸右 衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.31
770 文化七年七月四日	1810	鼓 絵		上拾俵下物 式拾俵			大黒屋幸右 衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.31
771 文化七年七月四日	1810		筒え中 但 し水仙割絵 菊貫入	九十九下六 拾俵			大黒屋幸右 衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.31
772 文化十四年三月八日	1817	里ん	一のせ 大 松 絵	上拾俵			安右衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.33
773 文化十四年三月八日	1817	つわへ		下もの五俵			安右衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.33
774 文化十四年三月八日	1817	里ん	大川内	上拾俵下も の拾俵			安右衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.33
775 文化十四年三月八日	1817	筒		下もの計 拾俵			安右衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.33
776 文化十四年三月八日	1817	五徳茶つけ		下もの計 五俵			安右衛門	前川太兵衛		『近世後期における「伊万里焼」の流 通』p.33
777 文政二年	1819	大広東	花割 内山 水画	四ハッ入拾 俵(内山水 画一ハッ入)			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
778 文政二年	1819	大広東	内山水画極上	一ハッ入七俵			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
779 文政二年	1819	大広東	内山水画上 ツ一	一ハッ入式俵			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
780 文政二年	1819	茶漬	柳牡丹画 大高台	一ハッ入式俵			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
781 文政二年	1819	茶漬	柳牡丹画極 上 大高台	一ハッ入四俵			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
782 文政二年	1819	茶漬	柳牡丹画上 ツ一 高台	一ハッ入老俵			亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
783 文政二年	1819	奈良茶	朝顔画 本形				亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
784 文政二年	1819	大広東	山 水絵				亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
785 文政二年	1819	大高台茶漬	鉄線 画				亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416
786 文政二年	1819	目小中	網 画				亀屋 源太 夫四郎兵衛	武村清之丞	大村系波佐 見窯	『波佐見史上巻』p.416

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
787 文政十一年	1828	廣東素ら (ママ)茶					西山和吉 真島弥右衛門			『有田町史 政治社会 I』 pp.203-204
788 文政十一年	1828	論筒(ママ)								『有田町史 政治社会 I』 pp.203-204
789 文政十一年	1828	けんといん							どんぶりの こと	『有田町史 政治社会 I』 pp.203-204
790 天保九年	1838	茶漬	大	二六のり					釜方職人賃 金=一〇文 九文半懸り	『波佐見史上巻』 p.427
791 天保九年	1838	茶漬	中	三〇のり					釜方職人賃 金=一〇文 九文半懸り	『波佐見史上巻』 p.427
792 天保九年	1838	茶漬	小	三四のり					釜方職人賃 金=一〇文 九文半懸り	『波佐見史上巻』 p.427
793 天保九年	1838	輪茶碗		三九のり					釜方職人賃 金=一〇文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
794 天保九年	1838	煎茶		四〇のり					釜方職人賃 金=一一文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
795 天保九年	1838	花漬		四四のり					釜方職人賃 金=九文懸り	『波佐見史上巻』 p.427
796 天保九年	1838	恋茶		二六のり					釜方職人賃 金=一一文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
797 天保九年	1838	小広東		四二のり					釜方職人賃 金=一一文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
798 天保九年	1838	小の中		四〇のり					釜方職人賃 金=八文懸り	『波佐見史上巻』 p.427
799 天保九年	1838	目茶漬		三〇のり					釜方職人賃 金=九文懸り	『波佐見史上巻』 p.427
800 天保九年	1838	小茶碗		四八のり					釜方職人賃 金=八文懸り	『波佐見史上巻』 p.427
801 天保九年	1838	碗	四つ揃						釜方職人賃 金=十二文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
802 天保九年	1838	中広東							釜方職人賃 金=九文懸り	『波佐見史上巻』 p.427
803 天保九年	1838	絵久保							釜方職人賃 金=一一文 懸り	『波佐見史上巻』 p.427
804 天保九年	1838	奈良茶	揃						釜方職人賃 金=九文半	『波佐見史上巻』 p.427
805 天保九年	1838	茶漬	□反 中	三〇のり					釜方職人賃 金=九文半	『波佐見史上巻』 p.427
806 天保九年	1838	茶漬	□反 小	三四のり					釜方職人賃 金=九文半	『波佐見史上巻』 p.427
807 天保十一年	1840	茶漬	博多絵大						絵書職人賃 金=八	『波佐見史上巻』 p.427
808 天保十一年	1840	茶漬	博多絵 中						絵書職人賃 金=七	『波佐見史上巻』 p.427
809 天保十一年	1840	茶漬	三木龍 中						絵書職人賃 金=四	『波佐見史上巻』 p.427
810 天保十一年	1840	茶漬	三木龍 小						絵書職人賃 金=四	『波佐見史上巻』 p.427
811 天保十一年	1840	輪茶碗	廿四孝						絵書職人賃 金=四	『波佐見史上巻』 p.427
812 天保十一年	1840	花漬	菊貫入						絵書職人賃 金=二	『波佐見史上巻』 p.427
813 天保十一年	1840	煎茶	博多絵						絵書職人賃 金=四	『波佐見史上巻』 p.427
814 天保十一年	1840	煎茶	鳥絵						絵書職人賃 金=三	『波佐見史上巻』 p.427
815 嘉永二年	1849	小瓶	大唐艸絵	六十入拾壺		百貳拾八匁 四厘	江戸陶器方	伊万里商人		『伊万里焼流通史の研究』 p.211
816 嘉永二年	1849	小瓶	大唐艸絵	六十入三		三拾四匁九 分式り	江戸陶器方	伊万里商人		『伊万里焼流通史の研究』 p.211
817 嘉永二年	1849	瓶子	るり	廿四入壺		拾壺匁五分 式厘	江戸陶器方	伊万里商人		『伊万里焼流通史の研究』 p.211
818 嘉永二年	1849	大瓶子	るり	拾四入式		三拾八匁四分	江戸陶器方	伊万里商人		『伊万里焼流通史の研究』 p.212
819 嘉永二年	1849	取合御酒びん	松絵	上百拾			河内屋徳兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』 p.803
820 嘉永二年	1849	取合御酒びん	笹絵	□十五			河内屋徳兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』 p.803
821 嘉永二年	1849	取合御酒びん	竹絵	中七ツ		三百三拾六 匁六分九	河内屋徳兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』 p.803
822 嘉永三年閏四月十二日	1850	七通揃物 口紅薄葉詰へ	廿一揃三組			五拾匁	田中屋忠兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』 p.243

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
823 嘉永三年閏四月十二日	1850		尺三寸 口紅薄葉詰絵	四枚		四百五拾匁	田中屋忠兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』p.244
824 嘉永三年閏四月十二日	1850	井	内山水八仙人五角縁三組	四組入三		三百匁	田中屋忠兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』p.244
825 嘉永三年閏四月十二日	1850	小皿	口金花薄葉絵	四十 六十 八〇		八百目	田中屋忠兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』p.244
826 安政二年	1855	春かん	口金山水絵	十七		七百拾四匁	河内屋徳兵衛	武富家		『伊万里焼流通史の研究』p.805
827 文久二年三月六日	1862	茶碗	夜喰	拾人前		八拾五文位の処文迄	塩田屋長作	角谷五郎右衛門		『北前船の時代』p.116
828 文久二年三月六日	1862	茶碗	茶ノミ	式十		廿七八文	塩田屋長作	角谷五郎右衛門		『北前船の時代』p.116
829 慶応三年	1867	中鉢		式拾六枚			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
830 慶応三年	1867	大皿		七拾六ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
831 慶応三年	1867	中皿		九拾九ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
832 慶応三年	1867	小皿		式百五拾九ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
833 慶応三年	1867	奈 良茶碗		百四拾三組			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
834 慶応三年	1867	煎茶碗		四百九ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
835 慶応三年	1867	水指		八ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
836 慶応三年	1867	噸茶碗		四拾式ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
837 慶応三年	1867	水呑		拾四ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
838 慶応三年	1867	茶巾盤		拾四ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
839 慶応三年	1867	花水差		式拾式ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
840 慶応三年	1867	卓下花生		拾四ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
841 慶応三年	1867	卓香爐		五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
842 慶応三年	1867	水入		七ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
843 慶応三年	1867	手水鉢		式ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	御用	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
844 慶応三年	1867	笙焙		拾四ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	禁裏御用注文	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
845 慶応三年	1867	噸鉢		拾五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	大殿様御用注文	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
846 慶応三年	1867	香爐	爐屋	五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	大殿様御用注文	『鍋島藩窯とその周辺』p.80
847 慶応三年	1867	中鉢		壹枚			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
848 慶応三年	1867	大皿		五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
849 慶応三年	1867	中皿		拾壹ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
850 慶応三年	1867	小皿		拾七ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
851 慶応三年	1867	奈 良茶碗		式拾七組			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
852 慶応三年	1867	煎茶碗		四拾五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
853 慶応三年	1867	水指		壹ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
854 慶応三年	1867	噸茶碗		五ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
855 慶応三年	1867	水呑		六ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
856 慶応三年	1867	茶巾盤		三ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
857 慶応三年	1867	花水指		七ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
858 慶応三年	1867	卓下花生		壹ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
859 慶応三年	1867	笙焙		壹ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
860 慶応三年	1867	噸鉢		四ツ			御厨軍右衛門	石橋三右衛門	不 良品	『鍋島藩窯とその周辺』p.81
861 年次不 詳 月十日		なら茶	反中	七俵			原屋清右衛門			『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.4
862 年次不 詳 三月十五日		皿	形入 嘉十焼 模様御見合處へ	四十入 拾俵			虎屋安右衛門	武富七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.4
863 年次不 詳 二月廿日		茶碗鉢		式枚相添			紙屋治郎吉	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.6
864 年次不 詳 二月十日		鉢	式尺老寸人形絵	式枚		式兩式歩式朱	紙屋弥兵衛	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.6
865 年次不 詳		井	丸三組 山 上廿六組 間三組 引壹組	百六十四匁			福昌九嘉市	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.9
866 年次不 詳 四月朔日		本皿	柳絵	百四十			堀端七太郎	伊三郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
867 年次不 詳 四月朔日		小皿	寶絵	百七十三			堀端七太郎	伊三郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
868 年次不 詳 四月朔日		小皿	留リ(瑠璃)	四百ツ			堀端七太郎	伊三郎	□四百廿二而候得共式十不足也	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
869 年次不 詳 十月朔日		井	八寸 龍割へ	五ツ			武富七太郎	八兵衛	壹ツ不足下也 常助	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
870 年次不 詳 十月朔日		火鉢	山水へ	三十			武富七太郎	八兵衛	常助	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
871 年次不 詳 十月朔日		角弁當	唐花へ	六十式			武富七太郎	八兵衛	倉吉	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
872 年次不詳十月朔日		和へ物	薄用へ	五百十			武富七太郎	八兵衛	常太郎	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
873 年次不詳十月朔日		仙茶	極真鉢じ割へ	式拾四			武富七太郎	八兵衛	常助	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
874 年次不詳十月朔日		仙茶	極真龍濃へ	三十式			武富七太郎	八兵衛	下也 常助	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
875 年次不詳十月朔日		火入	口紅 桐へ	三十式			武富七太郎	八兵衛	常助	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
876 年次不詳十月朔日		湯呑	竹割	十			武富七太郎	八兵衛	老ッ不足 熊太郎	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
877 年次不詳十月朔日		和へ物	復書へ	三十式			武富七太郎	八兵衛	老ッ過上 熊太郎	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.21
878 年次不詳四月朔日		中皿	書物絵	三式五			伊萬里茂十	松蔵		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.23
879 年次不詳四月朔日		中皿	おも高絵	三式五			伊萬里茂十	松蔵		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.23
880 年次不詳四月朔日		中皿	目中	十八			伊萬里茂十	松蔵		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.23
881 年次不詳四月朔日		水扣へ	大根絵 小	式三			伊萬里茂十	松蔵	組物	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.23
882 年次不詳二月廿八日		大井	芙蓉	老ッ		(百三拾八 匁六分)	久富太兵衛			『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.24
883 年次不詳		丸中	金丸上から 花へ	百廿			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
884 年次不詳		うかい	から舂へ	百十			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
885 年次不詳		反中	銀杏から花へ	式百〇五ッ			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
886 年次不詳		丸小	から菊口へ	百廿			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
887 年次不詳		丸小	さくら話へ	百廿五			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
888 年次不詳		吸物わん	から草へ	百ッ			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
889 年次不詳			薄葉へ 十 両入	百六十			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
890 年次不詳		中皿	鶴へ	七十			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
891 年次不詳		小せん茶	から花へ	三百斗り			武富栄助	伊十	小樽釜	『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.25
892 年次不詳七月一日		盃たい	るり金	五ッ	式朱		蛭子屋久五郎	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.7
893 年次不詳巳七月八日		井	唐鳥絵 三 ッ組				福昌 丸嘉 市	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.9
894 年次不詳巳七月八日		大切留	唐鳥へ(絵)	十枚入一俵			福昌 丸嘉 市	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.9
895 年次不詳巳七月八日		井	錦手寿福割へ 玉口 八寸	上七間巻引老		九百〇式匁	福昌 丸嘉 市	堀端七太郎		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.9
896 年次不詳六月十二日		菓子鉢類		並尺口		仕入26匁 売値36匁か 35匁	田中屋忠兵衛	武富栄助		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.17
897 年次不詳六月十二日		菓子鉢類		上出来尺口		仕入30匁 売値45匁	田中屋忠兵衛	武富栄助		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.17
898 年次不詳六月十二日		菓子鉢類		上出来九寸		売値28匁	田中屋忠兵衛	武富栄助		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.17
899 年次不詳六月十二日		菓子鉢類		上出来八寸		売値20匁	田中屋忠兵衛	武富栄助		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.17
900 年次不詳四月十八日		かし鉢					土佐田村屋 幾三郎	武富栄助		『九州陶磁文化館研究紀要 2』p.16
901 年次不詳四月十二日		輪	無類唐鹿絵	六十入 式表	六分	七拾式匁	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
902 年次不詳四月十二日		茶わん	無類 寿唐絵	百四 四ッ 入式表	六分二リ	百七拾八匁 五分六厘	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
903 年次不詳四月十二日		手しほ	四角縁切 無類山水	九十入老俵	三分二リ	廿八匁八分	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
904 年次不詳四月十二日		小なら茶	無類水口きて	四十入式表内 間廿ッ入六匁	拾匁	七拾式匁	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
905 年次不詳四月十二日		なら茶	無類唐山水絵	三十入式表	十七(六)匁	九十六匁	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
906 年次不詳四月十二日		重	飛切極乱絵	九ッ入式表	八匁	百四拾四匁	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.535
907 年次不詳四月十二日		小鉢	無類内外錦さ や金割	廿一ッ入一 式表	三分七リ	百五拾九匁 老分	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.536
908 年次不詳四月 月未		望料	無類 唐鹿絵	廿式与入式俵	十八匁	七拾九匁式分	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.536
909 年次不詳四月十二日		重	無類 唐草絵	八与入老俵 内間式与入 八分引	四匁	廿八匁八分	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.536
910 年次不詳四月十二日		小服	青地	六十入五俵 内間十入三 部引	二匁五分	七拾四匁二 分五リ	大坂問屋伏見 屋伝右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.536
911 年次不詳四月二十八日		大操(繰)鉢	飛切唐割濃	四入二 五 入一 三表	十五匁	百九拾五匁	大坂商人辰巳 屋宇右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.537
912 年次不詳四月二十八日		和物	形入 無類 割金欄手	三拾入二表内 間四入老ッ 六部二匁	廿匁	百拾六匁八分	大坂商人辰巳 屋宇右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.538
913 年次不詳四月二十八日		香爐	無類青地算木	五拾九入老龍 内間拾入			大坂商人辰巳 屋宇右衛門	前川善太郎		『伊万里焼流通史の研究』p.538

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
914	年次不詳	重	錦地文牡丹 絵 四寸	十入 壺	内間三与入 七懸 四 三分	四匁三分四 拾三匁四分 三厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.209
915	年次不詳	重	錦地紋菊牡丹 五寸	四与入 三	八匁四分	百〇九匁五分	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.209
916	年次不詳	四段重	錦龍鳳凰牡丹 六寸	三与入 四 式与入 壺	十一匁八分 老厘	百七拾七匁 老分五厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.210
917	年次不詳	四段重	錦松竹梅鶴 金蘭 五寸	四与入 三 イ与入 壺 間三与入 壺	八匁四分	百三拾六匁 九分式厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.210
918	年次不詳	長皿	龍牡丹木爪	上十入イ 入 壺 上々吉 上々吉 上々吉 上々吉	九匁六分	九拾六匁九 分六厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.211
919	年次不詳	さしみ	万暦人形絵	十四入 武 上十五 七 懸間三 入 イ 壺 八懸イ 十 懸イ 七 ツ入 懸 メ 壺 四俵	廿匁	百三拾匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 pp.211-212
920	年次不詳	鉢	松竹梅絵扇形	十与入 壺 上六 壺 上五 壺 上五 壺 上五 壺	三匁七分	百拾匁六分 三厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.212
921	年次不詳	長鉢	鯉形	上七ツイ ツ間 壺 ツ間 壺 メ 壺 龍			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.212
922	年次不詳	鉢	染紋り幕絵 九寸	九入 壺 入 壺 三俵	三匁三分	八拾式匁五分	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 pp.212-213
923	年次不詳	三与井・六 寸井		六ツ・五ツ メ 壺 壺内 壺 ツ引		三拾五匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 pp.215-216
924	年次不詳	さしみ皿		十四入 壺 内二ツ引		三拾壺匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
925	年次不詳	井	六寸	八ツ入 壺 内五ツ引		四拾匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
926	年次不詳	ゆのみ		十二			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
927	年次不詳	せん茶		四ツ			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
928	年次不詳	手塩皿		四ツ			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
929	年次不詳	小皿		二十七			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
930	年次不詳	重	三寸	壺与 壺 俵		三拾匁 (以 上5種合計)	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.216
931	年次不詳	鉢	尺口	五枚			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.217
932	年次不詳	菓子鉢	八角	四枚 壺 内四枚引		四拾匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.217
933	年次不詳	鉢	尺三寸	三枚 壺 提 壺 内大破 壺枚		四拾五匁六分	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.217
934	年次不詳		極上松竹梅絵	三ツ組 壺 提		三拾壺匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.217
935	年次不詳	なら茶(飯椀)	丸紋割	五拾三入 壺 内三 壺 破引	九匁一分老厘	四拾七匁三 分七厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.219
936	年次不詳	本皿	丸紋割形入	四拾入 壺 内壺ツ 破引	四匁五分	拾八匁	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.219
937	年次不詳	井	六寸竹仙人 菊形	拾			久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.219
938	年次不詳	井	六寸山水絵	八ツ 壺 俵	拾壺匁	拾九匁八分	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.219
939	年次不詳	重	唐竹絵 小	四拾壺入 壺 依四拾入 三 依内極廿入 メ 四俵	五匁三分	八拾四匁式 分七厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.220
940	年次不詳		上々吉	四拾入 三 俵	四匁三分	五拾匁壺分 六分	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.220
941	年次不詳	重	式寸五分	三拾壺入 壺 俵	七匁式分	廿式匁三分 式厘	久富太兵衛	河内清兵衛		『有田町史 商業編Ⅰ』 p.220
942	年次不詳	平香炉	今利染付唐子				加賀前田家	鍋島勝茂	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.339
943	年次不詳	水指	今利染付 魚耳友蓋 振み蟹				加賀前田家	鍋島勝茂	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.340
944	年次不詳	香炉	染付今利 獅子				加賀前田家	鍋島殿	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.340
945	年次不詳	水指	今利染付 むすび耳 友蓋振み蟹				加賀前田家	鍋島勝茂	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.340
946	年次不詳	香炉	染付今利 唐子				加賀前田家	鍋島殿	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』 p.340

年代	西暦	器種	種類・文様	個数	単価	値段	注文者 or 授者	受注者 or 受者	備考1	文献
947 年次不詳		香炉	染付今利 漆唐子	一			加賀前田家	鍋島殿	御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.340
948 年次不詳		鉢之形指物	鳳凰錦手染付、桐之枝折錦手染付				酒井田柿右衛門		寸法、文様詳しい。氷彩あり。鉢底ニ水抜穴一ツ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.514
949 年次不詳		鉢之形指物	青磁 青海波、ゆえん形の内ニ丸龍彫上	壺			酒井田柿右衛門		文様詳しい。鉢底ニ水抜穴一ツ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.515
950 年次不詳		鉢之形指物	亀甲彫上 亀彫上岩ニ波彫上	壺			酒井田柿右衛門		寸法、文様詳しい。鉢底ニ水抜穴一ツ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.515
951 年次不詳		鉢之形指物	胴の内柿色木目彫上、錦手牡丹唐草染付太鼓形	壺			酒井田柿右衛門		寸法、文様詳しい。鉢底ニ水抜穴一ツ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.516
952 年次不詳		鉢之形指物	唐松ニ麒麟岩ニ波あい志らい花色染付木杢形	壺			酒井田柿右衛門		南京手兩脇花形ノ内、地文様、唐松岩ニ波花色染付南京手底ニ水抜穴一ツ、御用	『有田町史 陶業編Ⅰ』p.516
953 年次不詳		火入		拾五ツ	正銀貳拾目	三百匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517
954 年次不詳		水吞		貳拾ツ	正銀拾五匁	正三百匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517
955 年次不詳		濃茶碗	ひ、焼	拾九ツ	正銀八匁替	正銀百五拾式匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517
956 年次不詳		薄茶碗	ひ、焼	廿ツ	正銀四匁替	正銀八拾匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517
957 年次不詳		角皿	青絵外濃	廿ツ	拾ツニ付正銀拾式匁替	正銀貳拾四匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517
958 年次不詳		中皿	青絵	廿ツ	拾ツニ付正銀九匁替	正銀拾八匁	酒井田柿右衛門			『有田町史 陶業編Ⅰ』p.517

※目についた近世文献史料の中で陶磁器と考えられる記述を抽出したもの。作成には山本文子氏の協力を得た。

参考文献一覧

- 鳳林承章『隔蓑記 第一』鹿苑寺 1958
- 鳳林承章『隔蓑記 第二』鹿苑寺 1959
- 鳳林承章『隔蓑記 第三』鹿苑寺 1960
- 鳳林承章『隔蓑記 第四』鹿苑寺 1961
- 鳳林承章『隔蓑記 第五』鹿苑寺 1964
- 鳳林承章『隔蓑記 第六』鹿苑寺 1967
- 有田町史編纂委員会 編『有田町史 陶業編Ⅰ』有田町 1985
- 有田町史編纂委員会 編『有田町史 商業編Ⅰ』有田町 1988
- 有田町史編纂委員会 編『有田町史 政治社会Ⅰ』1985
- 伊万里市郷土研究会 編『鍋島藩窯とその周辺』伊万里市郷土研究会 1984
- 波佐見史編纂委員会 編『波佐見史 上巻』波佐見町教育委員会 1976
- 丸山和雄 訳読「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁VOL.5』1978
- 正和久佳『「古九谷」研究批判』郷土史料研究所 1992
- 「奉国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料 第一編五巻』佐賀県立図書館 1997
- 「奉国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料 第一編六巻』佐賀県立図書館 1998
- 「奉国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料 第一編七巻』佐賀県立図書館 1999
- 「奉国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料 第一編八巻』佐賀県立図書館 2000
- 「奉国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料 第一編九巻』佐賀県立図書館 2001
- 「諸御手数録」『諸御手数録 九』佐賀県立図書館 鍋島文庫
- 「上田家文書（砥石・陶山の部）」抄録『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県教育委員会 1980
- 前山博『近世後期における「伊万里焼」の流通』1980
- 前山博「伊万里陶商の基礎的研究（二）」『九州 陶磁文化館 研究紀要第2号』九州陶磁文化館 1990
- 前山博『伊万里焼流通史の研究』1990
- 牧野隆信『北前船の時代』教育社 1979

表3 肥前陶磁の日本海側遺跡出土状況

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝緑皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
1	岩手	笹間館	花巻市	城跡		多								
2	岩手	向中野館	盛岡市飯岡	散布地							有			
3	岩手	柳田館	紫波郡紫波町片寄	城館		有								
4	岩手	下構	西磐井郡平泉町長島	屋敷		有					多			有
5	岩手	柳之御所	西磐井郡平泉町	城館										
6	岩手	柳之御所	西磐井郡平泉町	城館										
7	岩手	柳之御所	西磐井郡平泉町	城館									皿	
8	岩手	白木野Ⅱ	和賀郡湯田町	集落									皿多	有
9	岩手	白木野Ⅲ	和賀郡湯田町	集落										
10	岩手	江川鉄山跡	下閉伊郡岩泉町	製鉄							有	多		多
11	岩手	猪川館跡	大船渡市	集落					有(青磁)		有		皿	
12	岩手	花立Ⅰ	西磐井郡平泉町平泉	散布地							有			
13	岩手	黒岩城	北上市	城館										
14	岩手	志羅山遺跡	西磐井郡平泉町	散布地										
15	岩手	玉川鉄山	九戸郡軽米町	製鉄										
16	北海道	ボロモイチャシ跡	沙流郡平取町	城館		有								
17	北海道	上ノ国市街地(長谷川氏宅)	檜山郡上ノ国町	集落		多			有					
18	北海道	上ノ国市街地(山本吉春氏宅)	檜山郡上ノ国町	包含地		有	有						変形中皿	
19	北海道	上之国勝山館跡	檜山郡上ノ国町	城館										
20	北海道	上之国勝山館跡	檜山郡上ノ国町	城館		有								
21	北海道	上之国勝山館跡	檜山郡上ノ国町	城館		有								
22	北海道	上之国勝山館跡	檜山郡上ノ国町	城館		有								
23	北海道	上之国勝山館	檜山郡上ノ国町	城館		多								
24	北海道	上之国勝山館	檜山郡上ノ国町	城館										
25	北海道	勝山館跡宮ノ沢右岸地区	檜山郡上ノ国町	城館		多								
26	北海道	上ノ国町宮の沢川	檜山郡上ノ国町	集落										
27	北海道	上之国勝山館	檜山郡上ノ国町	城館		有								
28	北海道	上之国勝山館	檜山郡上ノ国町	城館										
29	北海道	瀬内内チャシ	瀬棚郡瀬棚町南川／瀬棚郡北松山町豊岡	城館		有	有						皿	
30	北海道	上ノ国漁港	檜山郡上ノ国町	港									皿	
31	北海道	上ノ国漁港	檜山郡上ノ国町	港		有				有	多	有	皿多	有
32	北海道	笹浪屋敷	檜山郡上ノ国町	集落		有							皿	
33	北海道	上ノ国市街地遺跡(向井宅遺跡)	檜山郡上ノ国町	集落		多	有						皿多	
34	北海道	上ノ国市街地遺跡(森兼夫氏宅地点)	檜山郡上ノ国町	集落			有							
35	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館										
36	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館									皿	
37	北海道	福山城本丸跡	松前郡松前町	城館		有	有						中皿	
38	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館										
39	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館										
40	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館		有								
41	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館										
42	北海道	福山城跡	松前郡松前町	城館									皿	
43	北海道	福山城跡馬坂	松前郡松前町	城館										
44	北海道	イルエカシ	沙流郡平取町	集落										
45	北海道	大川遺跡	余市郡余市町	集落										

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
						△					中世和賀氏一族の城館か、1592年焼却か	『笹間館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1988
有						△	○	△○	○			『向中野館遺跡第5・6次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団2007
						△	○		○			『岩手県文化財調査報告書第53集』岩手県教育委員会1980、『国内出土の肥前陶磁』九州芸術文化館1984No85・86
多	蛇目					△	○	△○	○	○	大堀相馬、在地産陶器	『下橋遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団2004
							○△		○			『柳之御所発掘調査報告書』平泉町教育委員会1983
							○	○				『柳之御所遺跡52次』岩手県教育委員会2001
									△、○?			『柳之御所遺跡57次』岩手県教育委員会2004
多	蛇目多		後期	17前・後、18			△	△○	△○	○	五人組組頭小原家屋敷跡	『白木野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1994
有	蛇目								○		五人組組頭小原家屋敷跡	『白木野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1994
多	蛇目		18多					△○	○△		1740年成立の南部藩の鉄山	『江川鉄山跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1996
有	蛇目	陶胎染付火入	18					△○	△○	○		『猪川館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1994
	蛇目								△○			『花立Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書』平泉町教育委員会1993
有	皿(蛇目)								○			『黒岩城跡』北上市教育委員会2002
有									○			『志羅山遺跡第7次発掘調査報告書』平泉町教育委員会1990
有	有								○	○	八戸藩の鉄山の一つ、1804年記録初見	『玉川鉄山第二期発掘調査報告書』軽米町教育委員会1992
						△						『ユオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター1986
					有	△	△○	○				『町内遺跡発掘調査事業報告書5』上ノ国町教育委員会2002
		18		17前		△	△○	△○				『町内遺跡発掘調査事業報告書9』上ノ国町教育委員会2006
						△						『史跡上之國勝山館跡2』上ノ国町教育委員会1981
						△			○			『史跡上之國勝山館跡4』上ノ国町教育委員会1983
						△						『史跡上之國勝山館跡7』上ノ国町教育委員会1985
						△						『史跡上之國勝山館跡10』上ノ国町教育委員会1989
						△						『史跡上之國勝山館跡11』上ノ国町教育委員会1990
有?									○			『史跡上之國勝山館跡20』上ノ国町教育委員会1999
	有					△	△					『史跡上之國勝山館跡21』上ノ国町教育委員会2000
	皿					△	△	○	○			『史跡上之國勝山館跡22』上ノ国町教育委員会2001
						△						『史跡上之國勝山館跡23』上ノ国町教育委員会2002
						△						『史跡上之國勝山館跡25』上ノ国町教育委員会2004
有	蛇目					△	△○	△○	△○		北松山町教育委員会所蔵品含む	『瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』瀬田町教育委員会1980、『国内出土の肥前陶磁』九州芸術文化館1984No1・2・3・7・8・9・10
有	有						○	○	△○	○		『上ノ国漁港遺跡』上ノ国町教育委員会1984
多	多、蛇目も			17多		△	△○	△○	△○	○		『上ノ国漁港遺跡』上ノ国町教育委員会1987
	蛇目					△	○	△○	△○	○		『笹浪屋敷遺跡』上ノ国町教育委員会1996
	有			17前		△	△○	△○	△○	○	勝山館下の町場	『町内遺跡発掘調査事業概報Ⅱ』1999
				17多			△○	△○	○	○		『町内遺跡発掘調査事業概報Ⅲ』2000
	有、蛇目も			18					△○	○		『史跡福山城Ⅳ』北海道松前町教育委員会1987
	有、蛇目も			17前、後			△○	○	△○	○		『史跡福山城Ⅴ』北海道松前町教育委員会1988
有	有、蛇目					△	△○	○	△○	○		『史跡福山城Ⅵ』松前町教育委員会1989
有			18	17前、18				△○	○	○		『史跡福山城Ⅶ』松前町教育委員会1990
多	有			17				△	○	○		『史跡福山城Ⅷ』松前町教育委員会1991
				18		△			△○			『史跡福山城Ⅸ』松前町教育委員会1992
	有	後期染付火入					△		○	○		『史跡福山城Ⅹ』松前町教育委員会1993
	蛇目						△		△○	○	陶器に関西系多い	『史跡福山城ⅩⅠ』松前町教育委員会1994
									○	○		『松城遺跡Ⅱ・史跡福山城』松前町教育委員会1992
				17前			△○					『イルエカシ遺跡』平取町遺跡調査会1989
多	多、蛇目も							○	○	○		『大川遺跡発掘調査概報1991年度』余市町教育委員会1992

N ₀	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝緑皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
46	北海道	大川遺跡	余市郡余市町	集落						中皿			中皿、皿	
47	北海道	洲崎館	檜山郡上ノ国町	城館									皿	
48	北海道	洲崎館	檜山郡上ノ国町	城館										
49	北海道	フレイトイ貝塚	斜里郡小清水町	貝塚										
50	北海道	白老陣屋跡	白老郡白老町	陣屋										
51	北海道	矢不來天満宮跡	上磯郡上磯町矢不來	神社								有		
52	北海道	五稜郭跡	函館市	城館										
53	北海道	五稜郭跡	函館市	城館										
54	北海道	五稜郭跡	函館市	城館										
55	北海道	五稜郭跡	函館市	城館										
56	北海道	松前藩戸切地陣屋跡	上磯郡上磯町	陣屋										
57	北海道	松前藩戸切地陣屋跡	上磯郡上磯町	陣屋										
58	北海道	松前藩戸切地陣屋跡	上磯郡上磯町	陣屋										
59	青森	浜通	下北郡東通村大字小田野沢	集落		多								
60	青森	堀越城	弘前市	城館										
61	青森	堀越城	弘前市	城館										
62	青森	堀越城	弘前市	城館										
63	青森	堀越城	弘前市	城館		有								
64	青森	堀越城	弘前市	城館										
65	青森	堀越城	弘前市	城館										
66	青森	堀越城	弘前市	城館										
67	青森	堀越城跡	弘前市	城館										
68	青森	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町大字浪岡	城館		有								
69	青森	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町大字浪岡	城館										
70	青森	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町大字浪岡	城館	皮鯨皿	有								
71	青森	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町	城館										
72	青森	浪岡城跡	南津軽郡浪岡町大字浪岡	城館	皮鯨皿？	有								
73	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
74	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
75	青森	根城跡	八戸市根城	城館		多								
76	青森	根城跡	八戸市根城	城館										
77	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
78	青森	根城跡	八戸市根城	城館										
79	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
80	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
81	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有							皿	
82	青森	根城跡	八戸市根城	城館		有								
83	青森	十三湊51次	五所川原市十三	港		多								
84	青森	十三湊157次	五所川原市十三	港		多	多		小坏					
85	青森	弘前城北の郭	弘前市	城館										
86	青森	弘前城北の郭	弘前市	城館		多					有			
87	青森	野脇遺跡	弘前市	集落		多	有						皿	
88	青森	岩屋近世貝塚	下北郡東通村	貝塚							有		皿	
89	青森	大平貝塚	下北郡東通村	貝塚			有						皿	
90	青森	弘前城跡	弘前市上白金町	城館										
91	青森	鞍越	下北郡川内町館山下	館跡カ										

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
				17前、後多、 18				△	△	△		『大川遺跡発掘調査概報1993年度』余市町教育委員会1994
	碗・皿		18後半					○	△○	○		『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅳ』上ノ国町教育委員会2001
有	有							○	○			『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅴ』上ノ国町教育委員会2002
									○			『フレイト貝塚』小清水町1989
				18					△	○		『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅰ』白老町教育委員会1982
		灰吹							△○	○		『矢不來天満宮跡』北海道埋蔵文化財センター1988
		後期染付 火入								○		『特別史跡五稜郭跡Ⅱ』函館市教育委員会1987
										○		『特別史跡五稜郭跡Ⅲ』函館市教育委員会1988
										○		『特別史跡五稜郭跡Ⅳ』函館市教育委員会1989
		後期染付							○	○	1857年着工1864 年完成	『五稜郭跡・箱館奉行所跡発掘調査報告書』1990
				18?						○		『史跡松前藩戸切地陣屋跡』上磯町教育委員会1984
										○		『史跡松前藩戸切地陣屋跡』上磯町教育委員会1985
		灰吹、火入								○		『史跡松前藩戸切地陣屋跡』上磯町教育委員会1986
				17初		△	△					『浜通遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財センター1984
有								△○	○			『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅱ』弘前市教育委員会2001
									○			『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅲ』弘前市教育委員会2002
	蛇目?					△			○			『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅳ』弘前市教育委員会2003
						△						『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅴ』弘前市教育委員会2003
	蛇目					△			○			『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅵ』弘前市教育委員会2005
						△	△		○			『史跡津軽氏城跡堀越城Ⅶ』弘前市教育委員会2006
有	有					△?						『史跡津軽氏城跡』弘前市教育委員会2000
							○					『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984No74
				17初		△	△					『浪岡城跡Ⅴ』浪岡町教育委員会1983
						△						『浪岡城跡Ⅳ』浪岡町教育委員会1984
						△			○			『浪岡城跡Ⅲ』浪岡町教育委員会1985
						△						『浪岡城跡』浪岡町教育委員会1986
						△						『浪岡城跡Ⅱ』浪岡町教育委員会1989
						△			○	○		『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ』八戸市教育委員会1982
						△		○				『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅳ』八戸市教育委員会1983
					17初瓶	△			○			『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』八戸市教育委員会1983
				17初?		△			△			『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅵ』八戸市教育委員会
						△					南部氏が1627年 に遠野に移り廃 城	『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ』八戸市教育委員会1985
	蛇目								△○	○		『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅷ』八戸市教育委員会1986
						△			△○			『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅸ』八戸市教育委員会1987
						△					南部氏が1627年 に遠野に移り廃 城	『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅹ』八戸市教育委員会1988
				17後		△		△				『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅺ』八戸市教育委員会1989
						△						『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅻ』八戸市教育委員会1990
					有	△	△					『十三湊遺跡』市浦村教育委員会2001
有	有	青磁		多	有	△	△○	△○	△○	○		『津軽十三湊遺跡』中央大学文学部日本史学研究室2007
有	有			17後				△○	○	○?		『弘前城北の郭発掘調査概報Ⅱ』弘前市教育委員会2000
有	蛇目		18前	17・18		△	○	△○	△○	○		『弘前城北の郭発掘調査報告書』弘前市教育委員会2003
	多蛇目	17後火入	18後	17前、後、 18多	多	△	△○	△○	△○	○	江戸初頭に成立 した村落	『野島遺跡』青森県教育委員会1993
有	有、蛇目も			17後多		△	○	△○	△○	○		『東通村史』東通村1999
				17前・後多			△	△○				『東通村史』東通村1999
							○	○				『史跡弘前城跡保存修理事業三の九庭園発掘調査概要書』弘前市教育委員会1981、『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984 No62・ 63・68・70・71
							△○	△○	△○			富岡一郎『下北部川内町板子塚出土の陶磁器について』『東奥文化 49号』、筆者見

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
92	青森	長勝寺構	弘前市	寺院										有
93	青森	長勝寺構	弘前市	寺院					有			有(蛭)	皿	
94	青森	長勝寺構	弘前市	寺院										
95	青森	長勝寺構	弘前市	寺院										
96	青森	長勝寺構	弘前市	寺院										
97	青森	小友館	弘前市	散布地							有			
98	青森	八幡3次	八戸市八幡	散布地										
99	青森	向野2	下北郡東通村	散布地									中皿	
100	青森	久米川	西津軽郡稲垣村	集落										
101	青森	七戸城北館	上北郡七戸町	城館										
102	青森	七戸城北館	上北郡七戸町	城館										
103	青森	七戸城北館	上北郡七戸町	城館										
104	青森	高杉館	弘前市	散布地										
105	青森	中野	弘前市	包蔵地										
106	青森	大光寺新城	南津軽郡平賀町大光寺	城館									皿?	
107	青森	寺沢	弘前市	包蔵地										
108	青森	若葉	弘前市	包蔵地										
109	青森	長谷野	弘前市	散布地										
110	青森	新井田古館17地点	八戸市新井田	館跡										
111	青森	市子林	八戸市妙	集落										
112	青森	尾上山	西津軽郡深浦町	集落										
113	青森	蘆野	西津軽郡深浦町	街道										
114	青森	津軽山革秀寺	弘前市	寺院										
115	青森	水木館遺跡	南津軽郡常盤村	城館										
116	青森	松笠森	弘前市	散布地										
117	秋田	新斗米館	鹿角市花輪	城館										
118	秋田	小豆沢館	鹿角市花輪	城館										
119	秋田	鶴沼城跡	雄勝郡雄勝町桑ヶ崎	城館									皿	
120	秋田	脇本城	男鹿市脇本	城館										
121	秋田	脇本城	男鹿市脇本	城館		多	有							
122	秋田	脇本城	男鹿市脇本	城館			有						皿?	
123	秋田	桐木田	雄勝郡雄勝町小野	集落		有	多						皿	
124	秋田	石鳥谷館跡	鹿角市	城館		有								
125	秋田	久保田城二の丸	秋田市	城館			鉄釉、平底							
126	秋田	久保田城本丸隅櫓跡	秋田市	城館										
127	秋田	花輪館	鹿角市花輪	城館		有								
128	秋田	湊城	秋田市土崎港	城館		有	多	皿						
129	秋田	藩校明德館	秋田市中通	城下町		多	多、鉄平底も	皿	有	碗	有		皿多・中皿	
130	秋田	東根小屋町	秋田市中通	武家屋敷	有?	多	多、平底も多		有?	皿、碗	有	有	皿多	
131	秋田	向山	由利郡岩城町	墓域										
132	秋田	蛭川	大曲市蛭川	墓力					有					
133	秋田	脇本石館	男鹿市脇本	城館										
134	秋田	龍門寺茶畑	由利郡岩城町	墓域					有?					
135	秋田	久保田城	秋田市	城館			鉄平底			皿		有(蛭)		
136	秋田	脇神館跡	北秋田郡鷹巣町	塚										
137	秋田	蒲沼	南秋田郡八郎潟町蒲沼	散布地									皿	

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
有			18前	17前、18			△	○	△○	○		『寿昌院発掘調査報告書』弘前市教育委員会2004
		17陶器、 18灰吹		17後、18	有		○	△○	△○	○		『 豊津軽氏城跡長勝寺構』弘前市教育委員会2003
有							○	○	○	○		『 史跡津軽氏城跡長勝寺構』弘前市教育委員会2005
				17前			△	○	○			『弘前市内遺跡発掘調査報告書8』弘前市教育委員会2004
		染付							○	○		『弘前市内遺跡発掘調査報告書10』弘前市教育委員会2006
有								△	○			『弘前市内遺跡発掘調査報告書6』弘前市教育委員会2002
								△	○			『八戸市内遺跡発掘調査報告書22』八戸市教育委員会2006
								○	○			『東通村史』東通村1999
				17後				△	○			『稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会1994
									○			『史跡七戸城北館Ⅰ』七戸町教育委員会1992
有								○	△○			『 豊七戸 城北館Ⅱ』七戸町教育委員会1993
									○			『 豊七戸 城北館Ⅳ』七戸町教育委員会1994
								○?				『弘前市内遺跡発掘調査報告書6』弘前市教育委員会2002
			有?					○?	○			『中野(2)遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会2002
									△			『大光寺新城跡遺跡発掘調査報告書』平賀町教育委員会1990
									○			『 釈遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会2002
									○			『弘前市内遺跡発掘調査報告書8』弘前市教育委員会2004
	蛇目?								○			『弘前市内遺跡発掘調査報告書6』弘前市教育委員会2002
有									○			『八戸市内遺跡発掘調査報告書22』八戸市教育委員会2006
	蛇目								○			『八戸市内遺跡発掘調査報告書22』八戸市教育委員会2006
									○			『尾上遺跡・座野遺跡』青森県教育委員会2003
									○			『 尾 遺跡・座野遺跡』青森県教育委員会2003
									○?			『津軽山革秀寺発掘調査報告書』弘前市教育委員会2002
									○	○		『水本館遺跡』青森県教育委員会1995
										○?		『弘前市内遺跡発掘調査報告書6』弘前市教育委員会2002
						△						『新斗米館跡』鹿角市教育委員会1981
						△						『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』秋田県教育委員会1982
						△	△○		△○			『鶴沼城跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会1980、『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984No58
	蛇目								○	○		『脇本城跡Ⅱ』男鹿市教育委員会2003
	蛇目			17前		△	△○		○			『脇本城跡』男鹿市教育委員会2005
有	蛇目			17後		△	△	△○	△?、○			『脇本城跡Ⅳ』男鹿市教育委員会2006
有				17前多	有	△	△○	△○	○		肥前多	『桐木田遺跡発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財センター1982、『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984No48
有	蛇目			17後		△	△	△	○			『石鳥谷館跡』秋田県教育委員会1998
				17前			△○	○	○		1604年完成の秋田藩佐竹氏居城	『久保田 城跡』秋田市教育委員会1992
						△					1604年完成の秋田藩佐竹氏居城	『久保田 城跡』秋田市教育委員会1989
有						△			△○			『花輪館跡試掘調査報告書、下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市教育委員会1984、『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984No56
有	多、蛇目も	青磁、灰吹			有	△	△○	○	△○	○		『秋田市湊城跡』秋田市教育委員会2007
多	有、蛇目多	染付、青磁		17、18		△	△○	△○	△○	○	陶器磁器共に肥前多、柿右衛門窯	『藩校明徳館跡』秋田市教育委員会2002
有			18後半、19	17、18	有	△	△○	△○	△○	○		『東根小屋町遺跡』秋田県埋蔵文化財センター2005
							△					『 龍門 寺茶畑跡・向山遺跡』秋田県埋蔵文化財センター2004
							○					能登谷宮康「大曲市蛭川遺跡より採集された遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター紀要4』1989
							○?					『脇本石館遺跡詳細分布調査報告』男鹿市教育委員会1999
					有		△○	△○	○			『 龍門 寺茶畑跡・向山遺跡』秋田県埋蔵文化財センター2004
有							△○	△○	○			『 久保田 城跡』秋田市教育委員会1992
有			18	17後、18			○	△○	○			『脇神館跡』秋田県教育委員会1999
有				17			△		△○			『瀬沼遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会1982

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝緑皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
138	秋田	払田棚	仙北郡仙北町	散布地					有					
139	秋田	石名館	仙北郡六郷町											
140	秋田	茂竹沢遺跡	平鹿郡山内村	集落										
141	秋田	古野	秋田市上北手古野	集落										
142	秋田	天戸森遺跡	鹿角市花輪	散布地										
143	秋田	祓川	男鹿市船川港	神社 門前										
144	秋田	山王岱遺跡	大館市	神社										
145	秋田	鳥屋場館	男鹿市船川港											
146	秋田	延命寺台	男鹿市脇本富永	散布地										
147	秋田	待入Ⅲ遺跡	秋田市	集落										
148	秋田	寺内焼窯跡	秋田市	窯跡										
149	山形	東屋敷館跡	米沢市											
150	山形	山形城三の丸	山形市	城館		多	多		有					
151	山形	城南町（山形城三の丸）	山形市城南町	集落・城館		多	有							
152	山形	双葉町	山形市双葉町	集落・城館	有？	有	多		多、小坏	碗、皿	有			
153	山形	双葉町	山形市双葉町	集落・城館		多	多							
154	山形	大在家	高島町高島	集落		有								
155	山形	小反	最上郡鮭川村京塚	散布地		有								
156	山形	観音堂	山形市青田	集落		有								
157	山形	小田島城	東根市東根	城館	小坏	多	有			皿	有	有		
158	山形	飛泉寺	西置賜郡小国町	集落		多					有			
159	山形	鶴ヶ岡城	鶴岡市馬場町	集落		多	多						皿、中皿	
160	山形	鶴ヶ岡城	鶴岡市馬場町	城館			多				有			
161	山形	藤治屋敷	山形市中野	集落										
162	山形	三条	寒河江市	城館					有		有			
163	山形	北小屋屋敷	米沢市窪田町	館						皿	有			
164	山形	東畑A	南陽市俎柳	用水										
165	山形	大道下	鶴岡市寺田	集落										
166	山形	堤屋敷	米沢市万世町	城館							有？			
167	山形	米沢城	米沢市	城館						火入・皿	有			
168	山形	上野	南陽市上野	集落										
169	山形	尾浦城	鶴岡市大山	城館										
170	山形	洪江	山形市洪江	墓										
171	山形	坂ノ上	山形市松原	道路										
172	山形	向河原	山形市洪江	散布地										
173	山形	鶴の木館	南陽市鍋田	集落										
174	新潟	子安	上越市子安	集落		有								
175	新潟	福島城跡	上越市	城館		有								
176	新潟	伝至徳寺	上越市東雲町	寺院										
177	新潟	蟹沢	上越市滝寺	集落		有	多		有、小坏	碗	有		皿	
178	新潟	坊ヶ入墳墓	西蒲原郡巻町角海浜	墓域										
179	新潟	江道	十日町市	散布地		有	有							
180	新潟	来迎寺	三条市井栗	包蔵地		有							皿	
181	新潟	来迎寺	三条市井栗	包蔵地										
182	新潟	高田城下鍋屋町	上越市東本町	城下町		有	有				多	有	皿多、中皿	有
183	新潟	佐渡金山（佐渡奉行所跡）	佐渡郡相川町	奉行所		有	多、平底も		有、小坏		有		皿・中皿	

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
							△○		○			『私田備録』秋田県教育委員会1995
							△○		○			『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984
							○		○			『東北縦断自動車道東和1秋田線発掘調査報告書XIII』秋田県教育委員会1993
有	有、蛇目		18					△○	○			『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書19』秋田県教育委員会1995
								△	○	○		『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書II』秋田県教育委員会1994
有？									○			『男鹿市内遺跡発掘調査報告書』男鹿市教育委員会2003
有	有								○			『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V』秋田県埋蔵文化財センター1992
									○？			『鳥屋場館跡発掘調査報告書』男鹿市教育委員会2000
	蛇目								○	○		『延命寺台遺跡発掘調査報告書』男鹿市教育委員会1984
									○	○		『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告II』秋田県教育委員会1992
									○	○		『寺内焼窯跡』秋田県教育委員会1991
									○	○		『東屋敷館跡発掘調査報告書』米沢市教育委員会1998
有				18前		△	△○	○	○			『山形城三の丸跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2005
有				17前		△	△○	△○	○			『双葉町遺跡・城南町遺跡発掘調査報告書』山形市教育委員会2006
				17前、後	有	△	△○	△○	○		肥前多	『双葉町遺跡発掘調査報告書近世編』山形市教育委員会2004
			18前			△	△○	○	○			『双葉町遺跡・城南町遺跡発掘調査報告書』山形市教育委員会2006
有	有					△	△○	○	○		福島県岸部の陶器	『大在家遺跡第1次・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
	蛇目	青磁				△	△		○			『小反遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
有（九）						△		○	○			『観音堂遺跡』山形市教育委員会2004
有	蛇目	陶器火入		17	有	△	△○	△○	△○	○		『小田島城跡』山形県埋蔵文化財センター2004
有	有、蛇目も		19初広東	17前	有	△	△○	△○	○	○		『飛泉寺跡遺跡』山形県埋蔵文化財センター2004
有	有、蛇目も	青磁、灰吹		17多、18、後	有	△	△○	△○	△○	△○	陶磁器ともに肥前多	『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2002
				17前			△	△○				『市内遺跡分布調査報告書6』鶴岡市教育委員会2003
				17			△	△			播鉢のみ	『服部遺跡・藤治屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2004
有				17前	有		△○	△○	○			『三条遺跡第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2001
有	蛇目						△○	△	○			『北小屋屋敷 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2002
有							△		○			『東畑A遺跡』山形県埋蔵文化財センター2003
							○		○			『市内遺跡分布調査報告書6』鶴岡市教育委員会2003
								△？				『稲荷山館跡・堤屋敷発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
有	蛇目							△○	○			『米沢城跡』山形県埋蔵文化財センター2004
有？								○	○			『上野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
有								○	○			『市内遺跡分布調査報告書7』鶴岡市教育委員会2004
多									○		大堀相馬焼	『渋江遺跡』山形県埋蔵文化財センター2002
多									○		陶器・磁器ともに後期は在地主	『小松原窯跡・長著屋敷遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
有									○			『向河原遺跡第5・6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2005
									○	○		『鶴の木館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター2006
						△						『市内遺跡確認調査概要報告書』上越市教育委員会1993
						△						『福島城跡緊急発掘調査概報III』直江津市教育委員会1970
				17前？		△						『伝至徳寺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会1983
		陶器		17前、後	有	△	△○	△○	△		越中瀬戸	『上信越自動車道関係発掘調査報告書』新潟県教育委員会2004
					多	△	△	△	△			『城瀬寺跡・坊ヶ入墳墓』巻町教育委員会1985
有						△	△		○			『江道B・C遺跡発掘調査概要報告書』十日町市教育委員会2005
有？						△			△○			『来迎寺遺跡』三条市教育委員会1997
									△			『来迎寺遺跡II』三条市教育委員会1998
多	多蛇目		後期	17前・後、18、後期	有	△	△	△○	△○	△○		『埋蔵文化財発掘調査報告書41高田城下鍋屋町遺跡』新潟県教育委員会1986
有	蛇目	18、灰吹も	18	17		△	△○	△○	△○	○		『佐渡金山遺跡（佐渡奉行所跡）』相川町教育委員会2001

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
184	新潟	佐渡金山（佐渡奉行所跡）	佐渡郡相川町	奉行所										
185	新潟	佐渡金山（北御役宅跡）	佐渡郡相川町	奉行所		有	平底						皿	
186	新潟	新発田城跡	新発田市大手町	城館	薬灰皿？	有							中皿	
187	新潟	新発田城	新発田市	城館		有								
188	新潟	新発田城	新発田市	城館	有	有								
189	新潟	春日山城跡	上越市大字大豆	城館										
190	新潟	春日山城跡	上越市大字大豆	城館										
191	新潟	春日山城跡	上越市大字大豆	城館										
192	新潟	辛子田	見附市新潟町	散布地										
193	新潟	横曽根	上越市横曽根	集落										
194	新潟	池田	上越市											
195	新潟	蔵王堂城跡	長岡市	城館			有							
196	新潟	堂ノ前	見附市	散布地							有			有
197	新潟	城田	岩船郡神林村	集落			平底							
198	新潟	元屋敷	見附市耳取町	散布地								有	皿	有
199	新潟	二之町	村上市二之町	城館						碗	多		皿	
200	新潟	十二ノ木南	見附市	散布地										
201	新潟	城願寺	西蒲原郡巻町角海浜	寺院										
202	新潟	三光館跡	新発田市上三光	館跡								有？		
203	新潟	坪ノ内館	新井市大字長森											
204	新潟	水原代官所	北蒲原郡水原町	代官所										
205	新潟	村松城跡	中蒲原郡村松町	城館										
206	新潟	宮野	上越市三ツ橋新田	集落										
207	新潟	宮林B	南魚沼郡湯沢町神立											
208	新潟	宝積寺旧境内	新発田市上三光	寺院										
209	新潟	正尺A	豊栄市葛塚	集落										
210	新潟	前田	見附市	散布地										
211	富山	水橋金広・中馬場	富山市	集落		有								
212	富山	吉野	魚津市吉野	集落		有								
213	富山	間尽	高岡市手洗野	集落		有？								有
214	富山	山下Ⅱ	魚津市	集落		有							皿	
215	富山	田尻	東砺波郡福野町	集落		有	有							
216	富山	田尻	東砺波郡福野町	集落		有	有						皿	有
217	富山	手洗野赤浦	高岡市手洗野	集落		有								
218	富山	水橋金広・中馬場	富山市	集落		有	有						皿	有
219	富山	岩坪岡田島	富山市岩坪	集落		有							皿	
220	富山	任海宮田	富山市任海	集落								有		
221	富山	任海宮田	富山市任海	集落										
222	富山	梅原胡摩堂	西砺波郡福光町	集落		多	有							
223	富山	梅原胡摩堂	西砺波郡福光町	集落		多	有？							
224	富山	梅原胡摩堂	西砺波郡福光町	集落	有	多	多		有	有	多	多	皿多	多
225	富山	善徳寺前	東砺波郡城端町	寺院・集落										有
226	富山	善徳寺前	東砺波郡城端町	集落		有					有	有	皿・中皿	有
227	富山	下老子笹川	高岡市	集落		有					有	有	皿多	多
228	富山	中名	婦負郡婦中町	集落										
229	富山	中名V	婦負郡婦中町	集落							有	有	皿多・中皿	有

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
多	有								△○			『佐渡金山遺跡 (佐渡奉行所跡) 相川町教育委員会2002
				17	有	△	△○	△○	△○			『佐渡金山遺跡 (北 御役宅跡) 相川町教育委員会2002
有				17、18	有	△	△	△○	△○	○		『新発田城跡 発掘 調査報告書Ⅰ(Ⅰ～Ⅲ区) 新発田市教育委員会2004
			18前、19前	17前		△	△○		○	○		『新発田城跡 発掘 調査報告書Ⅱ 新発田市教育委員会1997
	蛇目			17前多		△	△○		○			『新発田城跡 発掘 調査報告書Ⅲ 新発田市教育委員会2001
									○	○		『春日山城跡 発掘 調査概報Ⅱ 上越市教育委員会1980
						△			○			『春日山城跡 発掘 調査概報Ⅵ上越市教育委員会1983
							△				越中瀬戸か	『春日山城跡 発掘 調査概報Ⅺ 上越市教育委員会1993
						△				○		『辛子田 A遺跡 辛子田 B遺跡 見附市教育委員会2006
							△					『市内遺跡 調査概要報告書 上越市教育委員会1993
							△					『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘 調査報告書Ⅰ 新潟県教育委員会、1985
							△					『蔵王堂城址 発掘 調査報告書 蔵王市教育委員会1981
	蛇目			17前			△	△	○			『貫舟休場遺跡Ⅰ・前田遺跡・堂ノ前遺跡 見附市教育委員会2004
有				17前			△○	○	△○			『城田遺跡 見附市教育委員会2001
多	蛇目			18			○	○	△○			『見附市遺跡 範囲確認調査報告書 見附市教育委員会1998
有				17	有		△○	△○	△○	○	柿右衛門様式色絵、柿右衛門窯製品	『二之町遺跡 村上市教育委員会1996
							△			○		『十二ノ木北 遺跡・十二ノ木南遺跡 見附市教育委員会2006
有	有	18火入	後期	17後、18	有			△○	△○	○	柿右衛門様式皿	『城瀬 寺跡 坊々入墳墓 巻町教育委員会1985
									△			『宝積寺 日境内三光館跡 新発田市教育委員会1986
	有蛇目								○			『上新バイパス関係 遺跡 発掘 調査報告Ⅱ 新潟県教育委員会1986
	蛇目		18後						○	○		『水原城址 及水原代官所址 発掘 調査報告書 水原町教育委員会1977
有		青磁							○	○		『村松城跡 発掘 調査報告書 村松町教育委員会1982
有									○	○		『北陸自動車道埋蔵文化財発掘 調査報告書宮野遺跡 新潟県教育委員会、1985
									△○	○		『川久保遺跡 Ⅱ宮林B遺跡 湯沢町教育委員会1987
									△○	○		『宝積寺旧 境内・三光館跡 新発田市教育委員会1986
	蛇目	陶胎染付		後期					△○	△		『日本海沿岸東北自動車道関係発掘 調査報告書Ⅱ 新潟県教育委員会2001
										○	肥前系磁器	『貫舟休場遺跡Ⅰ・前田遺跡・堂ノ前遺跡 見附市教育委員会2004
						△					越中瀬戸	『富山市水橋金広・中馬場遺跡 発掘 調査報告書 富山市教育委員会2001
	有、蛇目も					△		○	○		越中瀬戸	『吉野遺跡 発掘 調査報告書 魚津市教育委員会2000
	蛇目					△			○		越中瀬戸	『間尾遺跡 調査報告 高岡市教育委員会2000
	蛇目					△			△○		越中瀬戸	『山下Ⅱ遺跡 発掘 調査報告書 魚津市教育委員会1997
						△	△				越中瀬戸	『東海北陸自動車道関連発掘 調査概報2 富山県文化振興財団1991
						△	△		△○		越中瀬戸	『東海北陸自動車道関連 発掘 調査概報Ⅲ 富山県文化振興財団1996
	蛇目					△	△		○		越中瀬戸多	『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸遺跡 発掘調査報告 富山県文化振興財団2007
						△	△		○		越中瀬戸多	『富山市水橋金広・中馬場遺跡 発掘 調査報告書Ⅱ 富山市教育委員会2006
有						△			△○		越中瀬戸多	『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸遺跡 発掘調査報告 富山県文化振興財団2007
	蛇目多					△			△○		越中瀬戸主	『任海宮田遺跡 発掘 調査報告Ⅰ 富山県文化振興財団2006
			18						△○		越中瀬戸もあり	『任海宮田遺跡 発掘 調査報告Ⅱ 富山県文化振興財団2007
					有	△	△				越中瀬戸	『東海北陸自動車道関連発掘 調査概報 富山県文化振興財団1991
						△	△				越中瀬戸	『東海北陸自動車道関連発掘 調査概報 富山県文化振興財団1992
多	有、蛇目も	青磁、陶胎染付	18後	17前、後	多	△	△○	△○	△○	○	越中瀬戸、出石か	『東海北陸自動車道関連発掘 調査報告Ⅱ 富山県文化振興財団1995
			18後半	17			△	△○	○		越中瀬戸少しあり	『善徳寺前遺跡 発掘 調査報告Ⅱ 城端町教育委員会2001
有	有、蛇目も	青磁・染付、陶器	18後、19初	17、19		△	△○	△○	△○	△○	越中瀬戸	『善徳寺前遺跡 発掘 調査報告Ⅲ 城端町教育委員会2004
有	有、蛇目も					△	○	△○	△○	○	越中瀬戸多い	『下老子笹川遺跡 発掘 調査報告 富山県文化振興財団2006
					有	△	○	○		○	越中瀬戸多	『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡 発掘 調査報告 富山県文化振興財団2003
有	有、蛇目も		18、19前	17後多、19			○	△○	△○	△○	越中瀬戸、後期は地方窯磁器主	『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡 発掘 調査報告 富山県文化振興財団2005

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
230	富山	中名Ⅵ	婦負郡婦中町	集落						碗			皿	有
231	富山	石名田木 舟	砺波郡	集落		有							皿	
232	富山	出	魚津市	集落		有								有
233	富山	梅原加賀坊	西砺波郡福光町	集落		有								
234	富山	北高木	射水郡大島町	集落		有?								
235	富山	越中国府	高岡市伏木	集落										有
236	富山	越中国府	高岡市伏木	集落		多	多							
237	富山	早月上野	魚津町上野	集落										
238	富山	増山	砺波市増山	城下町		有								
239	富山	柳田	下新川郡朝日町柳田	集落										
240	富山	弓庄	中新川郡上市町柿沢外	集落										
241	富山	弓庄	中新川郡上市町柿沢外	集落										
242	富山	五社	小矢部市五社	集落									皿	多
243	富山	富山城	富山市総曲輪	城下町								有		有
244	富山	中尾新保谷内	氷見市	散布地										
245	富山	清水島Ⅱ	婦負郡婦中町	集落						碗		有	皿	
246	富山	若栗中村	黒部市	集落										
247	富山	大野江瀨	氷見市	散布地									皿	
248	富山	正印新	中新川郡上市町										皿	
249	富山	砂子田Ⅰ	婦負郡婦中町	集落										
250	富山	梅原安丸	西砺波郡福光町	集落							有			
251	富山	江尻	西砺波郡福岡町	集落								多	皿多	多
252	富山	中尾坊田・中尾新保谷内	氷見市中尾	集落									皿	
253	富山	石塚	高岡市上北島	集落										有
254	富山	道場Ⅰ・Ⅱ	婦負郡婦中町	集落									皿	
255	富山	小林	射水郡大島町	集落										
256	富山	吉倉B	富山市新保	集落							有	有	皿	多
257	富山	館窪割	中新川郡上市町										皿?	
258	石川	金石本町	金沢市金石本町	散布地		有			有					
259	石川	白山橋	鳳至郡穴水町西川島	集落		有	多					有	皿	
260	石川	木 越光琳寺	金沢市木 越町	集落		多	多							
261	石川	大町・縄手	鳳至郡穴水町西川島	集落		有				有		有		
262	石川	九谷A	江沼郡山中町	窯	碗		鉄(平底)					多	皿	多
263	石川	中瀬	鳳至郡穴水町西川島			有							皿	
264	石川	久昌寺	金沢市安江町	墓地										有
265	石川	昭和町	金沢市昭和町	城下町		多	多		多、小坏、壺も	中皿	有	多	中皿	
266	石川	昭和町	金沢市昭和町	城下町		有	有		多			有	皿・中皿	
267	石川	昭和町	金沢市昭和町	城下町		多				皿、碗		有	中皿	有
268	石川	本町一丁目	金沢市本町	城下町		有	有		有	碗		多	皿	有
269	石川	本町一丁目	金沢市本町	城下町		有						有		有?
270	石川	本町一丁目	金沢市本町一丁目	城下町							有	有		多
271	石川	本町一丁目	金沢市本町一丁目	城下町		多	有							有
272	石川	木 ノ新保	金沢市北安江町	城下町									中皿	有
273	石川	木 ノ新保	金沢市北安江町	城下町		多	有			皿		多	皿	多
274	石川	八田中中村	松任市八田中町	集落		有	多		有			多	皿	
275	石川	高岡町	金沢市高岡町	城下町		多	多		有	碗・皿	有		皿	

くわわんか碗	くわわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
									△○		越中瀬戸	『中名V・VI遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2005
						△	△		△○	○	越中瀬戸	『石名田木舟遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2002
	多、蛇目も			18、後		△			△○	○	越中瀬戸	『出遺跡 発掘調査報告書』魚津市教育委員会1997
						△			△○		越中瀬戸	『東海北陸自動車道関連発掘調査報告書』富山県文化振興財団1996
						△		○	○		越中瀬戸多	『北高木遺跡』大島町教育委員会2005
	有、蛇目も								△○		越中瀬戸	『越中国府関連遺跡調査概報Ⅶ』高岡市教育委員会1994
					有	△	△			○	越中瀬戸	『越中国府関連遺跡 調査概報Ⅷ』高岡市教育委員会1996
						△			△			『早月上野遺跡 第2次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会1976
						△	△○	○	△○	○		『岩 埴野遺跡群予備調査概報』砺波市教育委員会1978、『国内出土の肥 前陶器』九州陶磁文化館1984
							○	△○	△○			『柳田遺跡、柳田古墳緊急発掘調査概要』富山県教育委員会1975
							○	○	△○			『弓庄城跡 第2次緊急発掘調査概要』上市町教育委員会1982
								○	△○			『弓庄城跡 第3次緊急発掘調査概要』上市町教育委員会1984
	多、蛇目		19前				○		△○		越中瀬戸	『五社遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団1998
	有、蛇目も	染付・青磁 灰吹	18前、後多	17後、18、 19	有		○	△○	△○	△○	越中瀬戸多い	『富山城跡 発掘調査報告書』富山市教育委員会2006
								△?○?			越中瀬戸	『埋蔵文化財調査概要』富山県文化振興財団2005
	蛇目							△	△○		越中瀬戸	『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2002
				17後				△	△○		越中瀬戸	『埋蔵文化財調査概要』富山県文化振興財団2004
								○	△○		越中瀬戸	『埋蔵文化財調査概要』富山県文化振興財団2005
								○	△○			『国内出土の肥 前陶器』九州陶磁文化館1984
	蛇目				有			△	○		越中瀬戸	『中名V・VI遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2005
								△	○?			『東海北陸自動車道関連発掘調査報告書』富山県文化振興財団1996
	蛇目多	青磁	18後半	17後、18				△○	△○	○	越中瀬戸	『江尻遺跡・猿島遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2003
								△			越中瀬戸あり 伊万里あるが図 なし	『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告』富山県文化振興財団2002
									○			『石塚遺跡 調査概要』高岡市教育委員会1999
		青磁	18後半						○		越中瀬戸	『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団2004
	有								○		越中瀬戸	『小林遺跡』大島町教育委員会2003
	蛇目		18後半						△○	○	越中瀬戸	『吉倉B遺跡 発掘調査報告』富山県文化振興財団2005
	有								○	○		『弓庄城跡 第3次緊急発掘調査概要』上市町教育委員会1983
				17前	有	△	△○	○				『金石本町遺跡Ⅰ』金沢市教育委員会1996
						△		△				『西川島』穴水町教育委員会1987
				17前・後	有	△	△○	△	○			『木越光琳寺遺跡』石川県立埋蔵センター1998
						△	△	△	△○			『西川島』穴水町教育委員会1987
有	有、蛇目				有	△	△	△	△○		九谷焼窯場、越 前播鉢	『九谷A遺跡Ⅰ』石川県教育委員会2005
						△	△○		△			『西川島』穴水町教育委員会1987
有	蛇目				多	△		△○	△○			『久昌寺遺跡Ⅰ』金沢市埋蔵文化センター2004
有		有	18前	17前・後	多	△	△○	△○	△○	○	在地、九谷多い	『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』金沢市教育委員会2001
有			19前	17多	多	△	△○	△○	△○	○		『金沢市昭和町遺跡Ⅱ』金沢市埋蔵文化センター2003
有	蛇目			17後	有	△	△○	△○	△○	△○		『金沢市昭和町遺跡Ⅲ』金沢市埋蔵文化センター2004
	有、蛇目	青磁多、 灰吹	18前、中	17後、後期	多	△	△○	△○	△○	○		『石川県金沢市本町1丁目遺跡Ⅲ』金沢市埋蔵文化センター2003
	有	陶器	18前、19	17	有	△	△○	△○	○	○		『石川県金沢市本町1丁目遺跡Ⅳ』金沢市埋蔵文化センター2006
有、丸も	多、蛇目		18	17後、18、 19	有		△	△○	△○	△○		『本町一丁目遺跡Ⅰ』金沢市教育委員会1995
			19前?	17前・後、 18		△	△○	△○	△○	○	越前焼、再興九 谷	『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会1997
多	蛇目	青磁、染付	18前・後	18、19		△	○	△○	△○	○		『木ノ新保遺跡Ⅱ』金沢市埋蔵文化センター2005
有	蛇目	染付・陶器、染 付・青磁灰吹	18前・後、 19	17前、後、 18、後期	多	△	△○	△○	△○	△○	胎土目多いが砂 目少ない、肥前磁 器多量	『木ノ新保遺跡Ⅰ』金沢市埋蔵文化センター2002
	蛇目			17前、18	有	△	△○	○	△○	○	越中瀬戸、九谷	『八田中遺跡群』石川県立埋蔵文化センター1990
		青磁		17、後期		△	△○	△○	△○	△○		『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』金沢市埋蔵文化センター2001

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
276	石川	高岡町	金沢市高岡町	城下町		多	有					有		
277	石川	安江町第1次	金沢市安江町	城下町		多			有、小坏					
278	石川	安江町第2次	金沢市安江町	城下町		多	多	皿		中皿		有	皿・中皿	
279	石川	彦三町	金沢市彦三町	城下町		多				有				
280	石川	金沢城石川門	金沢市	城			多							
281	石川	金沢城三ノ丸	金沢市丸の内	城跡		有								多
282	石川	三納アラムヤ	石川郡野々市町	集落		有								
283	石川	妙国寺門前	金沢市東山	城下町			有(平底)							
284	石川	耳聞山	加賀市大聖寺耳聞山町	城下町					有、小坏					
285	石川	中屋ヘシタ	金沢市中屋町	集落								有		有
286	石川	桜町	鳳至郡穴水町西川島	集落			有							
287	石川	醒ヶ井	金沢市醒ヶ井町	集落			有					有	皿	有
288	石川	片町2丁目	金沢市片町	城下町										
289	石川	金沢城跡	金沢市丸の内	城跡										
290	石川	栗田	石川郡野々市町	集落								有		有
291	石川	松任城	松任市古城町	城跡								有		有
292	石川	観音堂B	金沢市観音堂町	農地										
293	石川	三納トヘイダゴシ	石川郡野々市町	集落									皿	
294	石川	西島	加賀市西島	集落										
295	福井	筋生田	福井市筋生田			有	有							
296	福井	豊原寺華蔵院	坂井郡丸岡町豊原	寺院										多
297	福井	福井城	福井市	城跡		有	有		多	碗、皿	多	多、蛸も	皿	多
298	福井	福井城	福井市	城跡		多	有(平底)		有		有	有		
299	福井	一乗谷朝倉氏	福井市城戸ノ内町	城館			有				有?			有
300	福井	松雲院	福井市城戸の内町	寺院			有							
301	福井	小丸城跡	武生市五分市町	城跡			有					有		
302	福井	九十九橋	福井市											
303	福井	柴田氏甘棠館屋敷	敦賀市市野々	屋敷										
304	京都	宮津城跡	宮津市字鶴賀	城館		有	有						皿	
305	京都	宮津城跡	宮津市字鶴賀	城館		多								
306	鳥取	今倉城跡	倉吉市福光	館跡										
307	鳥取	米子城跡Ⅰ	米子市西町	武家屋敷		多	多						皿	
308	鳥取	米子城	米子市	武家屋敷		有	有、平底?							有
309	鳥取	米子城	米子市	武家屋敷		有	有							
310	鳥取	米子城	米子市	武家屋敷		有	多	有?	有、小坏多			有		有
311	鳥取	米子城	米子市	武家屋敷		有	多		多		有		皿	有
312	鳥取	米子城跡9	米子市加茂町	武家屋敷		多	有		多、小坏		有			有
313	鳥取	米子城跡22	米子市加茂町	武家屋敷		有					有	有		有
314	鳥取	米子城跡第25次	米子市西町	武家屋敷		多	有		有	碗		有		有
315	鳥取	米子城	米子市	城下町		有								
316	鳥取	陰田	米子市陰田町			有	有							
317	鳥取	尾高城	米子市尾高	城館										
318	鳥取	車尾	米子市車尾	散布地			有						皿	
319	鳥取	池ノ内	米子市美吉									有		有
320	鳥取	目久美	米子市目久美町	散布地										
321	鳥取	尾高城跡	米子市尾高	城館										

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
				17前、18		△	△○		△○	○		『金沢市高岡町遺跡Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター2003
有	蛇目	青磁		17前・後多、 18多	有	△	△○	△○	△○	○	越中瀬戸、在地 磁器、再興九谷	『安江町遺跡』金沢市教育委員会1997
			18前、19前	17前・後多、 18	多	△	△○	△○	△○		越中瀬戸、肥前 17c多量、再興 九谷	『安江町遺跡』金沢市教育委員会1997
	有		18初			△		△○	△○	○		『彦三町遺跡』金沢市埋蔵文化財センター2002
				17前		△	△○					『金沢城跡石川門前土橋発掘調査報告書Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター1997
						△			○	○		『金沢城跡Ⅱ三ノ丸第1次調査』石川県教育委員会2006
	蛇目					△?			○	○		『栗田遺跡・三納アラムヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡』野々市町教育委員会2006
				17前?			△○					『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』金沢市2006
			18前	17前			△○	○	○		柿右衛門色絵、 九谷焼	『耳聞山遺跡』加賀市教育委員会1994
							△○		△○			『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター2002
有	有						△		△○			『厩跡』穴水町教育委員会1987
有	多	青磁	18前	17後、18			△	△○	△○	○	九谷 お	『金沢市酸ヶ井遺跡』金沢市埋蔵文化財センター2001
有	蛇目	灰吹	18前	17前、18、 19			△○	○	△○	△		『片町2丁目遺跡』金沢市埋蔵文化財センター2005
							△○	○	○	○		『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館1984
				17後				△○	△○		越中瀬戸	『栗田遺跡・三納アラムヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡』野々市町教育委員会2006
	有		18前・後		有			○	△○	○		『松任城二の丸三の丸跡』松任市教育委員会2000
									○			『観音堂B遺跡』金沢市埋蔵文化財センター2005
									△			『栗田遺跡・三納アラムヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡』野々市町教育委員会2006
										○		『加賀市西島遺跡』石川県教育委員会1973
						△	△○					『藤生田遺跡調査概報Ⅰ』福井県教育委員会1988、国内彫の肥前陶磁 九州陶磁文化館1984
有						△	△	○	○	○		『豊原寺跡・華蔵院跡2次発掘調査概報』九岡町教育委員会1982
多	蛇目多	陶胎、灰吹	18前・後半	17前		△	△○	△○	△○	○	越前播鉢・甕、 灯明カウラケ多	『福井城跡Ⅳ』福井市文化財保護センター2004
			18後半			△	△○	○	○	○	越前播鉢多い、 再興九谷群あり	『福井城跡Ⅴ』福井市文化財保護センター2006
							△	△	○			『一乗谷朝倉氏遺跡』福井県立朝倉氏遺跡資料館1991
							△○	○	○			『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ』足羽町教育委員会1966、国内出土の肥前陶磁 九州陶磁文化館1984
							△		△			『小堀跡』武生市教育委員会1987
	有							○	○	○		『九十九橋遺跡調査報告書Ⅰ』1983、田中照久「福井市九十九橋下遺跡の陶磁器について」『福井考古学会誌第2号』福井考古学会1984
		18						○	○	○	柿右衛門窯製品	『柴田氏 甘家館屋敷跡』敦賀市教育委員会1992
						△	△○	○	○	○	慶長5年京極氏 が入り寛永13年 完成	『宮津城跡第3次発掘調査概報』宮津市教育委員会1985
	有					△	△○		○			『宮津城跡第5次発掘調査概報』宮津市教育委員会1986
						△	△○		△			『名倉城跡・今倉遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会1983
				17前		△	△○	○	△○			『米子城跡Ⅰ』米子市教育文化事業団1993
	有、蛇目	陶胎染付?			有	△	△○	△○	○			『米子城跡Ⅱ』米子市教育文化事業団1995
						△	△○	○				『米子城跡Ⅲ』米子市教育文化事業団1995
有、丸			18前			△	△○	△○	△○	○		『米子城跡Ⅶ』米子市教育文化事業団1995
	多、蛇目も	陶胎染付		17前	有	△	△○	△○	△○	○		『米子城跡Ⅷ』米子市教育文化事業団1995
有	蛇目		18後、19前 広東	17前		△	△○	△○	○	○		『米子城跡Ⅸ』米子市教育文化事業団1997
						△	△	○	△○			『米子城跡Ⅹ』米子市教育文化事業団1998
	有		18			△	△○	△○	△○	○		『米子城跡第25次調査』米子市教育文化事業団1999
	蛇目?			17後		△		△?		○		『米子城跡ⅩⅢ』米子市教育文化事業団2003
有						△	△	○	○	○		『陰田遺跡Ⅲ』米子市教育委員会1983、国内出土の肥前陶磁 九州陶磁文化館1984
							△					『尾高城址』米子市教育委員会1978
				17後			△	△○	△○			『車尾7丁目西濱中遺跡』米子市教育文化事業団2004
							△	○	△○			『池ノ内遺跡』米子市教育委員会1986
							△	○	○			『目久美遺跡』米子市教育委員会1986
							△○	○	△○	○		『尾高城址Ⅱ』米子市教育委員会1979、国内出土の肥前陶磁 九州陶磁文化館1984

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
322	鳥取	泉角屋敷	米子市泉	集落										有
323	鳥取	青谷大坪所在	鳥取市青谷町	集落										
324	島根	大峠	益田市久久茂	散布地		有								
325	島根	西川津	松江市西川津町海崎	散布地										
326	島根	石見銀山	大田市大森町	銀山		有								
327	島根	石見銀山	大田市大森町	銀山		有			有？					
328	島根	富田川河床	能義郡広瀬町富田飯梨川河川敷	城下町		多								
329	島根	富田川河床	能義郡広瀬町富田飯梨川河川敷	城下町		多	多		有					
330	島根	富田川河床	能義郡広瀬町	城下町		多	有							
331	島根	古志本郷	出雲市古志町	集落		有	有						皿	
332	島根	古志本郷	出雲市古志町	包含層		有	有(平底)						皿・中皿	有
333	島根	横路古墓	江津市敦川町	集落		有	有				有	有		多
334	島根	石田	安来市吉佐町	寺院関連		有					有			
335	島根	板屋Ⅲ	飯石郡頓原町	集落		有	有				有			
336	島根	馬場	飯石郡三刀屋町	集落		有								有
337	島根	半坂古墓群	松江市玉湯町	古墓		有	有							
338	島根	石見銀山	大田市大森町	武家屋敷		有	有							
339	島根	上久々茂土居	益田市久久茂	城館		有			有					
340	島根	慶光坊	邑智郡瑞穂町山田	古墓		有						有		有
341	島根	島根大学構内	松江市西川津町	散布地										
342	島根	島根大学構内	松江市西川津町	散布地		有								
343	島根	島根大学構内	松江市西川津町	散布地										
344	島根	キタバタケ	邑智郡川本町	集落		有								有
345	島根	本庄川流域条里	松江市上本庄町	散布地										
346	島根	本庄川流域条里	松江市上本庄町	散布地		有？								
347	島根	板屋Ⅰ	飯石郡頓原町	集落					小坏					
348	島根	板屋Ⅱ	飯石郡頓原町	集落										有
349	島根	松江城	松江市	城跡		有	多							
350	島根	恵良	江津市二宮町	集落			多(平底)							
351	島根	二ツ縄手	松江市	散布地			有							
352	島根	森	飯石郡頓原町	集落			有？							
353	島根	大横鋸	飯石郡頓原町	製鉄							有？		皿	有
354	島根	小山	出雲市四路	集落							有(古)			有
355	島根	面白谷	松江市玉湯町	集落										
356	島根	祇園町	津和野町	城下町						有、(18も)				有
357	島根	堂庭	江津市有福温泉町	集落										
358	島根	東船	隠岐郡西郷町	集落										有
359	島根	獅子谷	飯石郡頓原町	製鉄							有		中皿・皿	
360	島根	弓谷たたら	飯石郡頓原町	製鉄										多
361	島根	青原Ⅰ	鹿足郡津和野町	散布地							有？			
362	島根	青原Ⅳ	鹿足郡津和野町	散布地										
363	島根	神原	飯石郡頓原町	集落										有
364	島根	ツツ子Ⅲ	益田市飯田町	集落										
365	島根	宮ノ前	松江市玉湯町	集落										
366	島根	戸井谷尻	飯石郡頓原町	製鉄									皿	
367	島根	市木代官所	邑智郡瑞穂町市木	代官所										有

くらわんか碗	くらわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
	蛇目?			17後?				△?	○	○	播鉢	『泉角屋敷遺跡』米子清敏文化事業団2004
									○			『鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会2006
						△						『上久々茂土居跡・峠跡』鳥根県教育委員会1994
						△	△					『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥根県教育委員会1987
						△	△					『石見銀山遺跡発掘調査概要6』大田市教育委員会1993
				17前		△	△○	○				『石見銀山遺跡発掘調査概要7』大田市教育委員会1994
				17前		△	△○	○				『富田I阿床遺跡発掘調査報告書』広瀬町教育委員会1977
				17前		△	△○	○				『富田川』鳥根県教育委員会1984
						△	△○					『富田II阿床遺跡』広瀬町教育委員会1986
有				17前		△	△○	△○	△○			『古志本郷 竜跡』鳥根県教育委員会2001
	蛇目	陶胎染付	18	17前	有	△	△○	△○	△○			『古志本郷 竜跡』鳥根県教育委員会1999
多	蛇目					△	△○	△○	△○			『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』鳥根県教育委員会2000
	蛇目					△	△?、○	△○	○			『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』鳥根県教育委員会1994
				17前・後	有	△	△	△	○			『板屋III遺跡』鳥根県教育委員会1998
	蛇目		18後半	17		△	△	△	○			『馬場遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会2001
						△	△○		○		在地陶器	『瀬戸乃木湯町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会2006
				17前		△	△○		○			『代官所地役人旧河島家住宅修理工事報告書』大田市教育委員会2002
						△	○		○			『上久々茂土居跡』鳥根県教育委員会1992
					有	△	△		△○		石見焼、在地磁器?	『慶光坊遺跡発掘調査報告書』瑞穂町教育委員会1995
	蛇目								○			『鳥根大学構内遺跡発掘調査概報II』鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター1996
						△						『鳥根大学構内遺跡発掘調査概報I』鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター1994
	蛇目						△		○			『鳥根大学構内遺跡第1次調査』鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター1997
						△			○			『キタバタケ遺跡発掘調査報告書』川本町教育委員会1992
									○			『荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川 流域廻遺跡』鳥根県教育委員会1997
						△?						『荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川 流域糸里遺跡』鳥根県教育委員会1998
				17前	有		△○					『遺跡・板屋I 遺跡・森脇山城跡・阿丹谷止堂跡』鳥根県教育委員会1994
				17前		△	△○	○	○	○		『板屋II遺跡』鳥根県教育委員会1993
	有、蛇目		18			△	△		○	○		『史跡松江城整備事業報告書』松江市教育委員会2004
							△					『恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸神社跡・立女遺跡』鳥根県教育委員会2001
							△					『二ツ縄手遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2001
				17前			△					『森遺跡・板屋I 遺跡・森脇山城跡・阿丹谷 止堂跡』鳥根県教育委員会1994
有	蛇目		18前				○	△○	△○		Ⅱ期磁器高台無袖小坏	『丸山遺跡・横路跡』鳥根県教育委員会2001
	蛇目						△○		△○			『小山遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会1998
							○		○?			『瀬戸乃木湯町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会2006
有	有	灰吹	18後、19初		有		○	△○	△○	○	萩焼	『津和 野城下町 祇園町遺跡』津和 野町教育委員会999
							○		○	○		『堂庭遺跡』江津市教育委員会2004
有?	蛇目							○	○			『東船遺跡』鳥根県教育委員会2002
	蛇目							△○	△○	○		『殿瀬山遺跡獅子谷 遺跡』鳥根県教育委員会2002
多	蛇目		19前					○	○	○	石見陶器	『弓谷 たたら』頼原町教育委員会2000
								△?				『津和 野町内遺跡発掘調査報告書I』津和 野町教育委員会2006
有?									○?	○?		『津和 野町内遺跡発掘調査報告書II』津和 野町教育委員会2006
有?									○			『神原II遺跡』鳥根県教育委員会2002
多									○			『廿子I遺跡・廿子II遺跡』鳥根県教育委員会2006
	蛇目								○			『瀬戸乃木湯町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会2006
有	有		18後半						△○	○		『戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡』鳥根県教育委員会2001
			後期						○	○		『市木代官所跡発掘調査報告書』瑞穂町教育委員会1998

No	県名	出土地	所在地	遺跡性格	岸岳系陶器	陶器胎土目	陶器溝縁皿	砂目磁器	高台無釉碗	京焼風陶器	呉器手碗	刷毛目碗	青緑釉陶器	陶胎染付碗
368	島根	殿淵山	飯石郡頼原町	製鉄										有
369	島根	竹ヶ崎	安来市荒島町	集落										有
370	島根	宮原	邑智郡瑞穂町伏谷	集落										
371	島根	袋尻	松江市平成町	散布地										有
372	島根	上塩冶横穴墓群	出雲市上塩冶町	墓										
373	島根	門生黒谷Ⅱ	安来市門生町	散布地										
374	島根	堂床	八束郡東出雲町	古墳か										
375	島根	高浜Ⅱ	出雲市平野町	散布地										多
376	島根	中原	飯石郡頼原町	散布地										
377	島根	三田谷Ⅰ	出雲市上塩冶町	包含層										
378	島根	相生	益田市市原町	瓦窯										

くらかわんか碗	くらかわんか皿	火入	そば猪口	播鉢	叩き壺・甕	I	II	III	IV	V	備 考	文 献
有(丸)	蛇目								△?、○	○?		『駿酒山遺跡・獅子谷遺跡』島根県教育委員会2002
	有、蛇目	陶胎染付							△○			『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会1 998
									○			『宮原遺跡群分布調査報告書』瑞穂町教育委員会1 996
									○			『袋尾遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会1 998
有									○			『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書』出雲市教育委員会1 998
									○			『生里谷Ⅰ遺跡・門 生里谷Ⅱ遺跡・門 生里谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会1 98
									○			『勝鏡遺跡 堂床古墳』島根県教育委員会1 998
									○			『高浜Ⅱ遺跡』出雲市教育委員会1 999
									○			『中願遺跡』島根県教育委員会1 999
									○			『三田谷 遺跡 (Vol.1)』島根県教育委員会1 999
										○		『観音港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会1 92

凡例

1. 島根から北海道に限る日本海側地域及び岩手における肥前陶磁器の遺跡出土一覧である。
2. 基本的に報告書に掲載されたものであり、同一物が複数報告書に重複掲載されている場合もある。
3. 時期各の欄に記した、△印は肥前陶器、○印は肥前磁器が出土していることを表す。I～Vは時期を表す。(本文参照)
4. 特徴的種類欄には、基本的に報告書に掲載されていれば「有」、報告書に3個体以上、図や写真が掲載されていれば「多」と記した。
5. 猪口、播鉢、火入に記した数字は「世紀」を表し、「後期」とは江戸後期のこと。
6. 刷毛目碗に記した「蛸」は「蛸手」の略。
7. くらかわんか皿に記した「蛇目」は見込を蛇目釉剥ぎしたもの。
8. 陶器溝縁皿に記した「鉄平底」は鉄釉を施し、底部を糸切放しの平底に作られた皿の意。
9. くらかわんか碗に記した「丸」は外面に丸文を散らした碗の意。
10. 備考に記した「越中瀬戸」「九谷焼」「越前焼」「石見焼」などは、そうした焼物の共伴が目立つこと。

※島根から北海道に限る

日本海側地域及び岩手における遺跡
出土分布

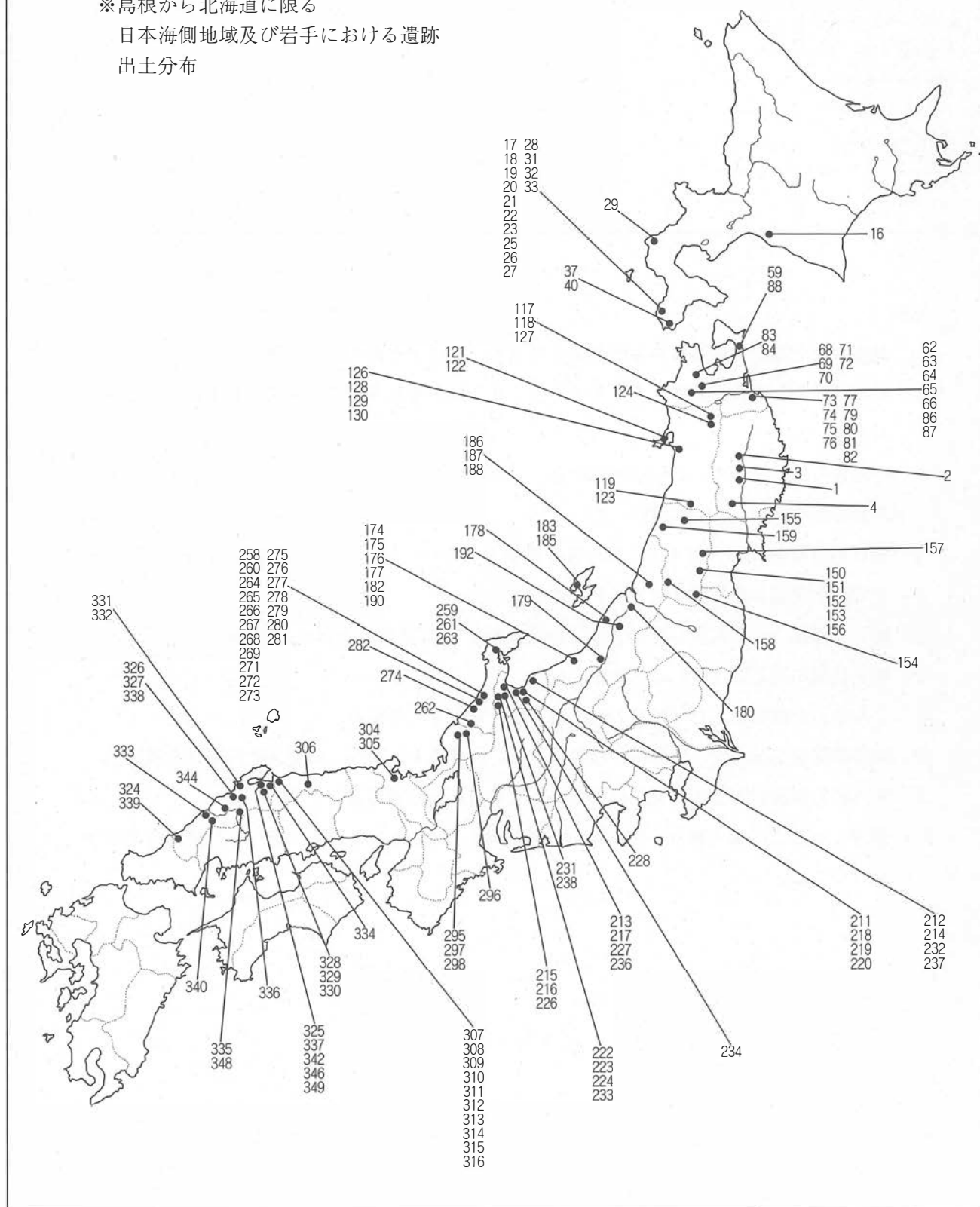


図26 日本海側における肥前陶磁出土遺跡分布図〈Ⅰ期〉

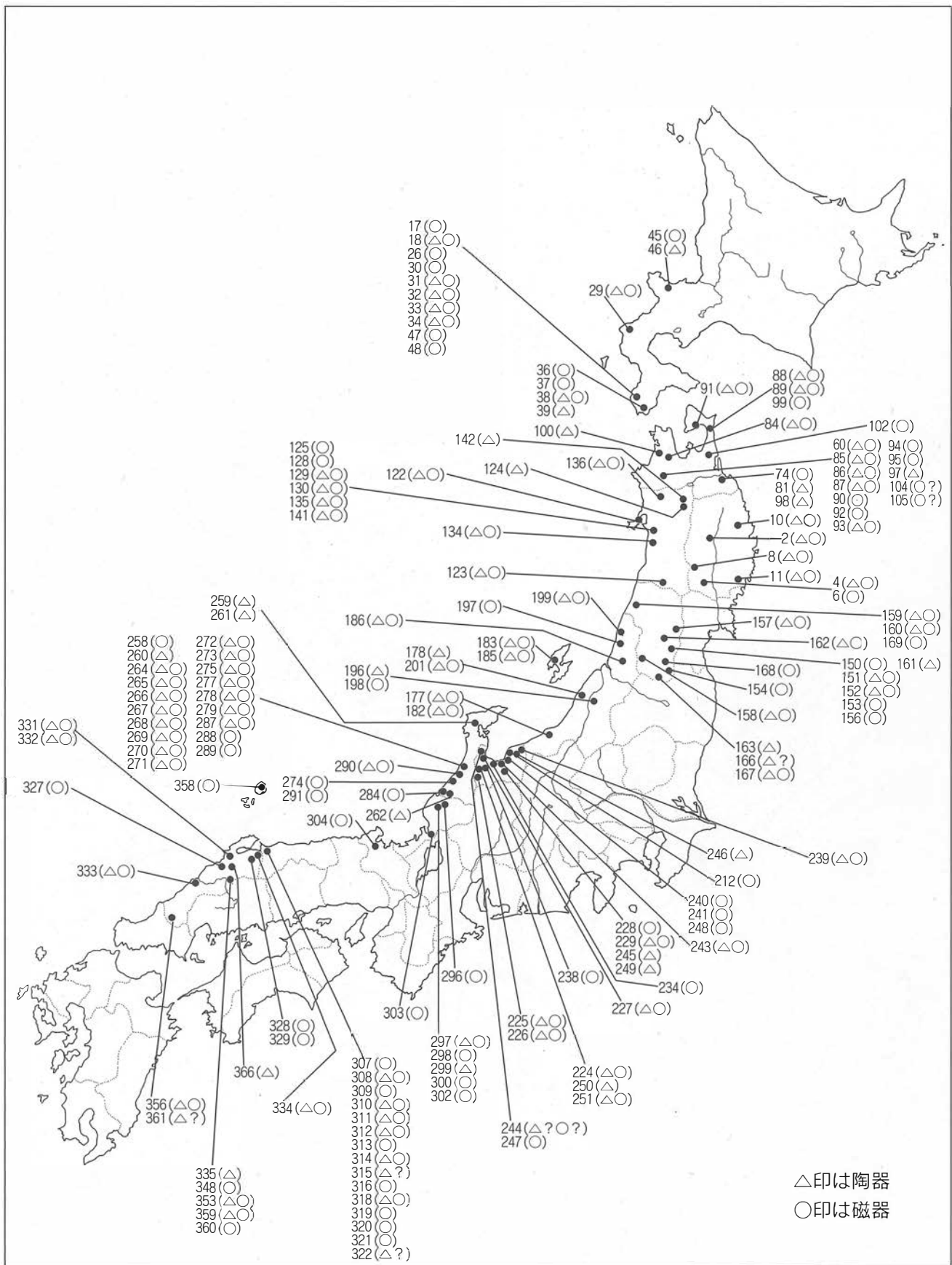


図28 日本海側における肥前陶磁出土遺跡分布図〈Ⅲ期〉

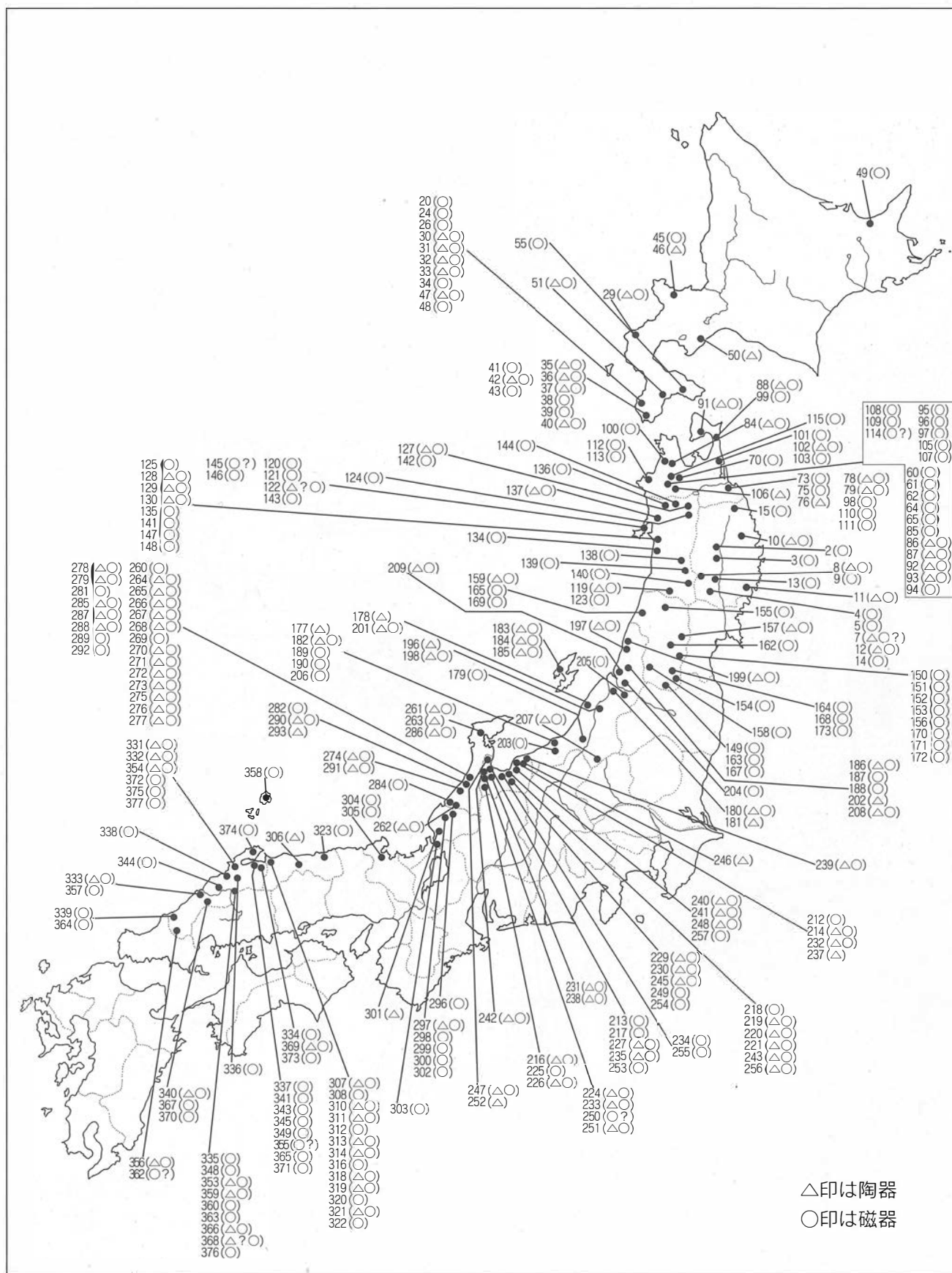


図29 日本海側における肥前陶磁出土遺跡分布図〈Ⅳ期〉

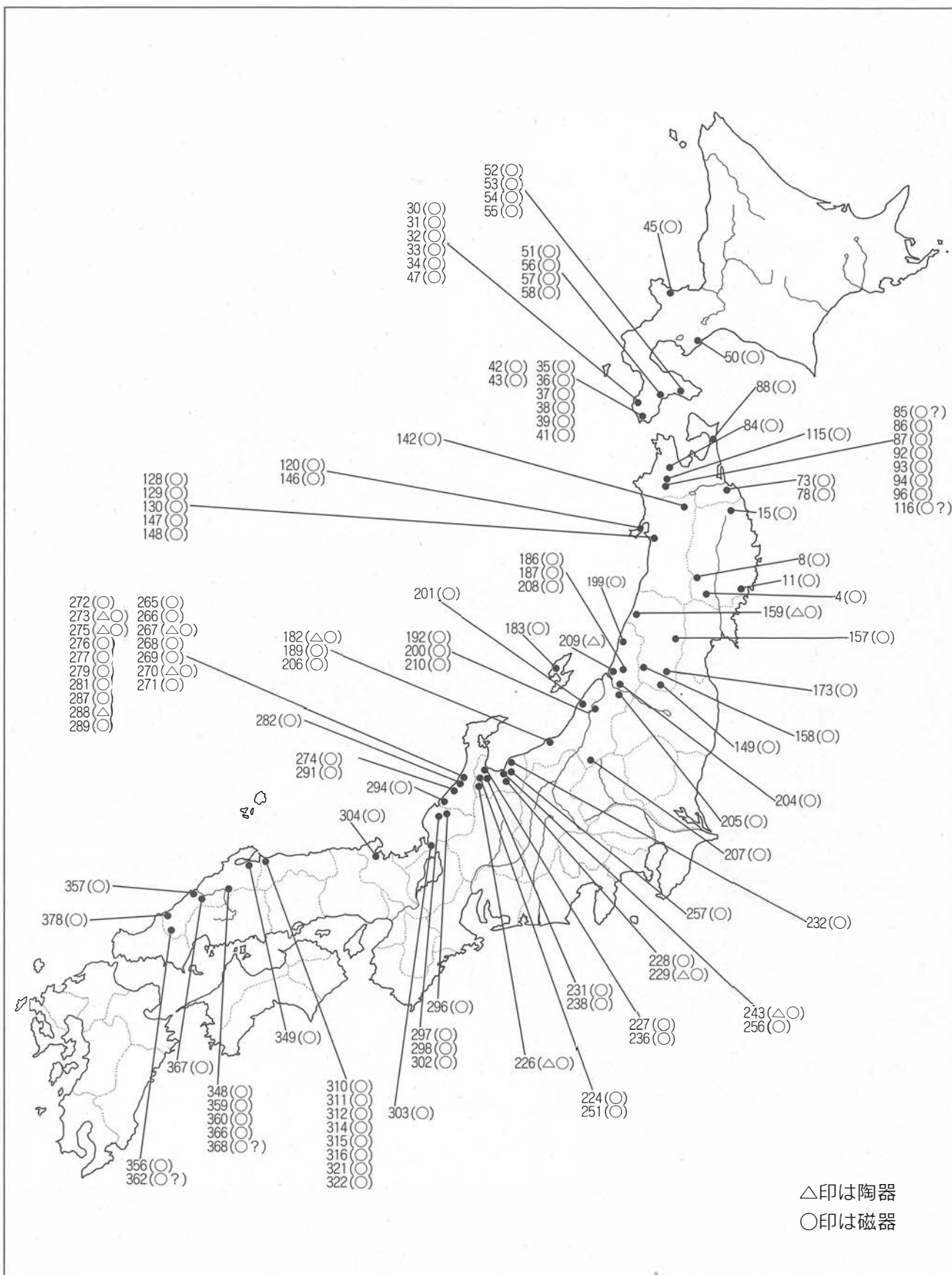


図30 日本海側における肥前陶磁出土遺跡分布図〈V期〉

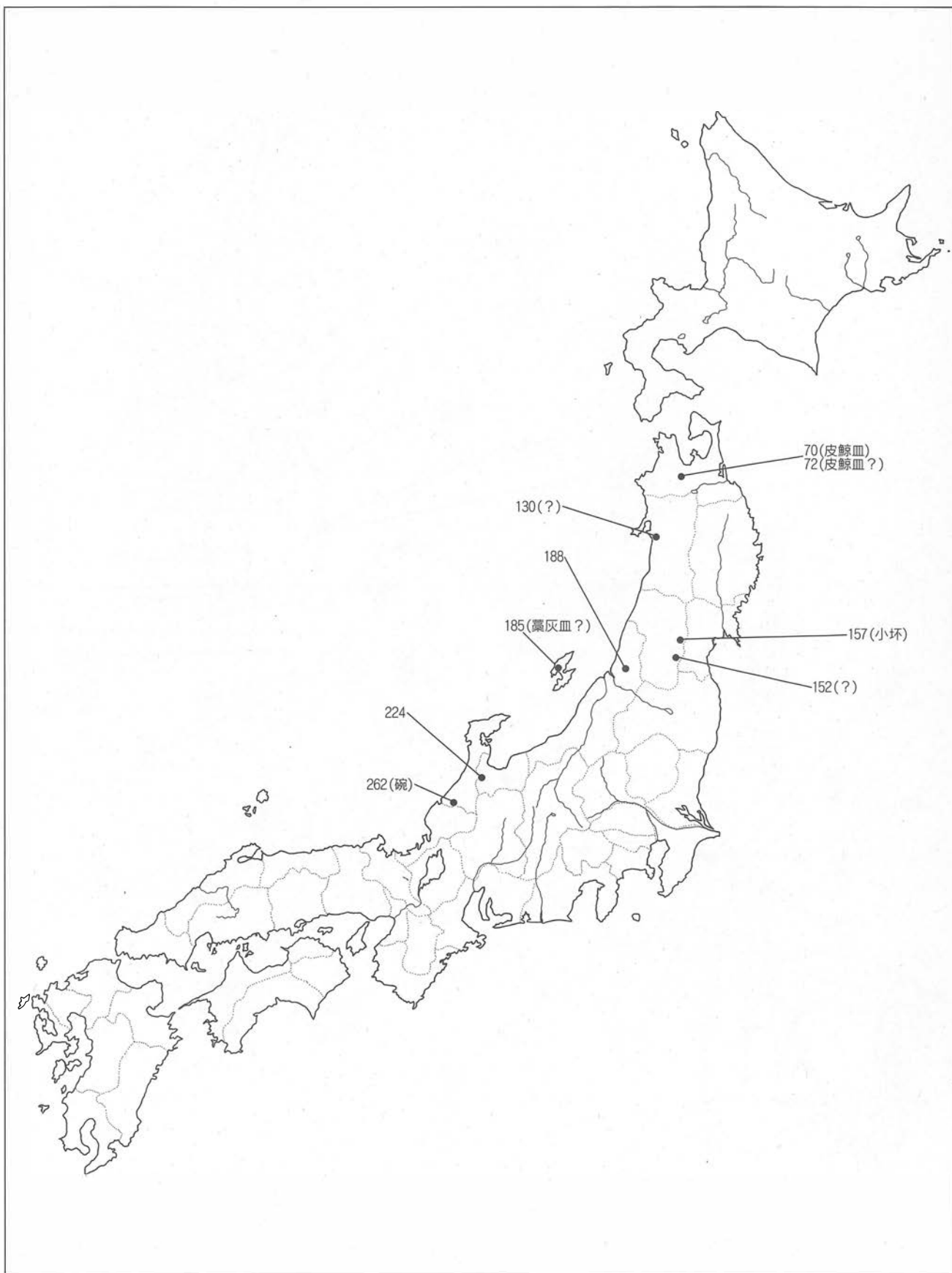


図31 日本海側における「岸岳系陶器」出土分布図

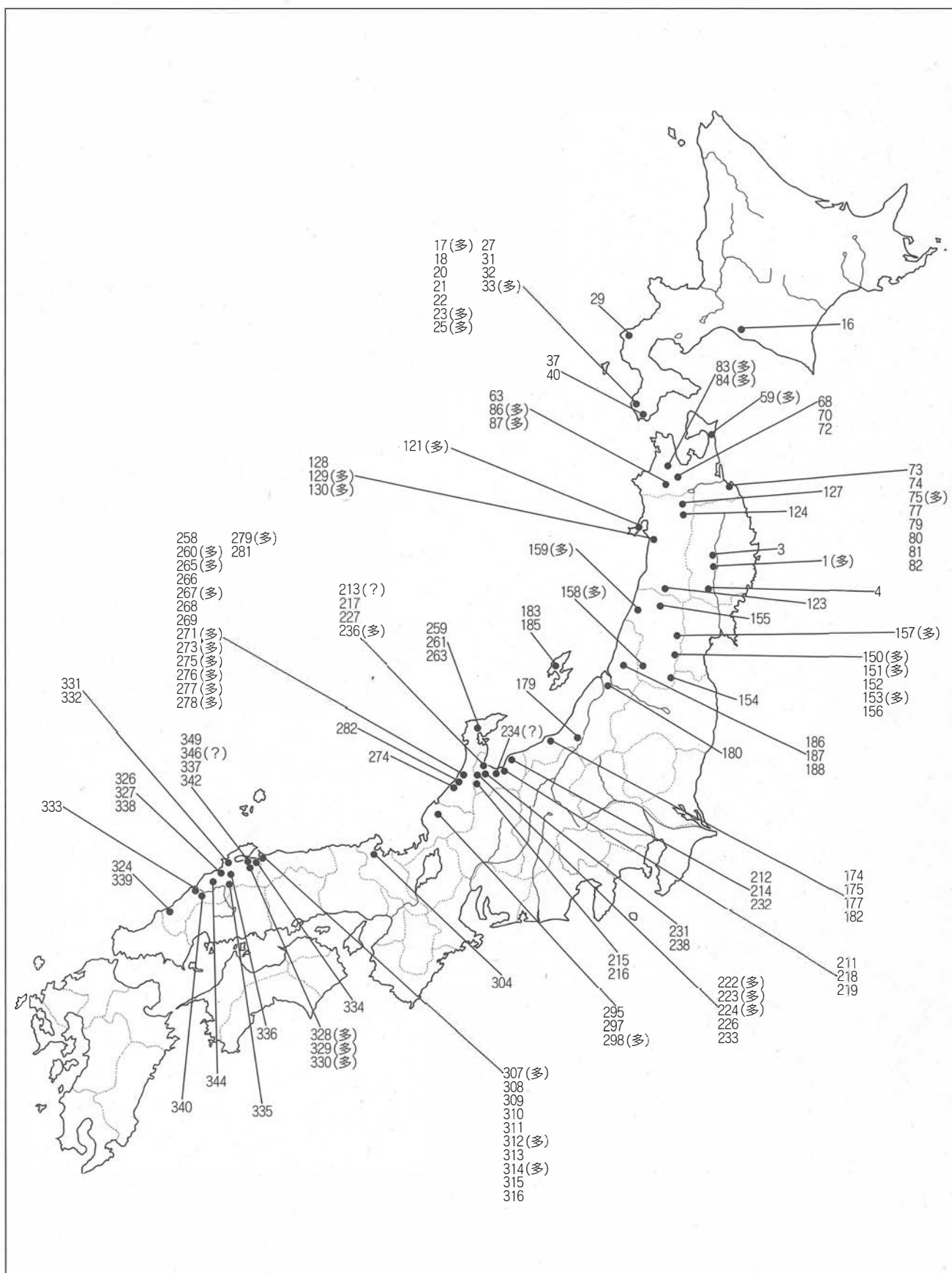


図32 日本海側における「胎土目積陶器」出土分布図

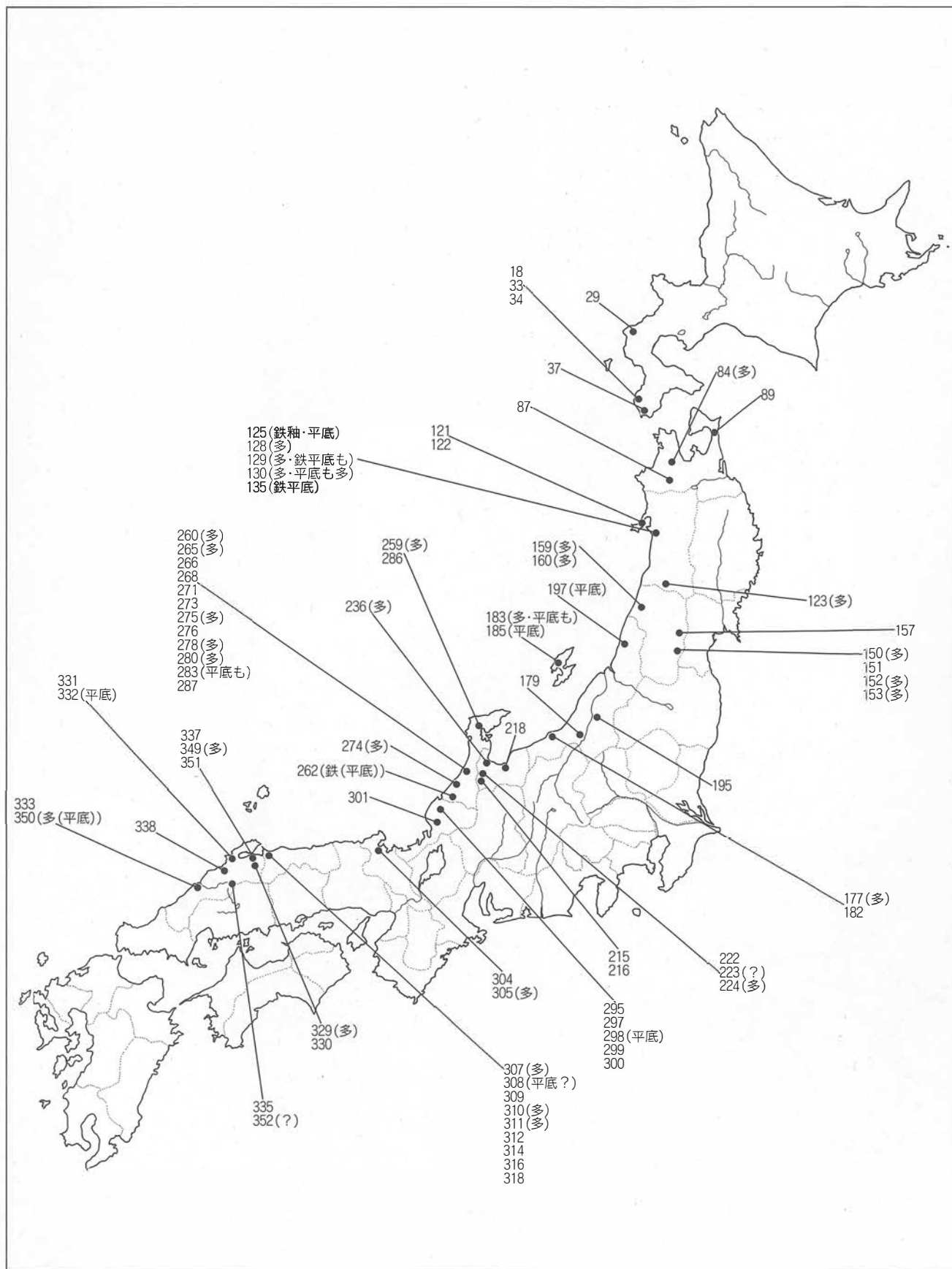


図33 日本海側における「陶器溝縁皿」出土分布図

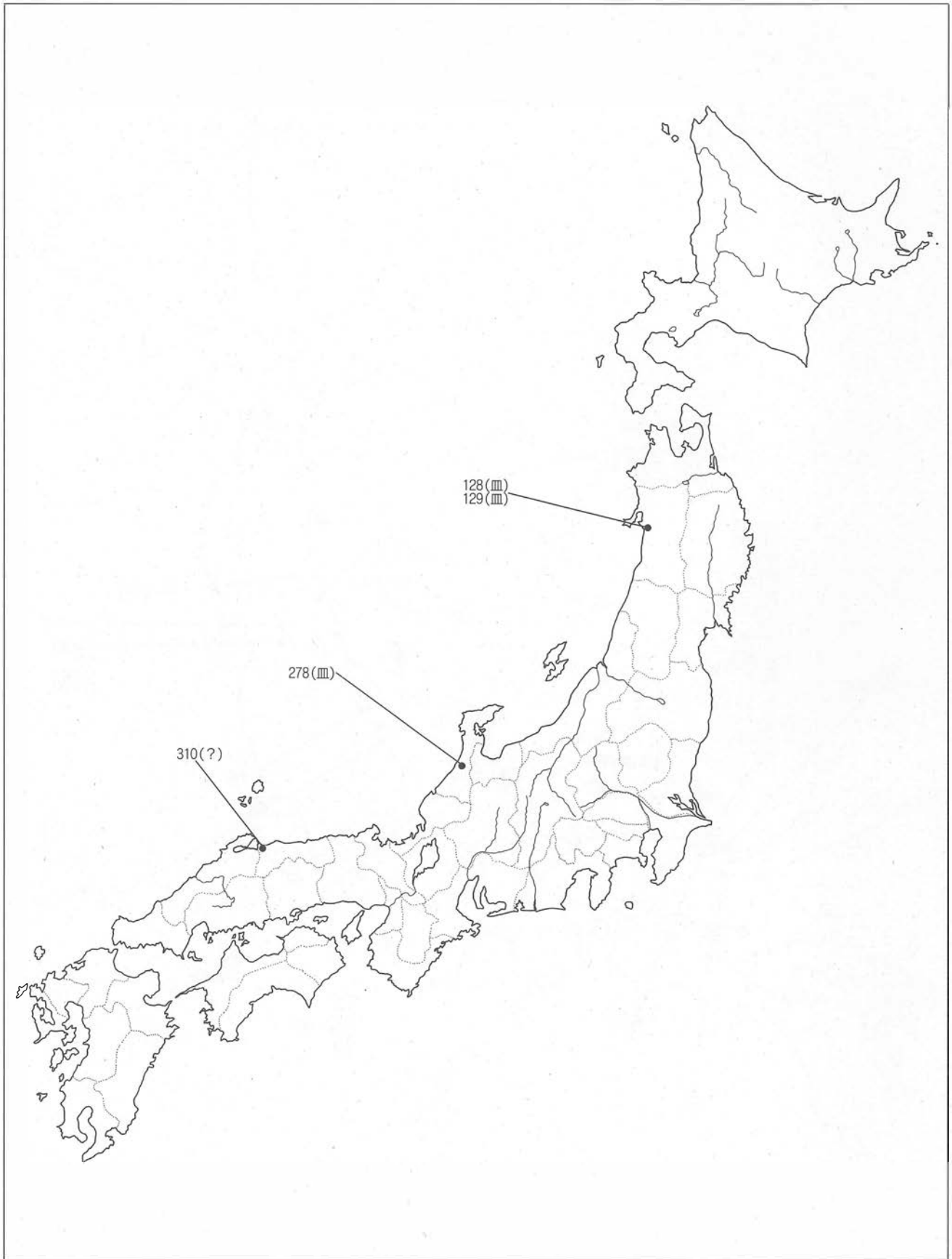


図34 日本海側における「砂目積磁器」出土分布図

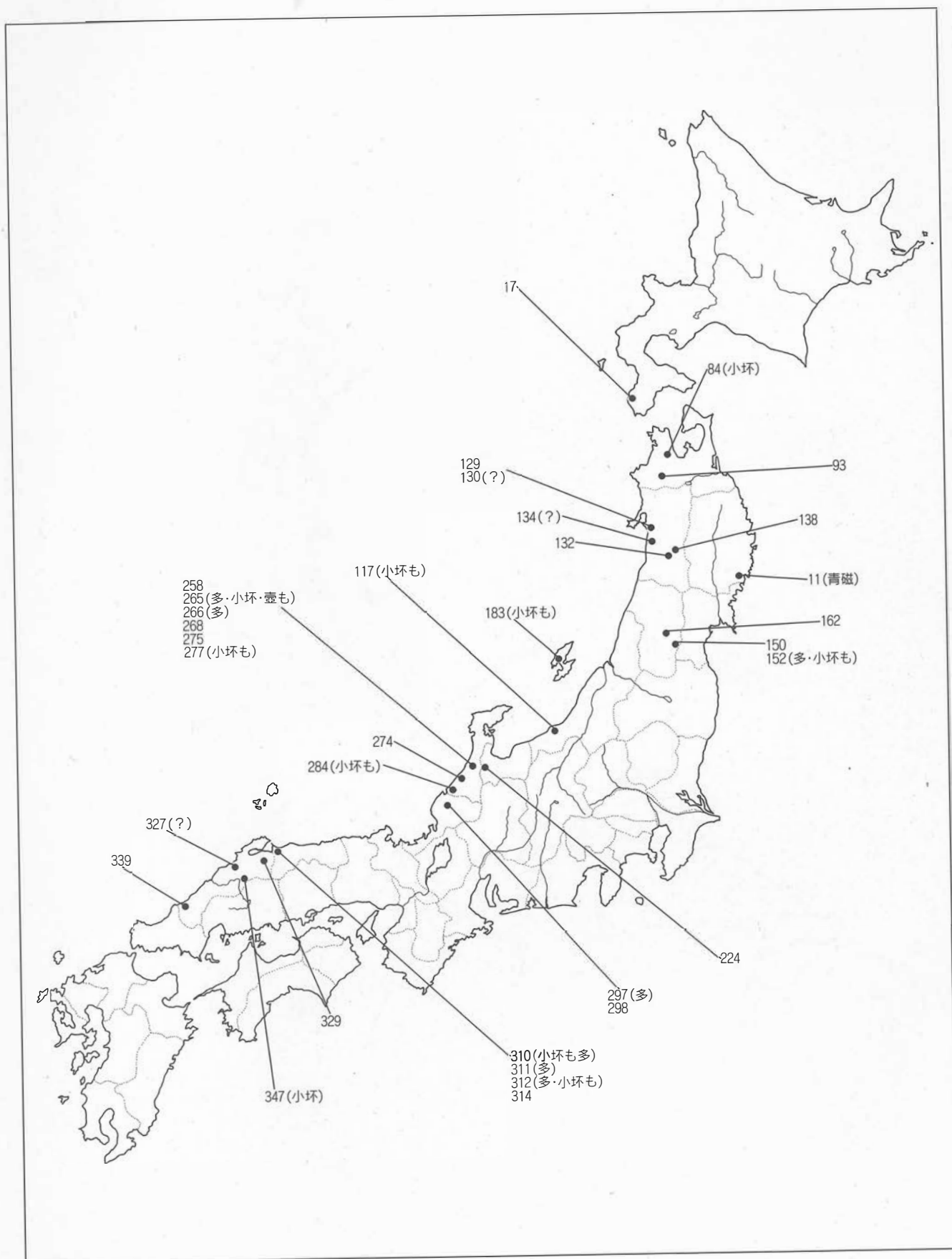


図35 日本海側における「高台無釉磁器碗」出土分布図

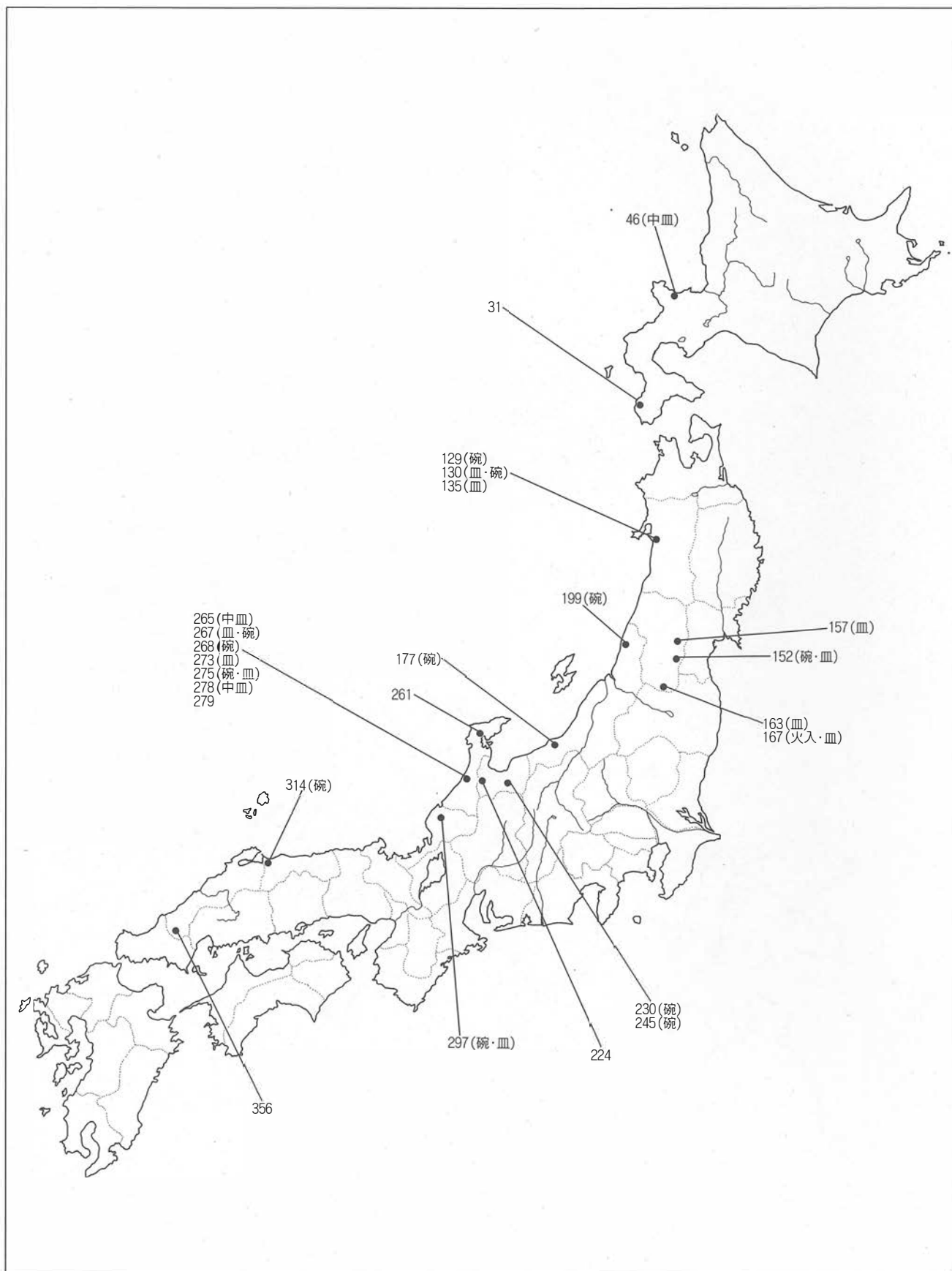


図36 日本海側における「京焼風陶器」出土分布図

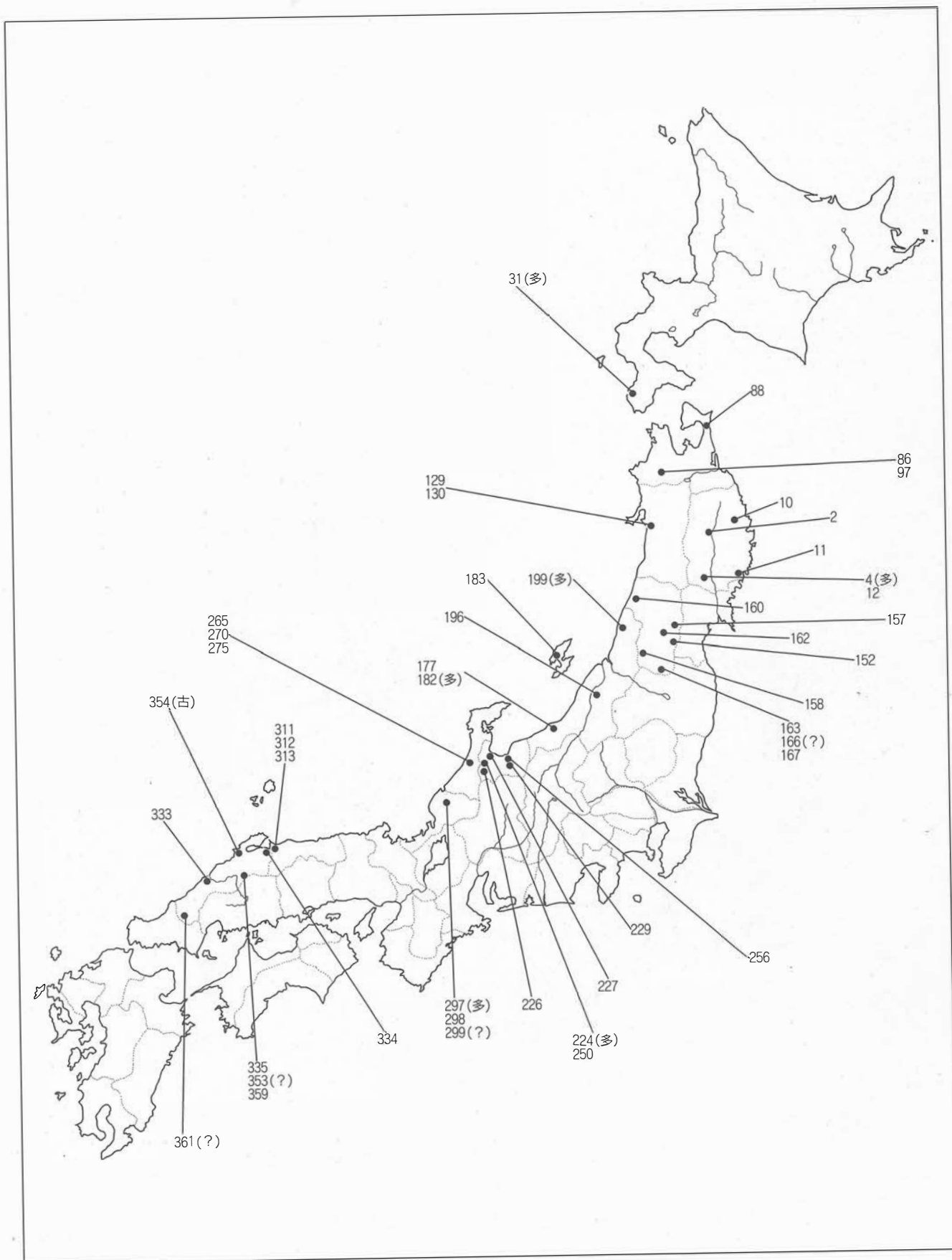


図37 日本海側における「陶器呉器手碗」出土分布図

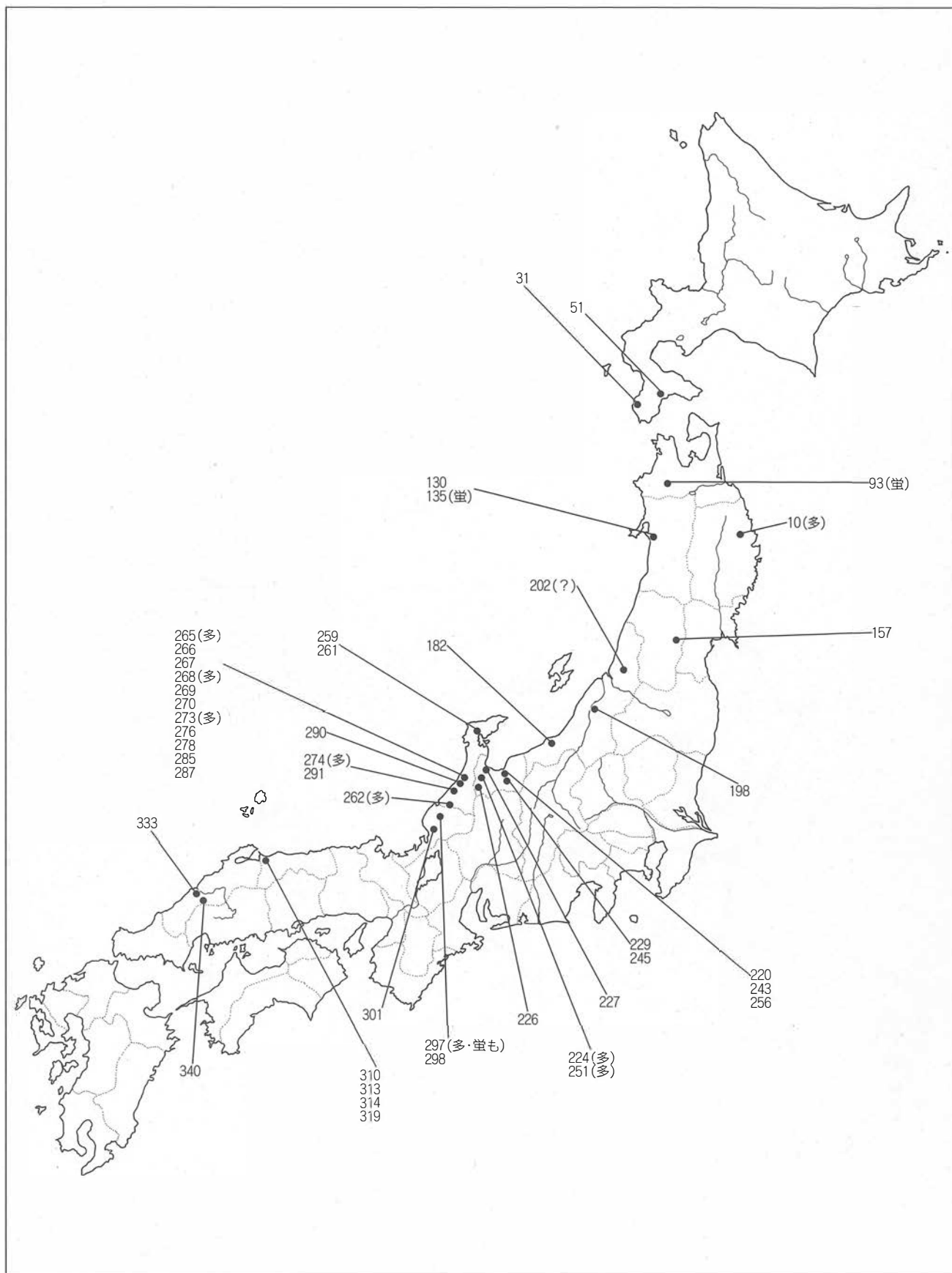


図38 日本海側における「刷毛目陶器碗」出土分布図

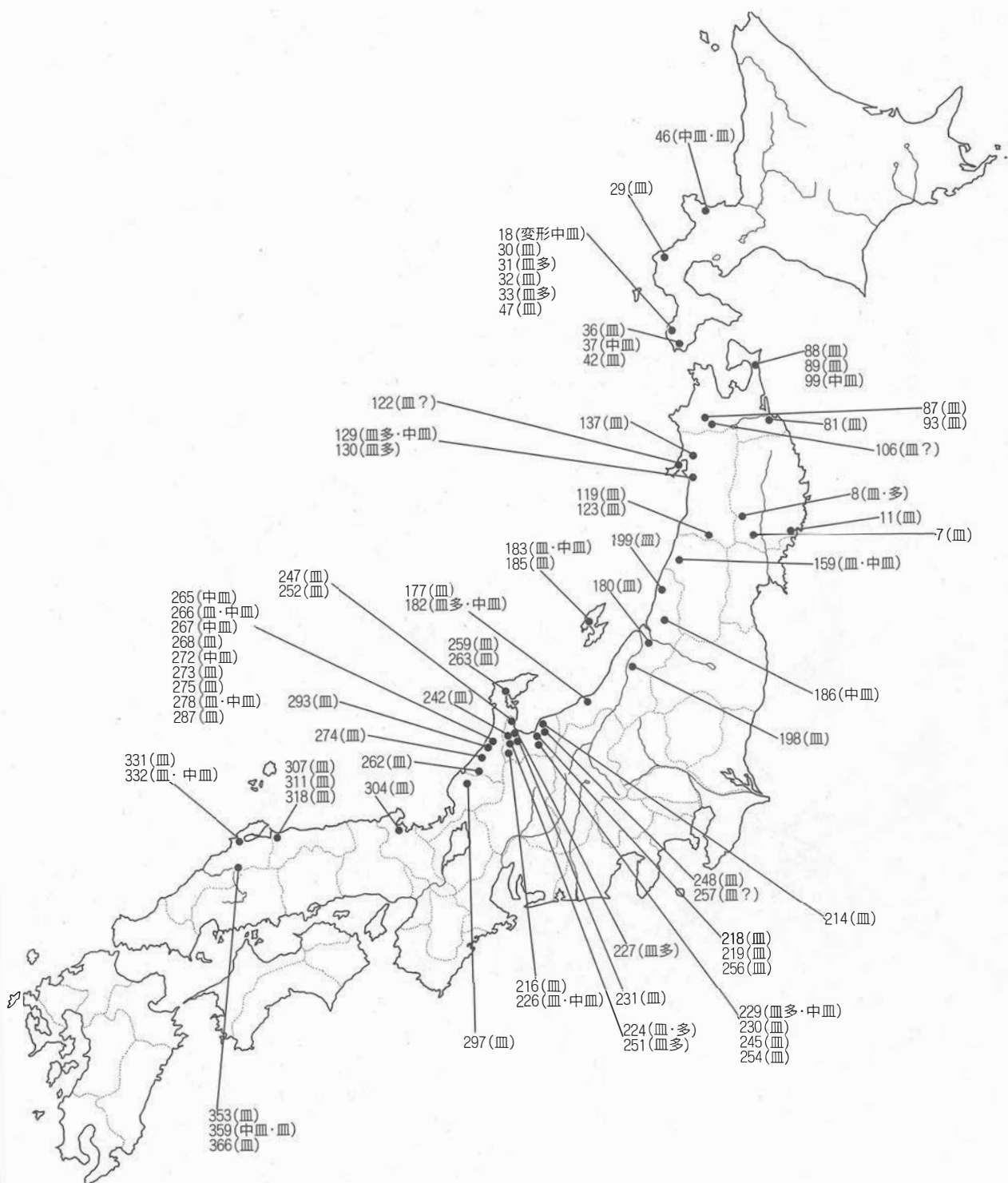


図39 日本海側における「青緑釉陶器」出土分布図

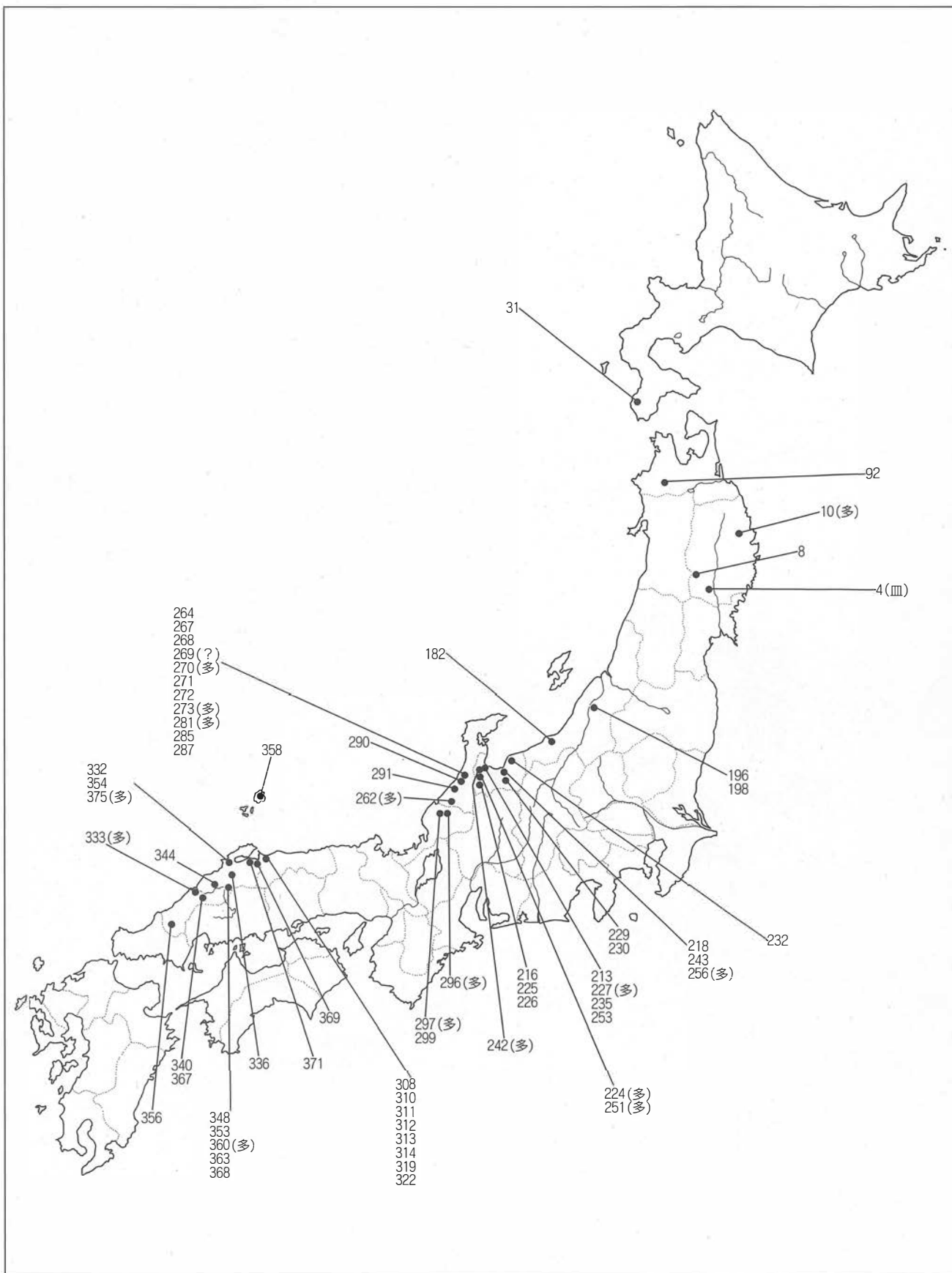


図40 日本海側における「陶胎染付碗」出土分布図

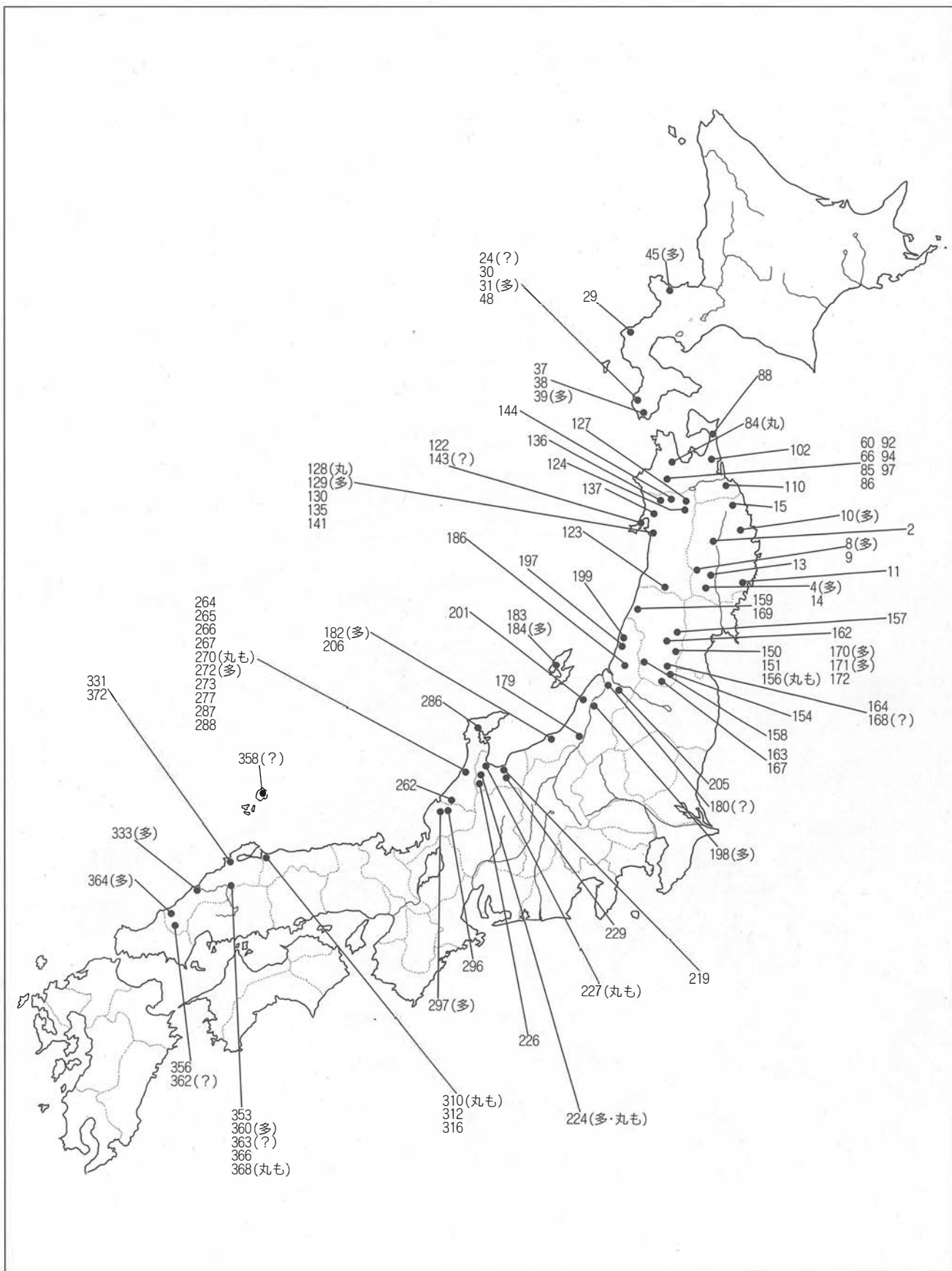


図41 日本海側におけるいわゆる「くらわんか碗」出土分布図

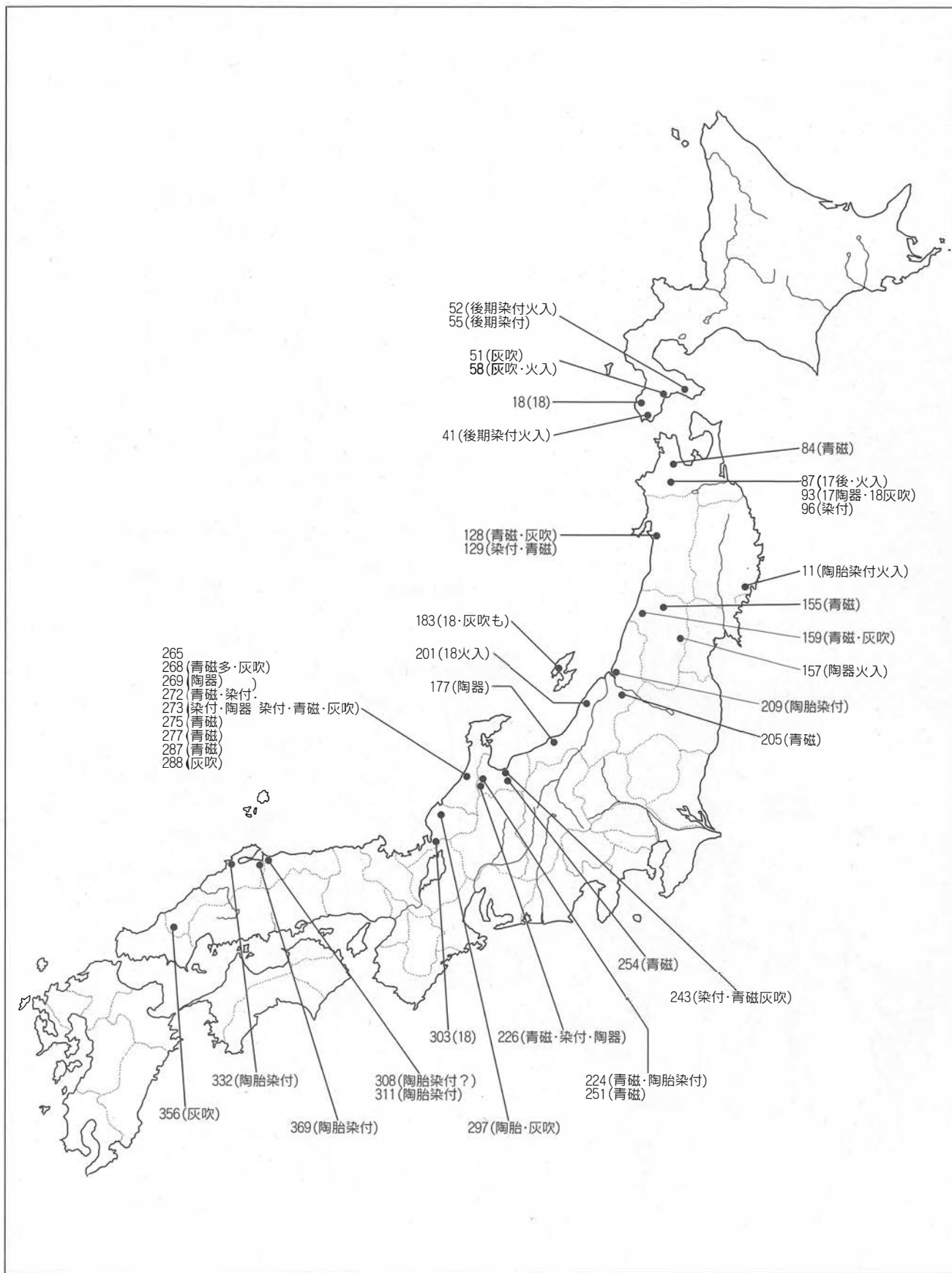


図43 日本海側における「火入・灰吹」出土分布図

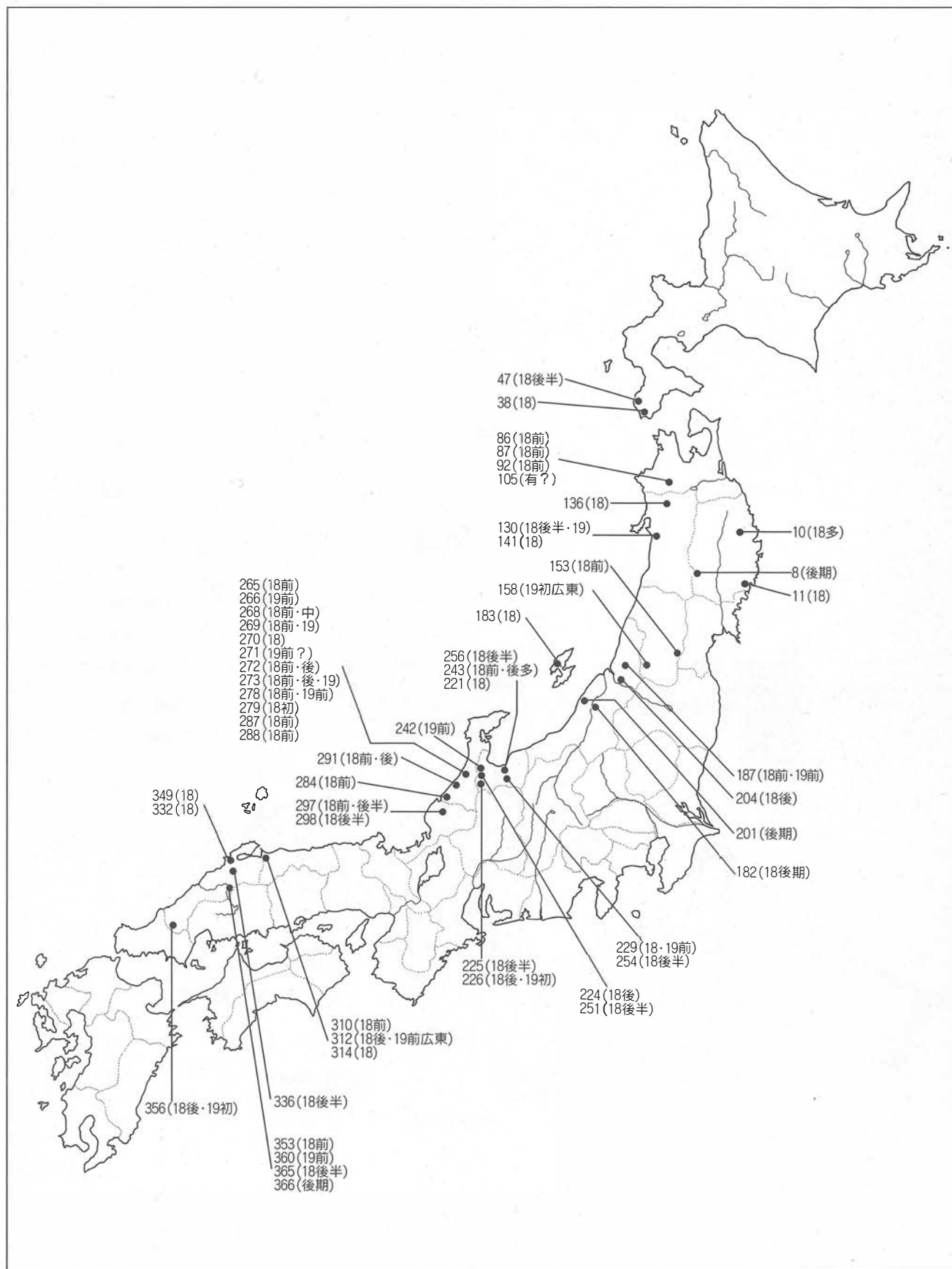


図44 日本海側におけるいわゆる「そば猪口」出土分布図

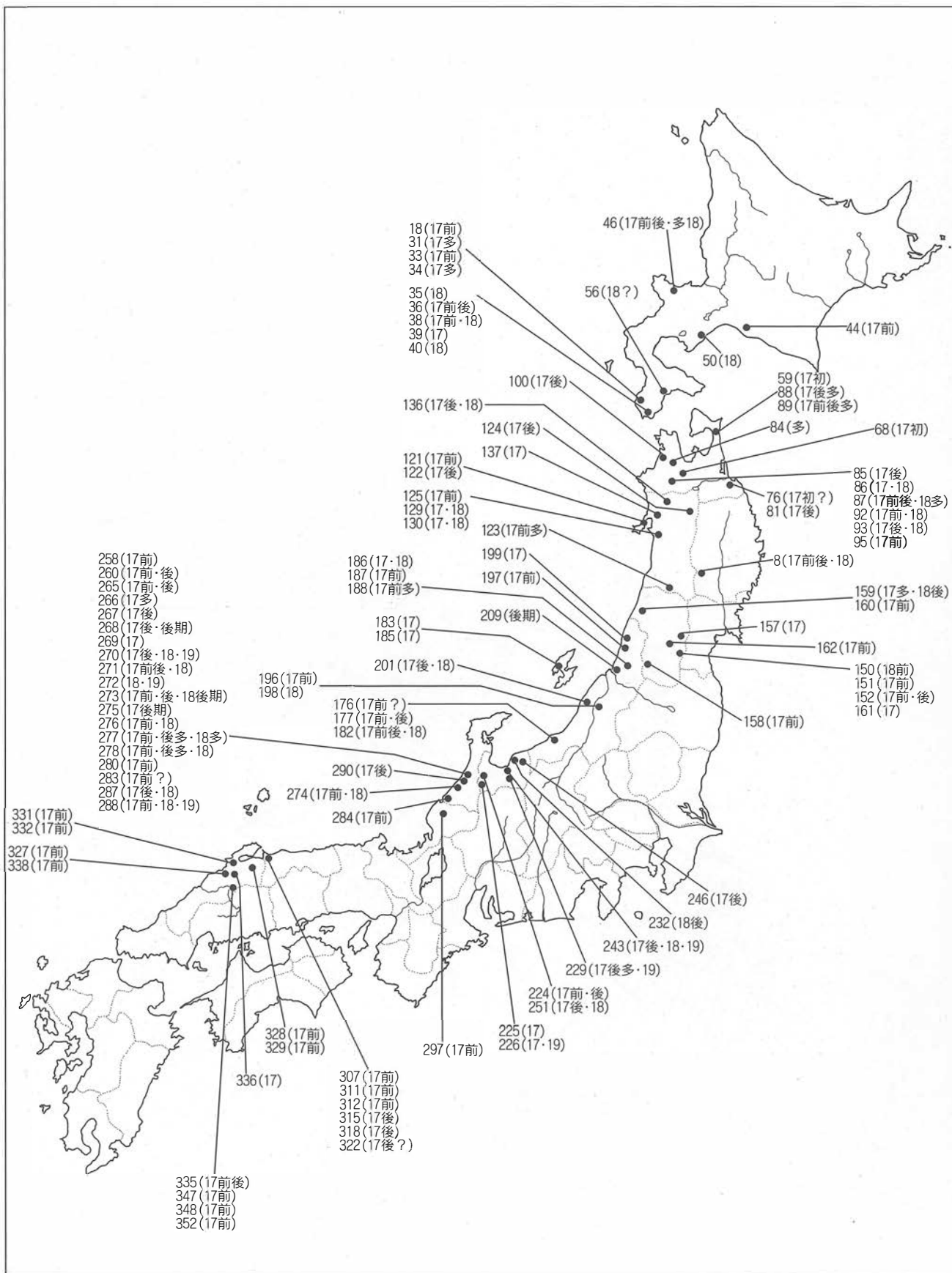


図45 日本海側における「掘鉢」出土分布図

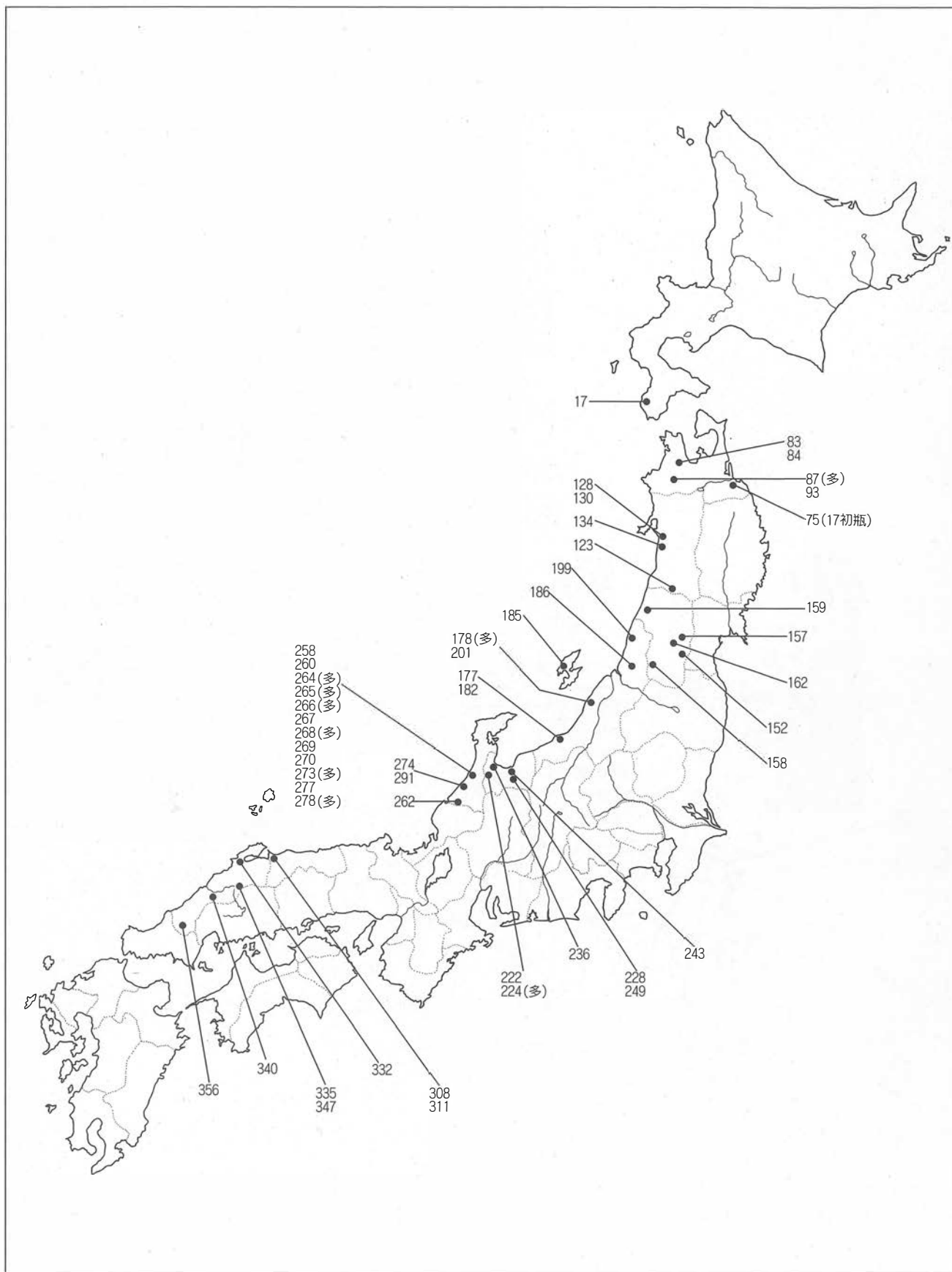


図46 日本海側における「叩き壺・甕」出土分布図